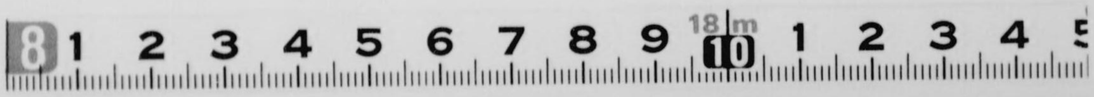

379
12

子4G60

379-12

國譯禪宗叢書

第拾壹卷

大正
10 2.22
內交

國譯禪宗叢書第十一卷凡例

一、本叢書第十一卷に載する所の書は、鎭州臨濟慧照禪師語錄(一卷)、無門關(一卷)、白隱禪師息耕錄開筵普說(一卷)、五家參詳要路門(一卷)、黃檗隱元和尙太和集(一卷)の五部五卷なり。

臨濟禪師語錄は、我國に流傳すること既に久しく、後醍醐天皇の元應二年僧妙秀の鏤板以後、嘉曆四年比丘尼道證によりて重刊せられ、次で足利時代に及びて、永享九年八月又印行せられ、斯くして叢社の徒之を讀まざるものなし。

無門關は應永二十八年正月、土佐國修禪寺に於て開版せられ、爾後德川時代に入りては、臨濟錄と共に數版を重ね今猶盛に行はれつゝあり。

白隱禪師の息耕錄開筵普說は、寬保三年九月開版以後、再刻を重ね、爾來我臨濟門下に於て到る所に提唱せられつゝあり。

五家參詳

要路門は、五家の宗風を提要して餘蘊なく、參禪者好箇の指針たり。今次國譯に際しては文政十年の版本に據り、傍ら大觀和尚の稿本を參照せり。太和集は、山城國宇治黃檗開山隱元禪師來朝後の語錄にして、禪師が得意時代の述作なり、此書に二本あり、今次國譯につきては寬文二年の初刻本に據りたり。

一、本卷に收載したる書中、臨濟慧照禪師語錄と無門關とは、我國に流傳以後殆ど六百有餘年、臨濟の家風是れによりて窺ふに足るべく、息耕錄開筵普說と五家參詳要路門とは、白隱禪師及び其門下の機鋒を知るに最も便なり。太和集に至りては、版本の流傳極めて稀にして、學者の之を知るもの尠し、今幸に之によりて隱元禪師面目の一端を窺ふを得は、自他の幸慶なり。

大正十年二月

編者誌す

國譯禪宗叢書　第拾壹卷

目次

國譯鎭州臨濟慧照禪師語錄解題……一
國譯鎭州臨濟慧照禪師語錄……一〇五
鎭州臨濟慧照禪師語錄原文……三〇
國譯無門關解題……三
國譯無門關……四三
無門關原文……二三

目次

國譯白隱禪師息耕錄開筵普說解題……一——八
國譯白隱禪師息耕錄開筵普說……一——八一
白隱禪師息耕錄開筵普說原文……一——四四
國譯五家參詳要路門解題……一——三
國譯五家參詳要路門……一——五八
五家參詳要路門原文……一——三五
國譯黃檗和尙太和集解題……一——三
國譯黃檗和尙太和集……一——七八
黃檗和尙太和集原文……一——四四

國譯鎭州臨濟慧照禪師語錄

解題

臨濟慧照禪師語錄は、臨濟宗の始祖勅謚慧照禪師一代の語錄にして、弟子慧然の編集する所なり。此の書、北宋の徽宗皇帝宣和二年、雲門八世の孫、福州鼓山の宗演、重ねて刊行してより廣く叢林の間に傳はり、臨濟の宗風之れによりて大いに宣揚せられ、馬祖、百丈、黃檗の語錄と相併び、四家語錄中の白眉として、今猶ほ盛んに世に行はる。而して本語錄の內容は初めに上堂、問答等を錄し、終りに勘辨、行錄、略傳等を附す。略傳は弟子延沼の錄する所なり。其の行狀に至りては本書の卷尾に載せたれば、今更めて錄せず。

國譯鎭州臨濟慧照禪師語錄序

(イ)鎭州(ロ)臨濟(ハ)慧照禪師(ニ)語錄(ホ)序

(ヘ)延康殿の(ト)學士・(チ)金紫の(リ)光祿大夫・(ヌ)眞定府路の(ル)安撫使・兼(ヲ)馬步軍の(ワ)都總管・兼(カ)知成德軍の(ヨ)府事・(タ)馬防(レ)撰す

(ソ)黃檗山頭に、曾て痛棒に遭ひ、(ツ)大愚の肋下に、方に築拳を解す。(ネ)饒舌の老婆、尿牀の鬼子、(ナ)這の風顚漢、再び虎鬚を捋づ。(ラ)岩谷に松を栽う、後人の標榜、(ム)鑼頭地を劃る。幾ど活埋せらる、(ウ)箇の後生を肯つて、慕口

(イ)鎭州。國の名、河北にあり、漢には恒山郡、五代の唐には眞定府といふ。

(ロ)臨濟。もと地の名、濟水に臨むによりて寺の名とす。河北鎭州城の東南の鴨津陀河の側の小院なり。

(ハ)慧照。名は義玄、唐の懿宗の勅諡せらるゝ禪師號なり。

(ニ)語錄。語言三昧の記錄なり。

(ホ)序。次第來由を述ぶるなり、この序は五段に分ちて述ぶ、馬藤體といふ、毎句四言なり。

(ヘ)延康殿。宋の仁宗、天章閣に四殿を安(お)く、南を延康殿といふ。

(ト)學士。東宮の師なり。

(チ)金紫。金印紫綬なり。

(リ)光祿大夫。日本の大膳大夫、正二位相當なり。

(ヌ)眞定府路。路は道なり、宋には二十四路あり、成德軍も同じ。

(ル)安撫使。巡察、安撫、存撫の名あり。

(ヲ)馬步軍。刑法を司る司獄官なり、軍は一萬二千五百人をいふ。

(ワ)都總管。總奉行なり。

(カ)知。管領なり、司なり、夫官には之を知といふ。

(ヨ)府事。小を事、大を政といふ、使も同じ、職なり。

(タ)馬防。宋末の人なり、傳は不詳。

(レ)撰。ひとりにて編するときは撰といふ、衆人同じく編するときは選といふ。

(ソ)黃檗山頭。此の二句は臨濟初めて黃檗の爐鞴に入ることを敍す。黃檗は福州洪州の兩處にあり、これは洪州の黃檗な

に自摑す、㊄辭して几案を焚いて、舌頭を坐斷す。㋑是れ河南にあらずんば、便ち河北に歸せん。㋒院古渡に臨んで、往來を運濟し、㋓要津を把定して、壁立萬仞、㋔奪人奪境。仙陀を陶鑄し、㋕三要三玄、衲子を鈐鎚す。㋖常に家舍に在つて、途中を離れず、㋗無位の眞人、面門より出入す。㋘兩堂齊しく喝す、賓主歷然。㋙照用同時、

り、希運禪師は百丈大智に嗣ぐ、臨濟の師。

㋑大愚肋下。此の二句は臨濟大悟して機用を呈することを敍す。肋は「わきぼれ」一度に六十棒打たれて、大愚の處に於て悟りて、大愚の脇の下をにぎりこぶしにて築くこと三たびするの活手段をいふ、大愚は歸宗、智常に嗣ぐ、常は馬祖に嗣ぐ。

㋒饒舌老婆。この一句は黃檗大愚の鉗鎚妙密の處を敍す。老婆は黃檗、饒舌は大愚を指していふ。尿牀鬼子とは抑揚の機あることを敍す、大愚の師を指して云ふ語なり、牀の上に小便する小餓鬼奴(め)と云ふ義。

㋓這風顚漢。此の二句は師の大機大用を呈することを敍す。虎鬚とは黃檗を指す、黃檗が師を指して「このどたわけ」と漢は日本でいふ「め」「やらう」「もの」等の意なり、人を罵つて支那では漢といふ。師が黃檗の所へ卻回するをいふ。

㋔嚴谷栽松。この二句は黃檗との問答をいふ。一には山門の與に境智となし、二には後人の與に標榜となすと、手本法樣の義。

㋕鑼頭劚地。この二句は黃檗維那を打す、師地を鑼して諸方は火葬す、我が這裏は一時に活埋すとの事をいふて、師の活手段を呈することを敍す。鑼は鋤、劚は斫、幾は近なり。

㋖肯箇後生。此の二句は黃檗の首座に點檢せらるゝことを敍す。首座の檗に向つて、「臨濟は後生ぢやのに、印可せられたは如何ぞや」と、檗の後悔して我れと我が口を手のわきにて打ちたるなり、摑は打つなり、瞥むなり。

㋗辭焚机案。この二句は、上はこれ黃檗の侍者、百丈先師の禪版几案を將ち來れと云ひたるとき、師の侍者、火を將ち來れと、方に恩を報ずることを解すの意。下は黃檗の證明印可の叮嚀なることを敍す。天下の人の舌頭を云々の意。

㋘不是河南。この二句は、一切處これ師の法幢を建て宗旨を立するの處といふことを敍す。これ常語といへども又本分の事を說く、檗は什麼の處にか去るといひしに對していふ。始より此れまで一段なり、大師、學者たるときのことを述ぶ。

㋙院臨古渡。この二句は臨濟の二字を形容して、四來の衲子を接得することを敍す。古渡は滹沱河に臨んで建つる寺なれば、濟水に因む。運は動なり、濟は渡なり、通なり、四

本前後なし。㋚菱花像に對し、虛谷聲を傳ふ。㋛妙應無方にして、朕迹を留めず、㋜衣を拂つて南邁して、大名に戾止す。㋝興化師承して、東堂に迎へ侍す。㋞銅瓶鐵鉢、室を掩ひ詞を杜づ。㋟松老い雲閒にして、曠然として自適す。㋠面壁未だ幾ならざるに、密付將に終へんとす。㋡正法誰にか傳ふ、瞎驢邊に滅す。㋢圓覺の老演、今流

方より來る學者を接得するをいふ。

㋚把定要津。この二句は、把定は師の家風門庭嶮峻にして、凡聖路絕するの義をいふ、要津は要路の津、日本ならば神戸とか橫濱とか下關とかの要港にて關門を設くるをいふ、萬仞の壁をきり立つるが如く粗忽にはよりつき難きの義、仞は七尺を一仞といふ、師の應機利生の嶮危をたとへる、則ち爲人の手段をいふ。

㋛奪人奪境。この二句、師の四料簡の話頭は唯だ上根上智、伶利の漢を陶鑄することを敍す。人は心意識情、境は文字言句、幷に山河大地等をいふ、仙陀婆、或は陀陀婆といふ、梵語なり、此には智臣と譯す、一には四實と名づく、馬、器、鹽、水、この四に通利するが故に、伶利の漢にたとへる、陶は土にて、鑄は鐵にて作る器。

㋜三玄三要。この二句は、師の學者を鈐鎚すること妙密に鍛錬するを敍す。三要は三玄に透徹したるをいふ、鈐は「かなばさみ」、鎚は「かなづち」、要は樞要、玄は玄奧をいふ、師の爲人の手段なり、惡辣の活手段なり。

㋝常在家舍。この二句は、外面に略して本錄上堂の語句を擧ぐ、裏面は師の家風不可思議にして、虛空背上に向つて劍輪を舞すが如く、應機接物の蹤跡なきことを敍す。衲僧家の本分の作略をこの語中に收む。家舍は佛法なり、途中は世法なり。

㋞無位眞人。この二句も本錄を擧して作用生佛に屬せざることを敍す。面門出入は傳大士の心王の銘に出づ、面門は口なり、又六根門なり、眉間なり、禪宗にては口のみを謂ふにあらず。

㋟兩堂齊喝。兩堂の首座は前堂後堂なり、首座は第一座のこと、賓主とも參話することなしとなり、古人も六耳謀を同じうせずと下語す。

㋠照用同時。この二句は、師の人に接して照用の機直截にして、同時に前後次第なきことを敍す。機を鑑みるを照と云ひ、その機に應ずるを用と云ふ、照は心に考へ、用は身に行ふこと。先照後用、先用後照、照用同時、照用不同時と四照用を云ふ、本錄には載せず、本無前後は馬防が心にて云へるなり、同時なるほどに、もとより前後はあるまいと五燈會元や人天眼目に載す。

㋡菱花對像。菱花は魏の武帝の鏡の名なり、上の句は師の賓

通を爲す。㊀點檢し將ち來る、故に差舛なし。㊁唯だ一喝を餘して、尙ほ商量せんことを要す。㊂具眼の禪流、冀はくは賺つて擧することなかれ。㊃宣和庚子中秋の日謹んで序す。

主相見の處、早く妍醜好惡を辨ずること明鏡の臺に當るが如くなることを叙す、下の句は師の虛懷にして、學者に酬對するの義を叙す。圓悟の所謂鐘の扣くに在るが如く、谷の響を受くるに似たりとは是れ也、それで妙應無方なりと。

㋐妙應無方。上の句は虛谷傳聲の句を承く、卽ち應酬方所を絕するの義なり、下の句は菱花對像の句を承く、卽ち應機今時に落ちざるの義なり。朕迹は「かくれたるあと」の義、自由自在なるを褒む。院臨より此に至りて一段、師の法幢を建て、四來を接するの大機用を述ぶ。

㋑拂衣南邁。上の句は師の行脚底を叙す、下の句は師の住處を叙す。これは河北の臨濟院を去つて、大名府の興化寺に行きてなり、戾止とは來り至る、逗留なり、大名は魏の府なり、南邁の語は六祖傳衣に原因す。

㋒興化師承。この二句は、師の法嗣の興化寺の存奬禪師、此に於て師の印可を承けて、師を東堂に迎へ申して給侍奉行するを叙す。東堂とは晉の武帝の時、鄧詵(字は廣基)の故事あり、略す、隱居處のことなり、今の東堂、西堂とは違へり、今云ふは大慧下の佛照光、又舜老夫より始まる、ただ尊宿なる高僧の退院せしを東堂といふ。

㋓銅瓶鐵鉢。銅瓶は淨瓶なり、水を貯へ身に隨へ手を淨む、鐵鉢は鉢多羅、此には應器、又鉢盂といふ、みな出家四十八道具の內の二つなり、師が東堂にての風情なり、貧僧にて別に財寶を持たざれどもの意なり。掩室杜詞とは師が萬事を休して學者を接せず、東堂に居して默然たることを叙す。釋迦が摩竭陀國に在して一切の法は不生なり、一切の法は不滅なりと言ひをはつて、室を掩ふて坐し玉ひ、維摩が毘耶離城に在りて、入不二法門と文殊が問ひしに默然無言なりし如くなり。

㋔松老雲間。この二句は、師の萬事休罷して、幽閑寂寞なることを叙す。曠然は虛廓の貌、自適は逍遙適悅の貌、自由三昧底を云ふ。

㋕面壁未幾。師、興化寺に閑居して未だ久しからず、密印付囑して命も將に終はらんとするの時なり、師の遺囑、其の人あることを叙す。暗に達磨の面壁九年、二祖を接得して付法已に畢りて、遂に示寂するに同じと、遺囑は興化に正法眼藏を付與して遷化せんとするを云ふ。

㋖正法謹傳。この二句は、亦師の末後を叙す。箇の滅、大いに子細あり、瞎驢は三聖を指すと、又別の意あり、三聖との問答は行錄にあり、三四代にして滅す、果して此の讖の如く三聖も大覺も師の嗣法なればなり。

㋗圓覺老演。此の二句は、雲門八世の孫、福州鼓山に住する圓覺宗演禪師、重れて梓に鏤めて爲に流通するとを叙す。老とは老僧なりと、尊稱していふ。雲門文偃―香林澄遠―智門光祚―雪竇重顯―天衣義懷―天鉢重元―元豐淸滿―雪峰宗演。會元十六に傳あり、恩州の人なり。

㋘點檢將來。檢は察なり、此の二句は馬防自ら此の錄をしらべてあやまりまちがひなきことを叙す。圓覺より此に至るまでの一段は、此の錄の流通を述ぶ。差は「たがふ」舛は「おつる」なり。

㋙唯餘一喝。此の二句は馬防、自らの見解を呈することを叙す。此の一喝は師の在世より今日に至るまで、喝して未だ已まず、故に馬防は具眼の者なり、平の官人ではないと、古人の抄にあり。唯だ箇の一喝分明に流通すること能はずして如何か商量せんと、白日靑天亦可レ喫レ棒となり。

㋚具眼禪流。此の二句は、後代に此の錄を看るものを戒むることを叙す。賺は錯なり、これは一喝に當る明眼の衲僧だちよ、かやうな處をわるく擧着めさるゝなとなり。

㋛宣和庚子。宣和は宋の八代徽宗帝の年號、唐の十八代懿宗咸通八年、師の示寂より宣和二年庚子に至るまで二百五十三歲の後なり、日本の七十四代鳥羽天皇保安元年に當る。

國譯鎭州臨濟慧照禪師語錄

㊀三聖に住する　㊁嗣法小師　㊂慧然　㊃集す

㋐府主王常侍、諸官と師を請じて　㋑陞座せしむ。師㋒上堂云く、「山僧今日　㋓事已むとを獲ず、曲げて人情に順つて方に此の座に登る。若し祖宗門下に約して　㋔大事を稱揚せば、直に是れ　㋕開口不得、儞が足を措く處無けん。山僧此の日、常侍の堅く請するを以て、那ぞ　㋖綱宗を隱さん。還つて　㋗作家の戰將、直下に陣を展べ旗を開くこと有りや、衆に對して　㋘證據せよ看ん。」僧問ふ、「如何なるか是れ佛法の　㋙大意。」師便ち㊂喝す、僧禮拜す。師云く、「㋚這箇の師僧卻つて　㋛持論するに堪へたり。」問ふ、「師誰が家の　㋜り、こゝに略す、必ず立して法を聞くなり。

㋓事不獲已。本分の上には說くべきことはないが、强ひてといふこと、師の陞座說法を求むることなり。

㋔大事。禪宗の大悟の因緣をいふ、祖宗は禪宗の一流にはといふこと。

㋕開口不得。口をひらき足をおくところあるまいと。元來說不得行不得なり。

㋖綱宗。佛法の大旨なり、一千七百則の公案など、今は上堂提綱、索話などといふ。

㋗作家。宗門では法戰場の第一

㋐府主。鎭州にあり。

㋑三聖。鎭州にあり。

㋒嗣法小師。先師の法を嗣ぐ弟子なり、師を大師、弟子を小師といふ、沙門謙遜の稱なり。

㋓慧然。臨濟に嗣ぐ、三聖の諱なり。

㋔集。結集なり、この錄をあむをいふ。

㋕府主。河南府の知事、王は氏なり、常侍は官なり、日本の中宮亮に當る、名は敬初、潙山に嗣ぐの居士。

㋖陞座。佛法商量の爲に法堂の高座にのぼらしむ、今代は普說するときをいふ。

㋗上堂。百丈清規に據る作法あ

曲をか唱へ、宗風(ワ)阿誰にか嗣ぐ。」師云く、「我れ黄檗の處に在つて、三度問を發して三度打たる。」僧(ネ)擬議す、師便ち喝して、後に隨つて打して云く、「(ナ)虚空裡に向つて釘橛し去るべからず。」(ラ)座主あり、問ふ、「(ム)三乘十二分教、(ウ)豈に是れ佛性を明すにあらずや。」師云く、「(キ)荒草曾て鋤かず。」主云く、「佛豈に(イ)人を賺さんや。」師云く、「佛什麼の處にか在る。」主無語。師云く、「常侍の前に對して、老僧を瞞せんと擬す、(オ)速退速退、他の別人の請問を妨ぐ。」復た云く、「此の日法筵、(ノ)一大事の爲の故なり、更に問話の者ありや、速かに問を致し來れ。」僊穉(ク)に口を開かば、早く(ヤ)勿交涉、也た何を以てか此の如くなる。見ずや、釋尊云く、「(マ)法は文字を離れて因にも屬せず、緣にも屬せざるが故なり。」僊が(ケ)信不及なるが爲の所以に、今日葛藤す。(フ)恐らくは常侍と諸官員とを滯して、他の佛性を昧すことを。如かず且く退かんには。」喝一喝して云く、「(コ)少信根の人、終に了日無けん、(エ)久立珍重。」

師因に一日(テ)河府に到る、府主王常侍、師を請じて陞座せしむ。時に(ア)麻谷出でて問ふ、「(サ)大悲千手眼、那箇か是れ正眼。」師云く、「大悲千手眼、那箇か是れ正眼、速かに道へ速かに道へ。」麻谷、師を拽いて座を下らしめて、麻谷卻つて坐す。師近前して云く、「(ヰ)不審。」麻谷、擬議す、師も亦麻谷を拽いて座を下らしめて、卻つて坐す。麻谷便ち出で去る。師便ち(メ)下座。

上堂云く、「(シ)赤肉團上に一無位の眞人あり、常に汝等諸人の(ヒ)面門より出入す、未だ證據せざるもの、看よ看よ。」時に僧あり、出でて問ふ、「如何なるか是れ無位の眞人。」師下座して、僧の胸を把つて云く、「道へ道へ。」僧擬議す。師托開して云く、「無位の眞人、是れ什麼の乾屎橛ぞ。」

師上堂云く、「(ス)大衆、山僧の見處は、佛祖と同じ、衆生と同じ。汝等諸人、但だ能く平常心なれば、是れ道なり。」僧問ふ、「如何なるか是れ平常心。」師云く、「(セ)趙州東院西院南院北院。」僧云く、「學人不會。」師云く、「(ソ)王老師三脚驢子。」

師上堂云く、「(タ)三乘十二分教、祖師門下、用ひず。祖師門下、(チ)但だ能く一切の法を了ずるを、之を解脱と名づく。」

師上堂云く、「(ツ)大丈夫漢、(テ)須らく自ら主宰を作すべし。」僧問ふ、「如何なるか是れ主宰を作す。」師云く、「(ト)隨處に主となれば、皆な眞なり。」

師上堂云く、「(ナ)山僧の見處は、佛祖と同じ、衆生と同じ。汝等諸人、但だ能く平常心なれば、是れ道なり。」僧問ふ、「如何なるか是れ平常心。」師云く、「(ニ)趙州東院西院南院北院。」僧云く、「學人不會。」師云く、「(ヌ)王老師三脚驢子。」

師上堂云く、「(ネ)三乘十二分教、祖師門下、用ひず。祖師門下、(ノ)但だ能く一切の法を了ずるを、之を解脱と名づく。」

師上堂云く、「(ハ)大丈夫漢、(ヒ)須らく自ら主宰を作すべし。」僧問ふ、「如何なるか是れ主宰を作す。」師云く、「(フ)隨處に主となれば、皆な眞なり。」

人なり、作は、おこす」なり、門風を興起する俗利の人のことなり。

(ワ)證據。分明なり、大衆の面前にて明かにせよとなり、此れは今の約語、又は索話なり。

(カ)大意。無邊涯なり。

(ヨ)喝。六種震動なり、これはちよつと注しがたし、禪は唯佛與佛の境界なればなり。

(タ)這箇。唐音「チエコ。」這は此に同じ、箇は助字。

(レ)持論。對論なり、決擇なり、理を究めて論ずるなり。

(ソ)曲。世上の曲調にあらず、宗門の那一曲なり。

(ツ)阿誰。阿孃、阿哥など兄のことに用ふ、此の問は察辨問なり、臨濟の悟處を看んと要す。

(ネ)擬議。龍頭蛇尾なり、ぐつとゆきつまる、即答しえぬなり。

(ナ)向虚空裡。これは臨濟が喝してておいて、慈悲の餘りにかくいはれしなり、天に向つて釘を釘ち去るべきではないと、去の字はおき字なり、思慮分別の及ばざるところないふ。

(ラ)座主。教宗の講師なり、高座の主といふこと。

(ム)三乘。この注は前の各巻に見ゆ。十二分教も同じ。

(ウ)豈不是。これは家私を問ふなり、禪宗ばかり佛性を知るにあらず、經論にも說いてあるぞよといふこと。

(キ)荒草。荒草は無明なり、言ふは三乘十二分教は無明の荒草なり、當體直指ないふ。

(イ)賺人。佛がなか〳〵妄語を仰せられうぞと。

(オ)速退。そこのけ〳〵、他の邪魔になると。

(ク)一大事。禪では本分をさしていふ。

(ヤ)勿交涉。不得要領ないふ。

(マ)法既文字。これは維摩經の第二の弟子品に、「法は名字なし言語斷ずるが故に、」又云く、「法は因にも屬せず、緣にも在らざるが故に」とあるより出づる語なり、天眞獨朗を云ふ。

(ケ)信不及。本分の上には說くべきことはなけれども、儞が不信なるゆゑ、無用のことを云ふぞと。葛藤すとは文字言句を云ふ。

(フ)恐滯。すぢなきことを言ふて、王常侍や諸官人だちを煩はすよりは、退座申さんとなり。滯は凝滯なり。

(コ)少信根人。一喝しておくべきところなれども、猶ほ不信の人は三生六十劫も、この一大事因緣かさとり畢ることはなるまいと。

(エ)久立珍重。これは字義でいへば大衆たち久しく立ちてあるゆゑ御苦勞でありき、さらば御いとま申しそろとの義なり。又はごきげんよく御まめでといとま申してかへるとなり。善加保重で、つゝがなく御大事にといふこと。

(テ)河府。河南又は大名府なり、因にとは「さいはひに」なり。

(ア)麻谷。第一世は寶徹禪師、馬祖に嗣ぐ。これは二世の良遂か、未詳。

(サ)大悲。このときの本章にてありしゆゑか、是れ正眼とは如何に、大自在を得るぞと。

(ヰ)不審はわかりませぬなり、禮話に用ふるなり、珍重と同じ。

(メ)擬議。〻の擬議子細あり。

(シ)下座。凡そ陞座、上堂に「下座」と記することは、集者の語なり。

(ヒ)赤肉團上。赤肉團は梵には紇利陀耶、或は肉團心といふ、堅實心といふ。無位眞人はもと道家より出づる語なり、佛

臨濟先師の處に在つて、三度佛法的的の大意を問ふて、三度棒を賜ふことを蒙る。❸茘枝の棒

❸茘枝●黒枝●掉●棒。たれた、よもぎの枝のやうなもの。ひりひりとしてうるさいこと如くなりの意。

❹云●云へとなり。

❺把●住。ひつつまへて云へ。

❻托●開。つきはなすなり。

❼乾●屎橛●、人糞なり、きたなきもの。

❽底●の物●方丈●。會下の二首座なり。

❾喝●棒●。喝と棒。

❿珍●重●。自愛せよ。

⓫再●犯●。再び犯すなり。

⓬好●喝●。喝は棒なり。

⓭過●什麽●。什麽は何なり。

⓮兩堂首座●相見●。兩堂の首座相見ゆ。

⓯上●堂●。法を説く座に上ること。

⓰問●話●。問答。

⓱珍●重●大●悪●。自愛せよ大悪人。

⓲喫●茶●去●。茶を喫して去れ。

⓳堅●拂子●。拂子を堅起す。

⓴下●語●。下語は評語。

㉑曲●直●。曲直は是非。

㉒古●人●。古人は注。

㉓面●門●。教家は口をいふ、禪宗は面前の事をいふ。

㉔大●悪●底●人●。大悪人は前後に居ず、衆生の位にも居ず、佛祖の位にも居ず。

㉕驀●直●。驀直は一向なり。

㉖驀●地●。地獄に落ちよ。

㉗有●来●有●去●。來るものには必ず去るものあり。

㉘不●留●行●。留まらず行く。

㉙不●識●。識らず。

㉚不●是●。是にあらず。

㉛不●肯●。肯はず。

㉜不●可●。不可なり。

㉝不●可●與●。與ふべからず。

㉞不●可●得●。得べからず。

㉟不●可●説●。説くべからず。

㊱不●可●思●議●。思議すべからず。

㊲不●可●捉●。捉へ難し。

㊳不●可●取●。取るべからず。

㊴不●可●教●。教へ難し。

㊵不●可●與●人●。與ふべからず。

㊶不●可●與●他●。與ふべからず。

㊷不●可●與●汝●。與ふべからず。

㊸不●可●與●我●。與ふべからず。

㊹不●可●與●師●。與ふべからず。

㊺不●可●與●祖●。與ふべからず。

㊻不●可●與●佛●。與ふべからず。

㊼不●可●與●法●。與ふべからず。

㊽不●可●與●僧●。與ふべからず。

㊾不●可●與●衆●。與ふべからず。

㊿不●可●與●人●天●。與ふべからず。

(1)不●可●與●一●切●。與ふべからず。

(2)不●可●與●一●物●。與ふべからず。

(3)不●可●與●一●法●。與ふべからず。

(4)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(5)不●可●與●一●切●人●。與ふべからず。

(6)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(7)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(8)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(9)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(10)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(11)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(12)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(13)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(14)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(15)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(16)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(17)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(18)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(19)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(20)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(21)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(22)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(23)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(24)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(25)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(26)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(27)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(28)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(29)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(30)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(31)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(32)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(33)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(34)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(35)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(36)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(37)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(38)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(39)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(40)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(41)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(42)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(43)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(44)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(45)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(46)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(47)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(48)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(49)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(50)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(51)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(52)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(53)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(54)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(55)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(56)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(57)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(58)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(59)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(60)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(61)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(62)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(63)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(64)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(65)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(66)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(67)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(68)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(69)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(70)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(71)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(72)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(73)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(74)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(75)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(76)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(77)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(78)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(79)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(80)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(81)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(82)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(83)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(84)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(85)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(86)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(87)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(88)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(89)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(90)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(91)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(92)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(93)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(94)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(95)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(96)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(97)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(98)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(99)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(100)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

臨濟先師の處に在つて、三度佛法的的の大意を問ふて、三度棒を賜ふことを蒙る。❸茘枝の棒

❸茘枝●黒枝●掉●棒。たれた、よもぎの枝のやうなもの。ひりひりとしてうるさいこと如くなりの意。

❹云●云へとなり。

❺把●住。ひつつまへて云へ。

❻托●開。つきはなすなり。

❼乾●屎橛●、人糞なり、きたなきもの。

❽底●の物●方丈●。會下の二首座なり。

❾喝●棒●。喝と棒。

❿珍●重●。自愛せよ。

⓫再●犯●。再び犯すなり。

⓬好●喝●。喝は棒なり。

⓭過●什麽●。什麽は何なり。

⓮兩堂首座●相見●。兩堂の首座相見ゆ。

⓯上●堂●。法を説く座に上ること。

⓰問●話●。問答。

⓱珍●重●大●悪●。自愛せよ大悪人。

⓲喫●茶●去●。茶を喫して去れ。

⓳堅●拂子●。拂子を堅起す。

⓴下●語●。下語は評語。

㉑曲●直●。曲直は是非。

㉒古●人●。古人は注。

㉓面●門●。教家は口をいふ、禪宗は面前の事をいふ。

㉔大●悪●底●人●。大悪人は前後に居ず、衆生の位にも居ず、佛祖の位にも居ず。

㉕驀●直●。驀直は一向なり。

㉖驀●地●。地獄に落ちよ。

㉗有●来●有●去●。來るものには必ず去るものあり。

㉘不●留●行●。留まらず行く。

㉙不●識●。識らず。

㉚不●是●。是にあらず。

㉛不●肯●。肯はず。

㉜不●可●。不可なり。

㉝不●可●與●。與ふべからず。

㉞不●可●得●。得べからず。

㉟不●可●説●。説くべからず。

㊱不●可●思●議●。思議すべからず。

㊲不●可●捉●。捉へ難し。

㊳不●可●取●。取るべからず。

㊴不●可●教●。教へ難し。

㊵不●可●與●人●。與ふべからず。

㊶不●可●與●他●。與ふべからず。

㊷不●可●與●汝●。與ふべからず。

㊸不●可●與●我●。與ふべからず。

㊹不●可●與●師●。與ふべからず。

㊺不●可●與●祖●。與ふべからず。

㊻不●可●與●佛●。與ふべからず。

㊼不●可●與●法●。與ふべからず。

㊽不●可●與●僧●。與ふべからず。

㊾不●可●與●衆●。與ふべからず。

㊿不●可●與●人●天●。與ふべからず。

(1)不●可●與●一●切●。與ふべからず。

(2)不●可●與●一●物●。與ふべからず。

(3)不●可●與●一●法●。與ふべからず。

(4)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(5)不●可●與●一●切●人●。與ふべからず。

(6)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(7)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(8)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(9)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(10)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(11)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(12)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(13)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(14)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(15)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(16)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(17)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(18)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(19)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(20)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(21)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(22)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(23)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(24)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(25)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(26)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(27)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(28)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(29)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(30)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(31)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(32)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(33)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(34)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(35)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(36)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(37)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(38)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(39)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(40)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(41)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(42)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(43)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(44)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(45)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(46)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(47)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(48)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(49)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(50)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(51)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(52)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(53)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(54)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(55)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(56)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(57)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(58)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(59)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(60)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(61)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(62)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(63)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(64)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(65)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(66)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(67)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(68)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(69)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(70)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(71)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(72)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(73)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(74)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(75)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(76)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(77)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(78)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(79)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(80)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(81)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(82)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(83)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(84)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(85)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(86)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(87)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(88)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(89)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(90)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(91)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(92)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(93)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(94)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(95)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

(96)不●可●與●一●切●衆●。與ふべからず。

(97)不●可●與●一●切●人●天●。與ふべからず。

(98)不●可●與●一●切●佛●。與ふべからず。

(99)不●可●與●一●切●法●。與ふべからず。

(100)不●可●與●一●切●僧●。與ふべからず。

上堂、僧問ふ、「如何なるか是れ ㊈劍及上の事。」師云く、「㋐禍事禍事。」僧擬議す、師便ち打す。問ふ、「祇だ ㋑石室行者の碓を踏んで、脚を移すことを忘卻するが如きんば、什麼の處に向つてか去らん。」師云く、「㋒深泉に沒溺す。」師乃ち云く、「但だ ㋓來者あれば伊を虧欠せず、總に伊が來處を識る。若し ㋔與麼に來れば、恰も失卻するに似たり、不與麼に來れば、不與麼に來れば、無繩自縛。一切時中亂りに ㋕斟酌すること莫れ、會と不會と、㋖都來是れ錯。分明に與麼に道ふ、㋗天下の人の貶剝するに一任す。久立珍重。」

上堂云く、「一人は ㋘孤峯頂上に在つて、出身の路無く、一人は ㋙十字街頭に在つて亦向背なし、㋚那箇か前に在り、那箇か後へにある。 ㋛維摩詰と作さゞれ、傅大士と作さゞれ。珍重。」

上堂云く、「一人あり ㋜劫を論じて ㋝途中に在つて家舍を離れず、一人あり ㋞家舍を離れて途中に在らず。 ㋟那箇か人天の供養を受く合き」といつて便ち下座。

上堂、僧問ふ、「如何なるか是れ ㋠第一句。」師曰く、「㋡三要印開して朱點側つ、未だ擬議を容れざるに主賓分る。」問ふ、「如何なるか是れ第二句。」師云く、「㋢妙解豈に無著の問を容れんや、漏和尙爭か截流の機を負はん。」問ふ、「如何なるか是れ第三句。」師云く、「㋣棚頭に傀儡を弄することを看取せよ、抽牽都來裏に人あり。」師又云く、「㋤一句語に須らく三玄門を具すべし。一玄門に須らく三要を具すべし。權あり用あり、汝等諸人作麼生か會せん」といつて下座。

師、晩參 ㋥衆に示して云く、「有る時は ㋦奪人不奪境、有る時は奪境不奪人、有る時は人境俱奪、有る時は人境俱不奪。」 ㋧時に僧有り問ふ、「如何なるか是れ奪人不奪境。」師云く、「㋨煦日發生して地に鋪く錦、 ㋩攖孩髮を垂れて白きこと絲の如し。」僧云く、「如何なるか是れ奪境不奪人。」師云く、「 ㋪王令已に行はれて天下に徧し、 ㋫將軍塞外に煙塵を絕す。」僧云く、「如何なる

㋐禍事禍事。禍事は災難。事故。

㋑石室行者の碓を踏んで、脚を移すこと。石室行者は、禪宗の祖師。碓は、米を搗く臼。

㋒深泉に沒溺す。深泉は、深い泉。沒溺は、おぼれること。

㋓來者あれば伊を虧欠せず、總に伊が來處を識る。來者は、來人。虧欠は、缺けること。來處は、來歷。

㋔與麼に來れば、恰も失卻するに似たり、不與麼に來れば、無繩自縛。與麼は、如此。恰は、丁度。失卻は、忘れること。無繩自縛は、「つくり病よ」となり。

㋕斟酌。亂りに思慮卜度することなかれと、「あてはかる」なり、計較安排することはならぬと。

㋖都來是錯。會は與麼、不會は不與麼、すべてに迷悟二つ俱に遣る、這裡に到りて佛祖も命を乞ふにて、いたづらものぞと。

㋗天下人。貶剝は是非の義なり天下の人がわるく云ふともまよと一任するとなり、善知識は是非毀譽の間にあづからずと。

㋘孤峯頂上。これは把住也、目に雲霄を見、三世佛を呑却する也、出身の路なしとは人間の路絕して居たとなり、人に接せざるの義なり、古人云く、「生佛未だ生ぜず、眞空法界に

住す」、又これ維摩詰等の境界なり、出身は悟りにおちつくなり。

㋙十字街頭。これは放行なり、和泥合水對人底なり、向背なしとは十字街頭には前後向背なく、平等なり、古人云く、「生佛已に起り、理事無礙法界に住す」、又これ傅大士の境界なり。

㋚那箇。一人と云ふに付いていへり、上來に人の功德、執れか一執れかと二、之を見るに前に在るかと見れば、忽焉として後へに在り、前後の見を作すことなかれ、各自に肯綮得せば好しとなり。

㋛維摩詰。言只だ無語を是と作さゞれの義なり、維摩は佛在世なれば前、傅大士は梁の武帝の時なれば後人なり、世出世ともに掃蕩せられたとなり。

㋜劫を論じて。劫は梵語には劫波、此には分別、時節。古書にも儒は世といひ佛は劫といふと、多說あれども、小劫、萬劫、無量劫、三大阿僧祇劫等なり、時分と譯する方正當ならん、論劫は堅固不動の義に取る、百劫千劫乃至阿僧祇劫を歷ると云はんが如し、むかし古來などの俗語あり、いつに至りてもとなり。

㋝途中云々。途中は世諦なり、家舍は佛法なり、遍一切處なり。不離とは不動なり、途中家舍一つなり、此の那一人は世諦流布の上にて此の事を用ひ得た。この一句は影略の句法ならんと古抄に夾山はいふ。又或抄に云く、「在途中とは十方世界、一切の諸趣と云ふが如く、家舍とは一切諸佛菩薩の地位と云ふが如し、永く正覺を取らず百千劫を論じ

か是れ人境兩俱奪。」師云く、「㋑並汾絕信、獨處一方。」僧云く、「如何なるか是れ人境俱不奪。」師云く、「㋺王、寶殿に登れば野老謳謌す。」師乃ち云く、「㋩今時佛法を學する者は、且く㋥眞正の見解を求めんことを要す。若し眞正の見解を得ば㋭生死に染まず、去住自由なり。㋬殊勝を求むることを要せざれども、殊勝自ら至る。㋮道

て大願輪に乘じて、羣生を化益するをいふ」と。

㋑家舍云々。佛法世法共に脫却した、掃蕩したとなり。法身に住せず色身に拘はらず、家舍途中を離るゝ大自在底の人を知らしめんことを要す、大殊勝底の人を喚出せよと。過去無量無始劫より盡未來際までを一場の夢と見るときは、未悟して途中に在つて主人公ともならず、世諦流布にも着せず、又大悟の上にて主人公となりて、歸家穩坐底をも那一人は打成して、一片と見るなり。

㋒那箇云々。那箇とは一人一人に付いて云ふ、驀直に爲人底なり、佛祖位中住むれども留ること得ず、畢竟家途を離るる沒蹤跡の人なり。

㋓第一句。是は掃蕩門なり、此の上堂は臨濟の三句と云ふ、第一句の中に三要がある、眞佛言前の妙旨卽ち理なり、後來雲門の嗣法の古塔主は、之を分ちて體中玄、句中玄、玄中玄となす、これは克符侍者の問なり。

㋔三要印開。三要の印と云ふは、凡そ卽ち印をつくには三つかされてつくなり、それを三要の印といふ、又印空、印水、印泥とも云へり、上根、中根、下根に配す。蹤跡が出來たゆゑ下根にとる。側の字は會元には窄の字に作る、これが好きなり、印をほるには點畫を小くほるが故に、窄しと云へり、側の時は三要の印を押して、開いて學者を開方するとき、朱點をば二なりと云ふこゝろなり、朱點は用に立たぬなり、點畫があらはれたるなり、主賓全く分る故に側といふ、印相搭し開く、已に提ぐるの間を窄といふ、主とは印板なり、これは能悟底の主人公を指す、卽ち理なり。賓とは紙上の印文なり、これは所悟底の賓を指す、卽ち事なり、分とは所謂分明なり、畢竟拈華破顏や三日耳聾等これなり。三要は三玄三要なり、三要を擧げて三玄を略す。印開は明白の義を取る、朱は南方の色なり、火なり、色の最も明なるものなり、窄とは界限明にして、見て分ち易きなり。

㋕妙解云々。言說及ばざるの義、不可思議の解會なり、畢竟達磨の不識底、又老胡の會底なり。妙解は文殊の名となす。無着、文殊に見えんと求む、殊許さず云々、無著文喜は仰山に嗣ぐ、文殊と問答す、前三三後三三の公案、碧巖の三十五則にあり、これに三義あ

流祇だ古よりの先德の如きんば、皆㋖人を出す底の路あり。山僧が人に指示する處の如きんば、祇だ儞が㋗人惑を受けざらんことを要す。用ひんと要せば便ち用ひよ、更に㋘遲疑すること莫れ。如今の學者得ざることは病甚の處にかある。㋙病不自信の處にあり、儞若し自信不及ならば、卽便ち㋚忙忙地にして一切の境に徇つて轉じ

りと、古來の說なり。溫和は此に方便と譯す、截流機とは衆流截斷向上の機なり、祖佛の悲智已むことを獲ず、權化の門を開いて方便度生す、爭か敢て截流向上の機に辜負せんとなり。無着の遲鈍なるは文殊の利根なる境界に及びがたきなり、故に文殊は無著の問をゆるさるゝなり。負の字は「かなはん」と讀む、及ばざるの心、截流は象の河を渡るを云ふ、上根をいふ。

㋜棚頭云々。傀儡は「でくのぼう」、善知識神頭鬼面を現じ、隨波逐浪する向下爲人の體裁なり。當頭始より本位を離れず、故に都來裏に人ありといふ三句は、別して三根の機に對す。つまりいふと「棚の上にてあやつりをまはす」、抽牽は「絲を付けて內からひく」こと、都來は「すべて」なり、裏は「うち」、或抄に「第一第二第三を法報應の三身と見るべきか」と。

㋝一句語云々。一句語とは前の第一句を徵詰して云ふ。一玄は言前の旨なり理なり、二玄は究竟直說なり智なり、三玄は方便なり。一玄に又三要ありとは、一玄の中に各々理智方便あり、圓融具足す、玄は微妙の理、言思路絕するを云ふ、要は言思絕する處、分明に履踐す、萬象森羅歷々孤明なるを云ふ。有權有用は此の一句中にあり、權は方便なり、法として備はらずといふことなく、應機接物するをいふ、又事已むことを獲ざるの方便なり、用は應機接物の手段なり。

㋞晚參。小參なり、小は「にた」と云ふ心なり、晚景に參禪をきくときを云ふ。すべて牌を掛けて朝は早參、非時には小參と揭示す。

㋟奪人不云々。以下之を臨濟の四料揀といふ、又四料簡といふ。人は心性及び識情等、境は山河大地文字言句等をいふ、奪とは不立をいふ、人境の惑をうけざらんがために、料簡して云ふなり。寧一山禪師云く、「彼の四料揀は已むことを得ずして慈を垂るゝの語なり」と。

㋠時有僧。克符道者、紙衣和尙といふ、臨濟に嗣ぐ。

㋡煦日發生。煦日は春の日、錦は花や柳など、百花爛熳のけしき、煦は暖なり。これは不奪境。

㋢孺孩垂。孺孩は人生れて二三歲より四五歲まで、生れて白髮のものなし、之あらば實に非人なり。これは奪人。

㋣王令已行。これは奪境なり、

て他の㋔萬境に回換せられて自由を得ず。儞若し能く念念㋕馳求の心を歇得せば、便ち祖佛と別ならず。儞祖佛を識ることを得んと欲すや、祇だ儞が面前㋖聽法底是なり。學人信不及にして、便ち外に向つて馳求す。設ひ求め得る者も、皆是れ㋗文字の勝相なり、終に他の活祖意を得ず、㋘錯ること莫れ諸禪德。此の時遇はずんば、萬劫

天子の政行はれて人民歸伏するを云ふ。

㋓將軍塞外。これは人を存するなり、烟塵は「のろし」、塞は國境なり、天下太平の兆をいふ。

㋔幷汾絕。幷汾は二州の名、この二州は朝命に順ぜず、獨立す。唐の時吳元濟、この二州を奪取して勅命に應ぜず、叛逆す、故に絕信といふ、人境俱奪なり。古語に「打破蔡州城、殺卻吳元濟」と、唐の憲宗元和十二年のこと、大原府は古へ幷州といふ。

㋙王寶殿。これは人境俱不奪なり、皇天子、大殿に在して、善政を施したまへば、臣子は千秋萬歲と謳ふ。あまたの人一同に聲をそろへて歌ふを云ふ。

㋚今時佛法。已下法語なり、殊勝自至まで第一段なり。

㋛眞正見解。邪見に揀異するものなり。

㋜生死不染。生死にあづからざるを云ふ。去は死、住は生、自由はあづからざるを云ふ。

㋝殊勝。奇特を云ふ、光を放つやうなことはないぞ、狐狸も三十二相八十種好を現し光を放つ、鬼神供を捧げ百鳥花を含むの類、これは殊勝でない。

㋞道流。聖道の法流に入るが故に、道流といふ、學者の總名なり。

㋟出人底路。學者を接し出すを云ふ。出入にとよむときは傑出の心なり、人にすぐれたるの義なり、大悟發明せしむるの義もあり、無明の窠窟を脫出し、蓋纏を出離せしむるの義もあり。

㋠人惑。惡知識の教壞なり、人境の二惑の內、佛惑、祖惑を受くるなり、佛祖は殊勝なものと思ふ故に、惑せらるゝなり。物々轉ぜらるゝを惑といふ。

㋡莫遲疑。卽今用ひよ、思量にわたるなと。「ぬかるな、」「狐疑するな」となり。

㋢不自信處。一切衆生、如來の智惠德相を具有することを知らず、本來自性淨を信ぜず、一切處一切時、これ天眞佛の受用することを覺悟せざるものなり。

㋣忙忙地。據を失すること、「あはてふためく、」一切の境に徇つて半疑半信の間にあるを云ふ、萬法の語をば自信し、不及は不審なり。

㋤萬境回換。目前の境に眼をぬきかへられて不自由なり。回は纏縛の義なり、「しばりくゝらるる」なり。

㋥馳求心。求むる心をやめよと、休歇の義なり、歇得すれば祖

千生㋦三界に輪廻して、㋧好境に徇つて掇し去つて㋨驢牛の肚裏に生ぜん。道流㋩山僧の見處に約せば釋迦と別ならず、今日多般の用處、什麼をか㋪欠少す。㋫六道の神光未だ曾て間歇せず、若し能く是の如く見得せば、祇だ是れ一生無事の人なり。㋬大德、㋭三界無安猶如火宅、㋮此れは是れ儞が久しく停住する處にあらず、㋯

佛と一般なり、萬閑の田地なり。

㋖聽法底。直指爲人なり、聽法底が則ち祖佛ぞと。

㋗文字勝相。文字とは一大藏經又は一千七百則の公案をさす、勝相は文字の上といふ義、世俗の論說に異なるを云ふ、活祖意を得ずとは、文字の勝相にあらざると明か也。

㋘莫錯。この小節は不自信を誡む、境惑を受くることを戒むるなり、已上三小節大段一節なり、この二字は上を結び、下を起すの語なり。

㋙輪廻三界。三界は三毒なり、貪を欲界、嗔を色界、癡を無色界と名づく。この時善知識に遇はずんばと云ふ義なり、迷時に約す。

㋚好境掇去。好境とは好愛する所の六塵の境なり、好惡の境なり、掇去は執著なり。

㋛驢牛肚裡。此の生に若し會はずんば、一念可愛の境に徇つて終に馬腹牛胎裏に生ぜん。諸禪德より此に至つて一段迷倒のものゝ異類に生ずることを誡む、次に生佛功用一致なることを示す。

㋜山僧見處。眞正の見解なり、應機說法、活脫自在の故に機に逗し化を設くるを以て、世に隨つて建立する故なり。

㋝欠少什麼。上の釋迦と別ならずといふ處をのぶ、佛も花は花、月は月とみる、我も花は花とみる、欠けたるものはなきとなり。

㋞六道神光。六根門頭なり、神光は色聲香味觸法の六境の上の神用光明なり、これは悟時に約す、永嘉の謂はゆる六般の神用これなり、十二時中間斷なきを云ふ、皆是の如し。一生無事人とは永嘉の云ふ、絕學無爲の閑道人の行履なり。

㋟大德。梵には婆檀陀といふ、律の中には佛を大德と呼ぶ、今は大衆を大德と呼ぶ、これよりは三有の執滯を破して、慆慢の學者を誡む。

㋠三界無安。貪嗔痴、煩惱妄想等の業火を云ふ、法華の譬喩品の偈文なり。

㋡此不是とは、無常迅速の義なり。

㋢無常殺鬼。無常は梵には薩迦耶、眼光落地の時を殺鬼といふ、一刹那此には一念と譯す、一彈指に六十五刹那あり。大德より此に至つて一段、三有の執滯を破り、慆慢の學者を誡む。貴となく賤となく、老少ともにつれてゆくなり。

㋣儞一念上。これは法身の境界本分をいふ、無分別光は報身の境界なり、柳櫻松楓なんど

無常の殺鬼、一剎那の間に貴賤老少を揀ばず、儞祖佛と別ならざらんことを要せば、但だ外に求むること莫れ。㋓儞が一念心上の清淨光、是れ儞が屋裏の法身佛なり、儞が一念心上の無分別光、是れ儞が屋裏の報身佛なり、儞が一念心上の無差別光、是れ儞が屋裏の化身佛なり。此の三種の身は、是れ儞が卽今、目前聽法底の人なり。祇だ外に向つて馳求せざるが爲に此の㋕功用あり。經論家に據らば、三種の身を取つて極則と爲す。山僧が見處に約せば然らず、此の三種の身は是れ㋖名言、亦是れ㋗三種の依なり。古人云く、『㋘身は義に依つて立し、土は體に據つて論ず、法性の身、法性の土、明かに知んぬ是れ光影なることを。』大德儞且く㋙光影を弄する底の人を識取せよ、是れ諸佛の本源一

といふが如し、無差別光とは化身佛の境界なり、釋迦佛などで、あまれく度生するを云ふ。光とは擧手下足、拈椎竪拂、揚眉瞬目を云ふ、屋裡とは形體を指す、無分別光は是れ智光なり、十二時中の受用、寒來れば衣を重ね、熱し來れば扇を搖す等、此れ分別擬議に渉らず、之をいふ、報身佛は自智なり、無差別光は二六時中、應用無邊、化身佛は自行の妙用なり。

㋕功用。悟をいふ、又功能なり、又功德妙用なり、關要より此に至るまで一小節なり、人人一心上に三身佛を具足することを提示す。

㋖名言。名身なり、此の名身、句身、文身の中に名身の一を擧げ、句身文身の二を兼ぬ、名ばかりと云ふほどの意。

㋗三種依。依は物に依倚するなり、獨脫ならざる義、三種の身は謂ゆる表顯なり。

㋘身依義。この古人とは護法菩薩及び慈恩法師等を指す、本分上には身もなし土もなし、法身なり、寂光土なりなどと立したる義理をつけて論じ、本體により論じたることなり。かう云ふたはたとへば影や光やを認めて眞形としたがるが如しと云ふ義。妙義佛國土法身體身は三身なり」と古鈔にあり。

㋙弄光影。これ什麼人ぞ、或は無位の眞人閑道人なり。諸佛の本源とは楚網經の文。光影は如夢如幻と、これは教家の三身を斥す。

㋚道流歸舍。一切處は細には色相等、麁には山河等を指す。これ道流が放身命の處なり。

㋛四大色身。四大とは地、水、火、風なり、四大の色身は死

切處、是れ㋜道流歸舍の處なり。是れ儞が㋝四大色身、說法聽法を解せず、㋞脾胃肝膽、說法聽法を解せず、㋟虛空、說法聽法を解せず、是れ什麼をか說法聽法を解する、是れ儞が目前㋠歷歷底、一箇の形段勿うして孤明なる、是れ這個說法聽法を解す。若し是の如く見得せば、便ち祖佛と別ならず、但だ㋡一切時中更に間斷莫し。觸目皆是なり、祇だ㋢情生ずれば智隔たり、想變ずれば體殊なるが爲の所以に、三界に輪廻して種種の苦を受く。若し山僧が見處に約せば㋣甚深ならずといふこと無く、解脫せずといふこと無し。道流㋤心法、無形十方に通貫す。㋥眼に在つては見と曰ひ、耳に在つては聞と曰ひ、鼻に在つては香を覺ぎ、口に在つては談論し、手に在つては執捉し、足に在つては運奔す、㋦

して後も全身儼然とあれども分別の心はなし。

㋝脾胃肝膽。五藏六腑なり。

㋞虛空。山河大地盡天下なり、四大、空大もなり。

㋠歷歷底。分明なり、此は人人の本性を指す、孤明とは此には心を指していふ、孤明なるが故に形段なし、形段なきが故に歷歷たり、是の故に說法聽法を解するなり。

㋡一切時中。十二時なり、觸目皆是れなり、滿眼滿耳、週遍するに處なきの心なり、所謂滿目青山間斷なしなり、此の一小節は光影を弄する底の無形段の者を指出す。

㋢情生智隔。情は妄情、智は實智、想は相に作るべし、形相なり、相變とは人相は異類の相に變ずるなり、體殊は實智の體殊にして異類の體と成る、妄情生ずるときは實智を隔て

て明なることを得ざしめす、終に業力の所轉に隨つて兩も報を受く、人相變ずるときは本體を殊にして永く異類に墮す、所以に三界に輪廻して種種の苦を受くと。或抄に「これは迷の方を云へり、情と想とは色相なり、智と體とは本分なり、この語は李長者の語を取る」と。

㋣不甚深。若し師の見處に約せば三界種種の苦境、卽ち甚深解脫の境界なり、更に得失憎愛なし眞正活脫の受用なり。已上は其の說無形無相の本心に歸す、これは師の自賛語なり。

㋤心法無形。心卽ち法なり、心に凡そ四種あり、五藏心、緣慮心、集起心、堅實心これなり、前の三は相、後の一は性、四種の心は本同一體なり、今此の心法とは堅實心なり、此れ

本是れ一精明、分れて六和合と爲る。㋕一心既に無なれば隨處に解脫す。山僧與麼の說、意什麼の處にか在る。祇だ道流㋖一切馳求の心歇むと能はずして、他の古人の間機境に上るが爲なり。道流山僧が見處を取らば、㋗報化佛頭を坐斷し、㋘十地の滿心は猶ほ客作兒の如し。等妙の二覺は擔枷鎖の漢、㋙羅漢辟支は猶ほ厠穢の如く、菩提涅槃は繫驢橛の如し。何を以てか此の如くなる、祇だ道流㋚三祇劫空に達せざるが爲の所以に、此の障礙あり。㋛若し是れ眞正の道人ならば、終に是の如くならず。但だ能く緣に隨つて舊業を消し、㋜任運に衣裳を著けて、行かんと要すれば卽ち行き、坐せんと要すれば卽ち坐し、一念心の佛果を希求する無し。何に緣つてか是の如くなる。㋝古人云く、『若し作業

性相に通ずるの心なり。通貫の義は此より已下之を擧ぐ、自由三昧自受用底なり。

㋖在眼曰見。これは傳燈の三にある波羅提尊者の偈の意を取る、師は偈中の六句を取りて擧ぐ、畢竟通貫の一理なり、下智の者は見聞等の緣に隨つて其の上に於に執著す、是れ卽ち繫縛するなり、此れ亦心性一致の直示なり、盡く心法のなすところと云ふ。

㋗是一精明。一精明は本分なり六和合は六根を云ふ、眼は色に、耳に聲に、鼻は香に、舌は味に、身は觸に、意は萬法に和合するなり、六和合は傳心法要にも出づ。

㋘一心既無。古人云く、「六根門頭大光明を放つ、」又云く、「一心生ぜざれば萬法に咎なし。」

㋙一切馳求。一切馳求の心とは求むべき法もなきを諸方に求むるを云へり、古人の閑機境は閑言語を云ふ。四十九年の說法一千七百則の公案等、參禪の學者眞正の見解を要す、この一段は心法無形の故に、當體解脫の理あることを示して馳求のものを激起す。機は內、境は外なり。

㋛報化佛頭。毘盧頂顱を坐斷するの義と一般なり、坐斷は有力のものゝ人を把捉して膝下に安在するの謂なり、切斷の義、頭の字はこゝろなし、報身佛、化身佛をも切斷するなり、法身佛と云ふは本分なり、故に本分から報化佛を坐斷するなり。

㋘十地滿心。十地とは菩薩修行の位階なり、滿心は修行了畢の心なり、十信、十住、十行、十回向、十地、此の五十位を經上りて等覺妙覺の二位にのぞむ菩薩なり、文殊菩賢など

して佛を求めんと欲せば、佛は是れ生死の大兆なり』と。㋝大德時光惜むべし、㋞祇だ傍家波波地に禪を學し道を學し、名を認め句を認め、佛を求め、祖を求め、善知識を求めんと擬して意度す、錯ること莫れ。道流儞祇だ一箇の父母あり、更に何物をか求めん、㋟儞自ら返照して看よ。㋠古人云く、『演若達多頭を失卻す、求心歇む處

の類なり。客作兒は下賤のものぞとなり、人にやとはれて賃を取る勞働者などなりと。等妙の二覺は如來地を云ふ、それも手かせ足かせ、入れられたるものぞと云へり。

㋙羅漢辟支。羅漢は聲聞、辟支は緣覺なり、それもくその如しと云へり、厠は東司(雪隱)の穴あり、穢は屎なり、菩提は覺と譯す、涅槃は不生不滅と譯す、それもなかしきものぞと云へり、驢馬をつなぎたるくひなり、無用の長物なりと。いづれも師の本分の眼から截斷して、一塵一法もなき處を諸人によくみせんが爲に慈悲のあまりにかく仰せらるるなり。

㋚三祇劫空。三祇劫とは三大阿僧祇劫なり、盡く空と知るは本分上の悟りなり、空ずる眼に達せざる故に、佛なり菩薩なり菩提なりなどと云ふてをぢおそれて纏縛せらるゝなり。

㋛若是眞正。上を結び下を起す、道流より此に至つて一小節、佛菩薩等の名相の執を破す。消は用なり、舊業は舊に依ら、これまでの業作なり、治生產業等、平常の受用なり、一切時一切處頭々物々の上に於て、其の緣に隨つて作用するの義なり、これ眞正の道人なり、消は消滅にあらず。

㋜任運著衣。任運は動容周旋、天眞自在の義なり。此の語は舊業を消する處の下語のやうに仰せられて殊勝なり。衣は佛衣、祖衣、人天神仙微妙寶衣等なり、任運は「なにとなくそのままに天眞自在」のことを云ふ。

㋝古人云。古人は寶誌和尙の大乘讚なり、作業は故らに心を起して造作するなり。生死大兆とは兆とは龜を灼いて占ふなり、兆は芽なり、此は生死流轉の大なる芽なり、此の一小節は任運自在の理を示す。

㋞大德時光。光陰を惜んで、いそぎ參禪をせよと。

㋟祇傍家云々。傍家とは「そばつら」と云ふ義、途中なり、教家なり、邪路なり、波々地は奔波なり、手忙脚亂にて、ぶつさうな體、あはたゞしきなり、意度は意に物を了簡しはからふ義、更に何物をか求めんとは、我が一箇の父母をもとめば更に傍家に向つて佛を求め祖を求めてなにかせんとなり。又一箇の父母は、何物をもとむるぞと直指して云ふ、本地の風光、無爲の眞人を云ふ。

㋠儞自返照。よそごとでないぞよ、我れに立ちかへつて看よ

卽ち無事』と。大德(ハ)且く平常ならんことを要せば、模樣を作すこと莫れ、一般の(ニ)好惡を識らざる禿奴有つて、便卽ち(ホ)神を見鬼を見、東を指し西を劃し、晴を好み雨を好む。是の如きの流、盡く須らく(ヘ)債を抵して、(ト)閻老の前に向つて熱鐵丸を呑む日あるべし。

(チ)好人家の男女、這の(リ)一般の野狐の精魅の所著を被つて、便卽ち(ヌ)揑怪す。(ル)瞎驢生、(ヲ)飯錢を索る〻日有ること在らん。」

師、衆に示して云く、「道流(ワ)切に眞正の見解を求取して天下に向つて橫行して、這の一般の精魅に惑亂せらるゝことを免れんことを要す。(カ)無事是れ貴人、但だ造作すること莫れ、祇だ是れ平常なり。(ヨ)外に向つて傍家に求過して腳手を覓めんと擬す、錯り了れり。祇だ(タ)佛を求めんと擬す、佛は是れ名句なり、(レ)馳求する底を識るや。(ソ)三世十方の佛祖出で來るも、也た祇だ法を求めんが爲なり、如今の參學の道流も也た祇だ法を求めんが爲なり。法を得て始めて了ず、未だ得ざれば依前として(ツ)五道に輪廻す。云何なるか是れ法、法といつぱ是れ心法、(ネ)心法形無うして十方に通貫す、目前

(一)卽ち無事 平常無事の義で、善惡をも辨ぜざる惡知識を指す。外相俗に非ず、心行僧に非ず。

(二)好惡 好人家男女。好の字は「あつたらもの」、又「子細もないもの」と云ふ義、善男子善女人なり、此れ在家の二衆なり。

(ホ)見神見鬼 一切魍魎の鬼神などに恐れて惑亂せらるゝ也、指東劃西とは此は迷の方を云へり、正法を顚倒しおちつかぬ不實の體、好晴好雨はよきことを好むもあり惡しきことを好むものもあり、晴がよきか雨がよしきかにとる。本分上には善惡共に不用のものなり、みな相に著するものを禪宗では嫌ふ。

(ヘ)抵債 債は人の物をかりること、相に著して惑亂せらるゝものは輪廻して債を返さずでは叶ふまいとなり。善惡因果は歷然なり。いかやうなる善根を修したりとも截斷を悟らずば、輪廻は免れぬぞと。

(ト)閻老前向 閻魔は此に靜息と譯す。能く靜に惡を造るもの、不善の事を息むるを以ての故に云ふ、畢竟惡知識を云ふなり。

(チ)好人家男女 好の字は「あつたらもの」、又「子細もないもの」と云ふ義、善男子善女人なり、此れ在家の二衆なり。

(リ)一般野狐 猪頭人形なるを魅といふ、總は眞氣なり、靈なり、倚伸附木、これは邪師惡知識を指していふ、所著は「ばかされて」なり。

(ヌ)揑怪 妖怪を造作す、又驚訝の貌なり、鼻にのする義なり、法を欺き人を誣ふるなり。

(ル)瞎驢生 驢は愚に作るべし、愚なり、此れは邪弟子をさす、「めくらのやうなもの」と云ふて人を罵る語なり。

(ヲ)索飯錢 大德より此に至りて一段、惡知惡見の師家や學者を懲斥す。索は「もとむ」、「はたる」、「あらくる」、「つくる」

(ヲ)揑怪す。(ル)瞎驢生、(ワ)飯錢を索る〻日有ること在らん。」

師、衆に示して云く、「道流(ワ)切に眞正の見解を求取して天下に向つて橫行して、這の一般の精魅に惑亂せらるゝことを免れんことを要す。(カ)無事是れ貴人、但だ造作すること莫れ、祇だ是れ平常なり。(ヨ)外に向つて傍家に求過して腳手を覓めんと擬す、錯り了れり。祇だ(タ)佛を求めんと擬す、佛は是れ名句なり、(レ)馳求する底を識るや。(ソ)三世十方の佛祖出で來るも、也た祇だ法を求めんが爲なり、如今の參學の道流も也た祇だ法を求めんが爲なり。法を得て始めて了ず、未だ得ざれば依前として(ツ)五道に輪廻す。云何なるか是れ法、法といつぱ是れ心法、(ネ)心法形無うして十方に通貫す、目前

(ワ)切要 再び眞正を擧揚す、切には「たしかに」の意。この一段は別して說法をいふ。

(カ)無事是貴人 心に無事に事に無心なる底なり、唯だ諸緣を謝絕して之を無事といふには非ず、隨緣放曠逍遙自在なるをいふ。造作は妖怪なり、祇だ是れ平常で無事に、屙屎送尿、著衣喫飯なり。

(ヨ)向外傍家 傍家は外の他家、長者の窮子の如し、脚手は手段なり、一知半解を求む、求過は走過と同じ、求めまはるなり。

(タ)擬求佛 佛は是れ名鳥句身といふ義、眞實にあらずといふ義なり。

(レ)馳求底 これ畢竟什麼物ぞ、

更に別物に非ず、馳求するものこそ肝要なりと。これは心法をさす、馳求は猶ほ修行するといふが如し、これを知るかと。

(ソ)三世十方 自悟自證、此れ佛祖求法の修行底なり。此れは正法を云へり、佛祖と云ふも法を求めて悟りて後こそ、大事了畢の境界にいたるなり、生れながら知りたるものはあらじと。

(ツ)輪廻五道 五道とは六道の中修羅の一道を除いて云へり、此の一小節は佛祖已來の修行求法の由を擧ぐ。法を得ざれば舊に依りて驢胎馬腹に入り去るとなり。

(ネ)心法無形 是れ法とは自問なり、法は是れ心法なりと自答なり、心性を一つに云ふ。通貫十方は徧界不曾藏、百姓日用不相知で、目前に全體作用

に現用す。人信不及にして便乃ち名を認め句を認め、文字の中に向つて佛法を意度せんとを求む。天地懸に殊なり、道流山僧が㊉說法、什麼の法をか說く。心地の法を說く、便ち能く凡に入り聖に入り、淨に入り穢に入り、眞に入り俗に入る。要且つ是れ㋭儞が眞俗凡聖なるにあらず、能く一切の眞俗凡聖の與に名字を安著す。眞俗凡聖、此の人の與に㋥名字を安著することを得ず、道流把得して便ち用ひて更に名字を著せざる、之を號して玄旨と爲す。㋖山僧が說法、天下の人と別なり、祇だ箇の文殊普賢、目前に出で來るが如きんば、各一身を現じて法を問ふ。纔に和尙に咨すと道へば、我れ早く辨じ了れり。老僧㋫穩坐更に道流有つて、來つて相見する時に、我れ盡く辨じ了れり。何を以てか此

㋥安著名字。能與の二字、眼を著けて之を看よ。玄旨とは深い旨あり、或は主人公と云ふ。此の人とは無依の道人なり。把得とは拈得なり、或は決擇なり。道流より玄旨に至るまで一段、無依の道人法に於て自在の義を示す。安著は「つけてやる」の義。

㋖山僧說。師の自稱なり。我れより上に人をおかぬを云ふ、文殊普賢ありて云々、鑪機前にありとなり。

㋫穩坐。無事のこと、本分の田地を云ふ。

㋬外不取凡聖。心外無相なるが故に內も亦不可得なり。更に不疑謬とは、大徹大悟して眞實にして眞に私なきが故に、此の一段は師の見徹して物を辨ずることを擧す。これ師の自負の語なり。

す、面前の境界かはれり、佛は名句なりと云ふを合せたるなり。意度は計較安排擬議思量なり、求めて意に佛性を度るは佛法と天地、白雲萬里なりと。

㊉說法什麼。これは心法圓融の義を示す、下を起して自ら問ふ也、說心地法とは自答なり。凡は凡夫、聖は聖人、一切世苦のものの事理通脫の人を聖といふ、これも心と性とを一つに云へり、心法はどこにも偏滿してあるぞと。眞は出家、俗は在家、直心は淨、三毒は穢、之を百億分身といひ、心性一致に直示す、一心念上を離れず。

㋭儞眞俗。儞とは無依の道人を指す、這の無依の道人、本眞俗等の名なし、眞俗凡聖と名字を著けたるにてこそあれとなり。

の如くなる、祇だ我が見處の別なるが爲なり。

㋬外凡聖を取らず內根本に住せず、見徹して更に疑謬せず。」

師、衆に示して云く、「道流㋐佛法は用功の處無し、祇だ是れ平常無事。屙屎送尿、著衣喫飯、困し來れば卽ち臥す。愚人は我れを笑ふ、智は乃ち焉を知る。㋗古人云く、『外に向つて工夫を作す、總に是れ癡頑の漢』と。儞且く㋒隨處に主と作れば、立處皆眞なり。境來れども回換することを得ず、縱ひ從來の㋓習氣、五無間の業有るも、自ら解脫の大海と爲る。今時の學者㋔總に法を識らず、猶ほ㋕觸鼻羊の物に逢著して、口裏に安在するが如く、㋘奴郎辨せず、賓主分たず、是の如きの流、邪心にして道に入る。闇處には卽ち入ることを得ず、名けて㋙眞の出家の

㋐佛法無用。本分の事は功動邊に涉らず、故に屙屎送尿著衣喫飯、自由自在の境界なり、天言はず四時行はるなり。無功用處とは此には本分の田地を言ふ、それで愚人は笑ひ智者は知る、これ自我を知るなり、之を歸向といふ。

㋗古人云く。古人とは南嶽の明壞禪師の歌にいふ半懶癡和尙なり。「向レ外覓二功夫一總是癡頑漢」と、佛法をよそにあると心得て求むるは馬鹿ものなりと。

㋒隨處作主。頭々物々、他物に非ず、境に轉ぜられぬといふ義なり、立處は緣起の諸法なり。

㋓習氣五無間。習氣の解、五無間の解は前卷に見ゆ、之を略す。天台の法相、前世の苦習、又は舊業といふ、本分を受用したる上にては五無間の業も自然に大解脫海となる。習氣

は微細の煩惱なり、無間は梵語阿鼻、第八の地獄なり。此の一段は無功用底の業報、卽ち大解脫なることを提示す。

㋔總不識法。法にあまたあり、正法、邪法、萬法など、故に總にと云ふ、どれだも知らぬ。

㋕觸鼻羊。羊は目では物を辨ぜず、鼻に觸れゝば卽ち之を食ふ、譬へば學者が師家の善惡邪正を知らざるが如し。羊の總名なりと古抄にあり。

㋘奴郎不辨。上郎をも下郎をも客をも主人をも辨ぜず、如是の流はたとひ參禪すれども、これを無眼子の漢といふ、佛法と世法と始より二途なし。邪心とは惡知惡見なり、順境界には入り易く、闇處則ち逆境界には入り難し、樹下石上孤峰獨宿す、總に是れ鬼窟裡の活計なり。

㋙眞の出家人。出家は名義集の

人と爲んや、正に是れ眞の俗家の人なり。夫れ出家といつぱ、須らく平常眞正の見解を辨得して㋐佛を辨じ魔を辨じ、眞を辨じ僞を辨じ、凡を辨じ聖を辨ずべし。若し是の如く辨得せば、眞の出家と名けん。若し魔佛辨ぜずんば、正に是れ一家を出でゝ一家に入る、喚んで造業の衆生と作す、未だ名けて眞の出家とすることを得す。祇だ如今一箇の㋐佛魔あり、同體にして分たず、㋑水乳の合するが如し。鵝王は乳を喫す、明眼の道流の如きんば㋒魔佛俱に打す、儞若し㋓聖を愛し凡を憎まば、生死海裏に浮沈せん。」

問ふ「如何なるか是れ佛魔。」師云く、「儞㋔一念心の疑處是れ箇の魔。儞若し萬法無生に達得せば、心、幻化の如くにして㋕更に一塵一法無うして、處々清淨なる是れ佛。然も佛と魔と一に云く「夫れ出家とは無爲の法の爲なり」と、我我なきが故に即心生滅せずなどなり、種々の說あり、之を略す。

㋐辨佛辨魔。佛はよきかたなり魔はあしきかたなり、是れは說法なるが故なり、平平に說きたる佛也、界魔界の染淨の二境を以て說く。擧一明三、目機錄兩底の俗利の漢が、眞の出家なり、左もなくば在家に同じ。

㋑佛魔同體。迷悟の二つを云ふなり、同じく出家の中にても迷ひたるも悟りたるも同體にして分たざるなり、佛魔共に三十二相八十種好を具するゆゑなり。

㋒如水乳合。水と乳とはまぎれやすきもの、鵝王こそ水と乳とを分別して喫するなり。言ろは悟と未悟とをば明眼の漢こそ辨ずるなり、瞎禿奴は分別なし。鵝王は明眼の漢にたとへたるなり。

㋓魔佛俱打。此れは師の一重自負して云ふ、納僧面前には善惡共打ちのくるとなり。雲門云く、「舒事も無きには如かじ」と。

㋔愛聖憎凡。此れは魔佛俱打の注脚なり、總べて上を結ぶ。今時より此に至つて一段。始は出家の眞僞を、末は取捨憎愛の見を斥す。聖は佛、凡は魔、一味平等の法門、生死海裏を離れずとなり。

㋕一念心疑。疑ふ處が魔なり。

㋖更無一塵。これは本分の境界を云ふなり、認著すれば依然として不是、處々清淨に萬法一如の理なり。

㋗染淨二境。差別の境を示す、魔は染境、佛は淨境なり。

㋘無佛云々。根本の眼から打ちのけて云へり。

は是れ㋙染淨の二境なり。山僧が見處に約せば、㋚無佛無衆生、無古無今、㋛得る者は便ち得、時節を歷ず、㋜無修無證、無得無失、㋝一切時中更に別法無し。設ひ㋞一法の此に過ぎたる者有るも、我れは說かん如夢如化と。山僧の所說皆是なり。道流卽今、目前㋟孤明歷歷地に聽く者、此の人處々滯らず。十方に通貫し三界に自在なり。㋠一切境の差別あるに、入れども回換することを能はず。㋡一刹那の間に法界に透入して、佛に逢うては佛を說き、祖に逢うては祖を說き、羅漢に逢うては羅漢を說き、餓鬼に逢うては餓鬼を說く。㋢一切處に向つて國土に游履して衆生を敎化すれども、未だ曾て一念を離れず。隨處淸淨にして㋣光十方に透つて萬法一如なり。道流㋤大丈夫兒は今日㋥方に知る、本

㋙得者得。一超直入如來地の意なり、根本の上には得べき法もなく歷るべき時節もなし。八歲の龍女や廣額屠兒の類。

㋚無修無證。聖もなく凡もなし亦衆生もなし、修すべき法もあきらむべき法もなし。この語は血脈論より出づるの意。

㋛一切時中。趙州の十二時を使ひ得たりと云ふの意。

㋜有一法。此れとは無修無證などの本分をさす、諸法を打ちのけて云ふ。山僧所說皆是なりの皆是の二字總結なり。問如より此に至るまで一段。始は佛魔二境の中泯絕無寄の理を說くことを示す、これは師の自負なり。

㋝孤明歷々地。自在十方に通貫する也。歷々地に聽くものとは無始以來倒聞の機なきが故に滯らずして通貫するなり。此の人は這箇をさす、此の則は圓通の理を說くに因つて聽べて十方といひ、又三界と言ふなり、實に是れ圓通門大に開くないふ。

㋞入一切境。這箇のものは一切差別の境に入れども、境に轉ぜられぬといふ義なり。

㋟一刹那間。一刹那は頃刻のごとし、入法界は下の佛眼羅漢等十法界に游戲するなり。達佛より餓鬼を說くまでは觀音の應以佛身得度者と同じ、それ〴〵にしたがつて爲人するといふ義なり。

㋠向一切處。這箇のものはいづれにも通達すると云ふ義、それで未だ一念を離れず、隨處淸淨なり。心と性とを一つに云へり。

㋡光透十方。みな一如で盡く本分ならずと云ふことなし。道流より此に至つて一段。開示す、圓通無礙の義なり。

來無事なることを。祇だ儞が信不及なるが爲に、念念馳求して(ア)頭を捨てゝ頭を覓む、自ら欺むこと能はず、(イ)圓頓の菩薩の如きんば、法界に入つて身を現じ、淨土の中に向つて凡を厭ひ聖を忻ふ。此の如くの流、(ウ)取捨未だ忘せず、染淨の心在り、禪宗の見解の如きんば、又且つ然らず、直に是れ現今なり更に時節なし。山僧が說く處は皆是れ(エ)一期の藥病相治す、總に實法無し。若し是の如く見得せば是れ眞の出家、日に萬兩の黃金を消せん。道流取次に諸方の老師に(オ)面門を印破せられて、我れ禪を解し道を解すと道ふこと莫れ。(カ)辯懸河に似たるも皆是れ造地獄の業、若し是れ眞正の學道人ならば、(キ)世間の過を求めず、切急に眞正の見解を求めんことを要す。若し眞正の見解に達せば、圓明にして方に始めて了畢せん。」

問ふ、「如何なるか是れ眞正の見解。」師云く、「儞但だ(ク)一切凡に入り聖に入り、染に入り淨に入り、諸佛國土に入り(ケ)彌勒樓閣に入り、(コ)毘盧遮那法界に入つて、處々に皆國土を現じて(サ)成住壞空す。(シ)佛世に出でて大法輪を轉じて、卻つて涅槃に入つて去來の相貌有ることを見ず、其の生死を求むるに了に不可得なり。便ち(ス)無生法界に入り、處處國土に游履し、(セ)華藏世界に入つて、(ソ)盡く見る諸法の空相にして皆實法無きことを。唯だ聽法無依の道人のみ有り、是れ諸佛の母なり。所以に佛は無依より生ず、若し無依を悟れば佛も亦無得なり、若し是の如く見得せば、是れ眞正の見解なり。學人了せずして名句に執するが爲に、他の凡聖の名に礙へ

(ヘ)大丈夫兒。丈夫は佛十號の一なり、茲には諸人を指す、出世の大智を具し、智惠の劍を乘り、煩惱の網を破り、生死の境界を出づ、故に大丈夫と云ふ。

(ト)方知本來。所謂無修無證無得無失なり。

(チ)捨頭覓頭。これは演若達多のことなり、前と同じ。

(リ)圓頓菩薩。圓頓とは慥漸く成するに非ず、故に名づく、教者の極位なり。淨土の中に向つて凡を厭ひ聖を忻ふ、かくの如きの類は禪宗の見解に約せば、未だ是れ眞正ならず。

(ヌ)取捨未忘。上にある厭凡は捨なり、忻聖は取なり、禪宗の見識ではさうではないと、圓頓の菩薩を斥す。現今は今日の受用なり、無時節とは三祇階級を論ぜず等なり。

(ル)一期藥病。一期は一時の義、又一往の義。雲門云く、藥病相治す、盡大地是れ藥、那箇が是れ自己、日に萬兩の黃金を消す」と。消は用ふる義、又消滅いづれもよし。

(ヲ)印破面門。取次は次第々々と云ふ義、諸方の惡知識はみだりに印可をして醍醐分と思ふべからず。面門を本來の面目と作すは不可なり。

(ワ)辯似懸河。すぢなきことを云ふて、たきの水の落ちるやうに、ものを言ふとも地獄の業は免れぬと。

(カ)不求世間過。過は是非の義、眞正の學人は必ず他人の非法を見ざるなり。圓明は圓備の義、了畢は休歇の田地に至るを云ふ。

(ヨ)一切。一切時一切處を云ふ。

(タ)彌勒樓閣。善財童子五十三の善知識に參じ、末後にこの樓閣の前に到る、この因緣は嚴經五十八、新譯七十七に出づ。是れは根本差別智の理行上の無作の果をさす。

(レ)毘盧遮那。此には遍一切處、則ち盡虛空なり、畢竟此の自己の身心を指す、畢竟法界の理を云ふ。

(ソ)成住壞空。國土の中のことなり、例へば成は花のつぼみ、壞は花の落ちる、住は花の開いてゐるとき、空は落ちてなき處、一切の上に此の四はあるもの也。劫は是れ時分の義也、國土には麁には三界並に四禪等を指し、細には形山を指す。

(ツ)佛出于世。これも本分を用て云へり。大法とは一大藏經を說きたるものを云ふ。本より去ることも來ることもなし、緣盡くるときは則ち無爲に入る、其の實は不出不入なり。

(ネ)入無生法界。上の涅槃を承けて不生不識の地を指す。又無生と云ふはどこぞ、即ち本分の田地なり。

(ナ)華藏世界。蓮華藏世界なり、一世界の名なり。

(ラ)盡見諸法。唯有とは本分を云ふ、無依とは物によりよらずして解脫する故なり、諸佛の母とは、上には儞といひ、佛と云ふ、此には道人といふ、又母といふ、總に是れ同稱なり。是れ眞正とは結して云へり、學人不了とは諸人が無依を悟らずして、名句をとらへて眞實とするが故に、道眼をさへらるといふ義なり。

(ム)表顯之說。十二分教は一代藏經をいふ、表顯はこれ眞實にあらず、外題なり、あらはにいはずして表相を以て說くなり。生解は智解を生ずるなり。

(ウ)依倚因果。依倚とは物に依つて獨脫せざるなり、是れ無依

らる。所以に其の道眼を障へて分明なることを得ず、祇だ十二分教の如きんば、皆是れ㊃表顯の說なり。學者會せずして、便ち表顯名句の上に向つて解を生ず、皆是れ㋐依倚して因果に落在す、未だ三界の生死を免れず。儞若し㊄生死去住、脫著自由なることを得んと欲せば、卽今聽法底の人を識取せよ。無形無相、無根無本無住處にして、㋑活潑々地なり。是の萬種に應じて施設す、㋒用處祇だ是れ無處なり。所以に覓著すれば轉た遠く、之を求むれば轉た乖く、㋓之を號して秘密となす。道流儞箇の夢幻の伴子を認著すること莫れ、遲晩中間便ち無常に歸す。儞此の世界の中に向つて箇の什麼物を覓めてか解脫と作さん。一口の飯を覓取して喫し、㊅毳を補ひ時を過して、且く智識を訪尋せんことを

の道人にあらず、物によつて輪廻するなり。因果と云ふことは、參じて知る子細あり。

㊄生死去住。去は死、住は生、脫著は脫得の意、解脫の意、自由自在の義。

㋑活潑々地。魚の水中にて尾を搖して、自在にはれまはる貌、本分上に自由三昧を得るを云ふ。

㋒用處祇是。施設は造作なり、無處は方處なきなり、還箇の物は一切の施したる處に應用して、しかも用處の落着はなきものなり。直指爲人を云ふ。

㋓號之爲秘密。秘密とは學不傳の處を云ふ、又一人に向つて說くを秘密とす。夢幻伴子とは色相を云ふ、夢幻の相伴しては、四大色身をこの臭皮袋を認むるなど因循荏苒として空しく光陰を過し、此の解脫の大道に於ては已に是れ遲晩なり。少より老に至る間をも遲晩といふ、還は老の義。佛法より外は解脫とするなと。

㋔補衲過時。印度の北部には毛布を以て製裘を作る、故に毳鳥の毛を以て僧服の稱となす、よきものや、うまきものをくらはすとも、肝要は參禪せよと云ふ。作爲することなし、之を因循といふ、けふもあすもと日を送るなと。因循はとやかくして冴ちまぎれるを云ふ。

㋕光陰可惜。禹は寸陰を惜む、衆人は分陰を惜むべし、移りかはるなり。

㋖麁細。麁身は無常、細身は神色、無常ならば神も亦無常なり。四大の地水火風は麁身と云ふ體あるものなり。生住異滅は細身なり、體がなきものなり、生老病死とも云ふ。

㋗四相所遷。生老病死の四相が要す。因循として樂を逐ふこと莫れ、㋘光陰惜むべし、念念無常なり。㋙麤なる時は則ち地水火風を被り、細なる時は則ち生住異滅の㋚四相の所逼を被る。道流今時且く四種無相の境を識取して、境に㋛擺撲せらるゝことを免れんことを要す。

問ふ、「如何なるか是れ四種無相の境。」師云く、「儞が一念心の疑、㋜地に來り礙へらる、儞が一念心の愛、㋝水に來り溺らさる、儞が一念心の瞋、㋞火に來り燒かる、儞が一念心の喜、㋟風に來り飄へさる。若し能く是の如く辨得せば、境に轉せられず、處々境を用ひ、㋠東涌西沒、南涌北沒、中涌邊沒、邊涌中沒、水を履むこと地の如く、地を履むこと水の如くならん。何に緣つてか此の如くなる、四大の如夢如幻に達すせざりては、無常に歸せずしては叶はぬものなり、又生死に二つあり、分段生死、變易生死なり、分段は生住異滅の四相を被りて、生死輪廻するを云ふ、變易生死は意生化身で、佛菩薩の一念を起して再來するを云ふ。

㋛擺撲。纏縛の義、轉換の義、或は撲碎の義。言は四種は無相なりと識取せば、萬境に惑亂せらるゝことを免るべきなりと。

㋜被地來礙。地とは堅持質礙の故に、物を疑へば愚癡の方、地大のわざなり。

㋝被水來溺。水とは津潤柔耎の故に、愛する心は水大が溺らして愛欲を生ずるなり。

㋞被火來燒。火とは暖氣炎盛なるが故に、嗔れば面も赤くなり、心もはげしくなるは火大が來りてやく故なり。

㋟被風來飄。風とは動氣輕利なるが故に、喜べば心もかるくなり、動き働くは風火のわざなり、この四種は元來相にあらずと辨得せば、境惑を受くべからず。

㋠東涌西沒。自由自在の義、六種震動中の四種なり。法華に所謂十八神變中の事、何に緣りてか此の如くなると。一念心の疑愛瞋喜の再釋なり。

㋡去住自由。水、水に非ず、地、地に非ず、水に非ずして水、地に非ずして地。問如より此に至りて一段。始は四大無相の理を示し、中ごろは受用の神變を擧す、末には四大を用ひ得るものを提ぐ。

㋢勿嫌底法。約より看教に至るまで一段。此の段は大師自受用の手段を說くなり。或は云ふ、勿嫌底法の此の四字に、一部の大意なりと。

るが爲の故なり。道流儞祇だ今聽法の者、是れ儞が四大にあらずして、能く儞が四大を用ふ、若し能く是の如く見得せば、便乃ち㊀去住自由ならん。山僧が見處に約せば㊁嫌ふ底の法勿し、儞若し㊂聖を愛せば、聖といつば聖の名なり。一般の學人有つて、㊃五臺山裏に向つて文殊を求む、早く錯り了れり。五臺山に文殊無し、儞、文殊を識らんと欲すや、祇だ儞が㊄目前の用處始終異ならず、處々疑はざる、此箇、是れ活文殊。儞が一念心の㊅無差別光、處々總に是れ眞の普賢。儞が一念心㊆自ら能く縛を解して隨處に解脫す、此れは是れ㊇觀音三昧の法なり。互に主伴と爲つて、出づる時は一時に出づ。㊈一卽ち三、三卽ち一、是の如く解得して、始めて好し看敎するに。」

㊀去住自由。智は體、德は相、音は用なり、文普賢は體相用の三なり、何れも皆本分なり。

㊁嫌ふ底の法勿し。本分なり、差別がありてはわるいぞ。普賢は妙行を指して云ふなり。無差別より起す所の差別智の行門、差別に卽して無差別なり。光は智なり、人人の一念心上に具在す、那箇が文殊の境界、那箇が是れ普賢の境界ぞ、人人參究して看るべし。

㊂聖を愛せば。聖といつば聖の名なり。聖を愛するは本實體なし、謂ゆる名句なり、上の聖は名の聖なり、下の聖は本分なり、かりに名づけたるものなり。

㊃五臺山。清涼山は雁門郡の五臺山なり、大原府代州清涼山は北なり。學人活文殊を知らずして名相の執を離れず、故に相に於て文殊を求めんと欲す、錯り謬れより大なるはなし。

㊄目前用處。目前とは眼根より源に返る處を指していふ、文殊は妙智を指していふ。森羅萬象、般若に非ずと云ふことなく、何ぞ一處として文殊に非ざることあらんやと。

㊅無差別光。本分なり、差別がありてはわるいぞ。普賢は妙行を指して云ふなり。無差別より起す所の差別智の行門、差別に卽して無差別なり。光は智なり、人人の一念心上に具在す、那箇が文殊の境界、那箇が是れ普賢の境界ぞ、人人參究して看るべし。

㊆自能解縛。これも本分なり、文普賢は體相用の三なり、何れも皆本分なり。

㊇觀音三昧法。耳根より源に返るを觀音と爲す。三は正、昧は定なり。正智現前するを之を名けて三と爲す。

㊈一卽三三卽一。互爲主伴で、體相用の三が互に主と爲り伴と爲りて、色相心と法性とも一致して云ふ、三卽一で、卽は不二の義なり。華嚴合論四十八に云く、「文殊は法身妙慧の理を主り、普賢は知身知根を明し、萬行の門を成し、觀世音は大慈悲をもつて生死に處することを明す、三人の法一人の德を成するを毘盧遮那と號

師、衆に示して云く、「如今の學道人、且く自信を要す。外に向つて覓むること莫れ、總に他の㊀閑塵境に上つて、都べて邪正を辨せず。祇だ祖あり佛あるが如きんば、皆是れ敎迹中の事なり。人有つて㊁一句子の語を拈起して、或は隱顯の中より出づれば、便卽ち疑生じて天を照し地を照して、傍家に尋問して也た太だ忙然たり。大丈夫兒、祇麼に㊂主を論じ賊を論じ、是を論じ非を論じ、色を論じ財を論じ、論說閑話して日を過すこと莫れ。山僧が㊃此間には僧俗を論せず、但だ㊄來者あれば盡く伊を識得す。任ひ伊甚れの處に向つて出で來るも、但だ㊅聲名文句のみ有り、皆是れ夢幻なり。㊆却つて境に乘ずる底の人を見るに、是れ諸佛の玄旨なり。㊇佛境自ら我れは是れ佛境なりと稱

㊀閑塵境。鋼葛藤の言句、或は六塵の境なり、畢竟自信なきが故に境に上つて邪正を辨ぜず、言句に惑亂せらるゝ也。一大藏經千七百則の公案を鋼葛藤といふ、皆是れ敎迹中の事、敎は四十九年の說をさす、迹は祖師の言迹を云ふ、自信を戒むなり。佛祖名字あるは盡く敎迹中の事なりと。

㊁拈一句子語。一句子とはなにを云々。盡は身心不二にして、參じて此の如く悟りたらば、我が敎ふるところをみるべしとなり。看敎は看經、看敎は文に隨つて解を生じて佛意を失せんことを恐る、直指人心、不立文字、卽心卽佛なれば心を宗となし、無門を法門と爲すなり。約山僧より此に至りて一段。人人眞箇の文殊普賢觀音を作用することを顯示す。

㊂閑塵境。鋼葛藤の言句、或は六塵の境なり、畢竟自信なきが故に境に上つて邪正を辨ぜず、言句に惑亂せらるゝ也。一大藏經千七百則の公案を鋼葛藤といふ、皆是れ敎迹中の事、敎は四十九年の說をさす、迹は祖師の言迹を云ふ、自信を戒むなり。佛祖名字あるは盡く敎迹中の事なりと。

㊃主論賊。祇麼には此の如くと云ふ義なり、いたづらごとを論じて、一生、目を過すべからずと云ふことなり。主は人の主人なり、賊は祖僧の用なを言ふたぞ、趙州、投子に問ふ、「大死底の人、還つて活する時如何、」投子云く、「喪行を許さず、卽に投じて須らく到るべし」と、又僧、雲門に問ふ、「生死到來の時、如何が排遣せん、」門云く、「什麼の處にか在る。」これこそ一句子の語なり。或は鐵橛子、或は本札觜と。今時の公案の如し、故に隱顯中出といふ。或は言句の中にもかくしつ、或はあらはしつしたることなり、隱と顯とは機と關となり、照天照地と上を見、下を見、傍家を尋れまはりて手忙はしく脚亂るるなり。學者の迷ふて諸方を尋覓するを呵す。

㊄論主論賊。祇麼には此の如くと云ふ義なり、いたづらごとを論じて、一生、目を過すべからずと云ふことなり。主は人の主人なり、賊は祖僧の用

すること能はず、還つて是れ㊀這箇無依の道人、境に乘じて出で來る。若し人あつて出で來つて、我れに求佛を問へば、我れ卽ち㊁淸淨の境に應じて出づ。人有つて我れに菩薩を問へば、我れ卽ち慈悲の境に應じて出づ。人有つて我れに菩提を問へば、我れ卽ち淨妙の境に應じて出づ。人有つて我れに涅槃を問へば、我れ卽ち寂靜の境に應じて出づ。境は卽ち萬般差別なれども人は則ち別ならず、所以に物に應じて形を現ず、水中の月の如し。道流儞若し㊂如法を得んと欲せば、直に須らく是れ大丈夫兒にして始めて得べし。若し㊃萎々隨々地ならば則ち得じ。夫れ㊄蘆嚢の器の如きんば、㊅醍醐を貯ふるに堪へず、大器の者の如きんば、直に㊆人惑を受けざらんことを要す、㊇隨處に主と作れば立處皆眞なり、但だ來る者有れば皆受くることを得す。㊈儞一念の疑卽ち魔心に入る、菩薩の疑ふ時の如きんば、生死の魔便りを得。㊉但だ能く念を息めよ、更に外に求むること莫れ。物來らば卽ち照せ、儞但だ㊋現今用ふる底を信せよ。一箇の事も也た無し、儞㊌一念心三界に生じて、緣に隨つて境に分たれて六塵と爲る。㊍儞如今の

ふる賊に非すなり。世界國土の是非を沙汰する賊は隣の寶を數ふ、言句の是非や色相や知識の容貌や財施の多寡やを論說して閑談することを許さす、但だ單單に己事を究明すべしと。此の一小節、不自信者の他求し及び非論することを斥す。

㊀此間。猶ほ這裡「このうち」といふが如し。

㊁有來者。來者は問ひ來る學者を云ふ、伊とは一問をさす。其處とは學人の奇言妙句、或は拂袖し、筋斗を打する等の事を指す。

㊂聲名文句。眞實にあらざるの義なり。すべて是れ浮塵夢幻の相にして、語言文字で許さぬぞと。

㊃卽見乘境。卽の字輕しく看過すること莫れ、境は聲名文句の境なり、これこそ眞實よ玄旨よ本分なり。境は佛境、乘するものは無依の道人なり、前に在るかとすれば忽焉として後に在る也。動容に古路を揚ぐ、悄然の機に墮せずとなり。

㊄佛境不能。一切の境が我は花なり柳なりと名のつて出づることはないぞと。性上の妙境なり、卽ち法界なり。

㊅這箇無依。無依の道人が境に乘じて來りて、名字安著するなり。

㊆淸淨境。淸淨境とは佛境界なり、言はいろ〳〵に問ひ來る底の境界に隨つて答ふる也。慈悲は菩薩の境界なり、拔苦與樂、方便濟度の境なり、淨妙境は菩薩の境界なり、卽ち淸淨の大道なり、佛道を履踐するの義なり、寂靜境は涅槃の境界なり、涅槃は不生不滅、又は大滅度といふ、境にはしなく〳〵あり、人とは卽ち無依の道人なり、本分をさす、又心法をさす。言ろは境界は色々差別ありとも、本分は別ならす、かはらぬなり、故に無依の道人、境に乘じて出來るといふ。如水中月で萬水千江に現すれども、月は同一月なり、淸渡透路なし。此の一小節は圓通無礙の理を開示せるなり。

㊇欲得如法。如法といふは持戒などの如法にあらす、是れは本分を能く受用する處を如法といふ、能き法器、修行者でなくば叶ふべからすといふ。

㊈蓼々隨々地。蓼は當に委に作るべし、物に隨つて委曲なるをいふ、物によりよつて羈縻せざる貌なり、正法の器とはなるべからずとなり。

㊉蘆嚢之器。蘆は瓦器の破れたる聲、嚢もその破れ聲、變するなり、此れは小器淺劣を指す。

つまり破器のことをいふ。

㊋不堪貯醍醐。王の召しあがる上味を云ふ。牛乳を煮て醐味となす等、印度にては大法乳など云ふて、御馳走の最上にたとへる。此れは眞如淸淨の法乳を指して云ふ。

㊌人惑。一切不善知識の敎壞をさす。若し本分の眼目を具するものは、子細に點檢し將ち來れば、五千四十八卷の閑言語も是れ佛惑なり、一千七百則の葛藤も是れ祖惑なり、但だ大法器の如きんば此の如くの人惑を受けざるなり。

㊍隨處作主。毘盧頂顚を坐して釋迦文を奪けず、步々是れ道場なり。此の一小節は、小器大器を辨ず、但だ來者とは萬境をさす、惑を受けざるなり。

㊎儞一念疑。疑が卽ち魔なり、菩薩にも十種の魔ありといふ、智積菩薩は八歲の龍女成佛すと云ふことを疑ひたるゆゑ、菩薩なれども疑ふ心あり、故に生死の魔となりたりと。

㊏但能息念。念をやめよとは枯木石頭の如くなれとはいはず、外に求むる境をやめよとなり。物來らばとは萬境をさす、照せとは破る、截斷するを云ふ。

㊐現今用底。現今とは卽今、直指爲人して云ふ。著衣喫飯の外になにと云ふ道理もなきなり、無心の境界なり。

㊑一念心生三界。心あれば則ち曠劫も流淪すの義。上に現今用底一箇也無といふは心無なれば則ち刹那に成正覺するを云ふなり。この小節は疑念を斥して自信を勸むる也。

㊒儞如今應用。這箇の者が應用して行住坐臥の間、自由自在に用ふるを云ふ、欠きたるこ

應用の處什麼をか欠少する。一刹那の間に便ち淨に入り穢に入り、彌勒樓閣に入り、㋒三眼國土に入つて、處々に遊履して唯だ空名のみを見る。」

問ふ、「如何なるか是れ三眼國土。」師云く、「我れ儞と共に淨妙國土の中に入つて、㋓清淨衣を著けて法身佛を說き、又無差別國土の中に入つて、㋔無差別衣を著けて報身佛を說き、又㋕解脫國土の中に入つて、光明衣を著けて化身佛を說く。此の㋐三眼國土は皆是れ依變なり。㋖經論家に約せば、法身を取つて根本と爲し、報化の二身を用と爲す。山僧が見處は、㋗法身は卽ち說法を解せず。所以に古人云く、『身は義に依つて立し、土は體に據つて論ず。』㋘法性の身、法性の土、明かに知んぬ、是れ建立の法、依通の

如し、故に喩ふ、三眼國土は是れ華嚴にある善見の因緣なれども、此の錄の所說は三身に配す、畢竟三身國土なり、これは法身佛の上をいふ。

㋗無差別衣。無差別國土は淨穢の境に於て、淨穢の差別等の境の名言なくしてなり。無差別衣は自他一致、凡聖一如等平等の名言を指す、これは報身佛の上を云ふ。

㋕解脫國土。解脫國土は一切を度脫して同居方便等の名言の境を指す、光明衣は神用放光等の名言を指す、これは化身佛の上を云ふ。

㋐三眼國土。依變とは物に依つて變ず、總に實法に非ず。

㋖約經論家。教家には法身說法の義なり、法身が根本なるゆゑに、今日報化佛の說法するも、卽ち法身の說法なりと云へり、是れは理を以て云ふ、とはなきなり。飢ゑ來れば飯を喫し、困じ來れば卽ち眠る。

㋒三眼國土。這箇の物がどつこにも入ると云ふ義なり。處々に遊履して唯だ空名のみを見る、どつこにもわたるといへども、唯だ空名のみ、なにの痕跡もなきなり。華嚴合論には國土を三目と名づくとは、一には法眼、二には智眼、三には慧眼、此れは是れ三眼國土なり、隨世利生を明す。智眼は根生を觀じ、法眼は法を知り、慧眼は邪正を決擇す、此の三は是れ一なり、用に隨つて三と說く。又「智眼は化身、法眼は法身、慧眼は報身に當る」と或抄に見ゆ。

㋓著淸淨衣。淨妙國土は寂光土なり、此れは自性淸淨、微妙名言の境を指す、淸淨衣は菩提涅槃、無相無形の名言を指す、名言は實體に於て衣相の

國土なることを。空拳黃葉用つて小兒を誑かす、㋙漢藥菱刺、枯骨上に什麼の汁をか覓めん。心外に法無し、內も亦不可得なり、什麼物をか求めん。儞諸方に言ふ、道に㋚修あり證ありと、錯ること莫れ。設ひ修し得る者有るも、皆是れ生死の業なり。儞言ふ㋛六度萬行齊しく修すと。我れ見るに是れ造業、佛を求め法を求む、卽ち是れ造地獄の業、菩薩を求むるも亦是れ造業、看經看教も亦是れ造業。㋝佛と祖師とは是れ無事の人なり。所以に㋞有漏有爲、無漏無爲は淸淨の業たり。一般の㋟瞎禿子有つて飽くまで飯を喫し了つて、便ち坐禪觀行し、㋠念漏を把捉して今放起せしめず、㋡喧を厭ひ靜を求む、是れ外道の法なり。祖師云く、『儞若し㋢心を住して靜を看、心を擧して外に照し、心を攝して內

禪には理に落つるを嫌ふ、直に用ふる事なり。水鳥樹林、悉皆念佛、念法といふも報身說法の義、又一代藏經五千四十八卷は化身佛の說法なり、故に報化の二身は同じ事なり、今日現成したる上なり。

㋜法身說法。師の見處には法身といふは、本分なるゆゑに說法を解せずといへり、本分の上からみる則は、說法する底は靈く相の上なり、故に說法を打ちのけて云へり。淵水松風皆に說法に非ずや。

㋡法性身。法性の身、法性の土などと云ふは、教家が本分の上に義理を着けていふ、又本分の體を論じて法性の國土などと云へり、故に今日の上から名字を立したるゆゑに建立して云へることなり、國土と云ふも物に依倚して名付けたることなり、たとへば空拳

なにぎり手の中にも乳があるぞといひ、黃葉を以てこれは錢なりなどと云ふて小兒が啼をやめさせるやうなものなり。

㋙菱刺菱刺。すぢなきことを云ふ。あざみは三角あり、人を刺す。ひしもはりあり。枯れたる骨の上に汁を求むる也、名言の上に於て佛法を覓むるにたとへる。故に心外といはば心內にあらんと心得るゆゑに、內も亦といふ。此の小節は三眼三身依變の事を擧げて、內外不可得の理を示す。

㋚有修有證。みな師の悟徹の眼から打ちのけていふ。大道本來欠もなく、缺もなし、更に什麼事をか修せん、元迷悟なし、生死輪廻の業を成するなりと。

㋛六度萬行。六度は六波羅蜜をいふ、總じて一切の名言を破

に澄まし、心を凝して定に入る。』是の如くの流、皆是れ造作なり。是れ儞如今與麼に聽法する底の人、作麼生か(ユ)他を修し他を證し、他を莊嚴せんと擬す。(メ)渠且く是れ修する底の物にあらず、是れ莊嚴し得る底の物にあらず、若し他をして莊嚴せしめば、一切の物卽ち莊嚴し得ん、儞且く錯ること莫れ。道流儞這の一般の老師の口裏の語を取つて、(ミ)是れ眞なりと爲して道ふ、『是れ善知識不思議なり。我れは是れ凡夫心、敢て他の老宿を測度せず』と。(シ)瞎屢生、儞一生秪だ這箇の見解を作して、這の一雙眼に辜負す、(ヱ)冷噤々地なること凍凌上の驢駒の如くに相似たり。(ヒ)我れ敢て善知識を毀りて、口業を生ぜんことを怕れず、道流(モ)夫れ大善知識にして、始めて敢て佛を毀り祖を毀り、天下

す、纔に名言に渉らば修證なす求覓す、卽ち是れ造業亦輪廻に同じ。

(コ)佛與祖師。これを云はんために上に盡く打つてのけて云へり、八字に打開して這の面目を露す。佛と祖師とは是れ無事の人なれば、修證に渉らず揀擇を作さず。

(エ)有漏有爲。無事の人の用なり、有漏は煩惱なり、無漏は菩提なり、いづれも共に清淨の業用なり。世間は有漏、出世間は無漏なり。此の小節は名言有相の修行を斥す。

(テ)瞎禿子。めくら坊主也。無眼子なり。坐師の解は前卷に見えたれば略ㇾ之。

(ア)把捉念漏。念をとらへてちつともちらさゞるなり。

(サ)厭喧求靜。言ろはぶつさうな處は念がちる、靜なる處がよいと云ふ。これは外道のめくら坊主なりと呵斥す。

(キ)住心看靜。心をしづめてなるもあり、心をやりてよそを照し物を求むるもあり、心をなさめてすましきつてなるもあり、無心にして木石の如く、舌上の齶を拄へて入定するもあり、是の如きものは、皆ただ綿密に似たりといへども、未だ眞顯眞正の宗にあらず、造作の漢なりと呵せらる。この祖師は達磨大師を指すなり、破相論の語の意なり。

(ユ)修他證他。他は畢竟聽法底と同じ、いづれも本分を云ふ。本分は修し證し、莊嚴すべきものにあらず、證すとは悟るの義、聽法とは卽今說法を聽聞する學者を云へり、他は無相無形の那一人なり。

(メ)渠且是修。渠とは他と云ふも同じ、本分を云ふ。本分から莊嚴せしめば、一切の物なば

を是非し、三藏教を排斥し、諸(セ)小兒を罵辱して、(ス)逆順の中に向つて人を覓む。所以に(イ)我れ十二年の中に、一箇の業性を求むるに、芥子許りの如くも不可得なり。若し(ロ)新婦子の禪師に似たらば、便卽ち院を趁ひ出して、飯を與へて喫せしめず、不安不樂ならんことを怕れん。(ハ)古よりの先輩、到る處に人信ぜず、遞ひ出されて、始めて知る、是れ貴きことを。若し到る處に人盡く肯はゞ、什麼を作すにか堪へん。所以に(ニ)師子一吼すれば、野干腦裂す。道流諸方に、道の修すべきあり、法の證すべき有りと說く。儞、何の法を證し、何の道を修せんとかを說く。儞が今の用處、(ホ)什麼物をか欠少し、何れの處をか修補せん。後生の(ヘ)小阿師、(ト)會せずして便卽ち這般の野狐の精魅を信じて、

莊嚴すべしと云へり、一切の物からは他を莊嚴すべからずと云ふ義。

(ミ)爲是眞道。眞道なりとなすは惡知識をさす。惡知識のいふことを信じて諸人が云ふことなり、殊勝なことを仰せらるゝ、我れ如き者がうかゞひ測るべきやうなどと云ふ意。

(シ)瞎屢生。瞎屢生は惡知識をさす、罵詈の言、どめくらめがと云ふ義。這一雙眼は兩眼、辜負は辜は法を犯す、負は背くなり、古文に罪を辜、恩に背き德を忘るゝを云ふ。道流より口業に至るまで一段なり、此の段は善知識口裡の語を認むること莫らしむ。

(ヱ)冷噤噤地。噤は閉なり口閉ぐなり、惡知識のいふことを信じて、なぢつまつたる貌なり、こゝえても得言はれやうにして、わなゝきふるふこと、氷の上の馬の如し。

(ヒ)我不敢毀。これまで惡知識を信ずるやつが云ふことなり。善知識をそしり申しては罰があたらんずるなどと云ふ義。此の一小節は一時の惡知識を斥す、幷に師學の眼目なきことを辨す。

(モ)夫大善知識。天下は世間を指し、出世間に對して言ふなり。排斥はしりぞくる義、三藏教は修多羅藏、毘尼藏、阿毘曇藏なり、小乘教なり、通じて論ぜば大小乘に局す。

(セ)罵辱小兒。學者を指すなり、はづかしむる義なり。

(ス)向逆順中。逆行順行の上にて學者を接するを云ふ。

(イ)我於十二年。不可得の語勢、三祖の病を求むるに不可得なりといふに同じ。十二年は師が黃檗の處にて悟徹してより

なりす。

問ふ、如何なるか是れ心々不異の處。師云く、

僧問はんと擬す、早く異にし了れり。

各〻分る、道流錯ること莫れ。

世出世の諸法、

の皆自性無く亦生性なし。但だ空名のみあり、名字も亦空なり、

祇を他に他の閑名を認めて實とす、大いに錯り了れり。

設ひ有なるも

相別なり、心不異なるが故に、卽ち異あれば卽ち性と相別つ。

る、之を活祖と名く。

の心若し異あれば卽ち性

て、

の疑ひ、心々不異なる

ならざることを得んと欲せば、

但だ是の如く見

は四惡なと云ふ、世は佛法の方なり、世は世法、出世

の世出世語。

心が別になるべし。

にして、未だ曾て欠少せず。

佛、若し祖佛と別つ

の性相者。本分の事なぞ、

めん、現今目前惡法無依の道人、

屋地に分明

問ふべきぞ、本分の事、何へ

心是れ常道と。

の不覺なり。

大德、

所以に

の古人云はく、

一物無し、

の明頭未だ

す。

の智劍出で來つて、

頭を斷を斷じ、

の邪境、

せば道、行せず、高般

ふ、

の若し人、道を修

と爽れ。所以に言ふ、

ば、第一に道に向ふこと莫れ。

路に達道の人には、

の如し。

古人云く、

說く者は、

の春の細雨

始めて成佛を得と言ふ

こと勿れ。

此の如く

繫縛して、道は理行相

他の事を說き、他人を

り、名字も亦空なり、

祇を他に他の閑名を認め

て實とす、大いに錯り了れり。

設ひ有なるも

の皆自性無く亦生性なし。但だ空名のみあり

相別なり、心不異なるが故に、卽ち異あれば卽ち性と相別つ。

る、之を活祖と名く。

の心若し異あれば卽ち性

て、

の疑ひ、心々不異なる

ならざることを得んと欲せば、

但だ是の如く見

は四惡なと云ふ、世は世法、出世

の世出世語。

心が別になるべし。

にして、未だ曾て欠少せず。

佛、若し祖佛と別つ

の性相者。本分の事なぞ、

めん、現今目前惡法無依の道人、

屋地に分明

問ふべきぞ、本分の事、何へ

心是れ常道と。

の不覺なり。

大德、

所以に

の古人云はく、

て實とす、大いに錯り了れり。

設ひ有なるも

の皆自性無く亦生性なし。但だ空名のみあり、名字も亦空なり、

祇を他に他の閑名を認め

り、名字も亦空なり、

祇を他に他の邪境、

せば道、行せず、高般

ふ、

の若し人、道を修

と爽れ。所以に言ふ、

ば、第一に道に向ふこと莫れ。

路に達道の人には、

の如し。

古人云く、

說く者は、

の春の細雨

始めて成佛を得と言ふ

こと勿れ。

此の如く

繫縛して、道は理行相

他の事を說き、他人を

皆是れ㋐依變の境なり。箇の㋑菩提依・涅槃依・解脫依・三身依・境智依・菩薩依・佛依あり、彌㋒依變國土の中に向つて、什麼物をか覓めん。乃至三乘十二分教は、皆是れ㋓不淨を拭ふの故紙なり。佛は㋔是れ幻化の身、祖は是れ老比丘、㋕彌還つて是れ娘生にし已るや否や。彌若し佛を求めば、卽ち㋖佛魔に攝せられん、彌若し祖を求めば、卽ち祖魔に縛せられん。彌若し㋗求むることあれば皆苦なり、如かじ無事ならんには。一般の㋘禿比丘有つて、學人に向つて道ふ、㋙佛は是れ究竟なり、㋚三大阿僧祇劫に於て修行果滿して、方に始めて成道すと。道流彌若し佛は是れ究竟なりと道はゞ、什麼に緣つてか八十年後、㋛拘尸羅城雙林樹の間に向つて側臥して死し去る。㋜佛今何くにか在る、明かに知んぬ、我が生死と別ならざることを。彌言ふ、㋝三十二相八十種好是れ佛なりと、轉輪聖王も應に是れ如來なるべしや。㋞明かに知んぬ、是れ幻化なることを。㋟古人云く、『如來擧身の相は世間の情に順せんが爲なり。人の斷見を生せんことを恐れて、權に且く虛名を立す。假りに三十二と言ふ、八十も也た空聲なり。有身は覺體にあらず、無相は乃ち眞形。』彌道ふ㋠佛に六通あり、是れ不可思議なりと。一切の㋡諸天神仙・阿修羅・大力の鬼も亦神通あり、應に是れ佛なるべしや否や。道流錯ること莫れ。祇だ㋢阿修羅と天帝釋と戰ふが如きんば、戰敗れて八萬四千の眷屬を領して、藕絲孔中に入つて藏る、是れ聖なること莫しや否や。㋣山僧が擧する所の如きんば、皆是れ業通依通なり。㋤夫れ佛の六通

生の凡身となり終るや否や。娘は母の義なれば、母のうみつけたるまゝさやうにあるかと云ふ義。眼橫鼻直、うまれつきなり。

㋐被佛魔攝。佛祖名相の縛、皆求心よりして起るなり。攝の字は魔境に引き入らるゝと云ふ義なり。

㋑有求皆苦。問如云々より此に至りて一段、始は心々不異の旨を示す、次は名言依變の名を擧げて、外に求むることを斥す。これは出世間の佛祖をも求めざるを云ふ。黃山谷が云く、「樂は求むることなきより樂しきはなし。」

㋒禿比丘。一般の惡知識をいふ。禿はかみをそりたるなり。

㋓佛是究竟。佛は修行果滿なり、常住、いきてをると云ふ、これが究竟なり。四十二章經に云く、「三世諸佛を供養ぜんよりは、如かじ無念無住無修無證の者を供養ぜんには」と。

㋔三大阿僧。此に無數時分と譯す、上の成住壞空の下に出づ。初阿僧祇二阿僧祇三阿僧祇とす、過去の釋迦文佛より尸棄佛に到り、尸棄佛より燃燈佛に至り、それより毘婆尸佛に至るを云ふ、三大阿僧祇と名づく。修行果滿は四諦十二因緣六度等を修して、五十二位を滿するなり。

㋕拘尸羅城。拘尸那、此に角城といふ、その城三角なればなり。娑羅雙樹、此には堅固といふ、冬も夏もかれぬ故にいふ。佛の滅度の處をいふ。

㋖佛今何去。雲門云く、「是法住法位世間相常住」と道ふが如きは、釋迦老師何れの處に向つてか去るといふ意。

㋗三十二相。三十二相は如來應化の身なり、應化は眞佛に非

ざることを表す。此の諸相を現じて以て法身の圓極を表す、衆德具に備れり。八十種好は諸相の間に在りて、皆是れ色法同じく佛身を莊嚴せんが爲に奇妙を顯發す、但だ相總じて好なり、別相若し好なくんば則ち圓滿ならざるが故に、輪王釋梵皆亦之れども好なきを以ての故に、相殊妙ならずとなり。此は應身を以て釋す。

㋘明知是。三十二相八十種好も總に是れ幻化にして眞實の相に非ずと。金剛經の不應以三十二相觀如來などは如何と、此句は上を結して下を起す。

㋙古人云。この四十字は傅大士の頌なり、擧身とは三十二相八十種好の色身を擧示するの謂なり。本分に住してをるべけれども、世間の情に順じて出現したるなり、三十二相八十種なんどと云ひたるは虛

る名なり、眞實に非ず、空聲は空名に同じき也、有身は色相を云ふ、無相は本分を云ふ、有身は三十二相、八十種好、四大色身。覺體は佛體なり、寂滅體。有身は身法身にあらざるなり、無相や眞形は法身なり、無相が眞實なるぞと。

㋚佛有六通。六通は神境通、天耳通、他心通、宿住通、天眼通、漏盡通の六つなり。この解は大藏一覽の八に、般若經を引きて委し、禪林類聚十二に、世尊因に五通仙人問ふ、「世尊に六通あり、我れに五通あり、如何なるか是れ那一通」佛召して云く、「五通仙人、仙人應諾す、佛云く、「那一通儞我れに問はん」とあり。

㋛諸天神仙。諸天とは二十八天の衆類なり、神仙とは總じて十種の仙道をいふ、楞嚴には仙道を神仙といふ。阿修羅と

の如きんば然らず、色界に入つて色惑を被らず、聲界に入つて聲惑を被らず、香界に入つて香惑を被らず、味界に入つて味惑を被らず、觸界に入つて觸惑を被らず、法界に入つて法惑を被らず。所以に(ミ)六種の色聲香味觸法、皆是れ空相なるに達すれば、此の無依の道人を繫縛すること能はず。是れ五蘊の漏質な(ノ)りと雖も、便ち是れ地

は此には非天と云ふ、無端正、無酒などと云ふ四の阿修羅あり。大力鬼とは鬼神なり、能く山を移し海を塡め、小力は能く隱顯變化す。大力鬼を我が國の菅公、佐倉宗吾に比するが如きは大なる錯誤なり。

(キ)阿修羅與。阿修羅は大海の内に酒を作りて持ちたり、帝釋はよきむすめを持ちたり、互にとらんとて戰ふなり。天台の文句に、毘摩質多羅阿修羅王、乾闥婆女を娶めて舍脂を生ず、帝釋業力を以て、其の父をして七寶の殿に居らしめて、納れて妻となし、後に其の父を譏す、遂に兵を交へて脚を以て海水を波たゝしめ、手を以て喜見を攻む、帝釋、般若の呪力を以て害を爲すこと能はずと。又疏の記に云く、「王舍城倶絺羅池の側に天帝釋と修羅と戰ふ、時に修羅の兵敗れて藕絲孔中に入りて藏る云云、」本觀佛三昧經に出づ、法苑珠林第十に備に引けり。轉輪聖王も亦あり、諸天魔王も亦化作す、此を聖なることなしやといふ。

(ユ)山僧所擧。上の諸天及び阿修羅等を指す。色々の修行をし離行苦行がつもりて通となり奇特神變なる事が在るぞ、これを業通と云ふ。依通も同じ、萬の所作の上に依倚して、神通力あるを云ふ、何れも呆事(たはごと)なり。倩女離魂などはこれ業通なり、巧幻師の諸相をなすは依通なり。

(ナ)夫佛六通。上を牽ふて下を起す。入色界は此れ優波尼沙陀圓通の境界略々之に準ず、金沙灘上の馬郎婦等の境界なり。入聲界は此れ憍陳那の五比丘圓通の境界略々之に準ず。入香界は此れ香嚴童子圓通の境界略々之に準ず。入味界は此れ藥王藥上の二法王圓通の境界略々之に準ず、亦是れ猪頭蜆子等の境界なり。入觸界は此れ跋陀婆羅、並に十六の開士圓通の境界略々之に準ず、亦是れ維摩、傅大士等の境界なり。入法界は此れ摩訶迦葉圓通の境界略々之に準ず。此の錄の意は六塵の惑を被らざる底の受用、直に是れ眞佛の六神通なり、又惑を被らざる底巳下に之を說示す。

(ミ)六種色聲。六種の色等は是れ六塵なり、教家には根境識の十八界なり、若し頓門に據らば始より一塵一法なし、何ぞ六塵あらん、故に曰く、皆是れ空相なりと。無依の道人は本分を云ふ、五蘊は色受想行識を云ふ、漏質は煩惱を云ふ、地行の神通とは飛行自在ならぬ神通なり、是れこそ眞實な

行の神通なり。道流(シ)眞佛無形、眞法無相、儞祇麼に(ヱ)幻化上頭に模を作し樣を作す。設ひ求め得る者も、皆是れ野狐の精魅、並に是れ眞佛にあらず、是れ外道の見解なり。夫れ(ヒ)眞の學道人の如きんば、並に佛を取らず、菩薩・羅漢を取らず、三界の殊勝を取らず、(モ)逈然獨脫にして物と拘らず、(セ)乾坤倒覆すとも我れ更に疑はじ、十方の諸佛現前すとも、一念心の喜無く、三塗地獄頓に現すとも、一念心の怖無けん。何に緣つてか此の如くなる、(ス)我れ諸法の空相なるを見るに、變ずれば卽ち有、變せざれば卽ち無、(イ)三界唯心萬法唯識、所以に(ロ)夢幻空華、何ぞ把捉を勞せん。唯だ道流目前、現今聽法底の人のみ有つて、(ハ)火に入つても燒けず、水に入つても溺れず、三塗地獄に入りても園觀に遊

れ。龐居士が云く「神通幷妙用運水又搬柴」とは此の心なり。これは如實に神通の相を受用することを開示して、上の破執を結す。

(シ)眞佛無形。古人云く、「淨躶躶赤洒洒、」これは上の應佛の事を承くるなり。八字に打開す、眉毛を惜まず、謂つべし赤心片片と。

(ヱ)幻化上頭。儞等只管に夢幻空華の上に向つて、種種の模樣を成すの義なり。設求得者もとは有爲の形相を求め得るなり。外道とは倶舍玄義に云く、「學諦理に乖き、自らの妄情に隨つて內覺に返らず、稱して外道と爲す」と。

(ヒ)眞學道。此れ名相を取らず、階級に陟らず、人天殊勝の福報を取らず、當人分上只だ直下に活潑々地なり。三界は欲、色、無色の三なり、これは相の上にて兎角あつかふを云へり。

(モ)逈然獨脫。逈然は遠なり、逈に作るは非なり、物によらずしてすぐれたることなり、一切處一切事に於て礙ふるものなしの意。

(セ)乾坤倒覆。三塗とは三毒に對す、一には火途瞋なり、二には刀途貪なり、三には血途痴なり、此れ地獄、餓鬼、畜生の三惡道なり。畢竟疑畏怖なきとは惑を受けざるなり。

(ス)我諸法空相。空相變ずれば卽ち有、變ぜざれば卽ち本空相なり、故に無相なり、本分の眼から悉く空相と云へるが故に、うれしきこともなく、かなしきこともなきなり。

(イ)三界唯心。唯心とは第八識なり、識とは總じて八識を兼ねて云ふなり、三界と云ふも識情より起る、萬法も心から生

ぶが如し、㋥餓鬼畜生に入りても而も報を受けず。何に緣つてか此の如くなる、㋭嫌ふ底の法無ければなり。儞若し㋬聖を愛し凡を憎まば生死海裏に浮沈せん。㋣煩惱は心に由るが故に有なり。無心ならば煩惱何ぞ拘らん。㋠分別取相に勞せずんば、自然に得道須臾なり。㋷儞傍家波々地に學得せんと擬せば、三祇劫の中に於てすとも

するなり。空相と用ひるときは三界是れ什麽ぞ、萬法是れ什麽ぞ、山花開似レ錦、澗水湛如レ藍なり。

㋺夢幻空華。これは信心の銘の語なり、夢幻空華とは此れ謂ゆる三界萬法なり、或は言ふ心識俱に立せずと、畢竟惣じて奪ふなり。此の一小節は一切唯心識の變現を明すが故に外相の拘繫を受けざることを擧ぐるなり。空華は圓覺經の中に出づ、こゝに略す。

㋩入火不燒。楞嚴の七に「火も燒くこと能はず、水も溺すこと能はず、」法華の普門品に、「火不レ能レ燒、水不レ能レ漂」等の語あり。法華の譬喩品に云く、「常に地獄に處して園觀に遊ぶが如し」と。

㋥餓鬼畜生。已に餓鬼畜生に入りて、甚麽としてか報を受けざる、是れ甚麽人の境界ぞ。餓鬼道は梵語には閣梨哆、畜生道は亦旁生といふ、上は諸趣に偏し、下は諸處に徧在す。

㋭無嫌底法。四字にて上をうけ下を起して、殊勝に仰せられた。此の句は大に子細あり、須らく參じて始めて知るべきなり。

㋬愛聖憎凡。此れ未だ取捨の心を亡ぜず、甚だ嫌ふ底の法なき受用に異なり。この一小節は、無依の道人、苦報を受けざることを示す。生は愛、死は嫌、浮沈は頭出頭沒なり。儞若しより乃至得道須臾まで、この六言六句は寶誌和尙の大乘讃十首の中の第二首の語なり。

㋣煩惱由心。古宿云く、「下の句は剩語なり、」畢竟煩惱性空なるが故なり。

㋠分別取相。須臾とは、一日を十五にわりたるを一須臾と云ふ。古人曰く、「臨濟はあまりに云ひすごした」となり、盡く相に惑せられたるものなり、相を取らざるときは得道須臾なり。

㋷儞擬傍家。傍家は外路に走る、波波地は忙忙熱々なること。學得は修行なり。三祇劫前に云ひしこと、心有なれば曠劫にも凡夫に滯る。

㋦向叢林中。無事を肝要と云つた。叢林といふは僧の五人より上あるを云ふ、梵語には貪婆那といふ、僧伽、秦には衆多といふ、比丘一處に和合す、是れを僧伽と名づく、大樹の叢聚するが如し、これを叢林といふ、諸比丘和合する故に僧伽と名づく。牀角頭は床の上を云ふ、坐はひざを組んで坐するをいふ。この一小節は無心無事の說を擧す、分別馳求の學を斥く。

終に生死に歸せん。如かじ、無事にして㋦叢林の中に向つて、牀角頭に脚を交へて坐せんには。㋸道流諸方より學人有つて來るが如きんば、主客相見し了つて、便ち一句子の語有つて、前頭の善知識を辨ず。㋾學人に箇の機權の語路を拈出して、善知識の口角頭に向つて擴過して、儞識るや識らずやと看らる。㋻儞若し是れ境なることを識得すれば、把得して便ち坑子裏に抛向す、學人卽ち尋常なり。㋕然して後に便ち善知識の語を索む、依前として之を奪ふ。學人云く、㋵『上智なる哉、是れ大善知識』と。卽ち云く、『儞大いに好惡を識らず』と。㋟善知識の如きんば、箇の境塊子を把出して、學人の面前に向つて弄す。㋹前人辨得して、下々に主と作つて境惑を受けず。善知識便卽ち㋞半身を現ず、學人便

㋸道流諸方。この段は主客相見に三等あることを說く、前頭は面前の知識なり、言ろは一句子の語を提げ來つて面前の知識を辨するなり。辨は知識の好惡を辨驗す、卽ち是れ辨主問驗主問なり。前頭は猶ほ先方といふがごときなり、又總じて已下を指すの語。善知識は今は師家を指す、種々の說あれども之を略す。主は師家、客は學人、これは好學人と好師家とを云ふ。一句子の語は此れ學人の進問なり、師の與奪下の如し。主客相見は人察し了りてといふこと。

㋾學人云々。機權語路は猶ほ難題といふがごとし、公案の難問を拈出するなり、機用權柄なり。或は云ふ、一機一境、人の千尺の井中に在りてて網を用ひず、如何が此の人を出し得んの類なり。圓悟は許して之を驗主問といふ。口角頭は嘴面の義なり、當面の義なり。儞とは善知識を云ふ。擴過は拋出して、人を試むるなり、擲なり。

㋻儞若云々。儞は主なり、言句はかりものなりと。境なりと知りて打ちてのくるなり。把得は「おつとる、」或は一棒一喝等の大活手段を以て學者の機用を立せしめず、棒するか喝するかしてのくるなり、穴の中へなげ入る義。尋常とは動轉せざる貌なり、機鋒平穩にして更に動轉なし。把得はをさめえてなり。

㋕然後便。這の漢また忙ならず、緩緩地にして再び問話を呈す、主家を作麽生と看る、其れ實には主家を看盡さんと要するなり。依前として再喝したりなどして、主家も亦依前として學者の機用を立せ

ち喝す。善知識、又(ツ)一切差別語路の中に入つて擺撲す。(ネ)學人云く、『好惡を識らざる老禿奴』と。善知識歎じて曰く、(ナ)『眞正の道流』と。(ラ)諸方の善知識の如きんば邪正を辨せず(ム)學人來つて菩提涅槃三身の境智を問へば、(ウ)瞎老師便ち他の與に解說す。他の學人に罵著せられて便ち棒を把つて他を打して言ふ、『禮度なし』と。(ヰ)自ら是れ儞善知識眼無し、他を瞞ることを得ざれ。(ノ)一般の好惡を識らざる禿奴有つて、卽ち東を指し西を劃し、晴を好み雨を好み、燈籠露柱を好む。(オ)儞看よ、眉毛幾莖かある。(ク)這箇機緣を具す、(ヤ)學人會せずして便卽ち心狂す。是の如きの流、總に是れ野狐の(マ)精魅魍魎、他の好學の人(ケ)嗤嗤徹笑して、瞎老禿奴他の天下の人を惑亂す

(ツ)一切差別語路。古人云く、「土塊と雖も是れ金屑なり」と、此れ主家より賓家を辨するなり、此れ亦好主好賓なり、自身は卽ち是れ一塊肉、地球は一塊土なり、佛家の方より學者を試驗する探竿影草なり。總じて禪宗の問答は言句は用にもたゝざるものなり、句中を肝要とす。前のは賓が主を驗む、此れは主が賓をこゝろむるなり。

(ネ)學人云。句中をみて云ふなり。上は抑したれども底は揚ぐるなり、抑下托上す。

(ナ)眞正道流。此の一段亦好主好賓の作略を辨す。おとされて學人をほめたる、好學人と師家と也、揚げて抑するなり。是れ龍、滄海に戲れ、虎、南山に嘯くの境界なり、此れ主家より賓家を辨するなりと。

(ラ)諸方善知識。これは惡知識と好學人となり。

(ム)學人來問。或は晩間なり、境智は、境は菩提涅槃の名相なり、智は菩提涅槃能照の智なり、言句に意はなし。

(ウ)瞎老師。瞎老師は邪正を辨ぜざる邪師を罵るの語。他とは來問底の學者を云ふ、邪正を辨ずるの眼なうして、他に罵辱せられて妄に棒を行じて還つて他は禮義法度なしと知らぬと一段相見了、語に隨つて義を說いて座主の解會を成す、空腹高心を奪ふ、この手段なくんば則ち師となることを得ず。

(ヰ)自是儞。此の一段は惡主好賓の作略を辨す、大師自ら結す。

(ノ)一般好惡。これより一段、惡知識と惡學人を云へり、只管現前の境界を以て說話す。指東畫西は種種の模樣底なり、これはあやまりたる義なり、手忙脚亂にて又是れ東西を辨ぜず、好晴好雨よろづよきことをこのむなり。好燈籠露柱とは用にたゝぬいたづらごとを好む義、燈籠とは燈籠を破るなり、目を防ぎ物を照らすが能なり、破れば則ち無用なり、但だ凝禪者は一向にこのやうなものを用つて之を禪話なりと爲して、禪理を會せず唯だ脫空妄語して徒に壞遠に馳す、是れ惡知識の樣子なり。

(オ)儞看眉毛。そのやうなものは古人云く、「土塊と雖も是れ金屑なり」と、此れ主家より賓家を辨するなり、此れ亦好主好賓なり、自身は卽ち是れ一塊肉、地球は一塊土なり、佛家の方より學者を試驗する探竿影草なり。總じて禪宗の問答は言句は用にもたゝざるものなり、句中を肝要とす。前のは賓が主を驗む、此れは主が賓をこゝろむるなり。

(ク)這箇機緣。這箇とは惡知識を指す、機緣とは或は因果といひ或は因緣といひ亦同じ。言ろは無眼の漢といへども因位修顯の功力に感じて、今日の果報、乘緣機緣等の顯緣を具足して、人に崇敬ぜらるゝなり、之を凝顯の長老といふ。

(ヤ)學人不會。世の昧劣の學者、他の顯緣なるを以て之を佛法住持の人と爲して之を信ず、是の故に他に魔魅ぜられて便ち心狂するなり。

(マ)精魅魍魎。魅、いへのかみ、魍は「きのすたま」、魎は「いしのすたま」、宅舍の怪、木石の怪なり。此れ等の精怪は影ありて形なし、總じて世人の怜俐にして自ら惱し、他を惱さし

(ケ)嗤嗤徹笑。嗤嗤は「わらふ」なり。

(コ)瞎老禿奴。瞎老師は邪正を辨ぜざる邪師を罵るの語。他とは來問底の學者を云ふ、邪正を辨ずるの眼なうして、他に罵辱せられて妄に棒を行じて還つて他は禮義法度なしと知らぬと一段相見了、語に隨つて義を說いて座主の解會を成す、空腹高心を奪ふ、この手段なくんば則ち師となることを得ず。

(サ)上智哉。上智は「すぐれたるかな」とほめあげたること。外面は托上に似て底裡は弄して又他を作麼生と看る、實に此の語最も毒なり、若し眞箇に褒なせば恐らくは當に敗闕を取るべし、此の語抑揚の意あり。大不識好惡とは、これも亦抑揚の意あり、師家却つて學人を抑揚す、此に至りて一段相見の事了る。好賓主の作略を辨するなり。ほめられて釣にはのらざるものなるほどに、わざとすぢなきことを云ふよと云ひしこと。兩方ともこはものなり、一段相見了也なり。

(タ)如善知識。是れら好賓なり、境塊子は機權等の一句子の言句なり、或は拈椎竪拂等なり。

(ソ)卽現半身。竺子の風機を露はして、全身を現ぜざるなり。是れ瞎精なり、全然作用せず、麻谷と臨濟との相見の如し。現半身とは半邊の鼻孔と合せ考へて知んぬべし、機の境界なり。言句に離る〳〵と云ふて、底におそろしき意なかくすを云ふ、面に金色の交を結び、心に是非の雜を使ふ、是れこそ半身を現ずる處なり。便喝は是れ半身を藏す處を喝す、謂つべし、鍼機先に在りと、この喝、主あり、龍の水を得るが如し。

(ツ)一切差別。差別の語路とは一切佛祖の語句等なり、抑揚褒貶、擒縱與奪の面目等なり。擺撲とは作略なり、鍛練なり、上の擺撲の義は異なり、或は掃蕩の義なり、猶ほ學人を見てもむづかしきことを取り出して如何と看るなり。兵法ならば是れ受け太刀の作略なり。

(テ)「かつたゐ」になるべしと。只だ妄想の心を以て胡亂に佛法を說話す、必ず須らく屑糞墮落すべしとなり。

(ト)道箇機緣。道箇とは惡知識を指す、機緣とは或は因果といひ或は因緣といひ亦同じ。言ろは無眼の漢といへども因位修顯の功力に感じて、今日の果報、乘緣機緣等の顯緣を具足して、人に崇敬ぜらるゝなり、之を凝顯の長老といふ。

(チ)學人不會。世の昧劣の學者、他の顯緣なるを以て之を佛法住持の人と爲して之を信ず、是の故に他に魔魅ぜられて便ち心狂するなり。

(リ)精魅魍魎。魅、いへのかみ、魍は「きのすたま」、魎は「いしのすたま」、宅舍の怪、木石の怪なり。此れ等の精怪は影ありて形なし、總じて世人の怜俐にして自ら惱し、他を惱さし

と言はる。道流出家兒、且く學道を要す。㋐祇だ山僧が如きんば、往日曾て毘尼の中に向つて心を留め、亦曾て經論に於て尋討す。後方に是れ㋑濟世の藥、表顯の說なることを知つて、遂に乃ち一時に拋却して、卽ち道を訪ひ禪に參ず。後大善知識に遇うて、方に乃ち道眼分明にして、㋒始めて天下の老和尙を識得して、其の邪正を知る。㋓是れ娘生下にして便ち會するにあらず、還つて是れ㋔體究練磨して、一朝に自ら省す。道流㋕儞如法の見解を得んと欲せば、但だ人惑を受くること莫れ。裏に向ひ外に向つて逢著せば便ち殺せ、㋖佛に逢うては佛を殺し、祖に逢うては祖を殺し、羅漢に逢うては羅漢を殺し、父母に逢うては父母を殺し、親眷に逢うては親眷を殺して、始めて解脫を得ん。㋗物と拘らず

むることを被るに喩ふ、此れを惡主惡賓に譬ふ。

㋕嗌々微咲。嗌々は咽喉なり、俗にいふ「うふふ」の笑聲なり、喉の中に笑を含んで發せざるなり。明眼の學者は他の無眼の賓主を笑辱するなり。此の一段は惡主惡賓の作略を辨斥す、主と成ること安からず、賓と成ること亦難し。

㋐祇山僧。毘尼は律藏なり、經とは修多羅藏なり、論とは阿毘曇藏なり、此れ三藏なり。師は初め華嚴宗なり、師の行狀にあり。

㋑濟世藥。世わたりするくすし。表顯は外題ほどのことゝ云ふ意なり、惣べて道理邊を說いて、未だ眞實ならずとなり。

㋒始天下云々。古今二路なり、達者俱に途を同じうす、其の邪正を知る、明鏡臺に當るの謂なり。

㋓是娘生。これは黃檗をさす、母の胎内よりうまれて、そのまゝ悟りたるにはあらずと云へり。

㋔體究練磨。體究は明窮なり、練磨は煅煉なり。一朝は投機の時を指す、省は察なり審なり、悟證了徹を云ふ、淺深あり。大師自ら修行地及び投機の由來を擧示して、時の學者を激起するなり。又一朝は一旦の義、一時の義、卒度の義、これ師の昔物語なり。

㋕儞如法。正路に受用するの義。人の惑とは萬境の惑なり、邪師の敎壞なり、所謂邪師の過謬なり、裡とは念々生滅得失是非等なり、外とは一切名相文句等なり、逢著は念起の處、殺は內外中間一物を立せざる此れ卽ち殺すの義なり、截斷を用ふるなり。

㋖逢佛云々。佛祖羅漢は出世間

透脫自在なり。諸方の學道流の如きんば、未だ物に依らずして出で來る底あらず。㋘山僧此間に向つて頭より打す、㋙手上に出で來れば手上に打し、㋚口裏に出で來れば口裏に打し、㋛眼裏に出で來れば眼裏に打す。未だ一箇も獨脫して出で來る底あらず、皆是れ他の㋜古人の閑機境に上る。山僧一法の人に與ふる無し、祇だ是れ㋝病を治し縛を解す。儞諸方の道流、試みに物に依らずして出で來れ、我れ儞と共に商量せんことを要す。㋞十年五歲、並に一人もなし。皆是れ㋟依艸附葉、竹木の精靈、野狐の精魅なり。㋠一切の糞塊上に向つて亂咬す。㋡瞎漢枉げて他の十方の信施を消して、我れは是れ出家兒と道つて、是の如きの見解を作す。儞に向つて㋢無佛無法、無修無證と道ふ、祇だ與麼に傍家

最も尊貴の者なり、之を殺すとは其の執著を忌む、父母親眷は世間最尊貴の者なり、之を殺すとは其の愛著を忌む。大凡そ眞正の道流情を脫し累を捐して、一切一念心上に就いて之を論ずるのみ、畢竟物に依らずして出で來る底の眞正の見解を要するのみ。殺とは除の義なり。

㋛不與物拘。總て是れ他の閑機境に滯在するものなり、八字に打開して重れて物を殺す底の注脚を下すなり。祖關や心路を透脫して、內外玲瓏として一塵一法を立せざるを云ふなり。

㋘山僧此間。はじめからをはりへ打つとなり。

㋙手上出來。或は坐具を提起し或は錫を振ふこと一下する等、或は拈槌竪拂を認めて是となし、或は盲枷瞎棒を是となして出で來る等をば、師も亦其の上に據つて之を調伏す。兩手を展べたり、一指を立てたりなんどするふるまひなり。

㋚口裡出來。言句を以て是となして出で來る底の者をば、師も亦言句の上に於て之を調伏す。

㋛眼裏出來。或は揚眉瞬目を認めて是となし、或は境致を認めて是となして出で來る底の者をば、師も亦其の上に於て之を調伏するなり。眼を開き合眼するなんどするを云ふ。皆物に依倚して來る底を云へり。

㋜古人閑機。古則公案を指す、いたづらにあやつる底なり。

㋝治病解縛。直截爲人で我が此くの如く云ふは、應病與藥なり。又しばりくゝられたる者をときほどくの意。

㋞十年五歲。物に依らずして獨

に什麼物をか求めんと擬す。瞎漢㋥頭上に頭を安ず、是れ儞什麼をか欠少する。道流是れ儞が㋭目前に用ふる底、祖佛と別ならず、㋬祇麼に信せずして便ち外に向つて求む、錯ること莫れ。外に向つて法無く、内も亦不可得なり。儞㋣山僧が口裏の語を取らんよりは、如かじ休歇して無事にし去らんには。㋠已起の者は繼ぐこと莫れ、未

脫して來る底一人もなしと。

㋜依草云々。此には知解情識の學者を指す。是の故に古に云く、「祇關透らざれば心路絕せず、盡く依草附木の精靈」と。依倚して木につき草にたよる靈魂、又たぬき、きつねの如きものと云へり、めくら僧どもを云ふなり。

㋑一切嚢塊。くそのつきたる塊をかむなり、言句をあつかふをいふ、佛祖の閑名言を味著するを云ふ。

㋺瞎漢云々。めくらなりと罵る語なり。消すの消の字は用ふるの義なり、信施を受くるなり、道業を脊けんが爲に施し將ち來る、道業成ぜずんば爭か消得せん。

㋩無佛無法。是れ什麼人の境界ぞ、儞に向つてとは學人にいふなり。

㋥頭上安頭。演若達多が失せぬ、かうべをうせたと云ふて求むるが如くなり、これ直指爲人なり。此の一段依物の學者を調伏するなり、却つて外に向つて求むるなり、その愚なるを云ふ。人々具足、箇々圓成なるものをばいふ。傍家は前に見ゆ。

㋭目前用底。直指爲人して云へり。本分の上になほ欠けたるぞと云へり、著衣喫飯底なり。

㋬祇麼不信。師、學者の外求を斥するを聞いて又内を認めんことを恐る、故に云ふ内も亦不可得なりと。

㋣山僧口裡。師又學者の内外不可得の話を認取せんことを恐れて、亦此の語あり。但だ萬事脫洒にして須らく自ら穩坐地に到るべし、我が言ふ處を信じて求むる意をやめて、休歇しされとなり。

㋠已起者。念の起りたるをばつぐべからず、起らざるをば造作しておこさうとするなとなり。卽今現成底を受用せよと云ふなり。一說に已起の者とは一切すぎさりたることをばすてよとなり、未起のものとは未だみえざることをば造作して求むるなとなり。十年行脚とは大休歇無事なれば祖佛と異なることなきを譬示す。

㋷如許多般。古人云く、「元來佛法多子なし」、約の字より安名に至りて一段なり。

㋦儞要三界。相に著して求めまはるなり。有心なるが故に三界あり、曾て三界に入らざるが故に出づべき三界なし、本より是れ不去不來なり、但だ有心なるが故に二見の相あり、儞が自己脚跟下に一段の光明あり、步步是れ道場、舉足下足大安樂の田地に非ずといふことなし。

起の者は放起せんことを要せざれ、便ち儞が十年の行脚に勝らん。山僧が見處に約せば、㋷如許多般無し。祇だ是れ平常著衣喫飯、無事にして時を過す。儞諸方より來る者、皆是れ有心にして佛を求め法を求め、解脫を求め三界を出離せんことを求む。癡人㋦儞三界を出でゝ、什麼の處に去らんと要す。㋸佛祖は是れ賞繫底の名句なり、儞三界を識らんと欲すや。㋾儞が今の聽法底の心地を離れす、㋻儞が一念心の貪、是れ欲界、儞が一念心の嗔、是れ色界、儞が一念心の癡、是れ無色界、是れ儞が屋裏の家具子なり。㋕三界自ら我れは是れ三界なりと道はず、還つて是れ道流目前、靈々地にして㋵萬般を照燭し、世界を酌度する底の人、三界の與に名を安ず。大德㋟四大色身は是れ無常なり、乃至脾

㋸佛祖是賞。佛なり祖師なりと名をつくることは、賞翫し繫縛するものと云へり。賞は尙なり、其の功を尙ぶなり。

㋾儞今聽法。離せず卽せず、卽せざるが故に縛なし、縛なきが故に脫なし、空華の亂起亂滅するが如し、始めて知る衆生本來成佛することを、生死涅槃は猶ほ昨夢の如し。

㋻儞一念心。貪瞋痴といふは、譬へば家の中の桶盥の如きものなり、なくてはかなはぬものなるが用にも立たぬものなり。臨濟の意も同じ、三界は屋裡の閑家具子なりと。

㋕三界云々。且く道へ、什麼人か三界名を安ず。靈靈は寥廓不昧の義なり、全體の用を失せざるなり。

㋵照燭萬般。是れ什麼人ぞ、世界を酌度する、天を撐へ地を拄ふ、若し三毒性虛空の如くなりと知るときは、三界の名なし、三界は名のみにして實なきに、唯心所造なればなり。安は付の義、只だ這箇の上から名付けたるぞと云へり。

㋟四大色身。乃至とは其の始末を擧げて其の中を略す。五體六根は本分からは盡く空相なりと。肇法師云く、「四大本無生、五陰本來空。」

㋹一念心。鬼窟裡に向つて活計を作す。菩提樹は畢鉢羅樹なり、佛其の下に於て成道す、識して覺りといふ、樹といふは、根本などと云ふが如し。豁然大悟の端的心路、大休歇の本地を菩提樹といふなり。

㋞一念心。煩惱を云ふなり。無明の根本を樹といふ、無明に住處なくして煩惱性空なるが故に無明性空なり、是の故に住處なし、それ故に始終なし。

㋡六道四生。六道は上に見ゆ。

胃肝膽髮毛爪齒も、唯だ諸法の空相を見る。儞が㋺一念心歇得する處、喚んで菩提樹と作す。儞が㋻一念心歇得すること能はざる處、喚んで無明樹と作す。無明に住處なく、無明に始終なし、儞若し念々心歇不得ならば、便ち他の無明樹に上り、便ち㋼六道四生に入つて被毛戴角せん。儞若し㋽歇得せば、便ち是れ清淨の身界なり。儞一念不生なれば、便ち是れ菩提樹に上つて三界に㋾神通變化し、意生化身して㋿法喜禪悅し、身光自ら照さん。㊀衣を思へば羅綺千重、食を思へば百味具足す、更に橫病無し。㊁菩提に住處無し、是の故に得る者無し。道流大丈夫の漢、更に箇の什麼をか疑はん。㊂目前の用處更に是れ阿誰ぞ。㊃把得して便ち用ひて名字に著すること莫きを、號して玄旨と爲す。與

六道四生は是れ廣略雙べ擧ぐ、六道は廣、四生は略なり、四生は胎卵濕化なり、被毛云云は畜生道なり。

㋽歇得清淨。思念歇む處即ちこれ清淨法身の佛界なり、本分を云へり。歇めば即ち菩提なり、清淨明心本法界に周し、人に從つて得ず。

㋾神通變化。意生身とは唐譯の入楞伽經に、「意生身とは譬へば意去るが如く、速疾無礙なるを意生身と名く」と、意生化身は意のままに生れたき處へ生れ、出現したき處へ現する也、栽松道者の如き隨意受生の義。

㋿法喜禪悅。法華の四の偈に、「法喜禪悅、食更に餘の食想なし」と、或抄に云く、「佛法の上にて自由自在にして身心悅樂するを云へり、」法喜を妻となし、禪悅を食となすとは

維摩經の文なり、法喜は法を見て肉喜を生ずるなり、身光は光音天人なり、天人身より光を放つなり、自由自在の義なり。法喜禪悅の淨食を食ふが故なり。

㊀思衣羅綺。これは彌勒下生經に出づ。是れ什麼人の受用ぞよき僧にはねがはねども人が衣食を送る。橫病は中夭なり、これ子細あり、參じて須らく知るべし、一念不生なれば萬寶共に備はる。

㊁菩提住處。金剛經の「應無所住而生其心」と同じなり、無住の住と無得の得と、好し應生化身を現ずるに作麼生か現ぜん。此の一段は菩提無明は即ち一念心の歇と不歇との處に在ることを開示す。

㊂目前用處。十二時中着衣喫飯するものはなんぞや、歷然したることをなぜに疑ふぞと云

麼に見得せば嫌ふ底の法なし。㊃古人云く、『心は萬境に隨つて轉ず、轉處實に能く幽なり。流に隨つて性を認得すれば、喜も無く亦憂も無し。』道流、禪宗の見解の如きんば、㋺死活循然たり、㋻參學の人大いに須らく子細にすべし。主客相見するが如きんば、便ち㋼言論往來あり。或は㋽物に應じて形を現じ、或は㋾全體作用し、或は㋿機權を把つて喜怒し、或は㊀半身を現じ、或は㊁師子に乘り、或は象王に乘る。眞正の學人有るが如きんば、便ち喝して先づ一箇の㊂膠盆子を拈出す。善知識㊃是れ境なることを辨せず、便ち他の境上に上つて摸を作し樣を作す。學人便ち喝す、㊄前人肯て放たず、此れは是れ㊅膏肓の病醫するに堪へず、喚んで㊆客、主を看ると作す。或は是れ善知識㊇物を拈出せず、學

へり、これも直指爲人して云へり、殊勝なり。須らく是れ東山阿誰の則に參じて、始めて目前の用處を會すべし。

㋺把得云云。おつとつて用てみよ、相に着すべからず、肝要の玄旨よとなり。所謂把得定して主人公となれと。

㋻古人云。第二十二祖摩拏羅尊者の偈なり、二十三祖鶴勒那尊者に付する付法の偈なり。此の一段は目前の大道を直指するなり、山河大地、艸木叢林、盡く是れ我が自己。隨流とは萬物萬境に隨ふなり、認得性とは見性明理の義なり、幽は無事の義、流は眞常流注なり、流注の中に向つて性を認得するなり、其の上は無喜無憂なり。上の無嫌底法は此の傳法の偈を本として云ひたるなり、眼を著くべし。

㋼死活循然。死中に活あり、活中に死あり、死活大自在を得て、即ち大死底の人還つて活するの義なり。循は次序、又は善なり、依なり順なり。

㋽參學之人。死句活句と云ふて參ずる子細あり。毫釐も差あれば、天地懸かに隔たる。

㋾言論往來。問答のことなり、往は問、來は答なり、復と同じ。人天眼目に主客相見を賓主相見と作す。

㋿應物現形。應機接物なり。

㊀全體作用。拈槌竪拂、轉變自在の義なり。師の定上座を接する手段の如きなり。

㊁把機權喜怒。機は未發なり、機鋒なり、權は常に反して道に合ふなり。或は怒相を現じ歡喜相を示し、或は一棒一喝等なり。

㊂現半身。未だ全體を顯さず、但だ隻手を垂るゝなり。現とは言句三昧を謂ふ、隱とは言

人の問處に隨つて卽ち奪ふ、學人奪はれて死に抵るまで放たず、此れは是れ㋑主、客を看る。或は㋺學人有つて一箇清淨の境に應じて善知識の前に出づ、㋩善知識、是れ境なることを辨得し把得して坑裏に抛向す。學人言く、『㋥大好の善知識卽ち云く、㋭咄哉、好惡を識らず』と。學人便ち禮拜す。此れを喚んで㋬主、主を看ると作す。或は學人有つて㋣枷を披し鎖を帶びて善知識の前に出づ、善知識更に與に一重の枷鎖を安す。學人㋠歡喜して彼此辨せず、呼んで㋡客、客を看ると爲す。大德、山僧是の如く擧する所、皆是れ㋢魔を辨じ異を擇んで、其の邪正を知らしむ。道流㋤寔情大難、㋦佛法幽玄なり、㋧解得すれば可可地なり。山僧㋮竟日他の與に說破す、句に涉らざる底をいふ、擡坐眞久底なり。家裡の人にあらずんば是れ知らず、自ら擇び取るべし。

㋐主、客。師子は黑色、正位、本分なり、象王は白色、偏位、現成なり、文殊、普賢の境界、則ち大人の境界を云へり、參じて知るべし。文殊の根本智を證して、斷惑の殿なるを表す、是れ法身の妙裏たるが故に、普賢の根本智に依りて行を起すの序を表す、是れ萬行の成德たるが故に、それ〳〵にしたがふと云ふ義なり。上は大死一番底、下は大活現成底の時節をいふ。

㋑膠盆子。一問の六づかしき句中を指す。「にかはをとき入れたる盆に、頭をつき入れたる」如きなり、分別しがたきなり。此の一段は好學人と又惡知識との事なり、前の或は全體作用すと言ふは、大用現前、軌則を存せず、或は半身を現ずるは、些子の風規を顯はし、巴鼻を弄す、或は師子、或は象王とは、智悲に乘り、定慧出づるなり、膠盆子は境なり、葛藤の話頭を指す。此れは客家主家を看盡さんことを要するなり。

㋒不辨是境。言句はかりものにてこそあれ、一棒一喝してのくべきことぞ、一句の言句に取りつきて、摸を作し樣を作す、故に學人傾ち喝して計較安排するなり。

㋓前人不肯放。めくら知識なるほどに、なほも言句にぶらさがり放下せずとなり。前人は師家を指す、不肯放は俗にいふ「まけをしみ」なり。

㋔肓盲之病。必ず死する病なり、此れ惡知識の癡禪病を指す。

㋕客看主。賓中主なり、學人が師家を勘辨するなり、一段相見了なり。古の道歌に「懷に玉をいだきて持ちながら、はかなや人の餓所を尋れて。」

㋖不拈出物。これより好師家と惡學人とのことなり。拈出せずとは一向に默して學人を如何とみる底よと、本來無一物なり、一法の說くべきなし。問處卽ち奪ふとは、知解を立せざるなり。此の段は主家機あり、賓家機なしで、知解を立せざるなり、一棒一喝などにて打ちてのけたぞ。

㋗被奪抵死。箇の什麼をか放下せんと云ふに似たり、一期の間、疑を決せずして不審に思ふなり。

㋘主看客。主中賓なり、具眼の師家、無眼の學者なり。古の道歌に「鐵の中なる里に棲む人は、月花を見て優にやさしき。」

㋙有學人。以下は師學ともに具眼なり。一箇とは枝葉なきなり、清淨の境とは佛敎祖語の染著なき底の樣子なり、本分の田地なり。一物に依倚せず獨脫無依にして來る、佛法を問はず祖師意を問はず、無孔の鐵槌當面に擲つ、此れ賓家主家を看盡さんことを要するを云ふ。

㋚善知識。本分を以て句中を推し藏して問うやうなることなり、故に底に句中あるを云ひて一喝一棒なんどにて打ちてのくるを云ふなり。「石火光中に機業を分ち、閃電機程に端倪を辨ず」と古人も云へり。一邊に抛向す「かた方へなげだした」など、三千里外に抛却したるなり。

㋛大好善知識。師家を托上したるなり「あゝよい知識」なり、これ抑か揚か。

㋜咄哉好惡。學人を抑して是れは兩方知音なり、學人便ち禮拜すと、外面は識明を謝し、底裡は行解相應す、この禮拜はをさめたる方あり、禮謝したる方あり、おしだしる方あり、あまたの心あり、好禮拜なり。

㋝主看主。主中主なり、古の道歌に「夏の日はいづくも同じなつの日ぞ、冬はいづくもおなじ冬の日。」

㋞披枷帶鎖。この一段は無眼の學者と無眼の師家とを云ひ、くびかせを入れてしばりからげられたるやうに、佛祖人境に縛せられて出來るや、鈍なる學者に逢ふてなほかまへて看經看敎をもせよ、念佛持齋をせよ、念をちらさずして戒律を守れなんどと云ふなり。

㋟歡喜彼此。小乘の小を聞いて歪れりと爲るが如し、是れ大を廢て、小を皆ふが故なり。學人が殊勝に御座候はんと云ふ、兩方まつくらやみなるなり。彼は師家を、此は學人をます。

㋠客看客。賓中賓なり。古の道歌に「たび人はまたたび人を憐みて、うきもつらきもとけるなりけり」と。上來の四則は臨濟の四賓主の則といふ、已下は四賓主の總結なり。

㋡辨魔揮異。大師、四賓主の則を擧して、其の境界を辨ずることは此れ天下の學者をして其の邪正を知らしめんと要すとなり。魔は麤なり邪なり、異は正なり、眞なり、異とは尋常にすぐれて顯異なる義なり。

㋢寔情大難。眞實の學者はまれなりと云ふ義。寔は「シヨク」の音「ジツ」の音あり、實と同字なり。情識泯絕するを寔情

學者總に意に在かず、(ヌ)千徧萬徧、脚底に踏過すれども黑沒焌地なり、(ル)一箇の形段無うして歷々孤明なり。(ヲ)學人信不及にして、便ち名句上に向つて解を生ず、年半百に登とするまで、祗管に傍家に死屍を負つて行き、擔子に擔却して天下に走る、(ワ)草鞋錢を索はるゝ日あること在らん。大德、山僧(カ)外に向つて法無しと說かば、學人會せずして便即ち裏に向つて解を作し、便即ち壁に倚つて坐し、舌、上の齶を拄へて湛然として動せず、此れを取つて是れ祖門の佛法と爲す、大いに錯れり。是れ儞若し不動淸淨の境を取つて是と爲さば、儞即ち(ヨ)他の無明を認めて郎主と爲す。(タ)古人云く、『湛々たる黑暗の深坑、寔に怖畏すべし』と、此之是れなり。儞若し他の動する者是と認めば、(レ)一切の草木皆

といふ、塞情成し易からず、故に大難といふ、之を眞正の見解の人と云ふ。

(ト)佛法幽玄。佛法深密なる處を云ふ。少信根の人、其の源底を窮むることを爲し難し。

(チ)解得可可地。可とは可否の可なり、悟りてみればわづらひもなく自由自在なり。

(リ)竟日云々。時々刻々、語默背觸等の作用、皆是れ爲人直說なり。他は諸人家をさす。此の如く云ふてきかすれども諸人が信ぜざるなり。

(ヌ)千徧萬徧。漆桶不會なり、焌とは然火なり、無分曉なり、此れは學者の暗昧にして不分曉なるの謂なり、黑漫々地なり。

(ル)一箇形段。脚底に踏過する底の物を指出す。且く道へ、是れ什麼ぞ。

(ヲ)學人信不及。半百は四十五十の時分を云ふ、傍家は自家に向つて求めず、他の門戶に傍ふて求むるなり。死屍は五尺の形骸なり、擔子とは無明煩惱、文字言句等の解會を指す、色々の造作を持つて放さゞるを云ふ。

(ワ)索草鞋錢。閻魔王の前にて、諸方にいたづらあるきしてふみ破りたるわらぢ錢をもとめらるゝことあるべきぞと。信不及を誡む。

(カ)向外無法。湛然とは不動のこと、水の湛へて流れざるが如きなり。不動淸淨の境とは無心の境界を云へり。

(ヨ)認他無明。無明は煩惱なり、郎主とは上郎の義、主人となすの義、坐禪觀法を不動淸淨境と爲す、又無明を郎主となす。

(タ)古人云。無念無心にして、胸中まつくらやみなるを云ふ。

動を解す、應に是れ道なるべしや。所以に動は是れ(ソ)風大、不動は是れ地大、(ツ)動と不動と倶に自性なし。儞若し動處に向つて他を捉へば、他は不動處に向つて立せん、儞若し不動處に向つて他を捉へば、他は動處に向つて立せん。譬へば(ネ)泉に潛む魚の波を鼓して自ら躍るが如し。大德(ナ)動と不動と是れ二種の境なり、還つて是れ無依の道人、動を用ひ不動を用ふ。諸方の學人來るが如きんば、山僧が此間には(ラ)三種の根器を作して斷る。中下根器の來るが如きんば、我れ便ち其の境を奪つて其の法を除かず。或は中下根器來れば、我れ便ち境法倶に奪ふ。上上根器の來るが如きんば、我れ便ち境法人倶に奪はず。(ム)出格見解の人有つて來る如きんば、山僧が此間には便ち全體作用して根器を歷ず。大德這

一乘の見解を云ふ。怖るべしとは肝要にあらず、おそるべしと云へり。古人は華嚴宗の淸涼澄觀國師なり。是也とは許可の辭、黑山鬼窟裡に向つて目を閉ぢて、坐禪するを訶するの類なり。

(レ)一切草木。上の不動を認むるを斥するが爲に、師、學者の又動處に認著せんことを恐る、故に此の語あり。前前是とせばと云ふ字を置きたるほどに、此には爲の字を略して是の一字を是とせばとよまするなり、文を省くなと云ひて、文法なり。

(ソ)風大地大。動は有心の貌なり、有心無心ともに色相なり。風大地大といふは地水火風の四大なり、圓覺の注に云く、「動念は有に著し、息念は空に沈む、是の故に動息は皆迷悶に歸す。」

(ツ)動與不動。相と性と別なりと截斷して云へり。或抄に云く「是れは動不動共に肝要ならずと云はんために、滾倒爲人して云へり、說法の段なるが故に說きたり。」然れども自性は動處をも不動處をも離れざる也。他とは本分を云ふ、他の一字佛祖も奈何ともすること得ず、且く道へ、他は是れ什麼物ぞ。

(ネ)潛泉魚。動不動の處に向つて他を捉へんと欲せば、譬へば魚を捉ふるに波浪の動く處に於て捉へんと欲すれば、則ち躍つて波浪不動の處に入る、波浪不動の處に於て捉へんと欲すれば、則ち又躍つて波浪の動く處に入るが如しと也、畢竟他は是れ動不動の境に住せざるなり。

(ナ)動與不動。這箇の境界を活處になして云へり。是れ二種の

裏に到つて、㋐學人著力の處風を通せず、㋑石火電光も卽ち過ぎ了れり。學人若し眼定動せば卽ち㋒沒交渉、㋓心を擬すれば卽ち差ひ、念を動ずれば卽ち乖く、人有つて解せば目前を離れず。大德、㋔儞鉢囊屎擔子を擔つて傍家に走つて佛を求め法を求む。卽今與麼に馳求する底、儞還つて渠を識るや。㋕活潑潑地にして祇だ是れ根

境と云ふは、動靜二種は相の上にてこそあれ、眞實に非ずと云へり。或抄に云く、「境と云ひ、相と云ふは同じき意なり、或る時は動を作用し、或る時は不動を作用す。」唯だ此の無依の道人は活脫自在なり、この一段は止動の二機を斥して、止動作用の實を示すなり。信心銘に云く、「止動歸止止更彌動す」と。

㋐三種根器。通じて上中下の三根を言ふなり、別しては上の上、上の中、上の下、乃至下の下の九等を言ふ、上の上之を上智といふ、下の下之を下愚といふ。大師の意の如きは只だ中より下の根器、中より上の根器、又最上の根器を言ふのみ、上上と言ふは最上の義也、必ずしも九等の根器を言はず。不除其法とは中下根器の爲なるが故に一方を存して一方を奪へり、一着を許す意なり。境は相なり、法は本分を云ふ、境は四大或は山河或は名言等なり、法は學人依る所の理なり。若し中下根器の只だ萬境を拂つて學者をして一塵一法を立せざる處に住せしむる故に、不除其法と云ふて、權に一法を立するの義なり。境法俱奪ふとは四料簡の人境俱奪と同じ、是れ壁立萬仞の機なり、桶底の脫するが如くの地に至らしめんが爲の故に。境法人俱不奪は人境俱不奪と同じ、言ろは上上根器の者は著衣喫飯、屙屎送尿、一切處受用して嫌ふ底の法なし、故に俱不奪といふ、蓋し王登二寶殿一、野老謳歌の境界なり。或抄に「境とは現の色相なり、七尺の拄杖、三尺の竹篦等なり、」人とは此にては輪廻色相を云ふ、法とは本分なり。

㋑出格見解。出格とは超佛越祖の作略あり、人之を出格と謂ふ。全體作用は無語低頭して、方丈に歸るの類なり、又維摩の一默等なり。不歷根機とは直下に接得して根器を論ぜざるなり。

㋐學人著力。這裡は全體作用を指すなり、此れは是れ學人大に力を著くる處、是れ容易ならず、是の故に消息を通ぜざるなり。古宿下語して曰く、「佛祖不識、」又云く、「風吹不レ入水洒不レ著。」

㋑石火電光。全體作用の端的、其の疾きこと言を以て彰し難し。又作用の端的、石火も及ぶことなく、電光も通ずることなし、卽ち蹉過し了る、沒蹤跡の境界なり、石火の過ぎ了るが如しと。

㋒沒交渉。目ばかりきろりきろりとするを云ふ、見んと要す

株勿し。擁すれども聚らず、撥へども散せず、求著すれば卽ち轉た遠く、求めざれば還つて目前にあり。㋓靈音耳に屬す、若し人信せずば徒に百年を勞せん。㋔道流一刹那の間に、便ち㋕華藏世界に入り毘盧遮那國土に入り、解脫國土に入り、神通國土に入り、淸淨國土に入り、法界に入り、穢に入り淨に入り、凡に入り聖に入り、餓鬼

れば卽ち見ると。沒交渉は相干ることなきの義、定動は不定の貌、又瞪目無轉機の貌、又思惟に渉るの貌なり。

㋓擬心卽差。この一段は三種の根器を接する手段を擧す、末は出格の人を接する底の全體作用を開示す。いづれも急なる用處を云ふ、本分上の用ひなり、念をちらさゞるなんどと云ふ心にてはなし。

㋔儞擔鉢囊。鉢囊は行脚の道具なり、屎擔子は色相をさす、「くそぶくろ」の如きものをになひあるくなり、前に云ふ、負死屍と云ふに同じ、又は諸方古則話頭をかきあつめてになひあるくを云ふ。馳求する底と云ふも渠と云ふも、這箇を指すなり、渠は阿誰ぞ、汝迷倒底の物、卽ち主人公なり。

㋕活潑潑地。本分を活處に用ひて云ふ。衲僧の方にも用ひることあれども、此は本分なり。擁は「かきあつむれども」也、撥は「はらへども」散せざるなり、捏すれども團と成らず、劈けども開けざるの境界なり。

㋓靈音屬耳。還つて聞く麼、五音六律なんどは靈音ではあるまい、それは尋常の音にてこそあれ。耳につくとは滿耳滿眼回避する處なしと云ふに同じ。勞百年とは猶ほ一生と言はんが如し、此れ亦上の全體作用の機を承けての說なり、空しく光陰を送るなどなり、目に在り耳に屬くと言ふは、只だ近きに在ることを知らしめんことを要す、若し信ぜずんば徒に空しく一生を過す。

㋔道流。道流より放却に至るまで一段なり。那一人種々の境界に入りて形段なきことを說く。

㋕華藏世界。華藏世界は乃ち毘盧如來因地の修行果報の境なり、毘盧遮那は徧一切處と譯す、法身なり。解脫國土、神通國土、淸淨國土等は用を言ふなり、華藏世界、毘盧遮那國土は體を言ふなり、畢竟同體にして異名なり。法界は總べて一切の法界を言ふ、穢は穢土、淨は淨土なり。六凡四聖餓鬼に入り畜生に入るとは處として到らずと云ふことなきの謂なり。箇の什麼人か諸餘の國土に入りて、而も箇の什麼人をか覓尋す、但だ箇の無依の道人、主伴交參自在なるが故なり。已下の不見も亦之に倣へ。

㋖皆有生有死。經に之を大涅槃と云ふ、又大滅度と云ふ。本分は何處にもあると云ふ義、而も生死を求むるになきと云へり。唯だ空名のみ有りとは

畜生に入つて、處々に討覓尋するに、㊁皆生あり死あることを見ず、唯だ空名のみなり。㊂幻化空華。これは三祖信心銘の語なり。畢竟なきものと云ふ義、這箇の上を云へり。空華とは目をひれれば空中に花の如きものあり、無用處なり。此の一段は始は無依の道人の根株なくして寂照現前することを擧し、末には無依の道人一切に入得して、一切を解脫することを示す。

㊃道流、山僧が佛法的々相承して、㊄麻谷和尙、丹霞和尙、道一和尙、廬山と石鞏和尙と從り、一路に行じて天下に徧し、人の信得する無し、盡く皆謗を起す。㊅道一和尙の用處の如きんば、純一無雜なり、學人三百五百、盡く皆他の意を見ず。㊆廬山和尙の如きんば、自在眞正なり。順逆の用處、學人涯際を測らず、悉く皆忙然たり。㊇丹霞和尙の如きんば、翫珠隱顯、學人來る者皆悉く罵らる。㊈麻谷の用處の如きんば、苦きこと黃蘗の如し、近づくこと皆得ず。㊉石鞏の用處の如きんば、箭頭上に向つて人を覓む、來る者皆懼る。㊊山僧が今日の用處の如きんば、眞正成壞神變を翫弄して、一切の境に入つて隨處に無事なり。境も換ふること能はず、㊋但だ來りて求むる者有れば我れ便卽ち出でて渠を看る、渠我れを識らず、㊌我れ便ち數般の衣を著くれば、學人解を生じて一向に我が言句に入る。苦なる哉瞎禿子、無眼の人我が著くる底の衣を把つて、㊍青黃赤白を認む。㊎我れ脫却して淸淨境中に入れれば、㊏學人一見して便ち忻欲を生ず。㊐我れ又脫却すれば、學人失心忙然として狂走して言ふ、我れに衣なしと。我れ卽ち渠に向つて、儞我が衣を著る底の人を識ることありや否やと道へば、㊑忽爾として頭を回して我れを認め了れり。大德儞衣を認むること莫れ、衣は動ずること能はず、人㊒能く衣を著る。箇の淸淨衣あ

生死と云ふ名のみありて生死はなきなり。

㊂幻化空華。これは三祖信心銘の語なり。畢竟なきものと云ふ義、這箇の上を云へり。空華とは目をひれれば空中に花の如きものあり、無用處なり。此の一段は始は無依の道人の根株なくして寂照現前することを擧し、末には無依の道人一切に入得して、一切を解脫することを示す。

㊃道流山僧。道流より處過に至るまで一段なり。此の段は臨濟佛法的的相承し來ることを說く。若し相承を論ぜば、第一の迦葉より、二十八傳して達磨大師に至る、之を西天四七といふ、二祖慧可大師より五傳して、六祖慧能大師に至る、之を東土二三といふ。南嶽讓和尙、燈々相續して乃ち我が慧照禪師に至るまで直に三十八世的的相承す。

㊄麻谷和尙。麻谷山の寶徹、盧山歸宗寺の智常、鎭州石鞏の慧藏は俱に馬祖道一禪師に嗣ぐ、鄧州丹霞天然は石頭希遷禪師に嗣ぐ、丹霞は石頭下の尊宿たりと雖も江西湖南法の由つて起る所、本唯だ一源なり、故に一路に行ずといふ、五人と我れと佛法異ならずと也。無人信得及とは新婦子の禪師にあらざるなり。此の一小節已下、馬祖より師に至るまでの法體建立の綱序なり。

㊅道一和尙。道一和尙云々と云ふは根木に穩坐して振舞ふ境界なり。用處純一無雜にして攀づべきの枝蔓なきが故なり。

㊆盧山和尙。うかゞひ得ざるの義。皆忙然たりとは、忙は茫に作るべし、學人其の涯際を測らず、望洋としての意なり。

㊇丹霞和尙。珠とは本分をさす、かくさんとすれば顯はれ、顯さんとすればかくる。翫とは自由自在に受用したる義を云ふ。

㊈麻谷用處。黃蘗は本艸十二木の部に出づ。南州の黃蘗、味苦く毒なし寒なり、入眼すれば神根に通ず。

㊉石鞏用處。石鞏はもと獵人たり、常に弓をはり箭を架して、以て學徒を待つ、三平の傳に見ゆ。已上の一節は五大老の宗旨用處の體裁を辨ず、上の二節大段一節なり。

㊊山僧今日。眞正成壞とは建立掃蕩なり、翫弄神變は妙應無方なり。一切の境界も我が這裏を翻換すること能はず、親聽言動、活脫無礙。此の上は師の用處の大段なり、次下は用處の子細を說くなり。

㊋但來來者。渠とは來る底の學人を云ふ。學者の心肝を照見することと鏡の臺に當るが如し、斬截卽ち照す。

㊌我便數般。言句なさず、應機接物、表顯の體裁を云ふ。又いふ橫說竪說、言論語句等は皆是れ外飾にして、裡面の眞實にあらず。

㊍青黃赤白。我が言句に隨つて計校安排す、譬へば衣色に青黃等あるが如し、我が三玄三要、四料揀等の語を聞いて、是れは上根の語、是れは下根の語と謂ふて、恰も衣色を辨ずるが如し、言句について色色理を付けてあつかふを云ふ。

㊎我脫却。言句を離れて、佛法の境界を以て示すの義なり、脫却は衣に付いて云ふ。

㊏學人一見。殊勝などと云ふてよろこびれがふなり。忻欲は願樂なり。

り、箇の無生衣・菩提衣・涅槃衣あり、祖衣あり佛衣あり、大德但だ㊁聲名文句のみあり、皆悉く是れ衣變なり。㊄臍輪氣海の中より鼓激し、牙齒敲磕して其の句義を成ず。明かに知んぬ、是れ幻化なることを。㊅大德、外に聲語の業を發し、內に心所の法を表して、思を以て念を有す、皆悉く是れ衣なり。㊆儞祇麼に他の著る底の衣を認めて寔解と爲さば、縱ひ塵劫を經るとも、祇だ是れ衣通なり。㊇三界に循環して生死に輪廻す、如かじ無事ならんには。㊈相逢うて相識らず、共に語つて名を知らず、今時の學人得ざることは、蓋し㊉名字を認めて解を爲すが爲なり。㊊大策子上に死老漢の語を抄し、三重五重、複子に裹んで人をして見せしめず、是れ玄旨なりと道つて、以て保重を爲す、大い

㋑我又脫却。別時に在りて上の如く作用するなり、我れとは大師自ら言ふなり。言ろは學者狂走して、臨濟に人の爲にするの言句なしと言ふなり、佛法をふみさつて一重上に示す時は、心を失して忙然たるなり、うかゝはざる義なり。狂走言我無衣とは學人が不心得に走りあるいて、臨濟は佛法を知らぬ人なりなんどと云ふ意なり、衣は佛法をさす。

㋺忽爾回頭。大師の我が衣を著る底の那一人を識るや否やと云ふを聽いて、又我が自己を認め了れり。已に頭を回すといふときは、我れをとは臨濟を指す。綠竹含レ煙、青山鎖レ翠。

㋩能著衣。本分から佛法をば受用するぞと云ふ義なり。淸淨衣は汚染を轉ず、無生衣は有念の相を轉ず、菩提衣は煩惱を轉ず、涅槃衣は生死を轉ず、祖衣佛衣は凡夫衆生を轉ずるの語なり。已下衣變衣通の事を擧して結す。

㊁聲名文句。依變と同じ、言句は皆眞實不變のものに非ずとなり。依は人の形を覆ふに象る、又人の依る所なり。菩提なり、涅槃なり佛法なりなんどと云ふも、皆名を付けたるまでなり、衣を重々に擧げたるは、畢竟いろ〳〵に學者に示す言句話頭をさす。

㊄臍輪氣海。臍輪氣海は此に丹田といふ、梵語に優陀那、臍下一寸を云へり。鼓激は息の中腹よりきしり出づるを云へり、牙齒敲磕すとは、いきがきばや齒にふれて聲となる義。成其句義とは、聲がいろ〳〵の聲名文句となり、幻化の如きものなり、假和合にして眞實に非ず。

に錯れり。瞎屢生、儞㋒枯骨上に向つて什麼の汁をか覓めん。一般の好惡を識らざるあつて、㋓敎中に向つて、取つて意度商量して句義を成ず。屎塊子を把つて、口裏に向つて含み了つて、吐いて別人に過與するが如し。猶ほ俗人の傳口令を打するが如くに相似たり。一生虛しく過して也た道ふ、㋔我れは出家と。他に佛法を問著せられて、便卽ち口を杜ぢて詞なし、眼漆突に似、口匾擔の如し。此の如きの類、彌勒の出世に逢ふとも、他方世界に移置せられて、地獄に寄つて苦を受けん。大德、㋕儞波々地に諸方に往いて、什麼物を覓めてか汝が脚板を踏んで濶からしむ。㋖佛の求むべき無く、道の成ずべき無し、法の得べき無し、外に有相の佛を求めば汝と相似かず。㋗汝が本心を識らんと欲せば、合に非

㋘大德外。聲語業は息が出て外にて聲となり、ことばとなるなり。內表心所法とは、心法をも言句を以てあらはし出すなり。以思有念とは、思と念とは敎に差別あり、大かた思の處は思なり、こまかに思ふは念なり、有つとは念をたもつなり、明記不昧を義となす。悉く是れ衣とはみな幻化といふのみ。

㋙儞祇麼。他の着る底の衣とは他は這箇をさす、又彼れといふ義、祇だ聲語上に於て通達するのみ。衣通といふは眞實の通に非ず、佛法を學知するといへども、見性せざれば則ち輪廻を免れざるほどに衣通と云へり、見性の上にて着衣喫飯するこそ眞實の神通なり、又衣通といふは、修行がつもりて奇特があるなどといふを云ふ。塵劫は儒には世といふ、釋には劫といふ、道には塵といふ、衣は依と同じ。

㋚三界云々。作麼生か是れ無事底、無事こそ肝要なれと也。

㋛相逢云々。這箇を云ふ、此の一段は始は師の用處の大段を擧し、中は唱道名言の名を擧して、名相の執を遣り、末には無名相の實を開示す。相識猶如二不相識一と、又百姓日用不二相知一と。

㋜認名字。上を承けて名字を認むるの過を示す。名字とは衣を云ふ、言句話頭等をいふ。不得とは不得悟なり。

㋝大策子上。策册冊の三字、共に簡編(ふだをあむ)を言ふなり。鈔は抄と同じ、略取なり、又謄寫なり、死老漢は邪師。三重五重と複子に大事に裹んで也。複子は古の打包なり、或は腰囊なり、三衣等の袋なり、此れ游方行脚の具なり、「うは

ず亦離に非ず。道流、㋐眞佛無形、眞道無體、眞法無相、三法混融して一處に和合す。㋑辨ずること既に得ざるを。喚んで忙々たる業識の衆生と作す。」

㋒問ふ、「如何なるか是れ眞佛眞法眞道。乞ふ開示を垂れたまへ。」師云く、「佛といつば心清淨是れなり、法といつば心光明是れなり、道といつば、處々無礙淨光是れなり。三

づつみ」なり、玄旨は祕法、保重は祕藏なり。

㋓向枯骨上。此の一段言句に著するの學者を斥す。

㋔向敎中。いろ〳〵に義理を付けて云ひまはるなり。屎塊子は乾屎橛の類、糞團なり、或は云ふ、邪師の言句不淨を含んで、人に向つて吐くが如し。傳口令は名句敎壞を指す、俗人の奏者するを云ふ、人の云ふことは我が言葉にして傳ふるを云ふ、主人ならず、一生佛法まれすれども佛法の主人にならざるを云ふ、「口耳の傳受之を過頭の禪といふ、之を口鼓子の禪といふ」と大慧もいへり。

㋕我出家。漆突は眼を張りて突出して黑漆の如きなり、突は竈の突竄なり、今は眼睛突出して黑きを云ふ。匾擔は一山云く、「擔子肩に有るときは、兩頭曼(たはんで)凸(なかだか)なり、その貌なり」と。眼はうるし合子の如くにしてえはたらかさゞるなり、口はあふこのたはみたるが如くにべそぐちになりて物もえいはぬなり。移置、寄地獄とは三災壞劫の時六道四生悉く壞るときも、大罪人をば他方にうつし置きて、生を轉ぜず、地獄に落つといへり。

㋖儞波波地。波々地はあはたゞしき義、千波起れば萬波おこるなり。脚板は脚底なり、或は脚絆、或は脚の裏といふ、脚跟の義なり、游方して東奔西走、脛も脚もふとく大になる故に「はゞき」も「きやばん」も大にひろくして、無益の行脚なりと。

㋗無佛可求。これ即ち佛法の當體なり、是の故に元自ら天然にして彫琢を假らず。外求有相佛とは應身、或は泥木等の像なり。與汝不相似とは汝はこれ什麼人ぞ、三十二相八十種の佛を云ふ、それで汝とはよつても付かぬと云ふの義、汝は本分をさす、本分と相似かずといふの義なり。

㋘汝本心。この四句の偈は、第八祖佛陀難提尊者の偈なり。汝が本心は眞佛と合にあらず離にあらず、即今直下に辨得して看よ。

㋙眞佛無形。無形は形段、無體は定體、無相は色相、三法混融は佛道法の三法和合するを强ひて之を呼んで一無位の眞人と云ひ、或は無依の道人といふ。一處とは畢竟那の處ぞ、若し妄りに處の會を作さば大方を失せん。

㋚辨不得。此の一段、佛道法の三法圓融和合の理を開示す。忙忙は茫茫と同じ、業識は妄

即ち一、皆是れ空名にして而も寔有無し。㋛眞正の道人と作すが如きんば、念々心間斷せず。達磨大師、西土より來つてより、㋜祇だ是れ箇の人惑を受けざる底の人を覓む。後に二祖に遇うて、一言に便ち了じて、始めて從前虛しく功夫を用ふることを知る。㋝山僧が今日の見處、祖佛と別ならず。㋞若し第一句の中に得れば、祖佛の與に師と爲る、㋟若し第二句の中に得れば、人天の與に師となる、㋠若し第三句の中に得れば、自救不了。」

㋡問ふ、「如何なるか是れ西來意。」師云く、「若し意有らば自救不了。」云く、「既に意無くんば云何が二祖法を得る。」師云く、「得といふは是れ不得なり。」云く、「既に若し不得ならば、云何が是れ不得底の意。」師云く、「㋢儞が一切處に向つ

想識を指す、まつくらやみなる衆生なり。

㋣問如何是。問より不了に至るまでの一段、三句の體裁を說く。心清淨是れとは赤膊條條として絲に掛けず、同行同坐阿誰か知らん、或は之を寂にして常に照すといふ。心光明是れとは心清淨の用なり、細に論ぜば清淨は體なり、光明は用なり、佛は體、法は用なり。處處無礙淨光是れとは道功勳を絕して十方に廓通す、故に無礙といふ。三即一とは佛法道の三即ち是れ一なり、空名にして實あるものならばなり。これは三十一心法をいへり、又本分なり。

㋤眞正道人。眞正作二道人一とは善知識を云ふ。念々とは十二時中無心の境界を受用するを云ふ、一念萬年々々一念の義、趙州の使得十二時をと云ふに同じ。

㋥祇是箇。人惑を受けざるもの獨脫無依、一切に惑亂せられざる底の人、後に二祖の言下便了云々虛用功夫とはこれこそ人の惑を受けざる底の人なし、我れ汝が與に安心し竟るの言なり。悟りて後昔しの錯をしる。

㋦山僧今日。直上直下、三玄三句の機を用ふること、即ち祖佛と同證同行なり。

㋧若第一句。第一句とは眞佛言前の妙旨、即ち理なり、寂といひ性といふ、此れ智行を兼ぬ、即ち玄中玄なり。

㋨若第二句。第二句とは眞法究竟の直說、即ち智なり、此れは理と行とに通ず、即ち句中玄なり。

㋩若第三句。第三句は眞道方便即ち行なり、用ひ云ひ此れ亦理と智とに通ず、即ち第三體

て馳求の心歇むこと能はざるが爲の所以に。祖師言く、『咄哉丈夫、頭を將つて頭を覓む。』儞言下に自ら回光返照して、更に別に求めず、身心と祖佛と別ならざることを知つて、當下に無事なるを方に得法と名く。大德、山僧㊥今時事已むを獲ず、話度して許多の不才淨を說き出す。儞且く錯ること莫れ、㋐我が見處に據らば、寔に許多般の道理無し。用ひんと要せば便ち用ふ、用ひざれば便ち休す。祇だ諸方㋑六度萬行を說いて、以て佛法と爲すが如きんば、我れは道ふ是れ㋒莊嚴門、佛事門なり、此れ佛法に非すと。乃至持齋持戒、油を擎げて潤さゞるも、道眼明かならずんば、盡く須らく債を抵して、飯錢を索はるゝと日あると在るべし。何が故に此の如くなる、㋓道に入つて理に通せずんば、身中玄なり。然るに亦此に自救不了といふは、是れ學人證悟の機に約して說けり、是れ臨濟三句の體にあらず、淺深を擧げて云ふのみ。自救不了とは、人を救ふまでには及ばず我が身さへ救はずと云ふ義なり。

㋐問如何。此の段は西來意の得不得を論ず、前の二祖の不可得の再釋なり。自救不了は化他の事はなか〳〵に云ふにおよばず、我が身をさへいかんともえせぬなり。既無ㇾ意、云何二祖得ㇾ法、師云、得者是不得なりと、不得とは老胡の不會に同じ、得べきものがあらばやとなり。

㋑儞一切處。祖師言くとは此の祖未詳なり。將頭覓頭とはいづれも演若達多がことなり。回光返照は我れと立ち回りて了悟するなり。各々須らく領坐地を得べし、身心不二の古則に參じて知るべし。

㋒今時事已。言ろは根本の上に說くべきことはなけれども、あまりに諸人が無道なるほどに已むことを得ずとなり。話度は學者の見地に似合せて料簡して說くなり。不才淨は不淨の義、こゝろは葛藤言句なり閑絡索なり。師卑下して之をいふ。

㋓據我見處。言ろは我がいふ處を用ひば、やがて用ひよ、用ひずんば我れ休す。便ち休せよと云ふ點がわろきなり、休するこそ用なし、故に用ひず休せよの時は休せよとよみても妨けず、便ち休せよとは我れに向つて物な云ひそ、どちらへももうせよと云へり、進退自由なり。

㋑六度。六度は布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧なり。

を復ふして信施を還す。㋔長者八十一、其の樹、耳を生せず。㋕乃至孤峯獨宿、一食卯齋、長坐不臥、六時行道皆是れ造業底の人なり。乃至頭目髓腦、國城妻子、象馬七珍、盡く皆捨施す。是の如き等の見、皆是れ身心を苦むるが故に、還つて苦果を招く。如かじ無事にして純一無雜ならんには。㋖乃至十地滿心の菩薩も、皆此の道

㋗莊嚴門。莊嚴門は化儀なり、金塔を建て金銀をちりばめ、はき掃地などする義。六度萬行を修行して、無明煩惱のあかを莊嚴するなどと云ふ義。あだ閑事なり。佛事門とは化法なり、經をよみ佛を作禮するなどを云ふ、何れも根本の上からみれば無用のこと也。持齋持戒は戒律を守りて餘念にわたらざる義にとる。天竺に國王あり、油を一器に盛り滿て、頭にいたゞかせて、行くこと二十五里せしむ、一滴もこぼさば頸を切るべしといへり、故に二十五里を護持して餘念に迷らずと云へり。抵債とは閻魔王宮にて信施をかへすべきと云へり。

㋓入道通理。理の至極を云へり、復身は償報を云ふ。

㋔長者八十一。これは第十五祖迦那提婆尊者の偈なり、大師之を擧して以て道眼明かならざるものは債を抵すの誠證と爲す。尊者は南天竺國の人、師得法の後、毘羅國に至る、彼に長者あり、梵摩淨德といふ、一日園樹に大耳を生ず、菌の如くにして味甚だ美なり、唯り長者と第二子羅睺羅多と取りて之を食す、取り已れば隨つて長じ盡きて復た生ず、自餘の親屬皆見ると能はず、尊者その宿因なることを知りて、遂に其の家に至る、長者其の故を問ふ、尊者曰く、「汝が家昔し曾て一比丘を供養す、然も此の比丘道眼未だ明かならず、虛りに信施に霑ふを以ての故に、報木菌と爲る、唯だ汝と子と精誠に供養して以て之を享することを得よ、餘は即ち否なり。」又問ふ、「長者年多少ぞ、」曰く、「七十有九」と、尊者乃ち偈を說いて曰く、「入ㇾ道不ㇾ通ㇾ理、復ㇾ身還ㇾ信施、汝年八十一、此樹不ㇾ生ㇾ耳」と、長者偈を聞いて彌歎伏を加ふ。

㋕乃至孤峯。一食卯齋は日中一食、孤峯獨宿は氣四海を呑み目に雲霄を視る底なり、長坐不臥、六時行道は六根を調伏して長時に捨て去るを云ふ、或は遶塔行道等なり。頭目髓腦は內財なり、國城妻子象馬七珍は外財なり、これ悉く有爲の法なるが故に、還つて苦果を招くなり。因業果報といふて因地の業を果界にて報ずるなり、因は花なり、果はこのみなり。純一無雜とは直示爲人を云ふ。

㋖乃至十地。五十位をへあがりて等覺地に至る菩薩なり。等覺一轉入ニ於妙門一、一見とて一轉すれば如來地に至る菩薩なり。此道流の蹤迹とは無事に

流の蹤跡を求むるに、了に不可得なり。所以に諸天歡喜し、地神足を捧げ、十方の諸佛も歎稱せずといふことなし。何に緣つてか此の如くなる、今の聽法の道人の用處、蹤跡無きが爲めなり。」

問ふ、「㋕大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道と。未審し此の意如何、乞ふ、師指示せよ。」師云く、「大通といつぱ是れ自己、處々に於て其の萬法の無性無相に達するを名けて大通となす。智勝といつぱ、一切處に於て疑はず、一法を得ざるを名けて智勝と爲す。佛といふは、心、淸淨光明、法界に透徹するを名けて佛となすことを得たり。十劫坐道場といつぱ、十波羅密是れなり。佛法不現前といつぱ、佛本不生、法本不滅、云何ぞ、更に現前するこ

して純一無雜なる人を云ふ。諸天歡喜し、地神足を捧ぐことはなけれども、本分上の自由自在の處を云へり。又はさもあるべきなり、其の故は護法神と云ふことがある故に。稱歎はほむるなり、今聽法道人とは本分をさす、蹤跡なきものなり、本分を受用する人こそ本分よとなり。

㋕大通智勝佛。これは法華の化城喩品の偈の文を擧して問ふなり。大通は體なり、智勝は用なり、十波羅密は解、上に見ゆ、佛不應更作佛と、元來佛なり、更に作佛と云ふ道理あるべからず。此の一段は大通佛の他にあらざることを開示す。

㋖古人云。佛常に世間に在りて世間の法に染まずと上を承く。譬へば高原陸地に蓮華が生ぜず、卑濕淤泥に此の華を

生ずるが如し。

㋗儞得作佛。常在靈鷲山の義なり、本分をいふ。萬物は萬境なり、萬境に轉ぜらるること莫れ。

㋘心生生種種。これは起信論の語なり、一切唯心の造なり。

㋙一心不生。これは信心銘の語なり、萬法の上をとやかくやとあつかふは一つの所作なり。

㋚世與出世。頭頭物物、本來如如、眞佛眞法、不得不失。世とは六凡界をさす、出世とは四聖をさす、畢竟打ちのけて云へり。

㋛設有者。歷代の佛祖の言說子細に看來れば、惣に是れ小兒を接引する表顯の方便なり、たとひ大師與慶に道ふも亦未だ曾て方便の跡を蹈むことを免れず。現前したることがあらばや、失ふこともあらうぞ、

と有らん。不得成佛道といつぱ、佛更に作佛す應からず。㋜古人云く、『佛常に世間に在つて、而も世間の法に染まず』と。道流、㋝儞作佛を得んと欲せば、萬物に隨ふこと莫れ。㋞心生ずれば種々の法生ず、心滅すれば種種の法滅す。㋟一心生せざれば萬法に咎なし、㋠世と出世と無佛無法、亦現前せず、亦曾て失せず。㋡設ひ有る者も皆是れ名言章句、小兒を接引する施設の藥病、表顯の名句なり。且つ㋢名句自ら名句なるにあらず、還つて是れ儞が目前、昭々靈々として鑑覺聞知、照燭する底、一切の名句を安ず。大德、㋣五無間の業を造つて方に解脫を得ん。」

問ふ、「如何なるか是れ五無間の業。」師云く、「父を殺し母を害し、佛身血を出し、和合僧を破り、經像を焚燒する等、此れは是れ五無間の業なり。」云く、「如何なるか是れ父。」師云く、「㋤無明是れ父、儞が一念心、起滅の處を求むるに得ず、響の空に應ずるが如く、隨處に㋥無事なるを名けて父を殺すと爲す。」云く、「如何なるか是れ母。」師云く、「貪愛を母と爲す、儞が一念心、欲界の中に入つて其の貪愛を求むるに、唯だ諸法の空相を見て、處處無著なるを㋦名けて母を害すと爲す。」云く、「如何なるか是れ㋧出佛身

ちひさきものを接引するほどのことなり。施設はほどこしまうくるなり。藥病はやまひがあればこそ藥はあり、病なきときんば用にもたゝざるものなり。名句とは我れは名句とは云はずとなり、本分からこそ名をば安ずるなり。

㋢名句自名句。こゝに所謂昭々靈々は人人具足する一段の光明なり、所謂認著して驢前馬後に落在する底の昭昭靈靈に非ず。安ずとは具足の義。

㋣造五無間。これ內の五無間にして、外の實造の無間業に非ず。

㋤無明是父。無明とは過去の煩惱なり、無明によつて三界に生を受くる故に父と云へり。

㋥無事名。無明を元來無なるものとみるときんば、殺父なり。五無間の業と臨濟のいはれたる意は、何れも此の義なり、

血。師云く、「儞清淨法界の中に向つて、一念心の解を生ずること無く、便ち處々黑暗なる、是れ出佛身血。」云く、「如何なるか是れ破和合僧。」師云く、「儞が一念心、正に煩惱の結使、空の所依無きが如くなるに達す、是れ㊅破和合僧。」云く、「如何なるか是れ焚燒經像。」師云く、「因緣空、㊁心空、法空を見て、一念決定斷じて逈然として無事なる、便ち是れ焚燒經像なり。大德、若し是の如く達得せば、他の凡聖の名に礙へらるゝことを免る。㊇儞一念心、祇だ空拳指上に向つて寔解を生じ、㊈根境法の中に虛しく捏怪す。㊉自ら輕んじて退屈して言ふ、我れは是れ凡夫、他は是れ聖人と。禿屢生甚の死急かある、㊋他の師子皮を披て、却つて野干鳴を作す。㊌大丈夫の漢、丈夫の氣息を作さず、

の故事なり、空拳はこぶしを握りて此の內に餅があるぞと云ふて小兒の泣きをやむる義、指上は指月のゆびなり、肝要とせばすちなきなり。

㊈根境法中。根塵法は六根六塵を云ふ、法とは本分なり。濃しく捏怪すとは、惡亂顚倒する義なり。

㊉自輕退屈。我れといやしくなりて、我れらごときの者は下賤にて候ふほどに、佛法なんどには及び候はぬなどと云へり。禿屢生は僧を罵る義、死急は死にさまには忽々しく七顚八倒するなり。

㊋他師子。師子、野干は上に見ゆ。師子の皮なきて狐を吼ゆる如きなり。言ろに紫衣なきて念佛房のまねする如きを云ふ。此の譬は上の我れ是れ凡夫、他は是れ聖人の語を指す。

㊌野干は梵には悉伽羅と云ふ、

自家屋裏の物肯て信せず。祇麼に外に向つて覓めて、他の古人の㊍閑名句に上り、㊎陰に倚り陽に博つて、特達すること能はず。㊏境に逢うては便ち緣じ、塵に逢うては便ち執し、觸處に惑起りて自ら准定無し。道流㊐山僧が說く處を取ること莫れ、何が故ぞ、㊑說に憑據なし、一期の間虛空に圖畫す、彩畫像等の喩の如し。道流㊒佛を將つて究竟と爲ること莫れ、我れ見るに猶ほ圓孔の如し、菩薩羅漢は、盡く〳〵是れ枷鎖、人を縛する底の物なり。所以に㊓文殊は劍に仗つて瞿曇を殺さんとし、惹掘は刀を持して釋氏を害せんとす。㊔道流、佛の得べきなし、乃至三乘五性、㊕圓頓の敎迹、皆是れ一期の藥病相治す、並に實法無し。設ひ有なるも皆是れ相似の表顯、路布の文字の差排なり、且く是の如

その色青黃にして狗の如し、寧楽して夜鳴くも狼の如し。本邦の諺にいふ「錦ひたたれにくすの袴」の類なり。

㊍大丈夫漢。自己屋裡、無形無相の眞佛を信ぜず。

㊍閑名句。閑言語を認むるなり。

㊎倚陰博陽。陰に陽に他人に依頼して己の希望を取る者なり。博は貿易の意、惡智慧の者他の名句に上りて計校卜度すること、譬へば算博士の陰陽支干に倚りて、數々算計するが如し、是の故に特達すること能はずといへり。

㊏逢境便緣。逢境は順逆の境に依倚するなり。準定は定むることなきなり、塵々刹々の上に執著惡亂せらるゝなり。

㊐山僧說處。吾が云ふ處なも肝要と思ふべからず。

㊑說無憑據。說底の理は實處なきぞと云へり。一期は一往、或は一時なり、軍機に應ずるの義なり、臨濟大師、住世の間を指して言ふも、亦通ず。惡據は本據なり、彩畫像は佛菩薩などを畫にかきいろどり眞實の佛とするが如きをいふ。

㊒將佛究竟。究竟は極則の義、厠孔は屎槽の穴なり。

㊓文殊仗劍。實積經に出づる故事。瞿曇と釋氏とは倶に釋迦なさす。瞿曇は星の名、星に從つて稱を立つ、後代に至りて釋迦と改姓す。應法師翻して地最勝と爲す、謂く、天を除くの外、人類の中に此の族最勝なり。惹掘は具には惹掘摩羅、此には指髻と翻す、人を殺して指を取り、首に冠して鬘と爲す云々。殺と云ひ害

く說く。道流、(の)一般の禿子有つて、便ち裏許に向つて功を著けて、出世の法を求めんことを擬す、錯り了れり。若し人、佛を求めば是の人佛を失す、若し人、道を求めば是の人道を失す、若し人、祖を求めば是の人祖を失す。(ネ)大德錯ること莫れ、我れ且く儞が經論を解することを取らす、我れ亦儞が國王大臣なることを取らす、我れ亦儞が辯、懸河に似たることを取らす、我れ亦儞が聰明智慧を取らす、唯だ儞が眞正の見解を要す。道流(十)設ひ百本の經論を解得するも、一箇無事底の阿師には如かじ、儞解得すれば卽ち他人を輕蔑す。勝負の修羅、人我の無明、地獄の業を長ず。(ラ)善星比丘の如きんば、十二分敎を解するも、生身地獄に陷る、大地も容れず、如かじ無事にして休歇し去らんには。飢る來れば飯を喫し、睡り來れば眼を合す、愚人は我れを笑ふ、智は乃ち焉を知る。道流(ム)文字の中に向つて求むること莫れ、心動すれば疲勞す、冷氣を吸うて益無し。如かじ、一念緣起無生にして、三界權學の菩薩を超出せんには。大德(ウ)因循として日を過すこと莫れ、山僧往日未だ見處有らざる時、黑漫々地なり。光陰空しく過すべからず、腹熱し心忙じて奔波して道を訪ふ。後に還つて力を得て、始めて今日に到つて道流と共に是の如く話度す。諸の道流に勸む、(ヰ)衣食の爲にすること莫れ、看よ、世界は過ぎ易し、善知識には遇ひ難し、優曇華の、時に一たび現ずるが如くなる耳。儞諸方に箇の臨濟老漢ありと道ふことを聞いて、出で來つて(ノ)便ち問難して、語をなし得ざらじめんと擬す。(オ)山僧に全

ばこそ藥はあれ、藥があればこそ病を治す、故に相治すと云へり、これ閑事なり。相似とは眞實にあらずと云ふ義、表顯は外に顯る。路布とは當に露布に作るべし、封ぜざる詔表を露布といふ、此れは蕃賊の言句を標す、路布は軍陣にて兵義を布に書いて路の傍に立て、諸人に知らしむる義なり、諸人知りて後は用に立たぬものなり、露布は注進の狀なり、今の折紙などなり。差排は差別安排の謂なり、文字語句といふ義。

(ノ)一般禿子。道流より了也に至る一段、偏に裏許に著けて佛法を求むることを說く。理許は文字等の理許なり、我が此の如く說く底の言句の理に向つて功能を著けて佛法を會せんとするなり。

(オ)大德錯。大德より見解に至り

すと云ふ、字を切斷して用ふるなり。大師二因緣を擧げて但だ有相佛は眞佛に非ざることを證するのみ。

(レ)道流佛云々。道流より是の如く說くに至りて一段なり、此の段は學者の外に向つて佛を求め法を求むることを嫌ふ。三乘とは聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘なり、五性は一に定性二乘、二に大悲闡提菩薩、三に斷善闡提、所有の罪、悉く作し畢りて、善を修せざる也、四に無性有情、五に佛と、これは唯識論の所說なり。本然の性は一理齊平なりと雖も、而も氣質の性に於ては、自ら五種の不同あり、委悉せんと欲せば、唯識法相を學ぶべし。

(ソ)圓頓敎迹。重々敎に云ひたるなり、敎相と云はんためなり。圓敎頓敎は天台八敎に依る藏通別圓頓漸等なり、病があれ

て一段、專ら眞正の見解を說き得るなり。辯似二懸河とは之を酌めども竭きずなり。聰明智慧は世智辯聰ではない、眞の聰明、眞の智慧も大師は之を取らず。

(十)設百本云々。達磨大師云く、「たとひ千經萬論を說くも、若し本性を見ずんば、只だ是れ凡夫なり、是れ佛法に非ず。」百本は百部なり。

(ラ)善星比丘。この因緣は涅槃經三十三迦葉品に出づ。又楞嚴八に云く、「善星妄りに一切法空と說く、生身に阿鼻地獄に陷入す」と。今時の人三五本の經論を講得して、以て佛法と爲すものは愚人なり。

(ム)向文字中。道流より菩薩に至るまで一段、唯だ無念無想の人を褒す。心動ずれば疲勞すと、求むることあれば心動じつかはる、疲勞する故に風な

引く。一念の緣起無生にしてと云ふは、一念の起るは無生なるものなり、無生なりと悟れば權學は小乘の菩薩。權は方便なり、超越するなり。吸冷氣は文字言句を說くものは口邊出入の氣冷にして、此の冷氣を吸ふも佛法に於て益なし。權學は新發意の菩薩などなり。

(ウ)因循過日。大德より話度に至るまで一段、光陰の惜むべきことを說く。因循は「とやかく」光陰を惜めとなり。往日とはこれより師の昔し物語なり、黑漫々は無分曉うまつくらやみ、未悟の時なり、腹熱心忙、單單物を思ふときは、胸中平穩ならず、腹中熱氣するを云ふ、奔波は「はしりあるく」なり、始到今日は辛棒の分にて悟りたることなり、話度とは大師自ら舊時の參禪

體作用せられて、(ク)學人空しく眼を開き得て口總に動くこと得ず、懵然として何を以てか我れに答へんといふことを知らず。我れ伊に向つて道ふ、(ヤ)龍象の蹴踏は驢の堪ふる所に非ず。(マ)儞諸處に祇胸を指し肋を點じて道ふ、我れ禪を解し道を解すと。三箇兩箇、這裏に到つて奈何ともせず。咄哉儞這箇の身心を將つて、(ケ)到る處兩片

得力の由を告げて時の學者を誘くなり。

(ヰ)莫爲衣食。勸諸道流より界攝に至るまで、善知識に遇ひ難きことを說く。優曇華は優曇鉢羅、此には瑞應と云ふ、希有の者に喩ふ。楞伽の四に云く「佛には値遇し難し、優曇鉢華の如し」と、世上はとにかくにすぎやすきものなり。大燈國師云く「布レ有レ無レ不レ衣、布レ口無レ不レ喫」と云ふに同じ、佛法が肝要なり。

(ノ)便問難。難大麁心なり、學人難問を起し來りて、臨濟を問ひつめんとすれども、却つて臨濟にまはさるゝぞ。

(オ)被山僧全撥。石火も及ぶことなく、電光も通ずること罔しと、作家の手段なり、却つて思うさましたゝめらるゝ也、

師の自らいふ語なり。

(ク)學人空眼。修行者は空しく目ばかりきら〳〵してものを云はぬ貌、目をみつめて口はちつともはたらかぬなり。懵然は心亂れて闇暗なり。

(ヤ)龍象蹴踏。師の自稱なり。龍象の如き良馬の狂奔するはなかなかしい、驢馬などはかなはざるなり。蹴踏は「ふむ」なり、この八字は維摩經の不思議品の語なり、又智度論に云く「其の力大なることは、龍は水行の中にして力大なり、象は陸行の中にして力大なるものなり。」今は師禪碩德を以て之を龍象に比す。

(マ)指胸點肋。指胸は自讃の貌、點肋は自高の貌、三箇兩箇は學人なり、自負高慢の學者も老僧が面前ではいかんともえせぬ。這裏は本分也。

(ケ)到處兩片。兩片皮とは上くちびる、下くちびるを扣いて口がましく物を云ふ。閭閻は里門を閭といふ、二十五家を一閭といふ、閻は里中の門なり。誑は欺なり、諕は號呼なり、村さとをたぶらかす、閻魔王の棒をあぶるなり、人家の男女を蠱魅するなり、閻魔王の棒をあぶるべし。

(フ)非出家兒。攝せられんは引き入れられんと云ふ義。上件の大我慢の學人は勝負の修羅にして、出家兒に非ず、他日必ず阿修羅界に引き入られ、落つるならんと。此の一段は師の大機大用を振ふを擧げて慈智慧點胸の聾を開示する也。

(コ)夫至理道。激揚は聲をはげまして物を云ふ義、鏗鏘の鏗は金石の聲なり、鏘は玉聲なり、金玉のなるが如くからめいて云ふ。

皮を鼓いて閭閻を誑諕す、鐵棒を喫すること日有ること在らん。(フ)出家兒に非ず、盡く阿修羅界に向つて攝せられん。(コ)夫れ至理の道の如きんば、諍論して激揚を求め、鏗鏘として以て外道を摧くに非ず、佛祖の相承に至つては更に別意無し、(エ)設ひ言教あるも化儀の三乘五性人天の因果に落在す。(テ)圓頓の教の如きんば、又且つ然ら

(エ)設有言教。言句などと云ふは人を化度儀式までなり、化儀は頓漸祕密不定なり、化法は藏通別圓なり。

(テ)圓頓之教。人天の因果にあらずと云へり。此は圓教頓教を以て云へり、理の至極尤もほど本分の方を用て云へり。

(ア)童子善財。善財童子の一百十城を歷て、五十三人の知識に參ずとも、然も至理之道に於ては未だ全く求め得ず。皆は五十三處を指す、求道は本分の眼から云へり。

(サ)莫錯用心。これは大德より無花に至るまで一段なり、正法に言句なきことを說く。大海不停死屍とは、胸中に一物をも留めざるに譬ふ、大海は佛法なり、死屍は言句なり。

(キ)祇麼擔却。死屍を擔ふて走りまはるなり。文字言句を擔却し、又無明煩惱を擔却して、

徒に天下に奔走して、邪師に誑惑せられて、自ら見障を起して、自己一段の光明を昧沒して以て心を礙ふ。

(ユ)日上無雲。日の上には元來雲はなきなり、故に天をば普く照すなり、雲は日の下にあつて光を障ふるが如くに、元來心は明歷々なるものなり、見障を以て心をくらますなり。眼中には云々、見障拂跡したる境界中に花が在るとみゆるなり、見障を以て道眼をさふると云ふ義なり。

(メ)爾得如法。道流より末の一段に至るまで、眞法は天地間に充塞すと云ふを說く。如法は大師が受用底なり、古今の大善知識の自受用三昧なり、眞正の見解を云ふ。これは巳下の全提の爲めの故に、先づ學者疑滯の心を遣る、譬へば水を澄して月を得るが如し。

(ミ)展則法界。把住放行、大自在を得たり。彌綸は包裹の如し、麗天普照に應じ、絲髮不立とは空裏無花に應ず。

(シ)歷々孤明。絲髮も立せざる故に缺くると云ふこともなく、眼見えず耳聞かずと。直指爲人なり。

(ヱ)古人云。古人は南嶽讓和尙なり、六祖能大師に嗣ぐ。これは臨濟が、嘍嘍喃喃、口乾き舌縮る、却つて中らず、わづかに開口、すぢなきことなり、本分のたゞちを云へり。

(ヒ)爾如自家。よそにはなきぞと云へり、さてあるものかと、直指して說くも亦無盡と。這箇の上を無盡に說くといへども、人々に我れと力を着けてみよと云ふこと。これは上に「說似一物即不中」と云ふ語をうけて、反して云へり。敎へて知らしむるを敎といひ、

す。㋐竈子善財、皆求過せず、大德㋑錯つて用心すること莫れ、大海に死屍を停めざるが如し。㋒祇麼に擔却して天下に走らんと擬す、自ら見障を起して以て心を礙ふ。㋓日上に雲無ければ天に麗いて普く照す、眼中に翳無ければ空裏に花無し。道流、㋔儞如法なることを得んと欲せば、但だ疑を生ずること莫れ、㋕展ぶる則んば法界に彌綸し、收むる則んば絲髮も立せず。㋖歷々孤明にして未だ曾て欠少せず。眼見ず耳聞かず、喚んで什麼物とか作さん。㋗古人云く、『說似一物卽不中』と。㋘儞但だ自家に看よ、更に什麼か有らん。說も亦無畫、各自に力を著けよ。珍重。」

自ら悟らしむるを禪といふ。自看力とは自ら悟りて知れとなり。珍重は我がいふ處を珍とし重んぜよとなり、又さ候はゞ是れまでにて候ふと云ふ意もあり、いとまごひすると同じといふ心の義なり、上來提唱の說を結ぶなり。

㋐勘辨

㋙黃檗因に厨に入る次で、飯頭に問ふ、「什麼をか作す。」飯頭云く、「衆僧の米を揀ぶ。」黃檗云く、「㋚一日に多少をか喫す。」飯頭云く、「二石五。」黃檗云く、「太だ多きこと莫しや。」飯頭云く、「猶ほ少きことを恐るゝこと在り。」黃檗便ち打す。飯頭却つて師に㋛擧似す。師云く、「我れ汝が爲に這の老漢を㋜勘せん。」纔に到つて侍立する次で、黃檗前話を擧す。師云く、「飯頭不會、請ふ和尙㋝一轉語を代れ。」師便ち問ふ、「太だ多きこと莫しや。」黃檗云く、「何ぞ道はざる、來日更に㋞一頓を喫せんと。」師云く、「什麼の來日とか說かん、卽今便ち喫せよ」と道ひ了つて便ち打すと。「大慈大悲更に見解を呈せんとを揑ぐに假たり」と古人はいへり、令妄りに行ぜずともいへり、遂に打すとする方文意よしともいへり。

㋐勘辨。勘辨とは入室の體なり、學者を勘辨するなり。此の勘辨も三聖惠然の撰なり、勘辨は試驗の如し、師家は學者を勘辨し、學者は師家を勘辨し、互に機關を立して云ひたることなり。佛法の境界に非ず、一重向上の手段なり。

㋙黃檗因入。厨は、くりや、」庫裏なり、飯頭は典座なり、大衆の齋粥一切の供養を掌る、揀米は米中の沙を揀ること。

㋚一日多少。多少とは米の多少を問はず、二石五と果然として多少に落つ、莫太多歟と慈悲の爲の故に又多少を問ふ、「猶恐し少在」と、元來不會、依然として多少に落つ、便ち

㋛擧似。示すの意なり。

㋜勘。試驗すること。

㋝一轉語。俗にいふ一言といふが如し、一語を撥轉すると。

㋞喫一頓。一度の食、一次の食なり、此には二義あり、是れ勘辨の祕密なり、法と食とに就いていふ、食に就いていへば更に一頓の飯を喫せしめんとの義、法に就いていへば更に二十棒を喫せしめんとの義、外面は來日長時、一頓の飯を喫せしめんと、裡許は但だ當

掌す。黃檗云く、「㋓這の風顛漢、又這裏に來つて虎鬚を捋づ。」師便ち喝して出で去る。後に潙山、仰山に問ふ、「此の二尊宿の意作麼生。」仰山云く、「和尚作麼生。」潙山云く、「㋑子を養つて方に父の慈を知る。」仰山云く、「然らず。」潙山云く、「子又作麼生。」仰山云く、「㋒大いに勾賊破家に似たり。」

㋑師、僧に問ふ、「什麼の處よりか來る。」僧便ち喝す、師便ち揖して坐せしむ。僧擬議す、師便ち打す。

師、僧の來るを見て、便ち拂子を竪起す、僧禮拜す。師便ち打す。又僧の來るを見て、又拂子を竪起す。僧顧みず、師亦打す。

㋐師一日、普化と同じく施主家の齋に赴く次で、師問ふ、「㋐毛、巨海を呑み、芥須彌を納る、

機觀面の分なり。師云く、「什麼の來日とか說かん、卽今便ち喫せよ」と道ひ了りて、便ち掌すと、掌すは手のひらにて打つなり、與二一掌一はつらより耳へかけて掌するなり。師始め檗の命を受けて大愚に參ぜしむ、遂に築くこと三拳して去來して答ふ、卽今便ち契せよといつて便ち掌す。

㋓這風顛漢。師却回し、遂に前話を擧す、是れ再捋の一番なり。風顛漢は序文の解に見ゆ。師便喝出去と、這の一喝他を肯ふと爲する耶、他を肯はずと爲る耶、諸方辨じて看よ。

㋑養子方和。黃檗已に臨濟を養出して、方に百丈の慈恩を知る、是れ黃檗底に就いて放行し來れり矣、(潙山、仰山の傳は略す。)是れ體なり。

㋒大似勾賊破家。是れ賊賊を知る、是れは用なり、是れ臨濟底に就いて把住し去れり矣。或抄に云く、「仰山の答は潙山にまされり」と。賊を養ふて破產するを勾賊破家といふ、俗にいふ、「飼貓に手を嚙まれた」と云ふに同じ。

㋑師問僧。來處を問ふに似て來處に非ず、僧便ち喝すとは直に來處を問ふの機に當る。師便ち揖坐せしむと、これに兩點あり、坐せしむるのときは僧を揖して坐せしむる也、坐するのときは師の揖して坐したるなり、前の義よし。揖は低頭して問訊するかたちを云ふ。僧擬議すとは、あまり格外の待遇なる故に、すぐゆきつまる、師便ち打すとは且く道へ、是れ賞か罰かなり。便竪二起拂子一とは間に髮と容れず、僧禮拜とは謹んで師の指示を謝す、僧不レ顧とは陷虎の機あり、禮拜に執與れぞ、

是れ神通妙用とやせん、本體如然たるか。」普化飯牀を踏倒す、師云く、「大麤生。」普化云く、「這裏是れ什麼の所在ぞ、㋕麤と說き細と說く。」師、來日又普化と同じく齋に赴く。問ふ、「今日の供養昨日に何似。」普化依前として飯牀を踏倒す。師云く、「得ることは卽ち得たり、大麤生。」普化云く、「瞎漢、佛法什麼の麤細とか說かん。」師乃ち舌を吐く。

師一日、㋖河陽木塔の長老と同じく僧堂地爐の內に在つて坐す、因に說く、「普化每日街市に在り、㋗掣風掣顛す、知る他は是れ凡か聖か。」言猶ほ未だ了らざるに普化、衆に入り來る。便ち問ふ、「汝は是れ凡か是れ聖か。」普化云く、「汝且く道へ、我れは是れ凡か是れ聖か。」師便ち喝す。普化手を以て指して云く、「㋘河陽は新婦子、

師亦打すとは舊抄に、「師問僧といふより此に至るまで三則、賓主の機用優劣なし、諸人眼を著けてみよ」とあり。

㋕師一日普化。普化は盤山寶積に嗣ぐ、積は馬祖に嗣ぐ。齋は師軍營に入る處に詳なり、施主は檀那の處へ羅齋に行くなり。

㋕毛呑巨海。この緣起は華嚴仁王等に出づ。「爲二是神通妙用一、本體如然」と此の十字、正しく普化を勘辨するなり、神通妙用にて候なり。本來此の理あるかと云ふ義なり。普化、蹈倒飯床と飯をもりてすゑたる臺をひつくりかへす。古人云く、勘破了也と。大麤生とは「あらけないやつ」なり。大師、普化を肯ふや肯はざるやと、諸方辨じて看よ。

㋕眼麤說細。古抄に云く、「此の答へ少し普化の一着をかきたる處なり、眼を着くべし」と。依前としては昨日の如くと云ふ義、師乃吐レ舌とは、法を識るもの懼るといふ義、これは漏逗なり、きもをつぶし、舌をによつと出したる貌なり、是れ白拈賊の手段なり。

㋖河陽木塔。河陽と木塔との傳は不詳。地爐とは僧堂露地の爐なり、長老の解は略す、粥齋後、休息のときの談話なり。

㋗掣風掣顛。街市はまち中にありてなり。風狂風顛、知る他は是れ凡か是れ聖かと云々、普化云く、汝且く道へ我れ是れ凡か是れ聖かとつゝかへしてよく答へた、師便ち喝すとは凡聖路絕す。

㋘河陽新婦子。新婦子は見解の軟弱を言ふ、老婆禪は親切太過を言ふ、小厮兒は馬鹿野郎、草かりわらべ、又こがしこき

木塔は老婆禪、臨濟は小厮兒、却つて一隻眼を具す。」師云く、「這の賊。」普化、「賊々」といつて便ち出で去る。

一日普化、僧堂前に在つて ㋮生菜を喫す、師見て云く、「大いに一頭の驢に似たり。」普化便ち驢鳴をなす、師云く、「這の賊。」普化、「賊々」といつて便ち出で去る。

因に普化、常に街市に於て鈴を搖して云く、「㋮明頭來や明頭打、暗頭來や暗頭打、四方八面來や施風打、虛空來や連架打。」㋯師、侍者をして去つて纔に是の如く道ふを見て、便ち把住して云はしむ、「總に不與麼に來る時如何。」普化 ㋰托開して云く、「來日大悲院裏に齋あり。」侍者回つて師に擧似す、師云く、「我れ從來這の漢を疑著す。」

㋮喫生菜。菁飯「かぶらいひ」なり、「菜飯」なり、日本の青醬「あをあへ」の類なり、不熟の菜をいふ、故に驢馬に似たりといふ。

㋮明頭來。明頭は出世有功用の邊、偏位、暗頭は不出世無功用、正位、四方八面來は八方に敵を受く、旋火輪の如し。又云く、千差萬別の境界なり。旋風打は一切の境界を立せず、虛空來は沒蹤跡にし來る、連架打は架は物に作るべし、拂なり、般を打する物なり、連架打はつよく打つ義。此の古則の一段子細あり。古人云く、「千七百則の公案にも此の古則の境界之れあるべからず。」又云く、「此の古則多くは截斷とみるべし、大に誤れり。」かう云ふたならば心得るものもあるべしと云ふ。

㋯師令侍者。侍者は樂普元安なり。不與麼に來る時如何と云ふは、一向に格外に來ればと云ふ義。

㋰托開。つきはなつて來る體なり。大悲院は日本の悲田院、(乞食非人を救ふ)。我れ從來疑著這漢」と、今日よりは疑ふまいとひさく。

㋱有一老宿。人事とは坐具を展ぶるの義なり、威儀を具へて案を啓するを云ふ。便ち問ふ「禮拜せんか卽ち是、禮拜せざらんか、卽ち是」とは、老宿是の老賊臨濟を看んことを要すと。師便ち喝すとは此の喝是れ深頭と、簡好はほめて云ふ、草賊は「かねすびと。」抑下或は抑揚するなり、師云く、道ふことなかれ、無事にして好しと、好箇の二字殊勝なり、草賊なれども好箇の二字にて、大賊とひさくなり、抑揚あつてよし、無事に事を生じたる處を目がけて云へり。

㋲首座侍立。この首座は必ず三聖ならん。古人云く、此の過妄りに看るべからず、眼を著くべし」と、資家は老宿、主家は臨濟を云ふ、二り俱に賊機なるが故なり。便ち出で去るとは首座、無事の作用、莫道無事好とは來りて是非を說くものは、便ち是れ是非の人。師、他の窠窟を打破せんことを要す。

㋳南泉云。南泉普願は馬祖道一に嗣ぐ。官馬は龍馬なり、師と首座とをほめて好き馬の駒むが如しと。

㋴「一老宿有つて師に參す、未だ曾て人事せず、便ち問ふ「禮拜せんか卽ち是、禮拜せざらんか卽ち是。」師便ち喝す、老宿便ち禮拜す。師云く、「好箇の草賊。」老宿、「賊々」といつて便ち出で去る。師云く、「道ふこと莫れ無事にして好しと。」㋲首座侍立する次で、師云く、「還つて過ありや也た無や。」首座云く、「有り。」師云く、「賓家に過あるか、主家に過あるか。」首座、便ち出で去る、師云く、「二り俱に過あり。」師云く、「過什麼の處にかある。」首座、後に僧有つて南泉に擧似す、南泉云く、「官馬相踏む。」

師 ㋷因に軍營に入つて齋に赴く、門首に員僚を見て、 ㋸師露柱を指して問ふ、「是れ凡か是れ聖か。」員僚無語、師露柱を打して云く、「直饒ひ道ひ得るも也た祇だ是れ箇の木橛」と。便ち入り去る。

㋷師、院主に問ふ、「什麼の處より來る。」主云く、「州中に黃米を糶り去り來る。」師云く、「糶り得盡すや。」主云く、「糶り得盡す。」師杖を以て面前に畫一畫して云く、「還つて這箇を糶り得てんや。」主便ち喝す、師便ち打す。典座至る、師前話を擧す。典座云く、「院主、和尙の意を會せず。」師云く、「儞

法論とは大乗百法論を云ふ、
三論宗の本論なり、智は論者
の我なり、是れ同か是れ別か、
と、まことに座主の見解なり、笑ふに堪へず。座主とは
牧牛をいふ、偈に二人を設けて座主の見解を見んことを要
す。

❼ 柴・牛疥・侍者。樂普元安、又洛
浦とかく、夾山慧會に嗣ぐ、
伜は師事給手に嗣ぐ、子は石
頭より三世。諸方且く道へ、
這の伜是れ貴か是れ賤か、此
れは喫すべきを喫せず、是れ
一の我なり、露地は本地といふに同じく、白牛は清浄無垢
の意なり、牧牛に喩ふ。咦は嘆ずる聲なり。

❽ 露・地・白・牛。露地白牛は牛苓實
とかく、夾山慧會に嗣ぐ、
伜は師事給手に嗣ぐ、子は石
頭より三世。諸方且く道へ、
這の伜是れ貴か是れ賤か、此
れは喫すべきを喫せず、是れ
一の我なり、露地は本地といふに同じく、白牛は清浄無垢
の意なり、牧牛に喩ふ。咦は嘆ずる聲なり。

❾ 師・問・者・山。豫山者山の臨濟師
の師は、靈雲志勤嗣の法嗣。
し、先哲みな放者を以て者字に亞
ぐ。

❿ 呼・ぶ。

とは、正に清淨眞如の體を擧ふ
て。又他を作麼生と者ふ機關
といふも、本分の眼から見れ
ば則ち醉とはなりなりと云ふ。
醒是酒後とは俗人と思ひた
れば、こはものなりとほめた

❶ 師・指・露・柱。露柱は門の中央の
圓柱、大黒柱なり、打三露柱、とは
木の切れなり、これ無
明・煩・惱なり、貝佼の不材を嘆ず。

❷ 師・同・院・主。院主は監寺なり、
我來は吾來なり、關は普が國
より他國に發心し來なり、來
は、猶ほ看院主云々、主云く、「歸
る勿れ。歸り得てんやと
は全機現らず、
院主も具眼なり。直一喫して
云くとは前へひきまはすことを
なり、運つて漬箇を歸り得て
んやとは力を出したる振舞なり。
前に見ゆ、この則は主中主を
の鋒なり、組は大綱なり、百
❷ 究・竟・無・得。究竟は畢下
丈・量・不・得。
❸ 以・入・亞・聲。單露は柱
なり、還嘉に赴く、門佼は門
の入口。

❹ 柴・井・疥・侍。樂普元安、又洛
浦とかく、夾山慧會に嗣ぐ、
伜は師事給手に嗣ぐ、子は石
頭より三世。諸方且く道へ、
這の伜是れ貴か是れ賤か、此
れは喫すべきを喫せず、是れ
一の我なり、露地は本地といふに同じく、白牛は清浄無垢
の意なり、牧牛に喩ふ。咦は嘆ずる聲なり。

❺ 師・問・者・山。豫山者山の臨濟師
の師は、靈雲志勤嗣の法嗣。
し、先哲みな放者を以て者字に亞
ぐ。

❻ 呼・ぶ。

とは、正に清淨眞如の體を擧ふ
て。又他を作麼生と者ふ機關
といふも、本分の眼から見れ
ば則ち醉とはなりなりと云ふ。
醒是酒後とは俗人と思ひた
れば、こはものなりとほめた

作麼生。」眞座使はち禮拜す、師亦打す。

座主有り、來つて相看する次で、師問ふ、「座主何の經論をか講ず。」師云く、「某甲の荒虛にして粗ぼ百法論を習ふ。」師云く、「一人有り、三乘十二分教に於て明め得ず、是れ同か是れ別か。」主云く、「明め得ず。」師云く、「明不得ならば卽ち同、卽ち別。」❶樂普侍者に告げ、「座主這裏是れ什麼の所在ぞ、同と說き別と說く。」師首を回らして侍者に問ふ、「汝又た作麼生。」侍者使ち喝す。師座主を送り回り來つて、遙かに侍者に問ふ、「適ぎ來是れ汝老僧を喝するか。」侍者云く、「是。」師便ち打す。

三十棒、道ひ得ざるも也た三十棒と云ふを聞き、❷德山、❸黐に示して、「道ひ得るも亦た打す。

師、❹篤二代德山、黐示して、「道ひ得ざるも也た三十棒、道ひ得るも亦た三十棒と云ふを聞き、❺雲門に問ふ、「德山の意旨如何。」門云く、「胡餅。」

❶ 師・指・露・柱。露柱は門の中央の圓柱、大黒柱なり、打三露柱、とは木の切れなり、これ無明・煩・惱なり、貝佼の不材を嘆ず。

❷ 師・同・院・主。院主は監寺なり、我來は吾來なり、關は普が國より他國に發心し來なり、來は、猶ほ看院主云々、主云く、「歸る勿れ。歸り得てんやとは全機現らず、院主も具眼なり。直一喫して云くとは前へひきまはすことを
なり、運つて漬箇を歸り得て
んやとは力を出したる振舞なり。
前に見ゆ、この則は主中主を
の鋒なり、組は大綱なり、百
❸ 究・竟・無・得。究竟は畢下丈・量・不・得。

❹ 篤・信・心・黐。篤信心黐は龍潭信に嗣ぐ、周
金剛といふ。接三往輒一迎一迎
すとは、棒をとらへてきく
つきやる處、此れは道し賊持
んと要す。人境俱奪なり。

❺ 雲・門。雲門は文偃嗣雪峰、
胡餅は、胡麻餅なり、
❻ 普・徧・疑・著。此れは、これ全體作用
の姿なり。
❼ 半・疑・疑。半疑疑は、
たとひ千佛萬祖出來るとも、
❽ 半・疑・疑。この疑團はさのみ不
足はなし、さりながらちつと
はうたてき疑團なり。此の垂
示面は裁斷のやうなれど、
大いに千細あり、總じて德山
は、この手段有句に參じて知る
べし。
❾ 王・常・侍・一・日。不審經とは唐空
背上無字の大經、是れ國の本
具なるに强ひて他の異佗赤軸を
看ることを呟んや、放に云く、
「手に經卷を取らざれども常
に是の如きの經を轉ず。」不審
僧とは正念現前、卽ち是れ眞
なり、經教、印成佛作祖去と
は大抵は他の肌骨の好きに這
なり。金屑雖貴、落眼成翳、

いて、師、樂普をして去つて、道ひ得ば什麼と
して か也た三十棒と問ふて、伊が汝を打せんを
待つて棒を接住し、送り一送りして他を作麼生と看ん
せしむ。❶普彼に到つて教なるが如く問ふに、德山便ち
に歸る。普は回つて師に擧似す、師云く、「我れ從う
來是の漢を疑著す、然も是くの如くなりと雖も、
汝還つて德山を見るや。」❷普擬議す、師便ち打
す。

❶ 王・常・侍・一・日。不審經とは唐空
背上無字の大經、是れ國の本
具なるに强ひて他の異佗赤軸を
看ることを呟んや、放に云く、
「手に經卷を取らざれども常
に是の如きの經を轉ず。」不審
僧とは正念現前、卽ち是れ眞
なり、經教、印成佛作祖去と
は大抵は他の肌骨の好きに這
なり。金屑雖貴、落眼成翳、

❷ 半・疑・疑。此れは、これ全體作用
の姿なり。
❸ 半・疑・疑。この疑團はさのみ不
足はなし、さりながらちつと
はうたてき疑團なり。此の垂
示面は裁斷のやうなれど、
大いに千細あり、總じて德山
は、この手段有句に參じて知る
べし。

む。」侍云く、「金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳と成る、又作麼生。」師云く、「將に爲へり、儞は是れ箇の俗漢と。」

㋓師、杏山に問ふ、「如何なるか是れ㋢露地の白牛。」山云く、「吽吽。」師云く、「啞する那。」山云く「長老作麼生。」師云く、「這の畜生。」

師、樂普に問うて云く、「從上來㋐一人は棒を行じ、一人は喝と行ず、阿那箇か親しき。」普云く、「總に親しからず。」師云く、「親處作麼生。」普便ち喝す、師乃ち打す。

㋚師、僧の來るを見て兩手を展開す、僧無語、師云く、「會すや。」云く、「不會。」師云く、「渾崙擘けども開けず、汝に兩文錢を與へん。」

㋖大覺到り參す、師拂子を擧起す。大覺坐具を敷く、師拂子を擲下す。大覺坐具を收めて僧

敎者は言語道斷、心行所滅といへり、禪には別に用ふる子細あり、啞那は抑下なり、「おしになつたか」といふ義、這畜生は白牛といふ語を受けて云へり、抑下のやうでさやうにてはなし、別に子細あり。長老とは事苑に云く、「今の禪宗住持のもの、必ず長老と呼ぶ。」露地白牛は法華の二譬喩品に出づるの意。

㋐一人行棒。一人とはこれ什麼人ぞ、大師謂く、「棒喝本分の事に於て那箇か親しき」と、是れ賊精、又是れ釣竿の機なり、普云く、「總不親」と、子細に看來れば、たとひ棒喝と雖も、未だ是れ建化門中を出づるに非ず、祖宗門下本分の事に於て總べて親しからず、諸方自靜して看よ。親しき處作麼生とは子細あり、親しき處問はず、普卽ち喝す、是れこそ眞箇親しき處よ、師乃ち眞棒を打するなり。虚堂云く、「平生の肝膽、人に向つて傾く、相識猶ほ不相識のごとし。」

㋚師見僧來。展開兩手は直指爲人なり、古人云く、「和盤托出夜明珠」と。僧無語と、これは瞎禿子なり。云く、不會と、眞箇不會なり、渾崙擘不開は鈍なる用處なり、渾崙は眞暗のこと、儱頑鈍なること渾崙の如し。汝に兩文の草鞋錢を與ふべし、飽くまで游方訪道すべしとなり。

㋖大覺到參。大覺は魏府の大覺和尙、臨濟に嗣ぐ、興化の恩人なり。大覺收坐具入僧堂とは又拂子を擲下すると、是れ同か是れ別か、看よ一家の事、放つときは同じく是れ放ち收むるときは同じく是れ收む、謂つべし師資の道契ふと、此の一路案は殊勝なり。親故

堂に入る。衆僧云く、「這の僧是れ和尙の親故なること莫しや、禮拜せざれども又棒を喫せず。」師聞いて覺を喚ばしむ、覺出づ。師云く、「大衆道ふ、汝未だ長老に參せずと。」覺云く、「不審」といつて便ち自ら衆に歸す。

㋙趙州、行脚の時、師に參ず、師の洗脚するに遇ふ次で、州便ち問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」師云く、「恰も老僧が洗脚するに値ふ。」州近前して聽く勢を作す、師云く、「更に第二杓の惡水潑がんことを要すること有り。」州便ち下り去る。

㋱定上座有つて到り參ず、問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」師繩床を下つて擒住して、一掌を與へて便ち托開す。定佇立す。傍僧云く、「定上座何ぞ禮拜せざる。」定禮拜するに方つ

は和尙の親類（知音）なり。未參長老とは師自ら云へり。不審とは此のほどは何事が御座候ふと云ふ義。

㋙趙州行脚。この則は傳燈、聯燈、會元の趙州傳にはなし、趙州は馬祖より三世、臨濟は四世、趙州は臨濟の示寂より三十年後れて寂す、壽百二十歳といふ、趙州は南泉普願に嗣ぐ、南泉は馬祖に嗣ぐ。祖師西來意を問ふたのに、師云く、「折節老僧が足を洗ふに値ふ」と、此の答は權實體用あり、州は近前して聽勢を作す、「へーなにとです」なり、西來意を御答へあるかと思ふてなり。第二杓の惡水とはさきに一杓をそゝぎたるに、又そのやうなることをせば、第二杓の惡水を面にかくべしと云へり、前に恰と云ひたるが、惡水を一杓そゝぎたる也。州便ち下り去るとは殊勝なり、賓主問答の手本なり、夜深同看千岩雪などの境界なり。

㋱有定上座。佛法大意とは是れ未悟なる故に、眞實佛法を問ひたるなり。繩床は禪床なり、擒住は胸を捉へる也、一掌とはぴつしやりと一つまゐる、托開はつつぱなす。この邊は大機大用そなはるなり、佇立はたぢたぢしたる貌、迷惑したる體、傍僧は三聖か興化かなどの人たちなり、忽然大悟とは悟らせうとて云へり。定上座、臨濟に嗣ぐ。此の話は本叢書七卷（一七〇頁）の碧巖集の三十二則に出づ。

㋯麻谷到參。第二代の麻谷なりと往々註せらるゝも麻谷寶徹禪師なり、師は馬祖に嗣ぐ。十二面觀音とは十二面觀音無正面と山谷外集十四にあり、十二面の內どれが正面ぞとい

て忽然として大悟す。

㊂麻谷到り參ず、坐具を敷いて問ふ、「十二面の觀音、阿那面か正。」師繩牀を下つて一手は坐具を收め、一手は麻谷を搊へて云く、「十二面の觀音、什麼の處に向つてか去る。」麻谷身を轉じて繩牀に坐せんと擬す。師拄杖を拈じて打す。麻谷接卻して相捉へて方丈に入る。

師、僧に問ふ、「㊃有る時の一喝は、金剛王寶劍の如く、有る時の一喝は、踞地金毛の獅子の如く、有る時の一喝は、探竿影草の如く、有る時の一喝は、一喝の用を作さず。汝作麼生か會す。」僧擬議す、師便ち喝す。

㊄師、一尼に問ふ、「善來か惡來か。」尼便ち喝す、師棒を拈じて云く、「更に道へ更に道へ。」尼又喝す、師便ち打つ。

ふなり。十二面は頭に十一面本の面ともに十二あり、之をいふ。向二什麼處一去也とは箭鋒相拄ふる境界なり、つゝかへして問ふなり。轉レ身擬レ坐二繩床一とは十二面觀音にならんとしたる義、師家にならうとしたる義なり。師打すとは直に是れ凡聖を絕する底なり。相捉入二方丈一とは神通遊戲三身の境界なり、此れは是れ全體作用の境界なり。

㊂有時一喝。大いに子細あり、四喝は參じて知るべし。金剛王寶劍は物に遇ひ緣を解して一刀兩斷するなり。踞地金毛獅子は言を發し氣を吐いて威勢振立す、百獸恐れ悚き、衆魔膽裂く。探竿影草は善知識一物を指し出して學人を驗む、竿のさきに草を着けて水の上にふりて魚の有無を試むる義、一說に盜の家の內に人のれいりたか、れいらざるかをさぐり試みる義なり。不レ作二一喝用一は隻手の聲なり、一切の作用皆本源となす。

㊄師問一尼。善惡を問はず、大いに子細あり。尼便ち喝すは好喝なり、更に道へ更に道へと猶も尼を見とゞけんとす、尼又喝すとはよく喝したり、こはき尼なり、師便ち打すと。此の問答起倒がありて殊勝なり。

㊅龍牙問。湖南の龍牙山居遁禪師は洞山价に嗣ぐ。此の話は碧巖の第二十則（本叢書七卷一〇八頁）に出づ。祖師西來意とは達磨大師はなにしに支那に來たのですかと。過禪版來とは禪版は坐禪のときに板片にこしらへて一寸した禪語の書いてある手や足をもたせる爲め使用する禪僧の臨息なり。過來れとは「ちよつとと

㊆龍牙問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」師云く、「我が與に禪版を過し來れ。」牙便ち禪版を過して師に與ふ。師接得して便ち打す。牙云く、「打つことは則ち打つに任す、要且つ祖師意無し。」牙後に翠微に到つて問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」微云く、「我が與に蒲團を過し來れ。」牙便ち蒲團を過して翠微に與ふ、翠微接得して便ち打つ。牙云く、「打つことは則ち打つに任す、要且つ祖師意無し。」牙住院して後、僧あり、室に入つて請益す。云く、「和尙行腳の時、二尊宿に參ず、因緣還つて他を肯ふや也た無や。」牙云く、「肯ふことは則ち深く肯ふ、要且つ祖師意無し。」

㊇徑山に五百の衆あり、人の參請する少し。

㊈黃檗、師をして徑山に到らしむ。乃ち師に謂つておくれ」なり。要且無二祖師意一とは打つことは打つに一任しますが、結局は祖師西來意は飛び出しませんよとやつた。翠微無學禪師は丹霞天然に嗣ぐ。蒲團は坐禪をするときに使用する座蒲團のことなり。接得して便ち打つとはそれを受取りてすぐさまなぐつた、接得は「おほきに御苦勞」といふ意。請益は之はある上に猶ほ物を增すをいふ、それが一轉して師友に物事を尋ね、その上に更に質問し討議することなり。入室は學人が師家に參禪するときをいふ。

㊉徑山有五百衆。徑山の開山國一禪師は牛頭融より七世、四祖道信の旁系、唐の德宗貞元八年十二月の示寂なり、大師と相隔つると六十二年なり、鳥窠道林和尙の師。本文の徑山は開山に非ず、二世に非ず、自ら是れ別人ならん、第三世洪諲禪師は法を鴻山祐に嗣ぐ後徑山に住す。徑山は臨安府即ち杭州府の徑山は天目の東北なり、峰に路あり、天目に通ずべし、故に徑山といふ。此のとき五百の衆僧參禪請益せずして、毎日佛殿の大樹を繞つて觀音經を讀ませらる、それで參請にあやかる人がまれなりと。

㊉黃檗令師。五百の衆を接すべき善巧方便如何となり。然るに黃檗、舊より臨濟に大機大用あることを知る、是の故に師をして徑山に到らしむ、豈に五百の痴漢を接するに足らざることあらんや。師は隨分の人なる故に御使にゆかるゝなり、是れは參請する者がなしときいてそのやうなることを云ふて、使をつかはすなり。

うたしむ、即時に傳布す。市人競ひ往いて粽を買はんと欲す、一日街市の中に於て、人に就いて直ちに山五百の衆、太半分散す。

❶普化、一日街市の中に於て、人に就いて直ちに山に問ふ、「這の僧適來什麽の言句有つてか便ち和尚を喝す。」徑山云く、「這の僧、黃蘗の會裡、尋いで僧あり、徑山口を開かんと擬す。師便ち拂袖して便ち行く。徑山方に下つて、師便ち喝す。徑山口を開かんと擬す。師便ち拂袖して便ち行く。徑山山頭を擧す。師、彼に到つて法堂に上つて、目ら方便あり。❷師、徑山に到る、裝ひ了つて、復た徑山に到つて作麽生。」師云く、「某甲彼に到つて目ら方便あり。❷師、徑山に到る、裝ひ了つて、復た徑山に到つて作麽生。」師云く、「某甲

❶普化、一日街市の中に於て、人に就いて直ちに山に問ふ、「這の僧適來什麽の言句有つてか便ち和尚を喝す。」徑山云く、「這の僧、黃蘗の會裡、尋いで僧あり、徑山口を開かんと擬す。師便ち拂袖して便ち行く。徑山方に下つて、師便ち喝す。徑山口を開かんと擬す。師、彼に到つて法堂に上つて、目ら方便あり。❷師、徑山に到る、裝ひ了つて、復た徑山に到つて作麽生。」師云く、「某甲

の隱々としむ、即時に傳布す。市人競ひ往いて粽を買はんと欲す、一日街市の中に於て、人に就いて直ちに山に問ふ、「這の僧適來什麽の言句有つてか便ち和尚を喝す。」徑山云く、「這の僧、黃蘗の會裡、尋いで僧あり、徑山口を開かんと擬す。師便ち拂袖して便ち行く。徑山方に下つて、師便ち喝す。徑山口を開かんと擬す。師、彼に到つて法堂に上つて、目ら方便あり。❷師、徑山に到る、裝ひ了つて、復た徑山に到つて作麽生。」師云く、「某甲

云く、「我れ今日未だし、來日南門に往いて遷化し去らんと。是の如くすること三日、人皆信せず。普化獨り出でゝ自ら棺内に入つて、之に釘す。路行の人を倩つて之を舁ぐ。普化隨ひて之を看る。普化既に遷化し了れり、我れ東門に往いて遷化し去らんと。市人競ひ隨つて之を看る。普化既に遷化し了れり、我れ汝が爲に直綴を做し得了れり。」普化便ち自ら擔ひ、街市を繞つて叫んで云く、「我れ汝が爲に箇の直綴を做し得了れり。」普化便ち自ら擔ひ、街市を繞つて叫んで云く、「隨ふ

て第四日に至つて人の隨ひ看る無し。獨り城外に出でゝ棺内に入つて、路行の人を倩つて之に釘す。

❶普化、一日街市の中に於て、人皆之を見ふ、人皆之を棄てゝ院主なし。師、より來る、爾知らんと要すや、且くは他に問取せよ。徑山五百の衆、太半分散す。

❶普化、一日街市の中に於て、人に就いて直ちに山に問ふ、「這の僧適來什麽の言句有つてか便ち和尚を喝す。」徑山云く、「這の僧、黃蘗の會裡、尋いで僧あり、徑山口を開かんと擬す。師便ち拂袖して便ち行く。徑山方に下つて、師便ち喝す。徑山口を開かんと擬す。師、彼に到つて法堂に上つて、目ら方便あり。❷師、徑山に到る、裝ひ了つて、復た徑山に到つて作麽生。」師云く、「某甲

㈠行錄

㈡師初め黃檗の會下に在つて、行業純一なり。㈢首座乃ち歎じて曰く、「是れ後生なりと雖も、衆と異なることあり。」遂に問ふ、「上座此にあること多少の時ぞ。」師云く、「三年。」首座云く、「曾て參問すや也た無や。」師云く、「曾て參問せず、知らず个の什麼をか問はん。」首座云く、「汝何ぞ去つて堂頭和尙に問はざる、如何なるか是れ佛法㈣的々の大意と。」師便ち去つて問ふ、聲未だ絕えざるに、黃檗便ち打す、師下り來る。首座云く、「問話作麼生。」師云く、「某甲、問聲未だ絕たざるに、和尙便ち打す、某甲會せず。」首座云く、「但だ㈤更に去つて問へ。」師又去つて問ふ、黃檗又打す、是の如く三度問を發して、三度打せらる。師來つて首座に白して云く、「幸に慈悲を蒙りて、某甲をして和尙に問訊せしむ、三度問を發して、三度打せらる。自ら恨む、㈥障緣あつて深旨を領せざることを。今且く㈦辭し去らん。」首座云く、「汝若し去らん時は、須らく和尙を辭して去るべし。」師禮拜して退く、

㈠行錄。行狀實錄なり、臨濟の平生の作略をしるす。
㈡師初云々。行業は行道の義、純一は他事に渉らざるなり。師の一代の作用を見るべし。
㈢首座歎曰。首座とは黃檗の法嗣臨濟睦州道蹤尊宿なり、首座とは大衆の上座をいふ。師子はうまれつき師子の意氣ありと、稱歎しほむるなり。
㈣的々は明見なり、詳明なり、實なり、的要の處を指すなり、正鵠なり。去問とはなほもまねりて問ひ申せよと云へり。
㈤更の字はかされてと云ふ義。
㈥障緣。業障が深くして悟らざるなり。
㈦辭去。御いとま申して行脚せ

首座先づ和尙の處に到つて云く、「問話底の後生、甚だ是れ㈧如法なり、若し來つて辭せん時は、方便して㈨他を接せよ、向後㈩穿鑿して一株の㈪大樹と成さば、天下の人の與に㈫蔭凉と作り去ること在らん。」師去つて辭す、黃檗云く、「別處に往き去ることを得ざれ、汝高安灘頭㈬大愚の處に向つて去れ、必ず汝が爲に說かん。」師大愚に到る、大愚問ふ、「什麼の處よりか來る。」師云く、「黃檗の處より來る。」大愚云く、「黃檗何の言句か有りし。」師云く、「某甲、三度佛法的々の大意を問うて三度打せらる、知らず某甲過ありや過無しや。」大愚云く、「黃檗與麼に老婆なり、汝が爲に㈭徹困なることを得たり、更に這裏に來つて、有過か無過かと問へ。」師言下に大悟して云く、「元來黃檗の佛法㈯多子無し。」大愚㈰搊住して云く、「這の尿牀の鬼子、㈱適來は有過か無過かと道ふ、如今は却つて道ふ、黃檗の佛法多子無しと、儞箇の什麼の道理をか見る、速かに道へ速かに道へ。」師大愚の脇下に於て築くこと三拳、大愚托開して云く、「㈲汝が師は黃檗なり、我が事に干るに非ず。」師大愚を辭して黃檗に卻回す、黃檗來るを見て便ち問ふ、「這の漢㈳來々去々して什麼の了期か有らん。」師云く、「祇だ㈴老婆心切なるが爲なんと云へり。

㈧如法。是れは如法如律なる義、初は如法如律なるものが悟りて活手段を具へたがよきなり。
㈨他は臨濟をいふ。
㈩穿鑿はよく鍛鍊してなり。
㈪大樹。大宗師となさばと云ふ義。
㈫蔭凉。諸人の熱惱を除いて清凉を得さしめんとなり。
㈬大愚。山の名、瑞州高安にあり。歸宗智常の法嗣なり。
㈭徹困。丁寧のこと、慈悲深切なると云へり。
㈯無多子。さしたることはないぞと云へり。
㈰搊住。とらへとむるなり。築三拳とは悟徹の活手段を取り出して振舞ふなり。
㈱適來。さきにはと云ふ義。
㈲汝が師。托開して、汝が師は黃檗なりと云へり。此の一小

り。」便ち㋓人事し了つて侍立す。黃檗問ふ、「什麼の處にか去來する。」師云く、「㋔昨、慈旨を奉じて大愚に參じて去來せしむ。」黃檗云く、「大愚何の言句か有りし。」㋕師遂に前話を擧す、黃檗云く、「作麼生か㋖這の漢の來ることを得ん、待つて痛く㋗一頓を與へん。」師云く、「什麼の來るを待つとか說かん、卽今便ち喫せよ」といつて、後に隨つて㋘便ち掌す。黃檗云く、「這の風顚漢却つて這裏に來つて虎鬚を捋づ。」師便ち喝す、黃檗云く、「侍者這の風顚漢を引いて㋙參堂し去らしめよ。」後に潙山、此の話を擧して仰山に問ふ、「臨濟、當時大愚の力を得るか、黃檗の力を得るか。」仰山云く、「但だ㋚虎頭に騎るのみに非ず、亦㋛虎尾を把ることを解す。」

師松を栽うる次で、黃檗問ふ、「深山裡に許多

節は臨濟、大悟の因由を錄す。

㋒來々去々。そのやうにあなたこなた去來したばかりではいつ悟らうぞと云へり。これもかく云ふてすこしは探り試みたる機なり。

㋓老婆心切。おとなしやかに仰せられて殊勝なりと。

㋔人事了。禮話をして後と云ふ義。

㋕昨奉慈旨。昨とは必ずきなふと云ふに非ず、過ぎこしかたなり。

㋕師遂。遂の字、始めから擧すならんと思つて侍したるほどに、遂に擧せりと云へり。

㋖這漢。大愚をさす。

㋗一頓。二十棒を與へんとなり。

㋘便掌。古人云く、「臨濟打爺の拳なり。」卽今和尙喫せよと、無用の事を云ふて、人を敎壞することは先づ和尙でこそあれと云ふて、便ち掌した。

㋙參堂去。掛搭させよと、僧堂の中へ入れて位を定めよとなり。參暇とも云ふ、こゝまでは臨濟の機用を錄す。

㋚虎頭。大愚をさす。

㋛虎尾。黃檗をさす、この仰山の答話は殊勝なり。

㋜作什麼とは子細あり、句に參じて知るべし。

㋝境致は風景趣致なり。

㋞標榜とは表準、手本なり、又は法樣と云ふ、只だしるしなり。

㋟打地三下。大に子細ありとみえたり。三とは陽の數、是れ生の義、又正なり。

㋠噓噓。吾が三十棒を與へて接したればこそ其のやうなることを云へと。噓々はからうそつくなり、人を瞞じたる振舞なり。

㋡到汝興於世。印可なり、ちつ

を栽ゑて㋢什麼か作ん。」師云く、「一には山門の與に㋣境致と作し、二には後人の與に㋤標榜と作さん」と道ひ了つて、钁頭を將つて㋥地を打すること三下す。黃檗云く、「然も是の如くなりと雖も、子已に吾が三十棒を喫し了れり。」師又钁頭を以て地を打すること三下す、㋦噓々の聲を作す。黃檗云く、「吾が宗、㋧汝に到つて大いに世に興らん。」後に潙山此の語を擧して仰山に問ふ、「黃檗當時祇だ臨濟一人に囑するか、㋨更に人の有る在るか。」仰山云く、「有り、祇だ是れ㋩年代深遠なり、和尙に擧似せんことを欲せず。」潙山云く、「然も是の如くなりと雖も、吾れ亦知らんことを要す、汝但だ擧せよ看ん。」仰山云く、「㋪一人南を指して吳越に令行せん、大風に遇はゞ卽ち止まん。」(風穴和尙を讖するなり。)

師、德山に侍立する次で、山云く、「㋫今日困す。」師云く、「這の老漢㋬寐語して什麼か作ん。」山便ち打す、師、繩牀を㋭掀倒す、山便ち休す。

師、普請して地を鋤く次で、黃檗の來るを見て、鑊を拄へて立つ。黃檗云く、「㋮這の漢困する那。」師云く、「鑊も也た未だ擧せず、箇の什麼にか困せん。」黃檗便ち打す、師棒を接住して㋯一送に送倒す。黃檗、「維那維那、

とはやき印可なり。その故は半夏に黃檗山に上るの處に見えたり。

㋢更有人在。黃檗、臨濟ばかりで斷ゆべきか、相續するかと問ふなり。

㋣年代深遠。はるかに後の事なれば擧げ似すも無益なりと。

㋤一人指南。これは風穴和尙を讖するなりと添注あるも、妄注なり。風穴は南院の法嗣なり、臨濟より三傳の後なればこの本錄は三聖の集、興化の校也、豈に風穴を知らんや。讖は未來記なり、公然人名を指すべきにあらず、人の判斷に止まるなり。仰山人名を指さず、三聖豈に人名を記せんや。思ふべし或は風穴或は大慧なりとの說あり、首山は仰山の後身と研究すべし。止は至極の義、休歇の義、定るの義もありとの說あり。

我れを扶起せよ」と喚ぶ。(ヒ)維那近前して扶けて云く、「和尚爭か這の風顛漢の(モ)無禮なるを容し得ん。」黃檗纔に起つて便ち維那を打す、師地を钁して云く、「(セ)諸方は火葬なり、我が這裏は一時に活埋せん。」後に溈山、仰山に問ふ、「黃檗維那を打す、意作麼生。」仰山云く、「(ス)正賊走却して、邏蹤の人棒を喫す。」

師一日、僧堂前に在つて坐す、黃檗の來るを見て、便ち(イ)目を閉却す。黃檗乃ち(ロ)怖るゝ勢を作して方丈に歸る、師隨つて方丈に至つて禮謝す。(ハ)首座、黃檗の處に在つて侍立す、黃檗云く、「此の僧是れ後生なりと雖も、却つて此の事有ることを知る。」首座云く、「老和尚、脚跟地に點せず、却つて箇の後生を(ニ)證據す。」黃檗自ら口上に於て打すること(ホ)一摑す。首座云く、「(ヘ)知らば卽ち得てん。」

師、堂中に在つて睡る、黃檗下り來つて見て、拄杖を以て(ト)板頭を打すること一下す。師(チ)頭を擧げて是れ黃檗なることを見て却つて睡る、黃檗又板頭を打すること一下す。卻つて(リ)上間に往いて首座の坐禪するを見て、乃ち云く、「下間の後生卻つて坐禪す、汝這裏に(ヌ)妄想して什麼か作ん。」首座云く、「這の老漢什麼をか作す。」黃檗板頭を打すること一下して便ち出で去る。後に溈山、仰山に問ふ、「黃檗、僧堂に入る意作麼生。」仰山云く、「(ル)兩彩一賽。」

師一日普請する次で、師後へに在つて行く、黃檗頭を回して師の空手なるを見て、乃ち問ふ、「钁頭什麼の處にか在る。」師云く、「(ヲ)一人有つて將ち去り了れり。」黃檗云く、「近前來、汝と共に箇の事を商量せん。」師便ち近前す、黃檗、钁頭を竪起して云く、「祇だ這箇の天下の人(ワ)拈掇不起。」師(カ)手に就いて掣し得て竪起して云く、「什麼としてか却つて某甲が手裏に在る。」黃檗云く、「(ヨ)今日大いに人有つて普請す」といつて便ち院に歸る。後に溈山、仰山に問ふ、「钁頭、黃檗の手裏に在り、什麼としてか却つて臨濟に

(ユ)今日困す とはくたびれてござると。
(メ)寐語。ねごとしてなにかせんと。
(ミ)攧倒。縄床をおしうごかした。これは水は瀟湘に到りて一様に清きの境界なり。
(シ)這漢困那。おまへはくたびれたかと。
(エ)一送送倒。とらへてつきたふすなり。
(ヒ)維那。次第と翻す、僧事の次第を知ればなり、悅衆又は知事と云ふ。
(モ)無禮。いづれもかやうに無禮に候ふほどに御ゆるしあらふかと。
(セ)諸方火葬。維那を打ちたるは師を打ちたるなり。故に地をすいて諸方は火葬もせよ、我れは黃檗をいけ埋にせんと云へり。大に子細あり、參じて知るべし。

(ス)正賊走却。盜人はにげたればあとをつく人が棒を喫したといへり。正賊は臨濟、邏蹤は維那を云ふ。
(イ)閉却目。人を漫ずるの貌。
(ロ)作怖勢。うそいねむりしたるやうとみておそるるなり。
(ハ)首座。睦州なり。
(ニ)證據。印可の義。
(ホ)打一摑。手のわきにて我が口を打ち、後悔したる底をしたと。
(ヘ)知卽得。知らば卽ち得てんと云ふ時は、ちつと抑揚あり、しらぬとひゞく。又知ることは卽ち得たりといふときは、ほめたるまでなり、この兩點あり、黃檗も首座をほめたるまでなり。首座の二字或はあやまり乎との說あり。
(ト)板頭。下間の長連床の版睡をさまさうとしたるやうの義、或抄又打草驚蛇の意もあり。或抄に板頭は「はんとう」とよみて然るべし。その故は僧堂の床がまちの板なり。「ハンザウ」とよめば飯頭とまぎれ、あしきか。頭の字はなにゝもそふるなり、只だ板のことならばなほのことなり。
(チ)擧頭。そらねむりをまだもして居ること。
(リ)上間。本尊の佛像のある左邊則ち東廊の方を云ふ。
(ヌ)妄想作什麼。睡るならば坐禪すと云ふて、坐禪するならば妄想すと云ひたり。大に子細あり、句に參ずべし。
(ル)兩彩一賽。首座と臨濟とが一つといふ義なり。又は賓主の上を云ふ故に、黃檗は主なり、首座は賓なり、首座を一方にとり、檗を二方に取るなり、是れがよき歟。或抄に「臨濟は瞌睡し首座は坐禪す、是れ兩賽、其の用心實は卽ち一也、

奪却せらる。」仰山云く、「(ノ)賊は是れ小人、智、君子に過ぎたり。」

師、黄檗の爲に(レ)書を馳せて溈山に去る、時に仰山(ソ)知客と作る、書を接得して便ち問ふ、「(ツ)這箇は是れ黄檗底、那箇は是れ專使底。」師便ち掌す。仰山(ネ)約住して云く、「(ナ)老兄是れ般の事を知らば (ラ)便ち休せよ。」同じく去つて溈山に見ゆ、溈山便ち問ふ、「黄檗師兄、多少の衆ぞ。」師云く、「七百衆。」溈山云く、「(ム)什麼人か導首たる。」師云く、「(ウ)適來已に書を達し了れり。」師却つて溈山に問ふ、「和尚此間多少衆ぞ。」溈山云く、「一千五百衆。」師云く、「(ヰ)太多生。」溈山云く、「黄檗師兄も亦少からず。」師溈山を辭す、仰山送り出して云く、「(ノ)汝向後北に去らば、箇の住處有らん。」師云く、「(オ)豈に與麼の事あらんや。」仰山云く、「但だ去れ、(ク)已後に一人有つて老兄を佐輔すること在らん。此の人祇だ是れ(ヤ)頭有つて尾無く、始有つて終無けん。」師後に(マ)鎭州に到る、普化已に彼の中に在り、師出世すれば(ケ)普化、師を佐賛す。師、住すること未だ久しからざるに、普化(フ)全身脫去す。

師因に半夏、黄檗に上る、(コ)和尚の看經するを見て、師云く、「我れ將に謂へり、是れ箇の人、元來是れ(エ)揩黒豆の老和尚と。」住すること數日にして乃ち辭し去る。黄檗云く、「汝夏を破つて來り、(テ)夏を終へずして去る。」師云く、「某甲(ア)暫く來つて和尚を禮拜す。」黄檗遂に(サ)打つて趁うて去らしむ。師行くこと數里、此の事を疑つて(キ)却回して夏を終ふ。(ユ)師一日黄檗を辭す、檗問ふ、「什麼の處にか去る。」師云く、「(メ)是れ河南

つて、溈山へ行きたるなり。

(ノ)知客。支那の禪刹にては隨分の人がするなり、山門の公界の客人を接する友なり、日本の用ひ方はかはれり。南浦は徑山の知客たり、仰山も溈山の知客たり。

(ツ)這箇は專使底、那箇は黄檗底と。檗の書を請け取りて、是れは黄檗底なり、御使はかやうなる人ぞと問ふ。これも至る處此の事を商量する故なり。

(ネ)約住。手をむづとつかまへること、又とりとゞむるなり。

(ナ)老兄。臨濟をほめていふ。

(ラ)便休せよ。まうこれまでの事を知つたよと云つて休す。又まうなほ仰せられうぞと云ふ。

(ム)什麼人。七百人の内に誰が首座であるぞ、後には誰が長老なるべきぞと云ふ。

(ウ)適來已書。さきに書をまゐらせたる者、こそ導首ぞと。

(ヰ)太多生。たくさんなりと。

(ノ)汝向後。仰山は神通力がありて、未來のことをよく知りたる人なりと、師を識して云へり。

(オ)豈與麼事。卑下して我等ごとき者が、なにが住處などがあらうぞと云ふこと。

(ク)已後有一人。普化を云ふ、佐輔はたすくべしと云ふ。普化は師の道を弘めんためにそらものぐるひをして回りたりとなり。

(ヤ)有頭無尾。師に先に死すべし。

(マ)鎭州は河北にして、臨濟鎭院のありし所、與化寺は河南なり。

(ケ)普化佐賛。諸方に行きて臨濟は大明眼の人なり、弟子になれ、相見せよなどと云ふてあるくなり。

(フ)全身脫去。そのまゝ空中へ去りたり。

(コ)和尚看經。折節用ありて看經せられしか。別に子細あり、參得して知るべし。

(エ)揩黒豆。くろまめ數ふる老和尚なり、或は文字にひたさるるの義。揩「ひろふ、かぞふ」なり。或抄に、「師は六十棒の下にて、三世の諸佛、歷代の祖師の體裁ある故に、悟りたれども黄檗の看經の處にては空闕があるなり。」畢竟看經を斥していふ。

(テ)不終夏去。七日は逗留していとま申して行くなり。

(ア)暫。「あからさまに」なり、此れも師の不足なり。

(サ)打趁令去。眞實とがあるかなみて打たん。こゝに逢に打すとしたるは妙處なり。

(キ)却回終。大利根なる人なり、散にさては心得て中途よりかへ

にあらずんば便ち河北に歸せん。」㊂黃檗便ち打す、師㊁約住して一掌を與ふ。㊀黃檗大笑して乃ち侍者を喚ぶ、「百丈先師の㊄禪版机案を將ち來れ。」師云く、「㊆侍者火を將ち來れ。」黃檗云く、「然も是の如くなりと雖も、㊇汝但だ將ち去れ、已後㊀天下の人の舌頭を坐却し去ること在らん。」後に潙山、仰山に問ふ、「臨濟他の黃檗に㊃辜負すること無しや也た無や。」仰山云く、「然らず。」潙山云く、「子又作麼生。」仰山云く、「㊈恩を知つては方に恩を報ずることを解す。」潙山云く、「從上の古人還つて㊅相似底ありや也た無や。」仰山云く、「有り、祇だ是れ㊂年代深遠なり、和尙に擧似せんことを欲せず。」潙山云く、「然も是の如くなりと雖も、吾れも亦知らんことを要す、子但だ擧せよ看ん。」仰山云く、「祇だ㊋楞嚴會に與へん、持ち來れと也。百丈は黃檗には禪板几案を、潙山には拄杖、拂子を印可の支證として與へらる。禪板も几案もよりかゝりて睡る具足なり、臨濟は正傳の的孫なり。㊆侍者將火來。これはやいてすつるべしと云ふ。言ろはなんの禪板几案などは印可の支證にならうぞとなり。㊇汝但將去。黃檗はさやういはれた、只だもち去れと。是れを支證にして人を接せば、天下のものは兎角是非することはあるまいぞと。㊀天下の人の舌頭を切斷すべきなり。坐却すとは天下の人に口をあかせまいとの義。「なる」の義。㊃辜負。侍者火を將ち來れと云ひたるは、辜負にてはなきかと云へり。㊈知ル恩方報。報恩底は諸方に

りきたりて夏を終ふるなり。㊁師一日辭。これは前に住すること數日、乃ち辭し去ると云ふのとは大に替れり。却回して夏を終へ、後首尾そろふて黃檗を辭するなり。別に子細あり。㊅是河南便。是れも前に暫來禮ニ拜和尙一といふとは大にかはれり、字面に付いてみるべからず。本錄に見ゆ。㊂黃檗便打。賞棒なり、答へたる處を知りて打すと書す。前に遂に打すとしたるとは大に替れり。㊂約住一掌。とらへてびつしやりとやつた。㊀黃檗大笑。悅喜して笑はれたり、師を接しすましたと思ふて歡喜して咲ふなり。㊄禪板几案。百丈禪師より黃檗へ印可の支證に與へられたる禪版几案を、師に印可の支證

上に阿難、佛を讃して、此の深心を將つて塵刹に奉せんと云ふが如きんば、是れ則ち名けて佛恩を報ずと爲すと、豈に是れ報恩の事にあらずや。」潙山云く、「㊇如是如是。㊈見、師と齊しうして、師に半德を減ず、見、師に過ぎて方に傳授するに堪へたり。」

師、㊆達磨の塔頭に到る。塔主云く、「長老先づ佛を禮せんか、先づ祖を禮せんか。」師云く、「佛祖ともに禮せず。」塔主云く、「佛祖と長老と是れ㊉什麼の寃家ぞ。」師便ち拂袖して出づ。

師行脚の時、㊁龍光に到る、光上堂す、師出でゝ問ふ、「㊋鋒鉾を展べず、如何が勝つことを得ん。」㊂光據坐す、師云く、「大善知識、㊐豈に方便無からんや。」㊎光瞪目して云く、「嘎。」師手を以て指して云く、「這の老漢、㊀今日敗闕せり。」

參じて看よと。燒却の處が眞實報恩底なりと。

㊅有相似底。昔からの古人に火を將ち來れと云ひたるに、あひ似たることがさうかと云へり。

㊂年代深遠。過ぎ去りて久しきことを云ふ。

㊍楞嚴會上。阿難が佛を讃してなり。佛法を以て塵々刹々にひろむると云ふの義なり。

㊇如是如是。まづさうにてありと肯ひたる語なり。

㊈見師齊。これは師をほめて潙山の云はれしなり、師の見地黃檗に過ぎたるを云ふ、一器の水を一器に寫すと云ふと同一なり。

㊆達磨塔頭。達磨大師の傳は之を略す、これは熊耳峰の少林寺は達磨の塔處なれば、その塔主いふなり。長老とは臨濟を敬していふ。先づ佛を禮拜せんか、先づ祖師を禮拜せんかと。祖師とは達磨を云ふ。

㊉什麼寃家。佛祖はなにとてあだかたきなりと云ふて、佛祖俱に禮せずと云ふ處を會せずして、此の如く又問ひたるなり。拂袖は座敷をけたてゝ去る意なり。

㊁龍光は馬祖下の尊宿なり、傳未詳。

㊋不展鋒鉾。凡そほこさきを合せてこそ勝負は決するに、鋒鉾を展べずして勝たんと問ひたるはおそろしき問なり。

㊎光據坐。居なほりたる底なり。これ無語なりといへども、其の聲雷の如きなり。

㊐豈無方便。おそろしき問ひなり、大に子細あり。ものも云はずして據坐したるゆゑに、なに事も仰せられぬは、方便を缺きたりと云ふ。

㊎光瞪目云嘎。瞪目とは目をみ

㋟三峯に到る、平和尚問ふ、「什麼の處よりか來る。」師云く、「黄檗より來る。」平云く、「黄檗何の言句かある。」師云く、「㋹金牛昨夜㋞塗炭に遇ふ、直に如今に至るまで蹤を見ず。」平云く、「㋡金風玉管を吹く、那箇か是れ知音。」師云く、「㋧直に萬重の關を透つて、清霄の内に住らず。」平云く、「子が這の一問㋤太高生。」師云く、「龍㋶金鳳子を生じて碧瑠璃を衝破す。」平云く、「㋰且坐喫茶。」又問ふ、「㋒近離甚れの處ぞ。」師云く、「龍光。」平云く、「龍光近日如何。」師便ち出で去る。

㋼大慈に到る、慈、方丈の内に在つて坐す。師問ふ、「丈室に端居する時如何。」慈云く、「㋨寒松一色千年別なり、㋔野老華を拈す萬國の春。」師云く、「㋗今古永く超ゆ圓智の體、㋳三山鎖斷す㋮萬重の關。」㋘慈便ち喝す、師亦喝す。㋫慈云く、「作麼。」㋙師拂袖して便ち去る。

襄州の㋓華嚴に到㋢る、嚴、拄杖に倚つて睡る勢を作す。師云く、「老和尚、㋐瞌睡して作麼かせん。」嚴云く、「作家の禪客、㋚宛爾として同じからず。」師云く、「㋖侍者、茶を點じ來つて、和尚に與へて喫せしめよ。」嚴乃ち維那を喚ぶ、「㋴第三位に

はつてなる貌、嗄は幼きものおびえてわつとなく聲なり、驚きたる貌。

㋵今日敗闕。さのみ敗闕はない、抑揚して云へり。

㋟到三峯。三峰平は未だ師承を詳にせず。

㋹金牛昨夜。金牛とは昔し蜀と中國と不通なりしとき、中國より蜀の國を平げんとて、謀に鐵にて牛を鑄て蜀と中國の山中に置きて、此の牛なば金を糞にすると云ふ雑説を風聞す、その比、蜀に五丁力士とて大力の者あり、行きて此の鐵の牛を蜀へ取る、その時始めて路出來たり、その路より蜀へせめ入りたり。金を糞にする故金牛と名づく。是れは本據なり、鐵牛と云ふも好し。

㋞塗炭。塗は泥なり、炭は火なり、金牛が塗炭に遭ふたならば、蹤迹はあるまいぞ。平の何の言が在ると問ひたるゆゑに、何の言句と云ふことがあるべきぞ、蹤迹もなきぞと云ふ意なり。

㋡金風玉管。是れは少し師に抑下せられて、平の點胸して云へり。金風は秋の風、秋は金がつかさどるなり、玉管は結構なる笛といふ義。言ろは秋風の面白き時節に、五管を吹くなば誰が知音としてきかうぞ、えきくまいぞと。臨濟を抑下のやうに云ひたり。されどもそこは知音にしてぞ。

㋧直透萬重。これは臨濟の點胸なり、平に抑下せられて、おどされて居るべきにあらずと思ふて云へり。吾れは萬重の關を透り、青霄にも住まらざるものぞと、自負せり。古人云く、「是れ文殊、普賢の境界なり。」

㋤太高生。これも抑下の意也、余り御たかぶりなさるなと。

㋶龍生金鳳子。これも師の點胸なり。碧琉璃とは天をいふ、衝破はつきやぶるなり。言ろは龍金鳳子を生じて、天をもつき破るやうに、吾れは黄檗の的子にて隨分のものなる故に、世間の者をなんとも思はすといふ意なり。平のちつと抑下したるを當て〻師の自負なり。

㋰且坐喫茶。まあ御茶でもあがれと取めたり。少しおそろしき機あり、まうきこえました御茶をまゐれといふ。

㋒近離甚處。近頃どこに御いででしたか。

㋼到大慈。大慈山寰中禪師は百丈の法嗣なり、師の法叔也。長老になりて丈室に端居しては、學者を接し、衲僧を勘辨し、邪正を別たんがためなり、故にかくの如く問ひたるなり。丈室は方丈と同じ、端居は主位にきつとなほつてたることなり、是れも恐しき心なり。

㋨寒松一色。是れは大慈が吾がことを云へり、點胸なり、點胸は自負するを云ふ、我れと我がむねをさして、隨分と云ひたる義。言ろは寒松の不變にして千年萬年一色なるは、尋常の衆木に異なり、吾れこそ此の如く諸人にかはりたるものよと云へり。

㋔野老拈花。これは臨濟を抑下して云へり。田夫野人のながしき者なり。野の花のながしきを拈じて、在々處々に遊ぶと云へり、故に寒松は一色にして、千年萬年不變にして、ながしき花の色の咲きて、やがて散り薄るやうなるとは別なるぞと云へり。我れを托上し臨濟を抑下して云ふ。

㋗今古永超。此の一對は師の自負なり、互に他を抑し我れを托上しあひたる問答なり。言ろは圓智體とは教の極位也、本分を云ふ、師の面前には圓智の體をも超越したると云へり、超佛越祖と云ふに同じ、圓智體とは教には如來地を云へり。智圓は四智の中なり、餘の平等妙觀成所の各智を大圓鏡智に兼ぬるなり。

㋳三山。蓬萊、方丈、瀛洲の三仙境。又三山を以法報應の三身に比し、以て大慈に贈るも宜べなり。

㋮萬重關を鎖斷して、凡聖をも通ぜずと云ふに同じ。底意は我れは超佛越祖の手段が在る故に、そなたのやうなるながしき者をば、よせつけぬぞと云へり。得よりつくまいぞともひ〻くなり。

㋘慈便喝師。拳し來れば踢なも

這の上座を安排せよ」と。

㋐翠峯に到る、峯問ふ、「甚れの處より來る。」師云く、「黃檗より來る。」峯云く、「黃檗何の言句有つてか人に指示する。」師云く、「黃檗に言句無し。」峯云く、「什麼としてか無き。」師云く、「㋑設し有るも亦擧する處なし。」峯云く、「㋒但だ擧せよ看ん。」師云く、「㋓一箭西天を過ぐ。」

つて報ずるの境界なり。

㋐慈云作麼。いかんと云ふ義、又なにと云ふ義。慈の少しまけぎみになり、さのみ惡しきにてはなし、作麼と云ひたるも、衲僧の機を含んで問ひたる故に、さのみ不可はなけれども、少し受け太刀になりてみえたり。譬へばいさかひをするに、兩方おひつめた後に、なぜにおれをば斬りたるぞなどと咎めたるが如し、空闕あるかと思ふ。

㋑師拂袖去。座敷をけたてたるが如きを云ふ、能く陣ばらひをして去りたり。作麼は即ち大慈が臨濟を探驗す、拂袖は即ち臨濟の超越底なり。

㋒華嚴。馬祖下の華嚴智藏禪師か。

㋓作睡勢。そらねむり。睡虎の如し、恐しき底なり。

㋔瞎睡什麼。よく問ふた、めくらねむり眠りになにかせんとのこと。大に子細あり。

㋕宛爾不同。師をば托上して、宛爾は分明の義、不同は諸人と不同とほめたところ。宛爾は依然なり。

㋖侍者點茶。これはねごとを仰せらるゝに、茶をのませて目を醒ませよと云へり。托上せられてあがるべきにあらず、故に抑下す。此の語は瞎睡の處にもひゞき、作麼せんにもひゞく。されども多くは作家と云ふに同じ。

㋗第三位安排。臨濟を賞翫して掛搭をゆるすなり。三位は後堂の位なり、その時は前堂、後堂なり、又書記をも云へり、その時は首座、後堂、書記なり。又僧堂鉢位は、一位は前堂、二位は西堂、三位は後堂、四位は立僧なり。排は列なり、安置なり。

㋘翠峰。師承未詳なり、この則は師に占領せられて、翠峰に見るべきなしと云ふ。

㋙設有亦擧。言句がたとひ有るとも、擧して誰にきかせうぞと云へり。句中にあたる。

㋚但擧看。平平なるやうなれども句中あり。

㋛一箭過西天。權實あり、看箭といふ境界もそなはる、參じて知るべし。或抄に云く、「此の一路索は權實分明なり。」或抄に云く、「若し黃白を知らんと欲せば、佛法白雲萬里なり」と。

㋜到象田。象田は師承未詳なり、この則も前より甚だしと云ふ。

㋝請師速道。尋常これ凡か是れ聖かなどとこそ問ふに、珍問だぞと。

㋞祇與麼。我れもまづさうと云へり、作家分上には大いに不

㋟象田に到る、師問ふ、「凡にあらず聖にあらず、㋠請ふ師速かに道へ。」田云く、「老僧㋡祇だ與麼。」師便ち喝して云く、「㋢許多の禿子、這裏に在つて㋣什麼の椀をか覓めん。」

㋤明化に到る、化問ふ、「來々去々して什麼をか作す。」師云く、「㋥祇だ徒らに草鞋を踏破す。」化云く、「㋦畢竟作麼生。」師云く、「老漢㋧話頭も也た識らず。」

㋨鳳林に往く、路に一婆に逢ふ、婆問ふ、「甚れの處にか去る。」師云く、「鳳林に去る。」婆云く、「㋩恰も鳳林の在らざるに値ふ。」師云く、「甚れの處にか去る。」㋪婆便ち行く、師乃ち「婆」と喚ぶ、㋫婆頭を回す、師便ち打す。

鳳林に到る、林問ふ、「㋬事有り、相借問し得てんや。」師「云何ぞ㋭肉を剜つて瘡を作すことを

足なり。或抄に、「よい老僧哉」と。

㋠許多禿子。惡知識の處、めくら僧どもが多くあつまりゐて、いたづらくるひをするよと云へり。象田のことは沙汰の限りなり、會下の僧どもを罵るなり。

㋣覓什麼椀。唐の世話に、人の處へ入りて家の內を見まはして目をきよろ〳〵するが如きを不二是什麼一と云へり。必ず椀に用處なし、日本に「なんのへちまの皮をもとむる」などと云ふが如し。又いたづらに粥飯を費すと云ふ義、閑家具なりと。門下の徒衆の不具眼を罵るなり。

㋤到明化。明化も師承未詳なり、この則も可もなく不可もなしと云ふ。

㋥祇徒踏破草鞋。無用の處へ來て、草鞋錢をつひやしたと云へり。明化の衲僧の手段なきを云ふて抑下す。

㋦畢竟作麼生。再問なほ不足なり。

㋧話頭也。老僧はものゝ云ひ樣もしらぬと抑下が托上なり。

㋨往鳳林。鳳林も師承未詳なり、この婆子は臺山の婆子に似たり。

㋩恰値鳳林。留守にて候ふぞと云ふ。師云く、甚の處にか去ると、こゝまでは尋常の婆子と心得たゆゑ、平平に答へたり。婆は始よりこはもので、毒氣を含んで問へり。

㋪婆便行。此にて婆が句中にあらはれたり。師乃ち婆と喚ぶとは便ち行く處にて、さてはせられたよと思ふて、喚びかへしたるなり。

㋫婆回頭。此れが婆のをちどなり、誰が不在といふたぞと。「こゝで無言にして走つたな

得ん。」林云く、「(ヲ)海月澄んで影無く、(ワ)游魚獨り自ら迷ふ。」師云く、「海月既に影無ければ、游魚何ぞ迷ふことを得ん。」鳳林云く、「(カ)風を觀て浪の起るを知り、(ヨ)水を翫んで野帆颺る。」師云く、「(タ)孤輪獨り照して江山靜なり、自ら笑ふ一聲天地驚く。」林云く、「(レ)任ひ三寸を將つて天地を齊すも、一句機に臨んで試に道へ看ん。」師云く、「(ソ)路に劍客に逢はゞ須らく劍を呈すべし、是れ詩人にあらずんば、詩を獻ずること莫れ。」(ツ)鳳林便ち休す。(ネ)師乃ち頌あり、「大道同を絕す、西東に向ふに任す、(ナ)石火も及ぶこと莫く、電光も通ずること罔し。」濟山、仰山に問ふ、「石火も及ぶこと莫く、電光も通ずること罔くんば、(ラ)從上の諸聖什麼を將つてか人の爲にせん。」仰山云く、「和尙の意作麼生。」濟山云く、

一〇〇

らばよかりしものを」と或抄に云へり。

(ヨ)水。小流のをかしきを翫べば、舟の帆がひるがへると云へり。水といふも野帆と云ふも、師を指して云ふ、野はいやしきといふ義なり。

(タ)孤輪獨照。これは二句とも師の我を托上して云へり。抑下せらるれば托上して我が境界をば月の江山を照して明かなるが如き也、我が笑ふ聲には天地も驚くべしと、自負して云へり。孤輪は月なり、この獨照なる境界から、何事を笑ふたぞ、すこし鳳林を瞞着して笑ふたとみえたり。天下に二人とはなし、吾れこそあれと自負したる意あり、故に高笑をして諸方を呑み切りたるなり。

(レ)任將三寸。口がましく物を云ふて輝すとも、我が前にて一句得云ふまいぞと云へり、抑

「但だ言說有つて都て寔義無し。」仰山云く、「然らず。」濟山云く、「子又作麼生。」仰山云く、「(ム)官には針をも容れず、私に車馬を通す。」

(ウ)金牛に到る、牛、師の來るを見て、橫に拄杖を按じて、門に當つて(ヰ)踞坐す。師手を以て拄杖を敲くこと三下して、却つて堂中に歸して(ノ)第一位に坐す。牛下り來つて、見て乃

下なり。三寸は昔し裴敬といふ人、三寸の舌を掉つて不拔の策を建つと云へり、車の輒(コヨギ)のぬけたるを觸れずして、言を以て留めたり、是より後舌を三寸といふと。

(ヰ)踞坐。是れも鳳林を抑下するの意なり。劍をよく使ふ武士に逢ふてこそ、劍は呈せられうぞ、さなきものに劍を呈しては、什麼の用ぞ、詩人こそ詩をば獻ずべけれ詩を知らぬものに獻じてはとなり。

(ノ)林便休。收めたるなり。此れにて這れ般の事を知らば、便ち休せよと云ふて、休したらばよかるべし。此の一絡索は衲僧の遊戲三昧なり。

(ネ)師乃有頌。大道の上には同別などと云ふことあらず、自由自在の義なり、本分を頌す。

(ナ)石火莫及。是れも本分なり、偈は四句ともに本分を頌す、

その意は衲僧の機關問答と云ふも、盡く本分上に足、實地を踏むの振舞なり。

(ラ)從上諸聖。言ろは石火も及ぶことなきの田地に至りては言句と云ふともあるべからず、爲すべきこともあるまいと云ふ。或抄に「只だ言說では是の如く云ふたれども、眞實は其の樣にはあるまい」と也。

(ム)官不容針。權實そなはりたる句なり、參すべし。石火莫及、電光罔通とは把住なり、官不容針義なり。又棒を行じ喝を行じ、慈悲の爲に力を盡すは放行なり、私通車馬なり。公方官には針ほどの物をも私には入れぬ、とりもせぬ、されども私にては車馬にても通すべきなり。官には無私の義。臨濟あるときは放行して、人の爲めには、此れ卽ち私通車馬一處なり。

(ク)到金牛。金牛は鎭州金牛和尙、馬祖に嗣ぐ。古抄に「兩箇共に賊なり」と。陷虎の機あり。

(ヰ)踞坐。拄杖を橫においてどつかと坐す、一關を設くるなり。

(ノ)第一位。前堂の位なり。法戰一場してさつさと機前の一句をやつてのけた。

(オ)夫資主相見。大無禮生であるぞと皆めて見た。

(ク)老和尙道。直に關鍵を設くる機を奪却するなり。

(ヤ)今日。着便。この語は金牛ならばこそなり、人我を存するものにはこの語あるまじ」と古抄にあり。眞に戰に慣ふ作家なり、言中有響なり。

(マ)勝卽總勝。勝たば二人ともに勝ち、負ければ二人ともに負くべしと。勝も亦是、負くるも亦是なり、這の法戰一場優劣なしと褒美せられたるなり。

(ケ)據坐。上堂なり、一寸坐わり

ち問ふ、「㋐夫れ賓主の相見は各〳〵威儀を具す、上座何れより來つてか、太だ無禮生なる。」師云く、「㋑老和尙什麼と道ふぞ。」牛、口を開かんと擬す、師便ち打す。牛倒るゝ勢を作す。師又打す。牛云く、「㋒今日便を著ず。」潙山、仰山に問ふ、「此の二尊宿還つて勝負ありや也た無や。」仰山云く、「㋓勝つときは卽ち總に勝ち、負くるときは卽ち總に負く。」

師遷化に臨む時、㋔坐に據つて云く、「吾が滅後、吾が正法眼藏を滅却することを得ざれ。」三聖出でて云く、「爭か敢て和尙の正法眼藏を滅却せん。」師云く、「已後人有つて儞に問はゞ、他に向つて什麼とか道はん。」三聖便ち喝す。師云く、「誰か知る、吾が正法眼藏、這の㋕瞎驢邊に向つて滅卻することを。」言ひ訖つて㋖端然として寂を示す。

直すの體。

㋒瞎驢邊とは三聖を云ふ。正法眼藏は他の卷に見ゆ、之れを略す。臨濟は世尊より三十八世の正統なり、此の滅却といふ語によりて、臨濟今に正宗があるなり。

㋖端然示寂。端坐して遷化せらる。師は後に大名府興化寺の東堂に居して咸通八年丁亥四月十日示滅せんとし、乃し傳法の偈を說いて曰く、「沿流不止問如何、眞照無邊說似他、離相離名如不稟、吹毛用了急須磨」と。已上は三聖慧然の所集の語錄なり。

略傳

㋑師、諱は義玄、㋺曹州南華の人なり。俗姓は邢氏、幼にして㋩穎異なり。長じて孝を以て聞ゆ。落髮㋥受具するに及んで㋭講肆に居り、精しく㋬毗尼を究め、博く經論を頤る。俄に歎じて曰く、「此れ㋮濟世の醫方なり、敎外別傳の旨に非ず」といつて、卽ち㋯衣を更へて遊方す。首め黃檗に參じ、次に大愚に謁す、其の機緣語句、行錄に載せたり。既に黃檗の印可を受けて尋いで河北に抵る。鎭州城の東南の隅、滹沱河の側に臨んで小院に住持す。其れ臨濟は地に因つて名を得たり。時に普化先づ彼に在つて、佯狂として衆に混ず、聖凡測ること莫し。師至れ

㋑已下は保壽沼の誌す所なり。

㋺曹州は楚の內、南華は縣なり、莊子が生緣なり。

㋩穎異。穎發の義、「いれのきのまつすぐなる」を穎といふ。

㋥受具。具足戒を受く、二百五十戒なり。

㋭講肆。講學の學校なり。

㋬毘尼は律藏、經論は脩多羅、阿毘曇の兩藏なり。

㋮濟世。これは眞實ではない、これ等は世間の口すぎの題目なり。

㋯更衣。律僧の衣を禪の衣にかへてなり。

㋰小釋迦。これは仰山は彌勒なりとのこと。正宗贊仰山傳（本叢書四）にもあり。

㋱懸記。未來記といふが如し、卽ち讖記なり。

㋲軍旅を兵革と曰ふ、旅は軍五百人なり。

㋳太尉。司馬なり、武官の大臣なり。

㋴默君和。或は墨君和とあり、墨が正ならん。

㋵河府。河南府なり、師は三處に住寺す、河北の臨濟寺、河南の臨濟寺、興化寺となり、太尉が宅にも住す、合せて四處。

㋶東堂。卽ち前住位、或は先師位なり。

㋷攝衣。威儀を正して據坐するなり。

㋸唐の咸通八年丁亥、日本の淸

ば卽ち之を佐く。師、化を旺にするに正つて、普化全身脫去す、乃ち仰山(ソ)小釋迦の(ス)懸記に符へり。適(ル)兵革に丁つて、師卽ち棄て去る。(ヲ)太尉(ワ)默君和、城中に於て宅を捨てて寺と爲し、亦臨濟を以て額と爲して、師を迎へて焉に居らしむ。後に衣を拂つて南邁して(カ)河府に至る。府主王常侍延くに師の禮を以てす。住すること未だ幾ならざるに、卽ち大名府の興化寺に來つて(ヨ)東堂に居す。師疾無うして、忽ち一日(タ)衣を攝めて據坐し、三聖と問答畢つて寂然として逝す。時に唐の(レ)咸通八年丁亥孟陬の月十日なり。(ソ)門人、師の全身を以て塔を大名府の西北の隅に建つ、勅して慧照禪師と諡し、塔を澄靈と號す。合掌稽首して師の大略を記す。

(ツ)鎭州の保壽に住する嗣法の小師延沼謹んで書す

和天皇貞觀九年なり、孟陬とは正月なり、又四月なりとの兩說あり、今の正月は秦漢の四月なりと韻府又は楚辭に出づ、高僧傳もこれに依るか。

(ソ)門人乃至記師大略。大師の順世、始終の事跡を記す。稽首とは首を下して地に至ると。以全身は掩土なり。勅諡慧照禪師とは唐の十八代懿宗帝より賜ふ所なり。

(ツ)住鎭州保壽。保壽の保は或は寶に作る、通音か、或は遲くるところあるか。延沼は臨濟に法を嗣ぐ。此の一節は師の涅槃の緣を錄して結ぶ。

(ネ)存奬は興化の本名なり、校勘はかんがへかんがふるなり。

(ナ)圓覺は蓋し禪師號ならん、卽ち雲門八世の孫なり。苾蒭は西國の草名なり、五義あり、その五に日光に背かずと、これを出家の人の常に佛日に向ふが如きに喩ふ、僧といふに同じ。重開は再び板行を開くなり。臨濟大師の遷寂より二百五十四年の後なり、前の序文は重開の序なり。

福州鼓山に住する(ナ)圓覺苾蒭　宗演　重開

國譯鎭州臨濟慧照禪師語錄　終

鎭州臨濟慧照禪師語錄序

延康殿學士・金紫光祿大夫・眞定府路安撫使・兼
馬步軍都總管・兼知成德軍府事馬　防　撰

黃檗山頭、曾遭痛棒、大愚肋下、方解築拳、饒舌老婆、尿牀鬼子、這風顚漢、再捋虎鬚、巖谷栽松、後人標榜、鑊頭剷地、幾被活埋、肯箇後生、驀口自摑、辭焚机案、坐斷舌頭、不是河南、便歸河北、院臨古渡、運濟往來、把定要津、壁立萬仞、奪人奪境、陶鑄仙陀、三要三玄、鈐鎚衲子、常在家舍、不離途中、無位眞人、面門出入、兩堂齊喝、賓主歷然、照用同時、本無前後、菱花對像、虛谷傳聲、妙應無方、不留朕跡、拂衣南邁、戾止大名、興化師承、東堂迎侍、銅瓶鐵鉢、掩室杜詞、松老雲閑、曠然自適、面壁未幾、密付將終、正法誰傳、瞎驢邊滅、圓覺老演、今爲流通、點檢將來、故無差舛、唯餘一喝、尙要商量、具眼禪流、冀無賺擧、宣和庚子中秋日、謹序。

鎭州臨濟慧照禪師語錄

住二三聖一嗣法小師　慧然　集

府主王常侍、與二諸官一請レ師陞レ座、師上堂云、山僧今日事不レ獲レ已、曲順二人情一方登二此座一、若約二祖宗門下一、稱二揚大事一、直是開口不得、無二個措レ足處一、山僧此日、以二常侍堅請一、那隱二網宗一、還有二作家戰將直下展レ陣開レ旗麼、對レ衆證據看、僧問、如何是佛法大意、師便喝、僧禮拜、師云、這箇師僧、卻堪二持論一、問、師唱二誰家曲一、宗風嗣二阿誰一、師云、我在二黃檗處一、三度發レ問、三度被レ打、僧擬議、師便喝、隨レ後打云、不レ可レ向二虛空裡一釘橛去一也、有二座主一問、三乘十二分教、豈不二是明一佛性一、師云、荒草不二曾鋤一、主云、佛豈賺レ人也、師云、佛在二什麼處一、主無レ語、師云、對二常侍前一、擬レ瞞二老僧一、速退速退、妨二他別人請問一、復云、此日法筵爲二一大事一故、更有二問話者一麼、速致レ問來、個纔開レ口、早勿交涉、也何以如レ此、不レ見二釋尊云一、法離二文字一、不レ屬レ因、不レ在レ緣故、爲二個信一不及一、所以、今日葛藤、恐滯二常侍與一諸官員一、味二他佛性一、不レ如且退、喝一喝云、少信根人、終無二了日一、久立珍重。

師因一日到二河府一、府主王常侍、請レ師陞レ座、時麻谷出問、大悲千手眼、那箇是正眼、師云、大悲千手眼、那箇是正眼、速道速道、麻谷拽レ師下レ座、麻谷卻坐、師近前云、不審、麻谷擬議、師亦拽二麻谷一下レ座、師卻坐、麻谷便出去、師便下座。

上堂云、赤肉團上有二一無位眞人一、常從二汝等諸人面門一出入、未二證據一者看看、時有レ僧出問、如何

是無位眞人、師下禪牀、把住云、道道、其僧擬議、師托開云、無位眞人、是什麼乾屎橛、便歸方丈。

上堂、有僧出禮拜、師便喝、僧云、老和尙莫探頭好、師云、儞道、落在什麼處、僧便喝、又有僧問、如何是佛法大意、師便喝、僧禮拜、師云、儞道、好喝也無、僧云、草賊大敗、師云、過在什麼處、僧云、再犯不容、師便喝、是日兩堂首座相見、同時下喝、僧問、師、還有賓主也無、師云、賓主歷然、師云、大衆要會臨濟賓主句、問取堂中二首座、便下座。

上堂、僧問、如何是佛法大意、師便喝、師便打、又僧問、如何是佛法大意、師亦竪起拂子、僧便喝、師亦喝、僧擬議、師便打、師乃云、大衆夫爲法者、不避喪身失命、我二十年、在黃檗先師處、三度問佛法的的大意、三度蒙他賜杖、如荅枝拂著相似、如今更思得一頓棒喫、誰人爲我行得、時有僧出、衆云、某甲行得、師拈棒與他、其僧擬接、師便打。

上堂、僧問、如何是劍及上事、師云、禍事禍事、僧擬議、師便打、問、祇如石室行者踏碓忘卻移腳、向什麼處去、師云、沒溺深泉、師乃云、但有來者不虧欠伊、總識伊來處、若與麼來、恰似失卻、不與麼來、無繩自縛、一切時中、莫亂擬酌、會與不會、都來是錯、分明與麼道、一任天下人貶剝、久立珍重。

上堂云、一人在孤峯頂上、無出身之路、一人在十字街頭、亦無向背、那箇合受人天供養、便下座。

維摩詰不作傳大士珍重。

上堂云、有一人、離家舍、不在途中、那箇合受人天供養、便下座。

上堂、僧問、如何是第一句、師云、三要印開朱點側、未容擬議主賓分、問、如何是第二句、師云、妙解豈容無著問、漚和爭負截流機、問、如何是第三句、師云、看取棚頭弄傀儡、抽牽都來裏有人、師又云、一句語須具三玄門、一玄門須具三要、有權有用、汝等諸人作麼生會、下座。

師晚參示衆云、有時奪境不奪人、有時人境俱奪、有時人境俱不奪、時有僧問、如何是奪人不奪境、師云、煦日發生鋪地錦、攖孩垂髮白如絲、僧云、如何是奪境不奪人、師云、王令已行天下徧、將軍塞外絕煙塵、僧云、如何是人境俱奪、師云、並汾絕信、獨處一方、僧云、如何是人境俱不奪、師云、王登寶殿野老謳謌、師乃云、今時學佛法者、且要求眞正見解、若得眞正見解、生死不染、去住自由、不要求殊勝、殊勝自至、道流祇如自古先德、皆有出人底路、如山僧指示人處、祇要儞不受人惑、要用便用、更莫遲疑、如今學者、不得病在甚處、病在不自信處、儞若自信不及、即便忙忙地徇一切境轉、被他萬境回換、不得自由、儞若能歇得念念馳求心、便與祖佛不別、儞欲得識祖佛麼、祇儞面前聽法底是、學人信不及、使向外馳求、設求得者、皆是文字勝相、終不得他活祖意、莫錯諸禪德、此時不遇、萬劫千生輪廻三界、徇好境攪去、驢牛肚裏生、道流約山僧見處、與釋迦不別、今日多般用處欠少什麼、六道神光未曾間歇、若能如是見得、祇是一生無事人、大德三界無安猶如火宅、此不是儞久停住處、無常殺鬼、一刹那間不揀貴賤老少、儞要與祖佛不別、但莫外求、儞一念心上清淨光、是儞屋裏法身佛、儞一念心上無分別光、是儞屋裏報身佛、儞一念心上無差別光、是儞屋裏化身佛、此三種身、是儞即今目前聽法底人、祇爲不向外馳求、有此功用、據經論家、取三種身爲極則、約山僧見處、不然、此三種身是名言、亦是三種依、古人云、身依義立、土據體論、法性身、法性土、明知是光影、大

德儞且識取弄光影底人、是諸佛之本源一切處、是道流歸舍處、是儞四大色身、不解說法聽法、脾胃肝膽、不解說法聽法、是什麼解說法聽法、是儞目前歷歷底、勿一箇形段、孤明、是這箇解說法聽法、若如是見得、便與祖佛不別、但一切時中更莫間斷、觸目皆是、祇爲情生智隔、想變體殊、所以輪廻三界、受種種苦、若約山僧見處、無不甚深、無不解脫、道流心法、無形通貫十方、在眼曰見、在耳曰聞、在鼻臭香、在口談論、在手執捉、在足運奔、本是一精明、分爲六和合、一心既無隨處解脫、山僧與麼說、意在什麼處、祇爲道流一切馳求心不能歇、上他古人閑機境、道流取山僧見處、坐斷報化佛頭、十地滿心猶如客作兒、等妙二覺擔枷鎖漢、羅漢辟支猶如劇賊、菩提涅槃如繫驢橛、何以如此、祇爲道流不達三祇劫空所以、有此障礙、若是眞正道人、終不如是、但能隨緣消舊業、任運著衣裳、要行卽行、要坐卽坐、無一念心希求佛果、緣何如此、古人云、若欲作業求佛、佛是生死大兆、大德時光可惜、祇擬傍家波波地學禪學道、認名認句、求佛求祖、求善知識意度、莫錯、道流祇有一箇父母、更求何物、儞自返照看、古人云、演若達多失卻頭、求心歇處卽無事、大德且要平常、莫作模樣、有一般不識好惡、禿奴、便卽見神見鬼、指東劃西、好晴好雨、如是之流、盡須抵債、向閻老前吞熱鐵丸、有日好人家男女、被這一般野狐精魅所著、便卽揑怪、瞎屢生索飯錢、有日在。

師示衆云、道流切要求取眞正見解、向天下橫行、免被這一般精魅惑亂、無事是貴人、但莫造作、祇是平常、儞擬向外傍家求過、覓腳手、錯了也、祇擬求佛、佛是名句、儞還識馳求底麼、三世十方佛祖出來、也祇爲求法、如今參學道流、也祇爲求法、得法始了、未得依前輪廻五道、云何是法、法者是心法、心法無形、通貫十方、目前現用、人信不及、便乃認名認句、向文字中求意度佛法、天地懸殊、道流山僧說法、說什麼法、說心地法、便能入凡入聖、入淨入穢、入眞入俗、要且不是儞眞俗凡聖、能與一切眞俗凡聖、安著名字、眞俗凡聖、與此人安著名字、不得、道流把得、便用更不著名字、號之爲玄旨、山僧說法、與天下人別、祇如有箇文殊普賢出來目前、各現一身問法、纔道咨和尙、我早辦了也、老僧穩坐更有道流、來相見時、我盡辦了也、何以如此、祇爲我見處別、外不取凡聖、內不住根本、見徹更不疑謬。

師示衆云、道流佛法無用功處、祇是平常無事、屙屎送尿、著衣喫飯、困來卽臥、愚人笑我、智乃知焉、古人云、向外作工夫、總是癡頑漢、儞且隨處作主、立處皆眞、境來回換不得、縱有從來習氣、五無間業、自爲解脫大海、今時學者總不識法、猶如觸鼻羊逢著物、安在口裏、奴郎不辨、賓主不分、如是之流、邪心入道、鬧處卽入不得、名爲眞出家人、正是眞俗家人、夫出家者、須辨得平常眞正見解、辨佛辨魔、辨眞辨僞、辨凡辨聖、若如是辨得、名爲眞出家、若魔佛不辨、正是出一家入一家、喚作造業衆生、未得名爲眞出家、祇如今有一箇佛魔、同體不分、如水乳合、鵝王喫乳、如明眼道流、魔佛俱打、儞若愛聖憎凡、生死海裏浮沈。

問、如何是佛魔、師云、儞一念心疑處是箇魔、儞若達得萬法無生、心如幻化、更無一塵一法、處處清淨是佛、然佛與魔、是染淨二境、約山僧見處、無佛無衆生、無古無今、得便者得、不歷時節、無修無證、無得無失、一切時中更無別法、設有一法過此者、我說如夢如化、山僧所說皆是道流卽今、目前孤明歷歷地聽者、此人處處不滯、通貫十方三界自在、入一切境差別不能回換、

一剎那間透入法界、逢佛說佛、逢祖說祖、逢羅漢說羅漢、逢餓鬼說餓鬼、向一切處游履國土、教化衆生、未曾離一念、隨處清淨、光透十方、萬法一如、道流大丈夫兒、今日方知、本來無事、祇爲儞信不及、念念馳求、捨頭覓頭、自不能歇、如圓頓菩薩、入法界現身、向淨土中厭凡忻聖、如此之流、取捨未忘、染淨心在、如禪宗見解、又且不然、直是現今更無時節、山僧處說皆是一期藥病相治、總無實法、若如是見得、是眞出家、日消萬兩黃金、道流莫取次被諸方老師印破面門、道我解禪解道、辯似懸河、皆是造地獄業、若是眞正學道人、不求世間過、切急要求眞正見解、若達眞正見解、圓明方始了畢。

問、如何是眞正見解、師云、儞但一切入凡入聖、入染入淨、入諸佛國土、入彌勒樓閣、入毘盧遮那法界、處處皆現國土成住壞空、佛出于世轉大法輪、卻入涅槃不見有去來相貌、求其生死、了不可得、便入無生法界、處處游履國土、入華藏世界、盡見諸法空相皆無實法、唯有聽法無依道人、是諸佛之母、所以佛從無依生、若悟無依、佛亦無得、若如是見得者、是眞正見解、學人不了爲執名句、被他凡聖名礙、所以障其道眼、不得分明、祇如十二分教、皆是表顯之說、學者不會、便向表顯名句上生解、皆是依倚落在因果、未免三界生死、儞若欲得生死去住、脫著自由、即今識取聽法底人、無形無相、無根無本無住處、活潑潑地、應是萬種施設、用處祇是無處、所以覓著轉遠、求之轉乖、號之爲秘密、道流儞莫認著箇夢幻伴子、遲晚中間便歸無常、儞向此世界中、覓箇什麼物作解脫、覓取一口飯喫、補充過時、且要訪尋知識、莫因循逐樂、光陰可惜、念念無常、麤則被地水火風、細則被生住異滅四相所遷、道流今時且要識取四種無相境、

免被境擺撲。

問、如何是四種無相境、師云、儞一念心疑、被地來礙、儞一念心愛、被水來溺、儞一念心嗔、被火來燒、儞一念心喜、被風來飄、若能如是辨得、不被境轉、處處用境、東涌西沒、南涌北沒、中涌邊沒、邊涌中沒、履水如地、履地如水、緣何如此、爲達四大如夢如幻故、道流儞祇今聽法者、不是儞四大、能用儞四大、若能如是見得、便乃去住自由、約山僧見處、勿嫌底法、儞若愛聖、聖者聖之名有、一般學人、向五臺山裏求文殊、早錯了也、五臺山無文殊、儞欲識文殊麼、祇儞目前用處始終不異、處處不疑、此箇是活文殊、儞一念心無差別光、處處總是眞普賢、儞一念心自能解縛隨處解脫、此是觀音三昧法、互爲主伴、出則一時出、一即三、三即一、如是解得始好看教、師示衆云、如今學道人、且要自信、莫向外覓、總上他閑塵境、都不辨邪正、祇如有祖有佛、皆是教迹中事、有人拈起一句子語、或隱顯中出、便即疑生照天照地、傍家尋問也太忙然、大丈夫兒、莫祇麼論主論賊、論是論非、論色論財、論說閑話過日、山僧此間不論僧俗、但有來者盡識得伊、任伊向甚處出來、但有聲名文句、皆是夢幻、却見乘境底人、是諸佛之玄旨、佛境不能自稱我是佛境、還是這箇無依道人、乘境出來、若有人出來、問我求佛、我即應清淨境出、有人問我菩提、我即應寂靜境出、我菩薩、我即應慈悲境出、有人問我涅槃、我即應淨妙境出、有人問我菩提、我即應寂靜境出、境即萬般差別、人即不別、所以應物現形、如水中月、道流儞若欲得如法、直須是大丈夫兒始得、若萎萎隨隨地則不得也、夫如甄叡(上音西、下所嫁切。)之器、不堪貯醍醐、如大器者、直要不受人惑、隨處作主、立處皆眞、但有來者、皆不得受、儞一念疑即魔入心、如菩薩疑時、生死魔得便、但能

息念、更莫外求、物來卽照、儞但信現今用底、一箇事也無、儞一念心生三界、隨緣被境分爲六塵、儞如今應用處、欠少什麼、一剎那間便入淨入穢、入彌勒樓閣、入三眼國土、處處遊履、唯見空名。

問、如何是三眼國土、師云、我共儞入淨妙國土中、著清淨衣、說法身佛、又入無差別國土中、著無差別衣、說報身佛、又入解脫國土中、著光明衣、說化身佛、此三眼國土、皆是依變、約經論家、取法身爲根本、報化二身爲用、山僧見處、法身卽不解說法、所以古人云、身依義立、土據體論、法性身、法性土、明知是建立之法、依通國土、空拳黃葉、用誑小兒、蒺藜菱刺、枯骨上覓什麼汁、心外無法、內亦不可得、求什麼物、儞諸方言、道有修有證莫錯、設有修得者、皆是生死業、儞言六度萬行齊修、我見皆是造業、求佛求法、卽是造地獄業、求菩薩亦是造業、看經看教亦是造業、佛與祖師是無事人、所以有漏有爲、無漏無爲、清淨業、有一般瞎禿子、飽喫飯了、便坐禪觀行、把捉念漏、不今放起、脈喧求靜、是外道法、祖師云、儞若住心看靜、舉心外照、攝心內澄、凝心入定、如是之流、皆是造作、是儞如今與麼聽法底人、作麼生擬修他證他、莊嚴他、渠且不是修底物、不是莊嚴得底物、若教他莊嚴、一切物卽莊嚴得底物、且莫錯、道流儞取這一般老師口裏語、爲是眞道、是善知識不思議、我是凡夫心、不敢測度他老宿瞎屢生儞一生祇作這箇見解、辜負這一雙眼、冷噤噤地如凍凌上驢駒相似、我不敢毀善知識、怕生口業、道流夫大善知識、始敢毀佛毀祖、是非天下、排斥三藏教、罵辱諸小兒、向逆順中覓人、所以我於十二年中、求一箇業性、如芥子許不可得、若似新婦子禪師、便卽怕趁出院、不與飯喫、不安不樂、自古先輩、到處人不信、被遮出、始知是貴、若到處人盡肯、堪作什麼、所以師子一吼、野干腦裂、道流諸方說有道可修有法可證、儞說證何法修、何道儞今用處欠少什麼物、修補何處、後生小阿師、不會便卽信這般野狐精魅、許他說事繫縛他人、言道理行相應、讖借三業、始得成佛、如此說者、如春細雨、古人云、路逢達道人、第一莫向道、所以言、若人修道道不行、萬般邪境競頭生、智劍出來無一物、明頭未顯暗頭明、所以古人云、平常心是道、大德覓什麼物、現今目前聽法無依道人、歷歷地分明、未曾欠少、儞若欲得與祖佛不別、但如是見、不用疑誤、儞心心不異、名之活祖、心若有異、則性相別、心不異故、卽性與相不別。

問、如何是心心不異處、師云、儞擬問、早異了也、性相各分、道流莫錯、世出世諸法、皆無自性、亦無生性、但有空名、名字亦空、儞祇麼認他閑名爲實、大錯了也、設有皆是依變之境、有箇菩提依、涅槃依、解脫依、三身依、境智依、菩薩依、佛依、儞向依變國土中覓什麼物、乃至三乘十二分教、皆是拭不淨故紙、佛是幻化身、祖是老比丘、儞還是娘生已否、儞若求佛、卽被佛魔攝、儞若求祖、卽被祖魔縛、儞若有求皆苦、不如無事、有一般禿比丘、向學人道、佛是究竟、於三大阿僧祇劫修行果滿、方始成道、道流儞若道佛是究竟緣什麼八十年後、向拘尸羅城雙林樹間側臥而死去、佛今何在、明知與我生死不別、儞言三十二相八十種好是佛、轉輪聖王應是如來、明知是幻化、古人云、如來舉身相爲順世間情、恐人生斷見、權且立虛名假言三十二、八十也空聲、有身非覺體、無相乃眞形、儞道佛有六通是不可思議、一切諸天神仙、阿修羅大力鬼、亦有神通應是佛否、道流莫錯、祇如阿修羅與天帝釋戰、戰敗領八萬四千眷屬、入藕絲孔中藏、

莫是聖否、如山僧所擧、皆是業通依通、夫如佛六通者不然、入色界不被色惑、入聲界不被聲惑、入香界不被香惑、入味界不被味惑、入觸界不被觸惑、入法界不被法惑所以達六種色聲香味觸法皆是空相不能繫縛此無依道人雖是五蘊漏質、便是地行神通、道流眞佛無形、眞法無相、儞祇麼幻化上頭作模作樣、設求得者、皆是野狐精魅、並不是眞佛、是外道見解、夫如眞學道人、並不取佛、不取菩薩羅漢、不取三界殊勝、逈然獨脫、不與物拘、乾坤倒覆、我更不疑、十方諸佛現前、無一念心喜、三塗地獄頓現、無一念心怖、緣何如此、我見諸法空相、變卽有、不變卽無、三界唯心、萬法唯識、所以夢幻空華、何勞把捉、唯有道流目前、現今聽法底人、入火不燒、入水不溺、入三塗地獄如遊園觀、入餓鬼畜生而不受報、緣何如此、無嫌底法、儞若愛聖憎凡、生死海裏沈浮、煩惱由心故有、無心煩惱何拘、不勞分別取相、自然得道須臾、儞擬傍家波波地學得、於三祇劫中終歸生死、不如無事向叢林中、牀角頭交脚坐、道流如諸方有學人來、主客相見了、便有一句子語辨前頭善知識口角頭撒過、看儞識不識、儞若識得是境、把得便拋向坑子裏、學人便卽尋常、然後便索善知識語、依前奪之、學人云、上智哉是大善知識、卽云、儞大不識好惡、如善知識、把出箇境塊子、向學人面前弄、前人辨得下下作主、不受境惑、善知識便卽現半身、學人便喝、善知識又入一切差別語路中擺撲、學人云、不識好惡老禿奴、善知識不辨邪正、學人來問善提涅槃三身境智、諧老師便與他解說、被他學人罵著、便把棒打他言、無禮度、自是儞善知識無眼、不得瞋他、有一般不識好惡禿奴、卽指東劃西、好晴好雨、好燈籠露柱、儞看眉毛有幾莖、

這箇具機緣學人不會便卽心狂笑是之流總是野狐精魅魍魎被他好學人喚喚微笑言諧老禿奴惑亂他天下人道流出家兒且要學道祇如山僧往日曾向毘尼中留心亦曾於經論尋討後方知是濟世藥表顯之說遂乃一時拋却卽訪道參禪後遇大善知識方乃道眼分明始識得天下老和尚知其邪正不是娘生下便會還是體究練磨一朝自省道流儞欲得如法見解但莫受人惑向裏向外逢著便殺逢佛殺佛逢祖殺祖逢羅漢殺羅漢逢父母殺父母逢親眷殺親眷始得解脫不與物拘透脫自在如諸方學道流未有不依物出來底山僧向此間從頭打手上出來手上打口裏出來口裏打眼裏出來眼裏打未有一箇獨脫出來底皆是上他古人閑機境山僧無一法與人祇是治病解縛儞諸方道流試不依物出來我要共儞商量是十年五歲並無一人皆是依艸附葉竹木精靈野狐精魅向一切叢塊上亂咬諧漢枉消他十方信施道我是出家兒作如是見解向儞道無佛無法無修無證祇與麼傍家擬求什麼物諧讀頭上安頭是儞欠少什麼道流是儞目前用底與祖佛不別祇麼不信便向外求莫錯向外無法內亦不可得儞取山僧口裏語不如休歇無事去已起者莫續未起者不要放起便勝儞十年行脚約山僧見處無如許多般祇是平常著衣喫飯無事過時儞諸方來者皆是有心求佛求法求解脫求出離三界癡人儞要出三界什麼處去佛祖是賞繫底名句儞欲識三界麼不離儞今聽法底心地儞一念心貪是欲界儞一念心嗔是色界儞一念心癡是無色界是儞屋裏家具子三界不自道我是三界還是道流目前靈靈地照燭萬般酌度世界底人與三界安名大德四大色身是無常乃至脾胃肝膽髮毛爪齒唯見諸法空相儞一念心歇得處喚作

菩提樹、儞一念心不能歇得處、喚作無明樹、無明無住處、無明無始終、儞若念念心歇不得、便上他無明樹、便入六道四生被毛戴角、儞若歇得便是清淨身界、儞一念不生、便是上菩提樹、三界神通變化、意生化身法喜禪悅、身光自照、思衣羅綺千重、思食百味具足、更無橫病、菩提無住處、是故無得者、道流大丈夫漢、更疑箇什麼、目前用處更是阿誰、把得便用莫著名字、號爲玄旨、與麼見得勿嫌底法、古人云、心隨萬境轉、轉處實能幽、隨流認得性、無喜亦無憂、道流如禪宗見解、死活循然、參學之人大須子細、如主客相見、便有言論往來、或應物現形、或全體作用、或把機權喜怒、或現半身、或乘師子、或乘象王、如有眞正學人、便喝先拈出一箇膠盆子、善知識不辨是境、便上他境上作模作樣、學人便喝、前人不肯放、此是膏肓之病不堪醫、喚作客看主、或是善知識不拈出物、隨學人問處即奪、學人被奪抵死不放、此是主看客、或有學人、應一箇清淨境出、善知識前、善知識辨得是境、把得拋向坑裏、學人言、大好善知識即云、咄哉、不識好惡、學人便禮拜、此喚作主看主、或有學人、披伽帶鎖出、善知識前、善知識更與安一重枷鎖、學人歡喜彼此不辨、呼爲客看客、大德山僧如是所舉、皆是辨魔揀異、知其邪正、道流寔情大難、佛法幽玄、解得可可地、山僧竟日與他說破、學者總不在意、千徧萬徧、脚底踏過黑沒焂地、無一箇形段歷歷孤明、學人信不及、便向名句上生解、年登半百、祇管傍家負死屍行、擔却擔子天下走、索草鞋錢有日在、大德山僧說向外無法、學人不會便即向裏作解、便即倚壁坐、舌拄上齶、湛然不動、取此爲是祖門佛法也、大錯、是儞若取不動清淨境爲是、儞即認他無明爲郎主、古人云、湛湛黑暗深坑、寔可怖畏、此之是也、儞若認他動者是、一切草木皆解動、應

可是道也、所以動者是風大、不動者是地大、動與不動俱無自性、儞若向動處捉他、他向不動處立、儞若向不動處捉他、他向動處立、譬如潛泉魚鼓波而自躍、大德動與不動是二種境、還是無依道人、用動用不動、如諸方學人來、山僧此間作三種根器斷、如中下根器來、我便奪其境而不除其法、或中上根器來、我便境法俱奪、如上上根器來、我便境法人俱不奪、如有出格見解人來、山僧此間便全體作用不歷根器、大德到這裏、學人著力處不通風、石火電光即過了也、學人若眼定動即沒交涉、擬心即差、動念即乖、有人解者不離目前、大德儞擔鉢囊屎擔子、傍家走求佛求法、即今與麼馳求底、儞還識渠麼、活潑潑地祇是勿根株、擁不聚、撥不散、求著即轉遠、不求還在目前、靈音屬耳、若人不信徒勞百年、道流一剎那間、便入華藏世界、入毘盧遮那國土、入解脫國土、入神通國土、入清淨國土、入法界、入緣入淨、入凡入聖、入餓鬼畜生、處處討覓尋、皆不見有生有死、唯有空名幻化空花、不勞把捉、得失是非、一時放却、道流山僧佛法的的相承、從麻谷和尚丹霞和尚道一和尚馬祖和尚百丈和尚南泉和尚趙州和尚、乃至臨濟和尚、一路行徧天下、無人信得、盡皆起謗、如道一和尚用處、純一無雜、學人三百五百、盡皆不見他意、如馬祖和尚自在眞正、順通用處、學人不測涯際、悉皆忙然、如丹霞和尚翫珠隱顯、學人來者皆悉被罵、如麻谷用處、苦如黃蘗、近皆不得、如石霜用處、向籌頭上覓人、來者皆懼、如山僧今日用處、眞正成壞、翫弄神變、入一切境隨處無事、境不能換、但有來求者、我便即出看渠、渠不識我、我便著數般衣學人生解、一向入我言句、苦哉瞎禿子、無眼人把我著底衣認青黃赤白、我脫却入清淨境中學人一見便生忻欲、我又脫却學人失心忙然狂走言、我無衣、我即向渠道、儞識我著衣底人否、

忽爾回頭認我了也、大德儞莫認衣、衣不能動人、能著衣、有箇清淨衣、有箇無生衣、菩提衣、涅槃衣、有祖衣有佛衣、大德但有聲名文句、皆悉是衣變、從臍輪氣海中鼓激、牙齒敲磕成其句義、明知是幻化、大德外發聲語業、內表心所法、以思有念、皆悉是衣、儞祇麼認他著底衣爲寔解、縱經塵劫、祇是衣通、三界循環輪廻生死、不如無事相逢不相識、其語不知名、今時學人不得、蓋爲認名字爲解、大策子上抄死老漢語、三重五重、複子裏不教人見、道是玄旨、以爲保重、大錯、瞎屢生儞向枯骨上覓作麼汁、有一般不識好惡、向教中取意度商量成於句義、如把屎塊子向口裏含了、吐過與別人、猶如俗人打傳口令相似、一生虛過也道、我出家、被他問著佛法、便卽杜口無詞、眼似漆突、口如匾擔、如此之類、逢彌勒出世移置他方世界、寄地獄受苦、大德儞波波地往諸方覓什麼物、踏儞脚板澗、無佛可求、無道可成、無法可得、外求有相佛、與汝不相似、欲識汝本心、非合亦非離、道流眞佛無形、眞道無體、眞法無相、三法混融和合一處、辨既不得、喚作忙忙業識衆生。

問、如何是眞佛眞法眞道、乞垂開示、師云、佛者心清淨是、法者心光明是、道者處處無礙淨光是、三卽一、皆是空名而無寔有、如眞正作道人、念念心不間斷、自達磨大師從西土來、祇是覓箇不受人惑底人、後遇二祖一言便了、始知從前虛用功夫、山僧今日見處、與祖佛不別、若第一句中得、與祖佛爲師、若第二句中得、與人天爲師、若第三句中得、自救不了。

問、如何是西來意、師云、既無意、云何二祖得法、師云、得者是不得、云、既若不得、云何是不得底意、師云、爲覓向一切處馳求心不能歇所以、祖師言、咄哉丈夫、將頭覓頭、

儞言下便自回光返照、更不別求、知身心與祖佛不別、當下無事方名得法、大德山僧今時事不變已、話度說出許多不才淨、儞且莫錯、據我見處、寔無許多般道理、要用便用、不用便休、祇如諸方說六度萬行以爲佛法、我道、是莊嚴門、佛事門、非是佛法、乃至持齋持戒、擎油不泯、道眼不明、盡須抵債、索飯錢、有日在、何故如此、入道不通理、復身還信施、長者八十一、其樹不生耳、乃至孤峯獨宿、一食卯齋、長坐不臥、六時行道、皆是造業底人、乃至頭目髓腦、國城妻子、象馬七珍、盡皆捨施、如是等見、皆是苦身心故、還招苦果、不如無事純一無雜、乃至十地滿心菩薩、皆求此道流蹤跡、了不可得、所以諸天歡喜、地神捧足、十方諸佛無不稱歎、緣何如此、爲今聽法道人用處、無蹤跡。

問、大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道、未審此意如何、乞師指示、師云、大通者是自己、於處處達其萬法無性無相、名爲大通、智勝者於一切處不疑不得一法、名爲智勝、佛者心清淨光明、透徹法界、得名爲佛、十劫坐道場者、十波羅密是、佛法不現前者、佛本不生、法本不滅、云何更有現前、不得成佛道者、佛不應更作佛、古人云、佛常在世間、而不染世間法、道流儞欲得作佛、莫隨萬物、心生種種法生、心滅種種法滅、一心不生萬法無咎、世與出世無佛無法、亦不現前、亦不曾失、設有者皆是名言章句、接引小兒施設藥病、表顯名句、且名句不自名句、還是儞目前昭昭靈靈、鑑覺聞知、照燭底安一切名句、大德造五無間業、方得解脫。

問、如何是五無間業、師云、殺父害母、出佛身血、破和合僧、焚燒經像等、此是五無間業、云、如何是父、師云、無明是父、儞一念心求起滅處不得、如響應空、隨處無事、名爲殺父、云、如何是母、師

云、貪愛爲母、儞一念心入欲界中、求其貪愛、唯見諸法空相、處處無著、名爲害母、云、如何是出佛身血、師云、儞向清淨法界中、無一念心生解、便處處黑暗、是出佛身血、云、如何是破和合僧、師云、儞一念心、正達煩惱結使如空、無所依、是破和合僧、云、如何是焚燒經像、師云、見因緣空、心空法空、一念決定斷迹然無事、便是焚燒經像、大德若如是達得、免彼他凡聖名礙、儞一念心祇向空拳指上生寃解、根境法中虛捏怪、自輕而退屈言、我是凡夫、他是聖人、禿屢生有甚死急、披他師子皮、却作野干鳴、大丈夫漢、不作丈夫氣息、自家屋裏物不肯信、祇麼向外覓、上他古人閑名句、倚陰博陽、不能特達、逢境便緣、逢塵便執、觸處惑起自無准定、道流莫取山僧說處、何故說無憑據、一期間圖畫虛空、如彩畫像等喻、道流莫將佛爲究竟、我見猶如廁孔、菩薩羅漢、盡是枷鎖縛人底物、所以文殊仗劍殺於瞿曇、騫掘持刀害於釋氏、道流無佛可得、乃至三乘五性、圓頓教迹、皆是一期藥病相治、並無實法、設有皆是相似表顯、路布文字差排、且如是說、道流有一般禿子、便向裏許著功、擬求出世之法、錯了也、若人求佛、是人失佛、若人求道、是人失道、若人求祖、是人失祖、大德莫錯、我且不取儞解經論、我亦不取儞國王大臣、我亦不取儞辯似懸河、我亦不取儞聰明智慧、唯要儞眞正見解、道流設解得百本經論、不如一箇無事底阿師、儞解得卽輕蔑他人、勝負修羅、人我無明、長地獄業、如善星比丘、解十二分教、生身陷地獄、大地不容、不如無事休歇去、飢來喫飯、睡來合眼、愚人笑我、智乃知焉、道流莫向文字中求、心動疲勞、吹冷氣無益、不如一念緣起無生、超出三界權學菩薩、大德莫因循過日、由僧往日未有見處時、黑漫漫地、光陰不可空過、腹熱心忙、奔波訪道、後還得力、始到今日、其道流如是話度、勸諸道流、莫爲衣食、看世界易過、善知識難遇、如優曇華時一現耳、儞諸方聞道有箇臨濟老漢、出來便擬問難、教語不得、被山僧全體作用、學人空開得眼、口總動不得、懵然不知以何答、我、我向伊道、龍象蹴踏非驢所堪、儞諸處祇指胸點肋道、我解禪解道、三箇兩箇、到這裏不奈何、咄哉儞將這箇身心、到處覆兩片皮、誑諂閭閻、喫鐵棒有日在、非出家兒、盡向阿修羅界攝、夫如至理之道、非諍論而求、激揚鏗鏘以摧外道、至於佛祖相承、更無別意、設有言教、落在化儀三乘五性人天因果、如圓頓之教、又且不然、童子善財皆不求過、大德莫錯用心、如大海不停死屍、祇麼擔却擬天下走、自起見障、以礙於心、日上無雲麗天、普照眼中無翳空裏無花、道流儞欲得如法、但莫生疑、展則彌綸法界、收則絲髮不立、歷歷孤明未曾欠少、眼不見耳不聞、喚作什麼物、古人云、說似一物則不中、儞但自家看、更有什麼說、亦無盡、各自著力、珍重、

勘辨

黃檗因入ㇾ厨次、問ニ飯頭一、作ニ什麼一、飯頭云、揀ニ衆僧米一、黃檗云、一日喫ニ多少一、飯頭云、二石五、黃檗云、莫ニ太多一麼、飯頭云、猶恐ㇾ少在、黃檗便打、飯頭却舉ニ似ㇾ師一、師云、我爲ㇾ汝勘ニ這老漢一、纔到ニ侍立次一、黃檗舉ニ前話一、師云、說ニ什麼來日一、卽今便喫、道了便掌、黃檗云、這風顚漢、又來ニ這裏一捋ニ虎鬚一、師便喝出去、後溈山問ニ仰山一、此二尊宿意作ニ麼生一、仰山云、和尙作ニ麼生一、溈山云、養子方知ニ父慈一、仰山云、不ㇾ然、溈山云、子又作ニ麼生一、仰山云、大似ニ勾賊破家一。

師問ニ僧一、什麼處來、僧便喝、師便揑坐、僧擬ㇾ議、師便打。

師見ニ僧來一便竪ニ起拂子一、僧禮拜、師便打、又見ニ僧來一亦竪ニ起拂子一、僧不ㇾ顧、師亦打。

師一日、同ニ普化一赴ニ施主家齋一次、師問、毛吞ニ巨海一、芥納ニ須彌一、爲ニ是神通妙用一、本體如然、普化踏ニ倒飯牀一、師云、太麤生、普化云、這裏是什麼所在、說ㇾ麤說ㇾ細、師來日又同ニ普化一赴ㇾ齋、問、今日供養何ニ似昨日一、普化依前踏ニ倒飯牀一、師云、得卽得、太麤生、普化云、瞎漢佛法說ニ什麼麤細一、師乃吐ㇾ舌。

師一日、與ニ河陽木塔長老一同在ニ僧堂地爐內一坐、因說、普化每日在ニ街市一擊ニ風擊顚一、知他是凡是聖、言猶未ㇾ了、普化入ㇾ衆來、師便問、汝是凡是聖、師便喝、普化以ㇾ手指云、河陽新婦子、木塔老婆禪、臨濟小廝兒、却具ニ一隻眼一、師云、這賊、普化云、賊賊、便出去。

一日普化、在ニ僧堂前一喫ニ生菜一、師見云、大似ニ一頭驢一、普化便作ニ驢鳴一、師云、這賊、普化云、賊賊、便出去。

因普化常於ニ街市一搖ニ鈴云一、明頭來明頭打、暗頭來暗頭打、四方八面來旋風打、虛空來連架打、師令ニ侍者去纔見一如ニ是道一、便把住云、總不與ニ麼來一時如何、普化托開云、來日大悲院裏有ㇾ齋、侍者回舉ニ似師一、師云、我從來疑ニ著這漢一。

有ニ一老宿參一ㇾ師、未ㇾ曾ニ人事一、便問、禮拜卽是、不ニ禮拜一卽是、師便喝、老宿便禮拜、師云、好箇草賊、老宿云、賊賊、便出去、師云、莫ニ道無事好一、首座侍立次、師云、還有ㇾ過也無、首座云、有、師云、賓家有ㇾ過、主家有ㇾ過、首座云、二俱有ㇾ過、師云、過在ニ什麼處一、首座便出去、師云、莫ニ道無事好一、後有ニ僧舉ニ似南泉一、南泉云、官馬相踏。

師因入ニ軍營一赴ㇾ齋、門首見ニ員僚一、師指ニ露柱一問、是凡是聖、員僚無語、師打ニ露柱一云、直饒道得也祇是箇木橛、便入去。

師問ニ院主一什麼處來、主云、州中糴ニ黃米一去來、師云、糴得盡麼、主云、糴得盡、師以ㇾ杖面前畫一畫云、還糴得這箇麼、主便喝、師便打、典座至、師舉ニ前話一、典座云、院主不ㇾ會ニ和尙意一、師云、儞作ニ麼生一、典座便禮拜、師亦打。

有ニ座主一來相看次、師問、座主講ニ何經論一、主云、某甲荒虛粗習ニ百法論一、師云、有ニ一人一、於ニ三乘十二分教一明得、有ニ一人一、於ニ三乘十二分教一明不ㇾ得、是同是別、主云、明得卽同、明不得卽別、樂普爲ニ侍者一、在ニ師後一立云、座主這裏是什麼所在、說ㇾ同說ㇾ別、師回ㇾ首問ニ侍者一、汝又作ニ麼生一、侍者便喝、師送

座主回來、遂問侍者云、是汝喝老僧、侍者云、是、師便打。

師聞第二代德山垂示云、道得也三十棒、道不得也三十棒、師令樂普去、問道得爲什麼也三十棒、待伊打汝、接住棒送一送看他作麼生、普到彼如敎而問、德山便打、普接住送一送、德山便歸方丈、普回舉似師、師云、我從來疑著這漢、雖然如是、汝還見德山麼、普擬議、師便打。

王常侍一日訪師、同師於僧堂前看乃問、這一堂僧還看經麼、師云、不看經、侍云、還學禪麼、師云、不學禪、侍云、經又不看禪又不學、畢竟作箇什麼、師云、總敎伊成佛作祖去、侍云、金屑雖貴落眼成翳、又作麼生、師云、將爲俚是箇俗漢。

師問杏山、如何是露地白牛、山云、吽吽、師云、啞那、山云、長老作麼生、師云、這畜生。

師問樂普云、從上來一人行棒、一人行喝、阿那箇親、普云、總不親、師云、親處作麼生、普便喝、師乃打。

師見僧來、展開兩手、僧無語、師云、會麼、云、不會、師云、渾崙擘不開、與汝兩文錢。

大覺到參、師舉起拂子、大覺敷坐具、師擲下拂子、大覺收坐具入僧堂、衆僧云、這僧莫是和尙親故、不禮拜、又不喫棒、師聞令喚覺、覺出、師云、大衆道、汝未參長老、覺云、不審、便自歸衆。

趙州行腳時參師、遇師洗腳次、州便問、如何是祖師西來意、師云、恰值老僧洗腳、州近前作聽勢、師云、更要第二杓惡水潑在、州便下去。

有定上座到參、問、如何是佛法大意、師下繩床擒住、與一掌、便托開、定佇立、傍僧云、定上座何不禮拜、定方禮拜、忽然大悟。

麻谷到參、敷坐具問、十二面觀音阿那面正、師下繩牀、一手收坐具、一手拽麻谷云、十二面觀音向什麼處去也、麻谷轉身擬坐、繩牀師拈拄杖打、麻谷接卻、相提入方丈。

師問僧、有時一喝如金剛王寶劍、有時一喝不作一喝用、汝作麼生會、僧擬議、師便喝、師問一尼善來惡來、尼便喝、師拈棒云、更道更道、尼又喝、師便打。

龍牙問、如何是祖師西來意、師云、與我過禪版來、牙便過禪版與師、師接得便打、牙云、打則任打、要且無祖師意、牙後到翠微問、如何是祖師西來意、微云、與我過蒲團來、牙便過蒲團與翠微、翠微接得便打、牙云、打則任打、要且無祖師意、牙住院後、有僧入室請益云、和尙行腳時、參二尊宿因緣還肯他也無、牙云、肯則深肯、要無祖師意。

徑山有五百衆、少人參請、黃檗令師到徑山、乃謂師曰、汝到彼作麼生、師云、某甲到彼自有方便、師到徑山、裝腰上法堂見徑山、徑山方擧頭、師便喝、徑山擬開口、師拂袖便行、尋有僧問徑山、這僧適來有什麼言句便喝和尙、徑山云、這僧從黃檗會裡來、儞要知麼、且問取他、徑山五百衆太半分散。

普化一日於街市中、就人乞直裰、人皆與之、普化俱不要、師令院主買棺一具、普化歸來、師云、我與汝做得箇直裰了也、普化便自擔去、繞街市叫云、臨濟與我做直裰了也、我往東門遷化去、市人競隨看之、普化云、我今日未來日往南門遷化去、如是三日、人皆不信、至第四日無人隨看、獨出城外、自入棺內、倩路行人釘之、卽時傳布、市人競往開棺、乃見全身脫去、祇聞空中

鈴轡隱隱而去。

行錄

師初在黃檗會下、行業純一、首座乃歎曰、雖是後生、與衆有異、遂問上座在此多少時、師云、三年、首座云、曾參問也無、師云、不曾參問、不知問个什麽、首座云、汝何不去問堂頭和尙、如何是佛法的的大意、師便去問、聲未絕、黃檗便打、師下來、首座云、問話作麽生、師云、某甲問聲未絕、和尙便打、某甲不會、首座云、但更去問、師又去問、黃檗又打、如是三度發問、三度被打、師來白首座云、幸蒙慈悲令某甲問訊和尙、三度發問、三度被打、自恨障緣不領深旨、今且辭去、首座云、汝若去時、須辭和尙去、師禮拜退、首座先到和尙處云、問話底後生、甚是如法、若來辭時、方便接他、向後穿鑿成一株大樹、與天下人作陰凉、去在、師去辭、黃檗云、不得往別處去、汝向高安灘頭大愚處去、必爲汝說、師到大愚、大愚問、什麽處來、師云、黃檗處來、大愚云、黃檗有何言句、師云、某甲三度問佛法的的大意、三度被打、不知某甲有過無過、大愚云、黃檗與麽老婆、爲汝得徹困、更來這裏問有過無過、師於言下大悟云、元來黃檗佛法無多子、大愚搊住云、這屎牀鬼子、適來道有過無過、如今却道黃檗佛法無多子、儞見箇什麽道理、速道速道、師於大愚脇下築三拳、大愚托開云、汝師黃檗、非干我事、師辭大愚、卻回黃檗、黃檗見來便問、這漢來來去去、有什麽了期、師云、祇爲老婆心切、便人事了侍立、黃檗問、什麽處去來、師云、昨奉慈旨、令參大愚、去來、黃檗云、大愚有何言句、師遂舉前話、黃檗云、作麽生得這漢來、待痛與一頓、師云、

說什麼待來、卽今便喫、隨後便掌、黃檗云、這風顚漢、却來這裏捋虎鬚、師便喝、黃檗云、侍者引這風顚漢參堂去、後潙山舉此話問仰山、臨濟當時得大愚力、得黃檗力、仰山云、非但騎虎頭、亦解把虎尾。

師栽松次、黃檗問、深山裡栽許多作什麼、師云、一與山門作境致、二與後人作標榜、道了將鑺頭打地三下、黃檗云、雖然如是、子已喫吾三十棒了也、師又以鑺頭打地三下、作噓噓聲、黃檗云、吾宗到汝大興於世、後潙山舉此語問仰山、黃檗當時祇囑臨濟一人、更有人在、仰山云、有、祇是年代深遠、不欲舉似和尙、潙山云、雖然如是、吾亦要知、汝但舉看、仰山云、一人指南吳越令行、遇大風卽止、（識風穴和尙也。）

師侍立德山次、山云、今日困、師云、這老漢寐語作什麼、山便打、師掀倒繩牀、山便休。

師普請鋤地次、見黃檗來、拄钁而立、黃檗云、這漢困那、師云、钁也未舉、困箇什麼、黃檗便打、師接住棒、一送送倒、黃檗喚維那維那扶起我、維那近前扶云、和尙爭容得這風顚漢無禮、黃檗纔起便打維那、師钁地云、諸方火葬、我這裏一時活埋、後潙山問仰山、黃檗打維那意作麼生、仰山云、正賊走卻、還蹤人喫棒。

師一日在僧堂前坐、見黃檗來、便閉卻目、黃檗乃作怖勢、便歸方丈、師隨至方丈、禮謝、首座在黃檗處侍立、黃檗云、此僧雖是後生、卻知有此事、首座云、老和尙脚跟不點地、却證據箇後生、黃檗自於口上打一摑、首座云、知卽得。

師在堂中睡、黃檗下來見、以拄杖打板頭一下、師擧頭見是黃檗、却睡、黃檗又打板頭一下、卻往上間、見首座坐禪、乃云、下間後生卻坐禪、汝這裏安想作什麼、首座云、這老漢作什麼、黃檗打板頭一下、便出去、後潙山問仰山、黃檗入僧堂意作麼生、仰山云、兩彩一賽。

一日普請次、師在後行、黃檗回頭見師空手、乃問、鑺頭在什麼處、師云、有一人將去了也、黃檗云、近前來、共汝商量箇事、師便近前、黃檗竪起云、祇這箇天下人、拈掇不起、師就手擧得竪起云、爲什麼却在某甲手裏、黃檗云、今日大有人普請、便歸院、後潙山問仰山、鑺頭在黃檗手裏、爲什麼却被臨濟奪却、仰山云、賊是小人、智過君子。

師爲黃檗馳書去潙山、時仰山作知客、接得書便問、這箇是黃檗底、那箇是專使底、師便掌、仰山約住云、老兄知是般事、便休、同去見潙山、潙山便問、黃檗師兄多少衆、師云、七百衆、潙山云、什麼人爲導首、師云、適來已達書了也、師却問潙山、和尙此間多少衆、潙山云、一千五百衆、師云、太多生、潙山云、黃檗師兄亦不少、師辭潙山、仰山送出云、汝向後北去、有箇住處、師云、豈有與麼事、仰山云、但去、已後有一人佐輔老兄在、此人祇是有頭無尾、有始無終、師後到鎭州、普化已在彼中、師出世普化佐贊於師、師住未久、普化全身脫去。

師因半夏上黃檗見和尙看經、師云、我將謂、是箇人元來是揞黑豆老和尙、住數日乃辭去、黃檗云、汝破夏來、不終夏去、師云、某甲暫來禮拜和尙、黃檗遂打趂令去、師打數里、疑此事却回終夏、師一日辭黃檗、檗問、什麼處去、師云、不是河南便歸河北、黃檗便打、師約住與一掌、黃檗大笑乃喚侍者、將百丈先師禪版机案來、師云、侍者將火來、黃檗云、雖然如是、汝但將去、已後坐却天下人舌頭去在、後潙山問仰山、臨濟莫辜負他黃檗也無、仰山云、不然、潙山云、子又作

麼生、仰山云、知恩方解報恩、溈山云、從上古人、還有相似底也無、仰山云、有、祇是年代深遠、不欲舉似和尙、溈山云、雖然如是、吾亦要知、子但擧看、仰山云、祇如楞嚴會上阿難讚佛云、將此深心奉塵刹、是則名爲報佛恩、豈不是報恩之事、溈山云、如是如是、見與師齊、減師半德、見過於師、方堪傳授。

師到達磨塔頭、塔主云、長老先禮佛先禮祖、師云、佛祖俱不禮、塔主云、佛祖與長老是什麼冤家、師便拂袖而出。

師行脚時到龍光、光上堂、師出問、不展鋒鋩、如何得勝、光據坐、師云、大善知識、豈無方便、光瞪目云、嗄、師以手指云、這老漢、今日敗闕也。

到三峯、平和尙問、什麼處來、師云、黃檗來、平云、黃檗有何言句、師云、金牛昨夜遭塗炭、直至如今不見蹤、平云、金風吹玉管、那箇是知音、師云、直透萬重關不住、清霄內平云、子這一問太高生、師云、龍生金鳳子、銜破碧瑠璃、平云、且坐喫茶、又問、近離甚處、師云、龍光、平云、龍光近日如何、師便出去。

到大慈、慈在方丈內坐、師問、端居丈室時如何、慈云、寒松一色千年別、野老拈華萬國春、師云、今古永超圓智體、三山鎖斷萬重關、慈便喝、師亦喝、慈云、作麼、師拂袖便去。

到襄州華嚴、嚴倚拄杖作睡勢、師云、老和尙瞌睡作麼、嚴云、作家禪客、宛爾不同、師云、侍者點來茶、與和尙喫、嚴乃喚維那、第三位安排這上座。

到翠峯、峯問、甚處來、師云、黃檗來、峯云、黃檗有何言句、指示於人、師云、黃檗無言句、峯云、爲什麼無、師云、設有亦無擧處、峯云、但擧看、師云、一箭過西天。

到象田、師問、不凡不聖、請師速道、田云、老僧祇與麼、師便喝云、許多禿子、在這裏覓什麼椀。

到明化、化問、來來去去作什麼、師云、祇徒踏破草鞋、化云、畢竟作麼生、師云、老漢話頭也不識。

往鳳林、路逢一婆、婆問、甚處去、師云、鳳林去、婆云、恰值鳳林不在、師云、甚處去、婆便行、師乃喚婆、婆回頭、師便打。

到鳳林、林問、有事相借問得麼、師云、何得剜肉作瘡、林云、海月澄無影、游魚獨自迷、師云、海月既無影、游魚何得迷、鳳林云、觀風知浪起、甄水野帆颺、師云、孤輪獨照江山靜、自笑一聲天地驚、林云、任將三寸輝天地、一句臨機試道看、師云、路逢劒客須呈劒、不是詩人莫獻詩、鳳林便休、師乃有頌、大道絕同任向西東、石火莫及電光罔通、溈山問仰山、石火莫及電光罔通、從上諸聖將什麼爲人、仰山云、和尙意作麼生、溈山云、但有言說都無定義、仰山云、不然、溈山云、子又作麼生、仰山云、官不容針私通車馬。

到金牛、牛見師來橫按拄杖當門踞坐、師以手敲拄杖三下、却歸堂中第一位坐、牛下來見乃問、夫賓主相見各具威儀、上座從何而來、太無禮生、師云、老和尙道什麼、牛擬開口、師便打、牛作倒勢、師又打、牛云、今日不著便、溈山問仰山、此二尊宿還有勝負也無、仰山云、勝卽總勝、負卽總負。

師臨遷化時、據坐云、吾滅後不得滅却吾正法眼藏、三聖出云、爭敢滅却和尙正法眼藏、師云、已後有人問儞、向他道什麼、三聖便喝、師云、誰知吾正法眼藏、向這瞎驢邊滅卻、言訖瞿然示寂。

略傳

師諱義玄、曹州南華人也、俗姓邢氏、幼而穎異、長以孝聞、及落髮受具、居於講肆、精究毗尼、博頤經論、俄而歎曰、此濟世之醫方也、非教外別傳之旨、卽更衣遊方、首參黃檗、次謁大愚、其機緣語句、載于行錄、旣受黃檗印可、尋抵河北鎭州城東南隅臨滹沱河側小院住持、其臨濟因地得名、時普化先在彼、佯狂混衆、聖凡莫測、師至卽佐之、師正旺化、普化全身脫去、乃符仰山小釋迦之懸記也、適丁兵革、師卽棄去、太尉默君和、於城中捨宅爲寺、亦以臨濟爲額、迎師居焉、後拂衣南邁、至河府、府主王常侍、延以師禮、住未幾、卽來大名府興化寺、居于東堂、師無疾而忽一日攝衣據坐、與三聖問答畢、寂然而逝、時唐咸通八年丁亥孟陬月十日也、門人以師全身、建塔于大名府西北隅、勅謚慧照禪師、塔號澄靈、合掌稽首記師大略、

住鎭州保壽嗣法小師　延沼　謹書

鎭州臨濟慧照禪師語錄　終

住大名府興化嗣法小師　存獎　校勘

住福州鼓山圓覺蕊菊　宗演　重開

國譯無門關

解題

無門關四十八則は、宋の報恩佑慈禪寺無門慧開禪師、理宗皇帝卽位の五年、紹定二年正月五日、皇帝の天基聖節に遇ふて、皇帝の萬壽を祝筵せんがために、預め元年十二月五日、佛祖の機緣四十八則を拈提し、之を印行したるものにして、爾來禪門乍入の學徒悉く之れによりて慧眼を開かざるはなく、宗門玄奧の徽旨を窺ふに好箇の指針たり。

傳を案するに、無門字は慧開、杭州良渚の人なり。俗姓は梁、母は宋氏、天龍の肱和尙を禮して受業の師となし、月林に蘇州の萬壽寺に參す。林、無字の話を看せしむ、六年を經て迥に入處なし、乃ち志を奪ひ剋責して誓ふて云く、「睡眠は我が身を爛却す」と。困時に至る毎に廊下に行道して頭を以て露柱に向ふて磕す。一日法座の邊に在つて立つ、忽ち齋鼓の聲を聞いて省することあり、偈を成して曰く、「靑天白日一聲雷、大地群生眼豁開、萬象森羅齊稽首、須彌跼跳舞三臺。」次の日入室して所得を通せんと欲す。林、遽かに曰く、「何れの處にか神を見鬼を見了るや。」師便ち喝す、林亦喝す、師又喝す、此れより機語脗合す。嘉定十一年安吉の報國寺に出世す。繼いで隆興の天寧、黃龍、

翠巖、蘇州の開原、靈巖、鎭江の焦山、金陵の保寧等に遷る。淳祐六年旨を奉じて、山を護國の仁王寺に開く。上堂、「若し人心を識得せば大地に寸土なし。古人恁麼に道ふ、黃龍は卽ち然らず、若し人心を識得せば大地盡く是れ土。」上堂、「是非長短は耳邊の風、切に中に於て異同を覓むること莫れ、八風吹いて動放せざることを得んと要せば、心地をして虛空に等しからしめよ。慈受老人只だ水に順ひ帆を張ることを解して、逆風に柁を把ること能はず、黃龍又且つ然らず、是非都べて去了す、是非の裏に薦取せよ。何が故ぞ、凝。幾度か黑風大浪を飜へすも、未だ曾て釣舟の傾くと道ふことを聞かず。」上堂、「三分の光陰、二は早く過ぐ。懷州の牛、禾を喫す、靈臺一點も揩磨せず、益州の馬腹脹る。貪生一日區々として去る、天下醫人を覓む、喚べども頭を回らさず、爭か奈何。猪の左の膊上を炙らしむと。斯に於て薦道參學の事畢る。其れ或は未だ然らずんば、」拄杖を拈じて云く、「請ふ永上座、諸人のために說破せよ。」拄杖を掉ふこと一下。上堂、「趙州和尙の云ふ、南來の者は他と下載し、北來の者は他と上載す。大いに世情の冷暖を看、人義の高低を逐ふに似たり。慈受和尙の云ふ南來の者も他一面の笑と、北來の者も他一面の笑と、大に歡喜厥散じ笑裏に刀あるに似たり。若し是れ焦山ならば又且つ然らず、南來の者も平生を以て之を待し、北來の者も平生を以て之を待す。また嗔らず笑はず、下なく高なし。何が故ぞ、淸平世界に干戈を用ひず。」朝陽の偈を作りて曰く、「寒時急に用ひる物、暖を趁ふて些の針線を着く、忽然として臘月到來、脚忙手亂に到ることを免る。」對月の偈に曰く、「始めて些

兒の光影を見ば、末後の一段を了ずることを要す。若し是れ無門拳頭ならば、這般の鈍漢を打せず」と。師晩年に楗拂に倦みて西湖の上に庵居す、參學の者猶ほ衆し。理宗皇帝召して還德殿に入れて說法せしむ、雨を祈りて卽ち感應す。勅して金襴の法衣、佛眼の號を賜ふて以て褒寵を示す。

國譯無門關の序

說いて無門と道はゞ盡大地の人、得入せん。說いて有門と道はゞ㊁阿師の分なけん。第一より強ひて幾箇の注腳をか添ふ、大いに㊅笠上に笠を頂くに似たり、硬く習翁が贊揚せんことを要す。之は是れ㊁乾竹に汁を絞りて、㊇這些の哮本を着得す、習翁が一擲を消せざれ。一擲、一滴をして江湖に落さしむること莫れ、㊈千里の烏騅も追ふことを得ず。

紹定改元七月晦

習庵㊉陳塤寫す

㊀無門關　門とは人の出入する所、關とは門閉の意、故に門關は通塞の義、開遮の義なり。而して無門關の題號に就いて考ふるに、二釋あり、一は「門關無し」の義、自序に、「門より入るものは是れ家珍にあらず」と、卽ち是れなり。二は「無門の關」の義、又同じく自序に云ふ「危亡を顧みず單刀直入せん」と、卽ち是れなり。

㊁阿師。これは開無門を指していふ。

㊅笠上に笠云々。有るが上に又重ぬる義にて、他人の爲したることばかりを爲して、何等發明する所なきをいふ。

㊁乾竹に汁云々。言句のなき處に言句を著くるは、乾れたる竹より汁を絞り出すやうなるものなり。

㊇這些の哮本。哮は咬むと同じ、乾れ竹の本より汁をすこしかみ出すことを得たり。

㊈千里の烏騅。黑き駿馬なり。

㊉陳塤。未詳、習庵は別號。

㊀表文

㊁紹定二年正月初五日、恭しく㊂天基の聖節に遇ふ。臣僧㊃慧開、預め元年十二月初五日に於て、㊄佛祖の機緣㊅四十八則を印行し拈提して、今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延したてまつる。皇帝陛下、恭しく願はくは、聖明日月に齊しく、㊆叡算乾坤に等しく、㊇八方、㊈有道の君を歌ひ、四海㊉無爲の化を樂まんことを。

㊁紹定二年。南宋理宗皇帝卽位の五年、我朝の紀元一八八九年、後堀川天皇安貞三年、今を去ること六九〇年なり。

㊂天基の聖節。天子の誕日にして、理宗皇帝の卽位は寶慶元年正月五日、また誕生も八月五日なるが故に、此の日は重大なる聖節と云ふべし。

㊃慧開。臨濟楊岐派の一燈宿にして、此の書の著者なり、姓は梁氏、杭州鐵塘瓦渚の人、天龍肱に依つて出家し、月林觀に隨つて趙州無字に參じ、終に其の法嗣となる。卽ち楊岐方會―白雲守端―五祖法演―開悟道寧―大潙善果―大洪祖證―月林師觀―無門慧開。その傳は五燈會元續略二ノ上、增集續傳燈錄二、五燈全書五十三、續統存稿二、五燈嚴統二十二、續傳燈錄二等に出づ。

㊄佛祖の機緣。諸佛祖師が公案を作つて、衆生を得入せしむ、之れ衆生の根機、因緣に從ふなり。

㊅四十八則。無門關は公案四十八則を集錄す。

㊆叡算。陛下の實算年壽といふこと。

㊇八方。天下到る處といふ義。

㊈有道。道は王道の道なり、王道に適へる仁君の義。

㊉無爲の化。堯舜は無爲にして民を化す、聖人の行は自ら人を德化するなり。

㊋懿德皇后。理宗皇帝の聖母、皇后が功德の爲に建立せし佑慈寺の前住職が慧開なり。

國譯無門關自序

㊀佛語心を宗と爲し、無門を法門と爲す。既に是れ無門、且つ作麼生か透らん。豈に道ふことを見ずや、「㊁門より入る者は是れ家珍にあらず、緣によりて得る者は始終成壞す」と。㊂恁麼の說話、大いに風無きに浪を起し、好肉に瘡を剜るに似たり。何ぞ況んや言句に滯りて解會を覓めんをや。棒を掉つて月を打ち、靴を隔てて痒を爬く、㊃甚の交涉かあらん。慧開㊄紹定戊子の夏、㊅東嘉の龍翔に首衆たり、衲子請益するに因つて、遂に古人の公案を將つて、門を敲く瓦子と作して、機に隨つて學者を引導す。㊆竟爾として抄錄するに、覺えず集と成る。初めより前後て線を與へたるのみにて、絕對の眞理に關係なきを云ふ。

㊄紹定戊子。紹定元年。

㊅東嘉龍翔。溫州永嘉縣の龍翔寺にして、支那十刹中の一なり。

㊆竟爾。爾は助字にして、竟は終にの意。

㊇箇漢。稱揚の意、眞に身命を拋つて眞理を求めんとする大丈夫の者を指す。

㊈八臂那吒。那吒は梵語、龍と譯す、毘沙門天の孫、卽ち毘沙門天の第三子半支迦の二男にして、佛法守護の天なり、四面八臂にして大力の鬼王と云ふ。

㊉四天四七。印度西天の禪宗は

㊁佛語心。已下著者の自序なり、初めの二句は楞伽經の意を受けて、馬祖大師の擧揚せられたるの語。佛語心とは佛心と見よ、卽ち卽心卽佛を宗旨となし、一法として立すべきが故に、趣入の門無きを法門となす。

㊂從門入者。岩頭和尙が法弟雪峰を喝せし語。會元七雪峰章に曰く、「儞不レ見レ道、從レ門入者、不二是家珍一、他後若欲レ播二揚大敎一、一一從二自己胸襟一流出將來、與レ我蓋天蓋地去」と。

㊃恁麼說話。此の書所逸の四十八則の公案を指す。

㊄有甚交涉。無門の處に門を立

を以て叙列せず、共に四十八則と成る。通じて無門關と曰ふ。若し是れ㊂箇の漢ならば、危亡を顧みず單刀直入せん。㊃八臂の那吒、他を攔れども住らず。縱使ひ㊄西天の四七、㊅東天の二三も、只だ風を望んで命を乞ふことを得ん。設し或は㊆躊躇せば、也た㊇窓を隔てて馬騎を看るに似たり。眼を㊈眨得し來らば、早く已に蹉過せん。

㊉頌に曰く、「㊋大道無門、千差路あり。㊌此の關を透得せば、乾坤に獨歩せん。佛祖の機緣、四十八則。」

初祖迦葉尊者より四七二十八祖達磨大師までを云ふ。

㊅東土二三。支那東土の初祖達磨大師より第六祖慧能大師までを云ふ。

㊆躊躇。猶豫の義、已下明眼の漢に反して愚昧遲鈍の者に就いて云ふ。

㊇窓。物事の速かに過ぎ去るを譬へたる語なり。

㊈眨得。ちらりと他に瞬眼をうつすこと。

㊉頌。梵には偈陀、此に孤起と云ふ。別に題を立てずして句を作り、其の中に廣き意義を含蓄して、諷誦に便ならしむ、或は之れを偈とも云ふ。

㊋大道。此所にては佛道を指せど、一般には常に佛道のみにあらず、凡て人の行つて世に叶ふものをいふ也。この大道には門なし、門あるは卽ちその家々を區別する標なれば、天下の大道には門なけれども、而も大道には千萬の小路が集まるとなり。佛道に比す。

㊌此の關。この關の字は書名、無門關の關に係り、この四十八の關を透らば、自由の界に入つて佛祖と等しく乾坤に獨歩せんとなり。乾坤とは天地のことにて、獨歩とは、自由氣儘にすることなり。天地を自由になすとは、この四十八則を打成して、心地明々として、上三十三天より下那落の底迄透得し、思の儘になることと本書の目的なりと功能を頌せるなり。

國譯無門關

參學比丘彌衍宗紹編

第一　趙州狗子

㊀趙州和尙、因に僧問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無や。」州云く、「無。」

無門曰く、「參禪は須らく祖師の關を透るべし、妙悟は心路を窮めて絕せんことを要す。祖關透らず心路絕せずんば、盡く是れ㊇依草附木の精靈ならん。且く道へ、如何が是れ祖師の關。只だ者の一箇の無の字、乃ち宗門の一關なり。遂に之を目けて禪宗無門關と曰ふ。透得過する者は、但だ親しく趙州に見ゆるのみならず、便

趙州從諗。蓋し趙州とは地名にして、こゝにては趙州城觀音院の從諗和尙を云ふ、此の人六十にして發心し、八十まで行脚し、百二十にして寂す、眞際大師と諡す。

㊇依草附木。草に依り木に附くの義、卽ち文字言句に依り、有無の會を作し、道理の會を作す人を指す。

㊁提撕。擧げ持ち出して、公案を工夫することを云ふ。

㊂虛無。老子の道は虛無自然の處を至極となせども、趙州の

ち歷代の祖師と手を把つて共に行き、眉毛厮結んで同一眼に見、同一耳に聞くべし。豈に慶快ならざらんや。透關を要する底有ること莫しや。三百六十の骨節、八萬四千の毫竅を將つて、通身に箇の疑團を起して箇の無の字に參せよ。晝夜㊁提撕して㊄虛無の會を作すこと莫れ、有無の會を作すこと莫れ、箇の熱鐵丸を呑了するが如くに相似て、吐けども又吐き出さず、從前の惡知惡覺を蕩盡し、久久に純熟して自然に內外打成一片ならば、㊅啞子の夢を得るが如く、只だ自知することを許す。㊆驀然として打發せば、天を驚かし地を動せん。㊇關將軍の大刀を奪ひ得て手に入るが如く、㊈佛に逢うては佛を殺し、祖に逢うては祖を殺し、生死岸頭に於て大自在を得、㊉六道㊊四生の中に向つて㊋遊戲三

無は然らずとの意。

㊅啞子得夢。啞子の夢を見るが如く、人に語ること能はざれども自身には成程と合點して其の境界を得たるに喩ふ、須らく參禪者は純一無雜に工夫して、盡十方法界、一箇の無字と現はれるまで、玉の汗をしぼり、血の涙を拭はざるべからず。

㊆驀然打發。大悟する時には更に時刻を要せず、唯だ大死一番絕後に再び蘇生して豁然大悟すとは此所の端的を云ふ。

㊇關將軍大刀。關羽將軍は劉玄德の臣にして、常に青龍刀を持して敵を破るの猛將なり、今此の無字の吹毛劍に依つて、種々の妄想戲論を破するを、關將軍の大刀を手に入ると形容せしまでなり。

㊈逢佛殺佛。禪宗にては悟の見識所謂悟りの糟を佛見法見、或は佛病祖病と云ふ、此の佛病祖病を無字の銘刀にて截斷するを殺佛殺祖と云ふなり。即ち迷悟生死の境を遠離して、大自在の域に達し、何等の繫縛なきを云ふ。

㊉六道。六道とは天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄。

㊊四生。四生とは胎、卵、濕、化を云ふ。

㊋遊戲三昧。臨濟禪師云く、「入二地獄一、如レ遊二園觀一」と、蓋し禪宗は迷を去つて悟に入るにあらず、迷即悟の大自在を得、假令ひ地獄の底に居すとも、隨處に主人公となりて、恰も園觀に遊ぶが如く、自由自在の心に安住するを云ふなり。

㊌法燭。法藏の光明一時に赫耀する如きの慶快を云ふ。

㊍百丈和尙。福州長樂の人、馬祖に參じて法を嗣ぎ、洪州百

昧ならん。且つ作麼生か提撕せん。平生の氣力を盡して箇の無の字を擧せよ、若し間斷せずんば、好し㊌法燭の一點すれば便ち著くるに似ん。」

頌に曰く、「狗子佛性、全提正令。纔に有無に涉れば、喪身失命せん。」

第二　百丈野狐

㊍百丈和尙、凡そ參の次で、一老人有つて、常に衆に隨つて法を聽く。衆人退けば老人も亦退く。忽ち一日退かず。師遂に問ふ、「面前に立つ者は復た是れ何人ぞ。」老人云く、「諾、某甲は非人なり、過去㊂迦葉佛の時に於て曾て此の山に住す。因に學人問ふ、『大修行底の人、還つて因果に落つるや也た無や。』某甲對へて云く、『不落因果』と。五百生野狐身に墮す、今請ふ和尙一轉語を代つて、貴むらくは野狐を脫せしめよ」といつて遂に問ふ、「大修行底の人、還つて因果に落つるや也た無や。」師云く、「不昧因果」と。老人言下に於て大悟す。作禮して云く、「某甲已に野狐身を脫して山後に住在せん、敢て和尙に告ぐ、乞ふ亡僧の㊎事例に依れ。」師、㊏維那をして㊐白槌して衆に告げしむ、食後に亡僧を送らんと。大衆言議す、一衆皆安し、㊑涅槃堂に又人の病む無し。何が故ぞ是の如くなる。食後に只だ

丈山に住す。即ち慧能大鑑―南嶽懷讓―馬祖道一―百丈懷海。百丈和尙身を律すること頗る嚴、「一日不レ作一日不レ食」の語あり、また會下の徒を督するに、始めて清規を立す、即ち百丈清規は實に禪門清規の根源にして骨子なり。

㊂迦葉佛。是れ過去七佛中の第六佛に當る、第七佛は即ち釋迦牟尼佛なり。

㊎事例。亡僧の資格を以て葬儀の例式を行はれたしと願ふの意。

㊏維那。叢林の法務僧籍を掌る重要の僧の役。

㊐白槌。大衆に報告せんとする時には、報告板を打つて維那が種々なる法務等を報告するなり。

㊑涅槃堂。寺中の病室、即ち延壽堂とも病僧寮とも云ふ。

㊒黃檗。洪州黃檗山の希運和尙

師の衆を領じて、山後の巖下に至つて、杖を以て一死野狐を挑出して、乃ち火葬に依るを見る。師、晩に至つて上堂、前の因緣を擧す。㋓黃檗乃ち問ふ、「古人錯つて一轉語を祇對して、五百生野狐身に墮すと。轉轉錯らずんば、箇の甚麼とか作るべき。」師云く、「近前來、伊が與に道はん。」黃檗遂に近前して、師に一掌を與ふ。師、手を拍つて笑つて云く、「將に謂へり、胡鬚赤と、更に赤鬚胡あり。」

無門云く、「不落因果、甚としてか野狐に墮す、不昧因果、甚としてか野狐を脫す。若し者裏に向つて㋔一隻眼を著得せば、便ち前百丈贏ち得て、㋕風流五百生なることを知得せん。」

頌に曰く、「不落不昧、㋖兩采一賽。不昧不落、千錯萬錯。」

第三　俱胝竪指

㋗俱胝和尚、凡そ詰問あれば唯だ一指を擧す。後に童子あり、因に外人問ふ、「和尚何の法要をか說く。」童子も亦指頭を竪つ。胝、聞いて遂に刀を以て其の指を斷つ、童子負痛號哭して去る。胝、復た之を召す、童子、首を廻す。胝、卻つて指を竪起す。童子忽然として領悟す。胝、將に㋘順世せんとす、衆に謂つて曰く、「吾れ天龍一指頭の禪を得て、㋙一生受用不盡」と。言ひ訖つて滅を示す。

無門曰く、「俱胝並に童子の悟處、指頭上にあらず、若し者裏に向つて見得せば、天龍同じく俱胝並に童子と自己と一串に穿卻せん。」

頌に曰く、「俱胝鈍置す老天龍、利刃單提して小童を勘す。㋚巨靈手を擘ぐるに多子無し、分破す華山の千萬重。」

第四　胡子無鬚

㋛或庵曰く、「㋜西天の胡子、甚に因つてか鬚なき。」

無門曰く、「參は須らく實參なるべし、悟は須らく實悟なるべし。者箇の胡子、直に須らく親見一回して始めて得べし。親見と說くも早く兩箇と成る。」

㋓擧。擧は博奕の賽、采は賽に記されたるちよぼ、ちよぼは賽を轉ずるに從つて三とも五とも出る、然〳〵賽は一個と云ふ意味にして、不落も不昧も大なる相違はなしと云ひ、更に第三第四の頌句にて忽ち打ち消して千錯萬錯と云ふところ深く味ふべし。

㋔俱胝和尚。南嶽下五世の法孫にして、婺州金華山の住持なり、大梅法常禪師の法嗣、天龍和尚より一指頭の禪を相承して生涯之れを唱ふ、師は常に俱胝佛母陀羅尼を誦するを以て、時の人は俱胝和尚と呼ぶ、傳燈錄十一に傳あり。

㋕順世。釋氏要覽に曰く、「釋氏死、謂二涅槃、圓寂、歸眞、歸寂、滅度、遷化、順世一也、卽ち順世とは僧侶の死を云ふ。

㋖一生受用不盡。この語深く咏ふべし、天龍和尚より一指頭の禪を相承して以來、唯だ一本の指が永き一生涯の間、用ひ盡すとも能はずと云ひて遷化せらる、あゝ一指頭の禪とは如何、生理上の手の先に附いて廻れば白雲萬里、併しまた指を離れて說くにもあらず、無門和尚の評を見よ。

㋗巨靈。これは碧巖錄第三十二則、定上座大悟の雪竇頌の轉結にある文句にして、支那の古說に巨靈神と云ふ大力量の神あり、廣大なる大華山を無雜作に二分して、一方を首陽山とし、一方を華山として、其の間に黃河の水を通じ、遠く東海に運ぶと云ふ神話を以て、俱胝一指頭の大力量に譬へ、生死涅槃、煩惱菩提、天堂地獄も當處に分破することを得るを云ふの意。

㋘或庵。鎭江府焦州の人、或庵なり、閩の人、幼にして百丈に參じ法を嗣ぐ、斷際禪師は勅諡號にして傳心法要の著あり、法嗣に臨濟義玄禪師ありて法流今に絕えず。

㋙胡鬚赤。支那の通名として、偸心多き者を云ふ、卽ち百丈の賊、賊に逢ひ、黃檗の賊、賊を知るの意、言句の外に活躍するを看取せよ、唯だ言句の儘を解釋すれば、西洋人の髯は赤いと思へば、鬚の赤い西洋人なりきと云ふ程のことなり。

㋚一隻眼。天地と我と同根、萬物と自己と一體と見る眞理眼にして、迷悟不二、生佛一如、染淨一體と觀ずる不二一隻の心眼を云ふ。

㋛風流五百生。一隻眼を縮開すれば、野狐五百生も實に風流なる生活にして、非常なる儲物なり。

頌に曰く、「癡人面前、夢を說くべからず。胡子無鬚、㋐惺惺に㋑憎を添ふ。」

第五　香嚴上樹

㋒香嚴和尙云く、「人の樹に上るが如し、口に樹枝を啣み手に枝を攀ぢず、脚、樹を踏まず、樹下に人あつて㋓西來意を問はんに、對へずんば卽ち他の所問に違く、若し對へば又喪身失命せん。正恁麼の時、作麼生か對へん。」

無門云く、「縱ひ懸河の辯あるも、總に用不著、一大藏敎を說き得るも、亦用不著。㋔若し者裏に向つて對得著せば、從前の死路頭を活卻し、從前の活路頭を死卻せん。其れ或は未だ然らずんば、直に當來を待つて㋕彌勒に問へ。」

頌に曰く、「香嚴眞の㋖杜撰、惡毒盡限無し。祇僧の口を啞卻して、通身に鬼眼を進しらしむ。」

師體禪師と云ひ、法を溈國元に嗣ぐ、溈國元は磐巖集の錄者圓悟勤に嗣ぎし人なり、合元第二十に傳あるも、胡子無鬚の話なし、宗門葛藤集には「或庵主示衆」とあり。

㋐惺惺。了悟分明の義。

㋑憎。閻冥の義、今この一句の意を云へば、眞意問に經言を語るが如き愚にして、眞個一回、胡子を親見せよと云ふにあり。

㋒香嚴。鄧州香嚴智閑禪師は青州の人、初め百丈に參じ、後に潙山靈祐禪師の法を嗣ぐ。傳燈錄十一、會元九に傳あり。

㋓西來意。祖師西來意の略、卽ち達磨大師の西天竺より東土に來りし意思と云ふ義にして、禪宗の意義、禪宗の大意、禪宗の安心と同じ意味に用ふ。

㋔若向者裏。斯かる非常の場合に於て轉身自在、應對することを得る者は、常に與奪縱橫、殺活自在なることを得ることを示す。

㋕彌勒。補處の菩薩にして、當來五十六億七千萬年の後に出現して、弘法利生し給ふと云ふ。この一段は劣機の者に對しての言にして、急がずに修行して長い未來世の彌勒にでも問へと云ふ意なれど、實は非根機の限は到底未來世に於ても轉身自在の妙處を得ることは能はざるを云ふ。

㋖杜撰。杜は塞の義、撰は造の義、杜撰とは、道理に適せずして出鱈目に造るの意、禪宗にては極端に貶したる言は無上の讚美の辭となる。

㋗世尊拈華。大梵天王問佛決疑經に出づ。此の經、古來より眞僞の議論あり、忽滑谷快天師の禪學批判論に詳論す。

㋘世尊。世間獨尊の略、卽ち釋迦如來を尊稱する語なり。

㋙尊者。智德具備の尊稱、迦葉は頭陀第一の上首なり。

㋚正法眼藏。無限の法寶を指す、佛にありても增さず、衆生に在りても減ぜざる寶藏にして、吾人の心性を云ふ。

㋛涅槃妙心。涅槃とは不生不滅の眞理、妙心とは微妙なる淸淨眞心を云ふ。

㋜實相無相。實相卽無相、無相其儘實相、水卽ち波、波卽ち水にして、甚深微妙の法門なるを云ふ。

第六　世尊拈華

㋝世尊、昔、靈山會上に在つて、華を拈じて衆に示す。是の時衆皆默然たり。惟だ迦葉㋙尊者のみ破顏微笑す。世尊云く、「吾れに㋚正法眼藏、㋛涅槃妙心、㋜實相無相、微妙の法門あり。㋞不立文字、㋟敎外別傳、摩訶迦葉に付屬す。」

無門曰く、「㋠黃面の瞿曇、傍若無人、良を壓して賤と爲し、㋡羊頭を懸けて狗肉を賣る。將に謂へり、多少の奇特と。只だ當時大衆都て笑ふが如きんば、正法眼藏作麼生か傳へん。設し迦葉をして笑はざらしめば、正法眼藏又作麼生か傳へん。若し正法眼藏に傳授ありと道はゞ、黃面の老子、㋢閻閻を誑謾す。若し傳授無しと道はゞ、甚麼としてか獨り迦葉を許す。」

頌に曰く、「花を拈起し來れば、㋣尾巴已に

㋞不立文字。かゝる微妙の法門は文字言句の上に於ては傳ふること能はず。

㋟敎外別傳。實は一切藏經其の儘敎外別傳の宗旨にして、文字言句にのみ拘泥するを戒ふ。

㋠黃面瞿曇。黃色人種の釋迦老僧と云ふが如し、禪者は常に蠻語を用ふ、敎者は金色の釋尊と云ふ、瞿曇とは釋尊の姓なり。

㋡羊頭。看板は正法眼藏と云ひて立派なれど、實は實質粗惡の喰ほせ物と云ふ、唯だ罵つたものと見れば千錯萬錯。

㋢誑謾。臨濟錄の語、誰は欺なり、謾は大叫なり、閻とは門里の門、閻とは村里一部分の門を云ふ、卽ち村里を欺き通るの意。

㋣尾巴。巴とは大蛇なり、大蛇の尾にて、正體を知るの意、

露る。迦葉破顔、人天措くこと罔し。」

第七　趙州洗鉢

趙州、因に僧問ふ、「某甲、乍入㊇叢林、乞ふ師指示せよ。」州云く、「喫粥了や未だしや。」僧云く、「喫粥了や。」州云く、「鉢盂を洗ひ去れ。」其の僧省あり。

無門曰く、「趙州口を開いて膽を見る、心肝を露出す。者の僧、事を聞いて眞ならずんば、㊁鐘を喚んで甕と作す。」

頌に曰く、「㊄只だ分明に極むるが爲に、翻つて所得をして遲からしむ。早く知る燈は是れ火なることを、飯熟すること已に多時。」

第八　奚仲造車

㊅月庵和尚、僧に問ふ、「㊆奚仲車を造ること一百輻、㊇兩頭を拈卻し、㊈軸を去卻して甚麼邊の事をか明む。」

無門曰く、「若し也た㊉直下に明め得ば、眼、流星に似、機、掣電の如くならん。」

頌に曰く、「機輪轉ずる處、達者猶ほ迷ふ。四維上下、南北東西。」

即ち花を拈起したる處に釋迦老僧の正體は見屆けたと云ふ程の事なり。

㊇叢林。衆僧の集まりて禪學の修行をする專門道場を云ふ。

㊁喚鐘作甕。早合點を誡む、鐘を撞けと云ふを甕を敲くことと思ふ如き早計を愼んで、深く趙州の心肝の露出せるを見よとの意。

㊄只分明。理窟の關門を打破して、別境界を體得せざるべからず、禪は直覺なり、理窟にては不可能なりと知れ。

㊅月庵。潭州の人、大潙善果禪師にして開福寧に嗣ぐ、即ち無門關の著者無門和尚は月庵四世の孫に當る、會元二十に傳あり。

㊆奚仲。夏の禹王時代の人と云ふ、馬車製造の率先者なり。

㊇拈却兩頭。車の兩輪を外すことを云ふ。

第九　大通智勝

㊈興陽の讓和尚、因に僧問ふ、「㊉大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道の時如何。」讓曰く、「其の問甚だ諦當なり。」僧云く、「既に是れ坐道場、甚麼としてか不得成佛道なる。」讓曰く、「伊が不成佛なるが爲なり。」

無門曰く、「只だ㊉老胡の知を許して老胡の會を許さず。凡夫若し知らば即ち是れ聖人、聖人若し會せば即ち是れ凡夫。」

頌に曰く、「身を了せんより何ぞ心を了じて休せんには似かん、心を了得すれば兮身愁へず。心身俱に了了ならば、㊉神仙何ぞ必ずしも更に侯に封せん。」

第十　清税孤貧

㊂曹山和尚、因に僧問うて曰く、「㊇清税孤貧、乞ふ師、賑濟したまへ。」山云く、「㊈税闍梨。」税、應諾す。山曰く、「㊉青原白家の酒、三盞喫し了つて、猶ほ道ふ未だ唇を沾さずと。」

無門曰く、「清税機を輸く是れ何の心行ぞ、曹山の具眼、深く來機を辨ず、然も是の如くなりと雖も、且く道へ、那裏か是れ税闍梨、酒を喫する處。」

㊈去却軸。車の心棒を取ること、即ち車の外形を全部無くして後、何と名を附けて呼ぶやと云ふ問なり。

㊉直下明得。造車は喩なり、良く月庵の腹を見拔いて、殺活自在の妙用を知らざるべからず。

㊈興陽。傳燈錄十三、會元九に傳あり。仰山寂―南塔涌―芭蕉清―興陽讓にして潙仰宗の人なり。

㊉大通智勝佛。この四句は法華經化城喩品の偈文なり、即ち過去無量劫以前に大通智勝佛あり、無量の間、道場に坐禪したりと雖も、少しも佛道を成ずること能はざるの義なれど、深く此の偈頌を考ふる時は、禪宗の本領あり。臨濟錄に曰く、「十劫坐道場者、十波羅蜜是、佛法不現前者、佛本不レ生、法本不レ滅、云何更有ニ

頌に曰く、「貧は㋒范舟に似、氣は㋓項羽の如し。㋔活計無しと雖も、敢て與に富を鬪はしむ。」

第十一　州勘庵主

趙州、㋕一庵主の處に到つて問ふ、「有りや有りや。」主、拳頭を竪起す。州云く、「㋖水淺うして是れ舡を泊する處にあらず」といつて便ち行く。又一庵主の處に到つて云く、「有りや有りや。」主も亦拳頭を竪起す。州云く、「㋗能縱能奪、能殺能活」といつて便ち作禮す。

無門曰く、「一般に拳頭を竪起す、甚麼としてか一箇を肯ひ一箇を肯はざる。且く道へ、㋘誦訛甚の處にか在る。若し者裏に向つて一點語を下し得ば、便ち趙州の舌頭に骨無く、㋙扶起放倒、大自在を得ることを見ん。然も是の如くなりと雖も、爭奈せん趙州卻つて二庵主に勘破せらるゝことを。若し二庵主に優劣ありと道はば、未だ參學の眼を具せず。若し優劣無しと道ふも、亦未だ參學の眼を具せず。」

頌に曰く、「眼は流星、機は掣電。㋚殺人刀、活人劍。」

第十二　巖喚主人

㋛瑞巖彥和尙、毎日自ら主人公と喚び、復た自ら應諾す。乃ち云く、「㋜惺惺著、喏、他時異日、人の瞞を受くること莫れ、喏喏。」

無門曰く、「瑞巖老子、自ら買ひ自ら賣つて、許多の㋝神頭鬼面を弄出す。何が故ぞ、㋞聻。一箇は喚ぶ底、一箇は應ずる底、一箇は惺惺底、一箇は人の瞞を受けざる底、忍著すれば依前として還つて不是。若し也た㋟他に傚はば總て是れ野狐の見解ならん。」

現前、不得成佛道者、佛不應更作佛矣。」

㋒老胡。達磨を指す、此處にては大通智勝を指すとも云ふ、何れにしても字眼は知と會とにあり、知とは根本智にして理體を覺悟するの智、會とは後得智にして修行通達の智なり。

㋓神仙。自身の本佛を指す、元來本佛なるに何を苦んで修行し、他に佛を求むるやとの意。

㋔曹山。泉甯州田の人、姓は黃氏、年十九にして出家し、二十五登戒、六十二遷化す、洞山の良价禪師の法嗣なり。慧能大鑑—青原行思—石頭希遷—藥山惟儼—雲巖曇晟—洞山良价—曹山本寂。傳燈錄十七、會元十三に傳あり。

㋕清稅。僧の名、孤貧とは孤獨貧乏の略、孤貧と云ふと雖も、實は迷悟染淨共に打ち棄てた無一物の人物と云ふ意。

㋖稅闍梨。闍梨とは阿闍梨耶の略にして、軌範師の梵語、即ち弟子の行を糾正する人、今は清稅を尊崇して稅闍梨と呼ぶ。

㋗青原。青原は地名、白家は白氏の家、已下の文意は、青原白家の美い酒を腹充滿飲んで、口を拭つて素知らぬ顏をして居る如きを云ふ。

㋘范舟。後漢書列傳七十一にあり、常に客廬に寓息し、木陰に依宿し、粮粒盡くれども而も自若たり、斯くの如く貧に甘んずるが爲、貧の代表者に擧ぐ。

㋙項羽。史記項羽本紀第七に傳あり、漢の高祖と天下を爭ひし人にして、力山を拔き氣は世を蓋ふ、依つて豪勇の人物の代表者に擧ぐ。

㋚活計。蘇溪和尙の牧護歌に曰く、「活計雖無一錢、敢與君王鬪富」と。即ち身は貧乏をしても、精神の富を鬪はすには、如何なる富豪とでも相撲を取る氣力ありとの意。

㋛一庵主。庵主とは世に隱れて道を養ふ人を指す。

㋜水淺。趙州恰も庵主の擧頭を肯はざる口吻を示す。

㋝能縱。此處にては趙州が殺活自在の力ある拳頭と云ふ、恰も肯ふたる如く作禮す。

㋞誦訛。俗語を以て云へば魂膽入組と云ふ程の意。

㋙扶起放倒。一方を扶け起し、一方を押し倒す、即ち一は活し一は殺すところの大自在の力を云ふ。

㋚殺人刀。刀の用處に殺人刀と活人劍とあり、人を殺すのみの刀に非ずして、實は人を活して縱橫無碍に働くを以て眞個の刀の用處となす。

㋛瑞巖。閩越の人、姓は許氏、幼より出家して岩頭を禮し、微酬良く忒ふことなくして遂に法を嗣ぐ。馬祖道一—天皇道悟—龍潭崇信—德山宣鑑—岩頭全奯—瑞巖師彥。傳燈錄十七、五燈會元七に傳あり。

㋜惺惺。了慧分明の義、第四則の頌參照せよ、此處は眼を丸くして「はい」と諾するの意。

㋝神頭鬼面。一箇は喚底、一箇は應ずる底の怪物、これ畢竟何物ぞと云ふ意。

㋞聻。物を指す貌にして、詰問詞に用ふ、俗語にて云へば、「是れは如何に」と云ふ意。

㋟他。瑞巖和尙を指す。

㋠學道。此の頌は長沙岑禪師の作なり、無門和尙自ら頌を作らずして此の頌を引く、意味更に深し、傳燈錄第十參照せよ。

頌に曰く、「㊁學道の人眞を識らざることは、只だ從前識神を認むるが爲なり。無量劫來生死の本、癡人喚んで本來人と作す。」

第十三　德山托鉢

㊂德山、一日托鉢して堂に下る、㊃雪峯に「者の老漢、鐘未だ鳴らず鼓未だ響かざるに、托鉢して甚の處に向つて去る」と問はれて、山、便ち㊄方丈に回る。峯、㊅巖頭に擧似す。頭云く、「㊆大小の德山、未だ末後の句を會せず。」山、聞いて㊇侍者をして巖頭を喚び來らしめて、問うて曰く、「汝、老僧を肯はざるか。」巖頭、密に其の意を啓す。山乃ち休し去る。明日陞座、果して尋常と同じからず。巖頭、僧堂前に至つて掌を拊して、大笑して云く、「且喜すらくは老漢末後の句を會することを得たり、他後天下の人、伊を奈何ともせず。」

無門曰く、「若し是れ末後の句ならば、巖頭、德山俱に未だ夢にだも見ざること在らん。檢點し將ち來れば、好し㊈一棚の傀儡に似たり。」

頌に曰く、「最初の句を識得すれば、便ち末後の句を會す。末後と最初と、是れ者の一句にあらず。」

㊁德山。劍南の人、姓は周氏、初め律藏を精究し、性相の諸經を學び、常に金剛般若を講ず、後禪宗に入り、龍潭崇信禪師の法嗣となる、傳燈錄十五に傳あり。

㊂雪峯。泉州の人、閩川の象骨山に居して化す、即ち雪峯義存禪師にして、德山の法嗣なり、この時德山の會下にありて飯頭を勤む。

㊄方丈。禪僧の居室を云ふ、維摩經の毘耶離城維摩の室を本據となす。

㊅巖頭。泉州の人、洞庭の臥龍山に居して化道す、即ち巖頭全奯禪師にして、德山の法嗣なり、この時德山會下の上首たりき。

㊆大小。この時代の俗語にして、「流石に」と云ふ程の意。

㊇侍者。長老の左右に侍して、雜用を辨ずる者を云ふ。

第十四　南泉斬猫

㊉南泉和尙、因に東西の兩堂猫兒を爭ふ、泉乃ち提起して云く、「大衆、道ひ得ば即ち救ひ得ん、道ひ得ずんば即ち斬卻せん。」衆、對ふる無し。泉遂に是を斬る。晚に趙州、外より歸る。泉、州に擧似す。州乃ち履を脫して頭上に安じて出づ。泉云く、「子、若し在りしかば即ち猫兒を救ひ得ん。」

無門曰く、「且く道へ、趙州、草鞋を頂く意作麼生、若し者裏に向つて一轉語を下し得ば、便ち南泉の令、虛りに行ぜざることを見ん。其れ或は未だ然らずんば險。」

頌に曰く、「趙州若し在らば、倒に此の令を行ぜん。刀子を奪卻せば、南泉も命を乞はん。」

第十五　洞山三頓

㊀雲門、因に㊁洞山參ずる次で、門、問うて曰く、「近離甚の處ぞ。」山云く、「㊂查渡。」門云く、「㊃夏、甚の處にか在る。」山云く、「湖南の報慈。」門云く、「幾時か彼を離る。」山云く、「八月二十五。」門云く、「汝に㊄三頓の棒を放す。」山、明日に至つて卻つて上つて問訊す。「昨日、和尙の三頓の棒を放すこ

㊈一棚傀儡。傀儡とは木偶の人形にして、同じ舞臺の上の人形芝居と云ふ程の意。

㊉南泉。鄭州新鄭の人、姓は王氏、始め大隗山の大慧禪師に依つて業を受け、三十にして戒を受けて毗尼を學び、更に性相の學に志し、後馬祖の室を扣いて頓に筌を忘れ、終に其の心印を得たり。自ら池陽に禪院を構へて山を出でざること三十年、終に南泉に下りて學徒に接す、世壽八十七にして寂す、法嗣に趙州和尙あり、傳燈錄八、會元三に傳あり。險はあゝ、あぶない。

㊀雲門。姑蘇嘉興の人、姓は張氏、韶州雲門山光奉院に居る、雪峯義存禪師の法嗣にして、雲門宗の初祖なり。

㊁洞山。洞山の守初禪師を云ふ、即ち雲門文偃禪師の法嗣として崇惠大師と諡せらる。

とを蒙る、知らず過甚麼の處にか在る。」門云く、「㋑飯袋子、江西湖南、便ち恁麼にし去るか。」山、此に於て大悟す。

無門曰く、「雲門、當時便ち㋒本分の草料を與へて、洞山をして別に㋓生機の一路あつて、家門寂寥を致さじ、一夜㋔是非海裏に在つて、著倒して直に天明を待つて再來すれば、又㋕他の與に注破す。洞山直下に悟り去るも、未だ是れ㋖性燥ならず。且く諸人に問ふ、洞山三頓の棒、喫すべきか喫すべからざるか。若し喫すべしと道はば、草木叢林皆棒を喫すべし、若し喫すべからずと道はば、雲門又誑語を成す。者裏に向つて明め得ば、方に洞山と一口の氣を出さん。」

頌に曰く、「㋗獅子、兒を教ふ迷子の訣、㋘前まんと擬して跳躑いて早く飜身す。㋙端無く再び叙ぶ當頭著、㋚前箭は輕く、㋛後箭は深し。」

第十六　鐘聲七條

雲門曰く、「世界恁麼に廣闊たり。甚に因つてか鐘聲裏に向つて㋜七條を披る。」

無門曰く、「大凡そ參禪學道は、切に忌む㋝聲に隨ひ色を逐ふことを。縱使ひ㋞聞聲悟道、㋟見色明心なるも、也た是れ尋常なり。殊に知らず衲僧家、㋠聲に騎り色を盖ひ、頭頭上に明に、著著上に妙なることを。然も是の如くなりと雖も、且く道へ、聲、耳畔に來るか、耳、聲邊に往くか。直饒ひ響寂雙び忘ずるも、此に到つて如何が話會せん。若し耳を將つて聽かば、應に會し難かるべし。㋡眼處に聲を聞いて、方に始めて親しからん。」

頌に曰く、「㋢會するときは則ち事、同一家、㋣會せざるときは則ち萬別千差。」

國師云く、「㋤將に謂へり、

㋑飯袋子。人を罵るの意、飯袋の義にして、俗に「穀つぶし」と云ふに當る、卽ち「是の廣袋、湖西湖南と何をうろ付いて歩く」と云ふ程の意味なり。

㋒本分草料。俗に持前の奥の手と云ふが如し、草料とは馬の食物なれど、此處は法喜食、禪悦食に當る。

㋓生機。復活の一路と云ふが如し。

㋔是非海裏。一大煩惱の圓にと云ふ意。

㋕他。雲門を指す。

㋖性燥。利根にあらざるの意。

㋗獅子。獅子は其の子を育つるに、千尋の崖より蹴落す、雲門の洞山を取扱ふに、汝に三頓の棒を放すと蹴落したるに當る。

㋘擬前。第二句の頌は、獅子の子の身を踊らして却つて親に飛び付くに喩ふ、卽ち洞山の明日の問訊を指す。

㋙無端。第三句の頌は、雲門が再び抑止して飯袋子等と云へるに當る。

㋚前箭。雲門、前日四度の言を指す。

㋛後箭。雲門明日の一言、卽ち洞山をして大悟せしむる言を指す。

㋜七條。七條衣を縮す、上著衣とも中價衣とも食衣とも云ふ、卽ち袈裟のことなり。五條は行脚衣、七條は食衣、九條は說法衣、二十五條は涅槃衣と云ふ。而して竪横に縫目あるは田を象るの意、故に福田衣とも云ふ。

㋝隨聲。外境に支配されるの義。

㋞聞聲悟道。香嚴和尚の擊竹の聲にて悟入し、永明禪師の蕾の墮ちし音にて悟りたる如きを云ふ。

㋟見色明心。釋尊の明星を見て大悟し、靈雲和尚の見桃悟入の如きを指す。

㋠騎聲。眞く外境を支配するの義。

㋡眼處。大燈國師の歌に、「耳に見て、眼に聞くならば最はや、おのづからなるのきのたま水」と、これと同じ消息なり。

㋢會するとき。一家に會するときは、萬別千差を見るの意。

㋣會せざるとき。萬別千差を見るときは、一家に會せざるの意。

㋤將に謂へり。國師三喚

㋥國師、三たび侍者を喚ぶ、侍者三たび應す。國師云く、「㋦將に謂へり、

吾れ汝に辜負すと、元來卻つて是れ汝、吾れに辜負す。」

無門曰く、「國師三喚、(ナ)舌頭地に墮つ。侍者三たび應す、光に和して吐出す。國師年老い心孤にして、牛頭を按じて草を喫せしむ。侍者未だ肯て承當せず、美食飽人の飡に中らず。且く道へ、那裏か是れ他の辜負の處。(ラ)國淸うして才子貴く、家富んで小兒(ム)嬌る。」

頌に曰く、「(ウ)鐵枷無孔人の擔はんことを要す、累兒孫に及んで等閑ならず、(ヰ)門を撑へ並に戶を拄ふることを得んと欲せば、更に須らく赤脚にして刀山に上るべし。」

第十八　洞山三斤

(ノ)洞山和尙、因に僧問ふ、「如何なるか是れ佛。」山云く、「麻三斤。」

り。

(レ)會則。千差萬別の諸法の間に橫はる一眞理を體得せば、萬物一體、平等無差別なり、但し迷へば山は山、川は川と千差萬別の境界を現前するとの意。

(ソ)不會。更に前二句の半面を言ふ、卽ち表裏兩面を體得して、始めて眞理を悟入すと云ふを得。

(ツ)國師。西京の光宅寺慧忠國師を云ふ、越州諸曁の人、姓は冉氏、心印を六祖に嗣ぎ、南陽の白崖山黨子谷に居る、後、千福寺光宅寺に住して、敎風大いに振ふ。傳燈錄五、會元二に傳あり。

(ネ)將に謂へり。巳下の文意を通俗に云へば、「吾の說得の仕方が惡いと思ふたら、卻つて汝の修行が足らぬのである」と云ふ意。

(ナ)舌頭地。國師は親切が過ぎ、侍者は親切を知らずして我儘育ちの意。

(ラ)國淸。これは太公望の言、明心寶鑑に出づ。

(ム)嬌。嬌は驕の誤りと云ふべし。

(ウ)鐵枷。鐵枷には罪人の首を入れるべき孔のあるもの、然るに無孔と云へば何等用を爲さん、厄介者と云ふ意。

(ヰ)欲得。眞個禪門を撑へ禪戶を拄へんと思はば、赤脚以て獻身的に修行せよと云ふ意。

(ノ)洞山。洞山守初禪師にして、前の第十五則を參照せよ。

(オ)蚌蛤。蚌蛤とは蛤にして、蛤が口を開いて五臟六腑を見せて居る貌、卽ち洞山が肝腸まで露出して居るゆゑ、見屆けよと云ふ意。

(ク)突出。麻三斤と云ひたるは、正しく心肝五臟を諸人に呈示

無門曰く、「洞山老人、些の(オ)蚌蛤の禪に參得して、纔に兩片を開いて肝腸を露出す。然も是の如くなりと雖も、且く道へ、甚の處に向つてか洞山を見ん。」

頌に曰く、「(ク)突出す麻三斤、言親しうして意更に親し。(ヤ)來つて是非を說く者は、便ち是れ是非の人。」

第十九　平常是道

南泉、因に趙州問ふ、「如何なるか是れ道。」泉云く、「平常心是れ道。」州曰く、「還つて趣向すべきや否や。」泉云く、「向はんと擬すれば卽ち乖く。」州云く、「擬せずんば爭か是れ道なることを知らん。」泉云く、「道は知にも屬せず、不知にも屬せず、知は是れ(マ)妄覺、不知は是れ(ケ)無記、若し眞に不疑の道に達せば、猶ほ(フ)太虛の廓然として洞豁なるが如し。豈に强ひて是非すべけんや。」州、言下に於て頓悟す。

無門云く、「南泉、趙州に發問せられて、直に得たり瓦解氷消、分疎不下なることを。趙州、縱饒ひ悟り去るも、更に參ずること三十年にして始めて得ん。」

したるところ、誠に親切なる言葉なり。

(ヤ)來說。他人の是非を說く人は、その本人も他人から是非を云はれる人と云ふ意、大いに學者の反省を促す。三祖も云く、「纔有二是非一紛然失レ心」と。

(マ)妄覺。妄想覺觀の略、卽ち吾人の心意識に於ける麤細分別の總稱なり、而して是の道は思慮分別の及ばざるところなり。

(ケ)無記。善性にもあらず、惡性にもあらざる無記性を云ふ。

(フ)太虛。眞空無相の境界を云ふ、洞山は曰く、「無心合レ道」と。

(コ)若し閑事云々。此の頌は實に平生心是れ道の意を說き盡して餘蘊なし、殊に轉句に至りて其の意最も顯る。

(エ)松源。松源崇岳禪師、初め居

頌に曰く、「春に百花あり秋に月あり、夏に涼風あり、冬に雪あり。(コ)若し閑事の心頭に挂くる無くんば、便ち是れ人間の好時節。」

第二十　大力量人

(エ)松源和尚云く、「(テ)大力量の人、(ア)甚に因つてか脚を擡げ起さゞる。」又云く、「(サ)口を開くこと舌頭上に在らず。」

無門曰く、「(キ)松源謂つべし、腸を傾け腹を倒すと、只だ是れ人の承當することを缺く。縱饒ひ直下に承當するも、正に好し無門が處に來らば痛棒を喫するに。何が故ぞ、聻。(ユ)眞金を識らんと要せば火裏に看よ。」

頌に曰く、「脚を擡げて踏飜す(メ)香水海、頭を低れて俯して視る(ミ)四禪天。(シ)一箇の渾身著くるに處無し、請ふ一句を續げ。」

第二十一　雲門屎橛

雲門、因に僧問ふ、「如何なるか是れ佛。」門云く、「(ヱ)乾屎橛。」

無門曰く、「雲門謂つべし、(ヒ)家貧にして素食を辨じ難し、事忙しうして草書するに及ばずと。動もすれば便ち屎橛を將ち來つて、門を撐へ戶を拄ふ、佛法の興廢見つべし。」

士の身を以て應庵曇華禪師に參じ、更に密庵咸傑に見えて法を嗣ぐ。楊岐方會―白雲守端―五祖法演―圜悟克勤―應庵曇華―密庵咸傑―松源崇岳。

(テ)大力量人。松源の三轉語の中、之は第一第二を出して第三を略す、第三轉の語に曰く、「明眼衲僧、因ニ甚麽ニ脚下紅絲線不レ斷。」此の第三轉を擧げざる意は、師の塔銘に第一第二を記して、第三を略するが爲なり。

(ア)因甚。自分で自分の足を何故に擡げ得ないかと云ふ意。

(サ)開口。口を開いて何故に舌の上にて饒舌り廻さんかと云ふ意。

(キ)松源。松源和尚の五臟六腑を丸出しにして居るも知らん者のみと云ふ意。

(ユ)眞金。黄金の眞僞を識らんとするには、須らく火中に投じて試驗する如く、悟道の眞僞を知るには先づ言句を以て試驗するとの意。

(メ)香水海。印度の須彌山說にて九山八海を立つ、八海の中の一を香水海と云ふ。

(ミ)四禪天。欲色無色の三界の中、色界の初禪二禪三禪四禪天を指す。

(シ)一箇。實に身體の置場がない、如何にせば眞きが一句云へとの意。

(ヱ)乾屎橛。此れは除糞の器なり、支那の山間僻地に於ては、大便所の傍に橛棒を横へ置き、糞し了りて之れに跨り、尻を着けて磨し去ること四五歩するなり、故に此の橛棒子には常に乾糞を止む、之れを乾屎橛と云ふ、我が國の木曾山中に於ても短小の木楔を以て糞箆となすと云ふ、今、佛の問に對して乾屎橛と答ふ、反語に非ず、倒語に非ず、雲門の五臟六腑を見よ。

(ヒ)家貧。道は貧道より貴きはなし。

頌に曰く、「閃電光、撃石火。眼を眨得すれば、已に蹉過す。」

第二十二　迦葉刹竿

(モ)迦葉、因に(セ)阿難問うて云く、「世尊、金襴衣を傳ふる外、別に何物をか傳ふ。」葉、喚んで云く、「阿難」と。難、應諾す。葉云く、「門前の(ス)刹竿を倒卻し著せよ。」

無門曰く、「若し者の裏に向つて一轉語を下し得て親切ならば、便ち靈山の一會儼然未散なることを見ん。其れ或は未だ然らずんば、(イ)毘婆尸佛早く心を留む、直に而今に至るまで妙を得ず。」

頌に曰く、「問處は何ぞ答處の親しきに如かん、幾人か此に於て(ロ)眼に筋を生ず。兄呼び弟應じて(ハ)家醜を揚ぐ、(ニ)陰陽に屬せず別に是れ春。」

第二十三　不思善惡

(モ)摩訶迦葉。摩竭陀國の人、姓は婆羅門、父は飲澤、母は香至、佛弟子中に於て第一と稱歎せられ、滅後の如來と仰がる、後阿難に法を傳へて鷄足山に入り、慈氏の下生を俟つ。傳燈錄一に傳あり。

(セ)阿難。王舍城の人、姓は刹帝利、父は斛飯王、佛の從弟なり、多聞博達を以て第一とす。傳燈錄一に傳あり。

(ス)刹竿。寺門の前に立てる旗を云ふ。

(イ)毘婆尸佛。法華經に本據あり、即ち過去七佛の一人にして、早くより心を留めても更に妙處を得ざるの因緣を擧ぐ。

㋐六祖、因に㋑明上座、趁ふて大庾嶺に至る。祖、明の至るを見て、卽ち衣鉢を石上に擲つて云く、「此の衣は信を表す、力をもて爭ふべけんや、君が將ち去るに任す。」明、遂に之を擧ぐるに、山の如くにして動せず、踟躕悚慄す。明曰く、「我れ來つて法を求む、衣の爲にするに非ず、願はくは行者開示したまへ。」祖云く、「不思善不思惡、正與麼の時、那箇か是れ明上座が本來の面目。」明、當下に大悟し、遍體汗流る。泣淚作禮して問うて曰く、「上來の密語密意の外、還つて更に意旨ありや否や。」祖曰く、「我れ今汝が爲に說く者は卽ち密に非ず、汝若し自己の面目を返照せば、密は卻つて汝が邊に在らん。」明曰く、「某甲、㋒黃梅に在つて衆に隨ふと雖も、實に未だ自己の面目を省せず、今入處を指授することを蒙つて、人の水を飮んで冷暖自知するが如し。今行者は卽ち是れ某甲が師なり。」祖云く、「汝若し是の如くならば、則ち吾れと汝と同じく黃梅を師とせん、善く自ら護持せよ。」

無門曰く、「六祖謂つべし、是の事は急家より出づと、老婆心切なり。譬へば㋓新荔支の殼を剝ぎ了り、核を去け了つて、儞が口裏に送在して、只だ儞が嚥一嚥せんことを要するが如し。」

㋐眼生筋。俗語にて云へば、眼を白黑さして覆ぎ廻るとの意。

㋑家醜。內處事なり、迦葉阿難の兄弟が內輪事を表面に持ち出すと云ふ意。

㋒陰陽。別世界の春景色にして、兄弟の云ふに云はれぬ圓滿なる狀態を顯す。

㋓六祖。慧能大鑑禪師、新州の人、俗姓は盧氏、幼にして父を喪ひ、母子二人、家極めて貧し、一日金剛經を聽いて感ずるところあり、終に五祖弘忍禪師に就いて修行し、その付法となること六祖壇經の如し、此の則は慧能が下賤の身を以て五祖の衣鉢を繼ぎ、夜に入りて南方に走らんとする處を、慧明上座が跡より追ふて大庾嶺に到り、問答する因緣なり、傳燈錄三に傳あり。

㋑明上座。袁州蒙山慧明禪師、

頌に曰く、「㋙描すれども成らず畫けども就らず、贊するに及ばず㋚生受することを休めよ。本來の面目、藏すに處沒し、世界壞する時、㋛渠れ朽ちず。」

第二十四　離卻語言

㋐風穴和尙、因に僧問ふ、「語默は㋐離微に涉る、如何が㋕不犯を通ぜん。」穴云く、「㋖長へに憶ふ江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し。」

無門曰く、「風穴、機、掣電の如く、路を得て便ち行く、爭奈せん㋗前人の舌頭に坐して斷せざることを。若し者裏に向つて見得して親切ならば、自ら出身の路あらん。且つ語言三昧を離卻して、一句を道ひ將ち來れ。」

頌に曰く、「㋘風骨の句を露さず、未だ語らざるに先づ分付す。㋙歩を進めて口喃喃、知ん

鄱陽の人、陳の宣帝の裔なり、極めて求道心の深きこと此の則にても知り得べし。

㋒黃梅。蘄州の黃梅、卽ち五祖弘忍大師の住所なり、故に五祖を指す。

㋓新荔支。果物の名、龍眼肉の如き枇杷の類なり、此處は老婆心切の譬にして、果物の殼を剝ぎ取り、其の核を取り除き、正味の御馳走を口中に送在せしめ、嚥一嚥せしめるの意。

㋙描すれども云々。慧明の言下に大悟せしところを形容して、如何なる美術家も描し、畫き、贊すること能はざるを云ふの意。

㋚生受。生受に就いて異解多し、受とは領納の義、卽ち俗語を以て云へば、「胡椒丸呑みでは駄目である、止めよ〳〵」と云ふ程の意か。

㋛渠れ朽ちず。世界の成壞に關係せず、本來の面目のみは光明赫々たるの義。

㋐風穴。汝州風穴延沼禪師、餘杭の人、初め鏡淸及び守廓に從ひ、後南院の惠顒禪師に就いて法を嗣ぐ。臨濟義玄—興化存獎—南院惠顒—風穴延沼。傳燈錄十三に傳あり。

㋐離微。僧肇法師の寶藏論にあり、默の極を離と云ひ、語の極を微と云ふ、卽ち語默離微は相對的の言なり。

㋕不犯。語默の二方面を犯さず、絕對の境界を問ふの意。

㋖長に憶ふ。已下の文意を云へば、天下の絕景たる江南の春三月、美い聲で啼く鷓鴣が頻りに囀り、百花咲き亂れて何とも譬へるに言葉なしと云ふ程の意、是れ犯か不犯か、語か默か。

㋗前人。問ひし僧を指す。

ぬ君が大いに措くこと罔きことを。」

第二十五　三座說法

(ヲ)仰山和尙、夢に彌勒の所に往いて(ネ)第三座に安せらる。一尊者あり、(ナ)白槌して云く、「(ラ)摩訶衍の法は(ム)四句を離れ(ウ)百非を絶す、諦聽諦聽」といふを見る。無門曰く、「且く道へ、是れ說法するか說法せざるか。口を開けば卽ち失し、口を閉づれば又喪す。開かず閉ぢざるも、(ヰ)十萬八千。」頌に曰く、「白日靑天、夢中に夢を說く。(ノ)揑怪揑怪、一衆を誑謾す。」

第二十六　二僧卷簾

(オ)淸涼の大法眼、因に僧、齋前上參す。眼、手を以て簾を指す。時に二僧あり、同じく去つて簾を卷く。眼曰く、「(ク)一得一失。」無門曰く、「且く道へ、是れ誰か得誰か失。若し者裏に向つて(ヤ)一隻眼を著得せば、便ち淸涼國師(マ)敗闕の處を知らん。然も是の如くなりと雖も、切に忌む(ケ)得失裏に向つて商量することを。」頌に曰く、「(フ)卷起明明として太空に徹す、太空猶ほ未だ吾が宗に合はず。爭か似かん空より都べて放下して、(コ)綿綿密密風を通せざらんには。」

第二十七　不是心佛

南泉和尙、因に僧問うて云く、「還つて人の與に說かざる底の法ありや。」泉云く、「有り。」僧云く、「如何なるか是れ人の與に說かざる底の法。」泉云く、「(エ)不是心、不是佛、不是物。」無門曰く、「南泉者の一問を被りて、直に得たり(テ)家私を揣盡して(ア)郎當少からざることを。」頌に曰く、「(サ)叮嚀は君德を損す、無言眞に功あり。任從あれ(キ)滄海は變するとも、終に君が爲に通せじ。」

第二十八　久響龍潭

(ユ)龍潭、因に德山(メ)請益して夜に抵る、潭云く、「夜深けぬ、子何ぞ下り去らざる。」山遂に珍重

(レ)風骨。この頌は雲門の偈頌なり、風骨とは風彩樣子の義。

(ソ)逈步。風穴の語に就いて口喃喃と理窟を述ぶれば、既に不犯の境界には遠く隔つとの意。

(ツ)仰山。袁州仰山慧寂禪師、韶州懷化の人、姓は葉氏、年十七にして出家し、諸方を歷遊す、終に溈山靈祐禪師の法嗣となる、傳燈錄十一に傳あり。

(ネ)第三座。五燈會元九、類聚五等には第二座とあり。

(ナ)白槌。人に注意を與ふる時に短き柱の頭を槌にて打つこと。

(ラ)摩訶衍。梵語、譯して大乘と云ふ。

(ム)四句。一異有無の四句を指す。

(ウ)百非。第一句は一非レ一、第二句は一亦非レ一、第三句は非レ非レ一、第四句は非レ非レ一、卽ち一に就いて四句あるが如く、異有無の三句に就いても又各四句あり、故に十六句となる、是れに三世の已起未起に配當して九十六非を得、更に初めの四句を加へて百非を數ふ、卽ち四句百非とは相對差別の偏見を總稱するの意。

(ヰ)十萬八千。大乘法に隔つる十萬八千も遠しとの意。

(ノ)揑怪。揑は捻聚、怪は奇異、卽ち靑天白日の幽靈物語を以て衆人を惑す、誰か之れを信ずるものあらんやとの意。

(オ)淸涼。昇州淸涼院の文益禪師、法眼宗の始祖、餘杭の人にして姓は魯氏、七歲にして出家し、諸匠を歷訪す、終に前漳州羅漢桂琛禪師の法嗣となる。雪峰義存—玄沙師備—羅漢桂琛—淸涼文益。

(ク)一得一失。一人は得、一人は失ふとの意。

(ヤ)一隻眼。禪宗の宗旨眼、卽ち悟道を得たる心眼を指す。

(マ)敗闕。法眼禪師の失言。

(ケ)得失。文字に就いて得失の理窟を云へば、法眼禪師の心底は見えざるなり。

(フ)卷起。簾を卷き上げて日本晴の意。

(コ)綿綿。簾を垂れ、水も漏さぬ綿々密々の境界に到らざるべからずとの意。

(エ)不是心。佛に三百餘會の說法ありて、橫說縱說至らざるなし、然るに今南泉は說かざる底の法ありと云ひて、不是心、不是佛、不是物と答ふ、馬祖は卽心卽佛と云ふ、南泉は其の反面を答ふ、共に說明すること能はざる底の法なり。

(テ)揣盡。揣は稱量忖度の義、又

して簾を揭げて出づ。外面の黑きを見て、卻回して云く、「外面黑し。」潭乃ち紙燭を點じて度與す。山、接せんと擬す。潭便ち吹滅す。山此に於て忽然として省あり、便ち作禮す。潭云く、「子箇の甚麼の道理をか見る。」山云く、「某甲、今日より去つて天下の老和尙の舌頭を疑はず。」明日に至つて龍潭陞堂して云く、「㊂可の中箇の漢あり、牙劍樹の如く、口血盆に似たり、一棒に打てども頭を回さず。他時異日、孤峯頂上に向つて㊁君が道を立する在らん。」山遂に㊁疏抄を取つて法堂前に於て、一炬火を將つて提起して曰く、「㊃諸の玄辯を窮むるも、一毫を太虛に致くが若く、世の樞機を竭すも、一滴を巨壑に投ずるに似たり」といつて、疏抄を將つて便ち燒く。是に於て禮辭す。

無門曰く、「德山未だ㊂關を出でざる時、㊃心憤々、口悱悱たり、得得として南方に來つて、教外別傳の旨を滅卻せんと要す。澧州の路上に到るに及んで、婆子に問うて㊄點心を買はんとす。婆云く、『大德、車子の內是れ甚麼の文字ぞ。』山云く、『金剛經の抄疏。』婆云く、『只だ經中に道ふが如きん ば、過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得と。大德、那箇の心をか點 せんと要す。』德山、者の一問を被つて、直に得たり口㊆匾擔に似たること を。然も是の如くなりと雖も、未だ肯て婆子の句下に向つて死卻せず、㊅逐 に婆子に問ふ、『近處に甚麼の宗師か有る。』婆云く、『五里の外に龍潭和尙あ り。』龍潭に到るに及んで敗闕を納れ盡す。謂つべし是れ㊇前言後語に應せ ずと。㊈龍潭大いに兒を憐んで醜きことを覺えざるに似たり。㊉他の些子 の火種あるを見て、郎忙して惡水を將つて驀頭に一澆に澆殺して、冷地に 看來らば一場の好笑ならん。」

頌に曰く、「㊋名を聞かんより面を見んには如かじ、面を見んより名を聞 かんには如かじ。然も鼻孔を救ひ得ると雖も、爭奈せん眼睛を瞎卻するこ とを。」

除の義にして、一家の私財を投げ盡しても何の役にもならぬとの意。

㊆郎當。浮浪の義、用をなさぬこと。

㊇叮嚀。南泉が叮嚀に答へたるは、却つて失言なり、無言なりした可とす。

㊈滄海。年代久しき形容詞に用ふ、卽ち草田變じて海となると雖も、決して此の事のみは說くこと能はずとの意。

㊉龍潭。澧州龍潭崇信禪師、渚宮の賣餅家の子、姓氏は未詳なれど、少にして英異、荊州天皇道悟禪師の室に入りて法嗣となる、道悟禪師の法系に就いては古來頗る異說あり、一說は石頭の付法と云ひ、一說は馬祖の心印を受くと云ひ、或は當時二人の道悟ありと云ふ、眞僞容易に決すべからず、傳燈錄十四に傳あり。因に此の則は無門の評より讀み始めて、後本則を見るときは、文意甚だ明瞭となる。

㊊講益。論語の語、弟子の師に教を請ふの義。

㊋可中。德山省悟の披露なり。

㊌君。傳燈錄、曾元、碧巖等みな君の字を我の字に作れり。

㊍疏抄。德山の手まで珍重せし金剛經の註釋本を指す。

㊎諸玄辯。是の二句は肇論の文にして、之は疏抄を燒くの弔文となす、卽ち經文の言句に拘泥して本心を究めざるを誡しめたるにあり。

㊏關。吾が宗の關門、卽ち悟道の妙境を透徹せざる以前の德山を指す。

㊐心憤憤。不平滿々にして勝他の意、卽ち獨に居りし時、自己の珍重せる金剛經を以て、教外別傳の宗旨を滅卻せんと云ひて澧州に來りしなり。

㊑點心。點茶の點と同義、卽ち少しく食して心を鎭むるの意。俗にいふこゝろづけ。

㊒匾擔。恰も擔ひ棒の如く、口なへの字にして答を爲すこと能はざる狀を示す。

㊓逐問。德山の凡人に非ざるところ、卽ち婆子すら此の如し、必ずや近邊に大善知識あらんと思ひたるなり。

㊔前言。前言とは獨にありし時の言を指す、後語とは龍潭の處にて云ひし語を指す、卽ち德山の大敗闕を云ふ。

㊕龍潭。龍潭の德山を接せしは、自己の醜態を顧みずして兒を愛するに似たりと云ふが如し。

㊖他些子。德山に多少の法器があると云ひて、餘りに龍潭の老婆親切なることを說く。

㊗聞名。德山に就いての抑揚と見るべし、後の二句殊に佳

第二十九　非風非幡

六祖、因に㋑刹幡を颺ぐ、二僧あり、對論す、一りは云く、「幡動く」と、一りは云く、「風動く」と、往復して曾て未だ理に契はず。祖云く、「是れ風の動くにあらず、是れ幡の動くにあらず、仁者が心動く。」二僧㋒悚然たり。

無門曰く、「是れ風の動くにあらず、是れ幡の動くにあらず、㋐是の心の動くにあらず、甚の處にか祖師を見ん。若し者裏に向つて見得して親切ならば、方に知る二僧㋓鐵を買つて金を得。㋔祖師忍俊不禁、一場の㋕漏逗なることを。」

頌に曰く、「風幡心動、一狀に領過す。只だ口を開くことを知つて、話墮することを覺えず。」

第三十　卽心卽佛

㋖馬祖、因に㋗大梅問ふ、「如何なるか是れ佛。」祖云く、「㋘卽心是佛。」無門曰く、「若し能く直下に領略し得去らば、佛衣を著け佛飯を喫し、佛話を說き佛行を行せば、卽ち是れ佛ならん。然も是の如くなりと雖も、大梅多少の人を引いて、錯つて㋙定盤星を認めしむ。㋚爭が知らん箇の佛の字を說くも、三日口を漱ぐと道ふことを。若し是れ箇の漢ならば、卽心是佛と說くを見ば耳を掩ふて便ち走らん。」

頌に曰く、「青天白日、切に忌む尋覓することを。更に如何と問へば、㋛賊を抱いて屈と叫ぶ。」

第三十一　趙州勘婆

趙州、因に僧、婆子に問ふ、「㋜臺山の路、甚の處に向つてか去る。」婆云く、「㋝驀直去。」僧纔に行くこと三五步。婆云く、「㋞好箇の師僧、又恁麼にし去る。」後に僧ありて州に擧似す。州云く、「待て、我れ去つて倆が與に這の婆子を㋟勘過せん。」明日便ち去つて亦是の如く問ふ、婆も亦是の如く答ふ。州歸つて衆に謂つて曰く、「臺山の婆子、我れ倆が與に勘破し了れり。」

無門曰く、「婆子只だ坐ながら㋠籌を帷幄に解して、㋡要且つ賊を著くることを。知らず趙州老人、善く謦を偸み寒を劫すの機を用ひて、又且つ㋢大人の相無し、檢點し將ち來れば、二りは俱に過あり。且く道へ、那裏か是れ趙州、婆子を勘破する處。」

し、鼻は救はれても眼は潰されたとの文面なれど、實は德山も氣持ちの良い悟りに入つたと褒むるの意。

㋑刹幡。刹とは國の義、今は寺の義に用ふ、寺に說法ある時寺中に旗を立つ、これを刹幡と云ふ。仁者はきみなり。法華經にていふ。

㋒悚然。怖れを懷き、あつけに取らるゝの意。

㋓不是心動。六祖の心動を掃蕩して、此の外に六祖の面目を見よとの意、心動を字の如く見るものを誡む。

㋔買鐵。鐵とは二僧の風動と幡動とを指す、金は六祖の心動を云ふ。

㋕祖師忍俊。六祖が二僧の水掛論を聞くに忍びず、飛び出して仁者心動と云ふは却つて六祖の失敗と抑揚す。

㋖漏逗。祕密を漏して他人に告ぐの意、玆は失敗とでも云ふべし。

㋗馬祖。漢州の人、姓は馬氏、容貌極めて奇異、牛行虎視、凡僧にあらず、南嶽懷讓の法嗣となる、傳燈錄七に傳あり。

㋘大梅。明州大梅山の法常禪師、襄陽の人、姓は鄭氏、馬祖の法嗣。

㋙卽心是佛。心は迷、佛は悟にして、迷心卽佛の意。

㋚定盤星。秤の目星、卽ち大梅も卽心卽佛と目星を定めし故、後人が目星に迷ふて如何ともする能はずとの意。

㋛爭が知らん。佛と云ふ字を聞くも汚れになると抑ふ。

㋜抱賊。青天白日なるに彼是云ふは、恰も盜賊が盜み物を抱いて愚圖々々云ふ如きもの、盜みましたと云ふより外はあるまいとの意。

㋝臺山。五臺山にして文殊を祀

頌に曰く、「問ひ既に一般なれば、答も亦相似たり。(ノ)飯裏に砂あり、泥中に刺あり。」

第三十二　外道問佛

(オ)世尊、因に(ク)外道問ふ、「有言を問はず、無言を問はず。」世尊、(ヤ)據座す。外道贊歎して云く、「世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我れをして得入せしめたまへ。」乃ち禮を具して去る。阿難尋いで佛に問ふ、「外道に何の所證あつてか贊歎して去る。」世尊云く、「(マ)世の良馬の鞭影を見て行くが如し。」無門曰く、「阿難は乃ち佛弟子、宛も外道の見解に如かず。且く道へ、外道と佛弟子と相去ること多少ぞ。」

頌に曰く、「(ケ)劍及上に行き、氷稜上に走る。(フ)階梯に涉らず、懸崖に手を撒す。」

第三十三　非心非佛

馬祖、因に僧問ふ、「如何なるか是れ佛。」祖云く、「(コ)非心非佛。」無門曰く、「若し者裏に向つて見得せば、參學の事畢んぬ。」頌に曰く、「(エ)路逢劍客に逢はゞ須らく呈すべし、詩人に遇はずんば獻すること莫れ。(テ)人に逢うては且つ三分を說け、未だ全く一片を施すべからず。」

第三十四　智不是道

南泉云く、「心是れ佛にあらず、智是れ道にあらず。」

無門曰く、「(ト)南泉謂つべし、老いて羞を識らずと。縱に臭口を開いて家醜外に揚ぐ。(ナ)然も是の如くなりと雖も、恩を知る者は少し。」

頌に曰く「天晴れて日頭出で、雨下つて地上濕ふ。情を盡して都べて說き了る、只だ恐らくは(ニ)信不及なることを。」

第三十五　倩女離魂

(ヌ)五祖、僧に問うて云く、「(ネ)倩女離魂、那箇か是れ眞底。」

無門云く、「若し者裏に向つて眞底を悟り得

(ア)ること莫れ。(イ)人に逢うては且つ三分を說け、未だ全く一片を施すべからず。

第三十四　智不是道

南泉云く、「心是れ佛にあらず、智是れ道にあらず。」

無門曰く、「(ト)南泉謂つべし、老いて羞を識らずと。縱に臭口を開いて家醜外に揚ぐ。(ナ)然も是の如くなりと雖も、恩を知る者は少し。」

頌に曰く「天晴れて日頭出で、雨下つて地上濕ふ。情を盡して都べて說き了る、只だ恐らくは(ニ)信不及なることを。」

第三十五　倩女離魂

(ヌ)五祖、僧に問うて云く、「(ネ)倩女離魂、那箇か是れ眞底。」

無門云く、「若し者裏に向つて眞底を悟り得

(ノ)飯裏に砂あり。飯を食ふ時に砂を噛むこと。

(ク)外道。佛教以外の教を奉ずる者。

(ヤ)據座。ちよいと座り直すの義。碧巖には良久とあり、或は默然不對とあり、卽ち有言無言にあらざるところ、據座を以て採るべきか。

(マ)世の良馬。雜阿含經に曰く、「比丘有二四馬一、一、鞭影卽驚悚、隨二御者意一、二、觸レ毛後如レ驚、三、觸レ肉、四、徹二骨肉一方覺」と。玆は鞭影を見て走り出す良馬の意、卽ち惜し氣もなく外道を賞讃せられたり。

(ケ)劍及上。初の二句は危險を侵すの形容譬喩なり、卽ち外道との問答の樣子を云ふ。

(フ)階梯。一超直入如來地の境界を云ふ。

(コ)非心非佛。前の卽心卽佛の類則にして全同にあらず、白隱禪師も始めは同と思ひしに、

六十にして初めて非心非佛の境に入ると云ひたり。

(エ)路逢。人を見て法說けの意、卽ち馬祖が是の坊主ならばと思ふて非心非佛と答へたるを云ふ。

(テ)逢人。人に逢ふて思ふ存分言ふ勿れ、馬祖が大悲心に溢れ、腹の中まで丸出しにせしは惜しいことと云ふ意。

(ト)南泉。南泉も年寄つて羞を忘れ、家内の秘密をさらけ出せしを云ふ。

(ナ)然りと雖も。しかし南泉の眞意を知る者は少いことであらうとの意。

(ニ)信不及。學者の信なきものは如何ともすること能はざるを云ふ。

(ヌ)五祖。五祖法演禪師は綿州鄧氏の子、三十五歲にして出家し、初め敎相を學び、後、圓照及び浮山の禪匠を扣き、終

ば、便ち知らん殻を出でゝ殻に入ることは旅舎に宿するが如くなることを。其れ或は未だ然らずんば、切に亂走することを莫れ。蕭然として㊂地水火風一散せば、湯に落つる螃蜞の七手八腳なるが如くならん。那時言ふこと莫れ、道はじと。」

頌に曰く、「雲月是れ同じ、溪山各異なり。萬福萬福、是れ一か是れ二か。」

第三十六　路逢達道

五祖曰く、「路に㊁達道の人に逢はゞ語默を將つて對せず、且く道へ、甚麼を將つてか對せん。」

無門曰く、「若し者裏に向つて對得して親切ならば、妨げず慶快なることを。㊁其れ或は未だ然らずんば、也た須らく一切處に眼を著くべし。」

頌に曰く、「路に達道の人に逢はゞ、語默を將つて對せず。㊂攔腮劈面に拳す、直下に會せば便ち會せよ。」

第三十七　庭前柏樹

趙州、因に僧問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」州云く、「㊃庭前の柏樹子。」

無門曰く、「若し趙州の答處に向つて見得して親切ならば、前に釋迦無く後に彌勒無し。」

頌に曰く、「㊄言、事を展ぶること無く、語、機に投せず。言を承くる者は喪し、句に滯る者は迷ふ。」

第三十八　牛過窓櫺

五祖曰く、「譬へば㊅水牯牛の㊆窓櫺を過ぐるが如き、頭角四蹄都べて過ぎ了る。甚麼に因つてか㊇尾巴過ぐることを得ざる。」

無門曰く、「若し者裏に向つて顚倒して一隻眼を著得し、一轉語を下し得ば、以て上㊈四恩を報じ下㊉三有を資くべし。其れ或は未だ然らずんば、更に須らく尾巴を照顧して始めて得べし。」

頌に云く、「㊋過ぎ去れば坑塹に墮ち、回り來れば卻つて壞らる。者些の尾巴子、直に是れ甚だ奇怪なり。」

第三十九　雲門話墮

雲門、因に僧問ふ、「㊌光明寂照遍河沙。」一句未だ絕せざるに門遽に曰

に白雲守端禪師の法嗣となる、卽ち楊岐方會禪師の法孫にして、圓悟克勤禪師の嚴師なり、會元十九に傳あり。

㊀倩女離魂。倩女の因緣は前燈新話に載す、卽ち支那淸河に張鎰が季女倩娘あり、鎰の甥の王宙と許嫁の間なりしに、鎰は違約して資倦に要す、依つて倩娘は病床に就き、王宙は國を去る、途中に於て船に乘り行くこと數里、夜半倩娘の追ひ來るを見て共に居ること五年、遂に國に歸りて張鎰に謝せんと思ひ、王宙その事を語るに、鎰云く「吾が女は病床にあり」と、驚いて王宙は舟中の倩娘を伴ひ來る、病床の女喜び迎へて合して一體となる、是れ何れの倩女を以て眞とするやと問ふの意。

㊁地水火風。死れば七顚八倒、沸湯の中に落ちたる蟹も同樣

樹子。」

無門曰く、「若し趙州の答處に向つて見得して親切ならば、前に釋迦無く後に彌勒無し。」

頌に曰く、「㊍言、事を展ぶること無く、語、機に投せず。言を承くる者は喪し、句に滯る者は迷ふ。」

第三十八　牛過窓櫺

五祖曰く、「譬へば㊅水牯牛の㊆窓櫺を過ぐるが如き、頭角四蹄都べて過ぎ了る。甚麼に因つてか㊇尾巴過ぐることを得ざる。」

無門曰く、「若し者裏に向つて顚倒して一隻眼を著得し、一轉語を下し得ば、以て上㊈四恩を報じ下㊉三有を資くべし。其れ或は未だ然らずんば、更に須らく尾巴を照顧して始めて得べし。」

頌に云く、「㊋過ぎ去れば坑塹に墮ち、回り來れば卻つて壞らる。者些の尾巴子、直に是れ甚だ奇怪なり。」

第三十九　雲門話墮

雲門、因に僧問ふ、「㊌光明寂照遍河沙。」一句未だ絕せざるに門遽に曰

との意。

㊂達道人。大道に體達せし人。

㊃其れ或は。一切時一切處に眼を著けて修養せよとの義。

㊄攔腮劈面。腮を裂ける位、顏面へびしやりと拳骨を入れること。

㊅庭前柏樹子。日本の柏の木と違ふ、柏樹子の話、古今の老和尙も實に血の涙の修行をなせり。

㊆言無。柏樹子の言句に拘泥する勿れ、言句以上の處に向つて修行せよとの意。

㊇水牯牛。五祖法演禪師の垂示。水牯牛とは大牛のこと。

㊈窓櫺。人の住する家の明窓。

㊉尾巴。尻尾のこと、此の尻尾の爲に古人は血の涙を流して修行せり。

㊋四恩。國王の恩、父母の恩、三寶の恩、衆生の恩を云ふ。

㊌三有。欲界、色界、無色界を

く、「豈に是れ ㊁張拙秀才の語にあらずや。」僧云く、「是。」門云く、「㊂話墮せり。」後來 ㊃死心拈じて云く、「且く道へ、那裏か是れ者の僧、話墮の處。」無門曰く、「若し者裏に向つて雲門の用處 ㊄孤危、者の僧甚に因つてか話墮すと見得せば、人天の與に師と爲すに堪へん。若し也た明めずんば、 ㊅自救不了。」

頌に曰く、「㊆急流に釣を垂る、餌を貪る者は著く。口縫纔に開かば、性命喪卻せん。」

第四十　趯倒淨瓶

㊇溈山和尙、始め百丈の會中に在つて ㊈典座に充つ、百丈將に大溈の主人を選ばんとす、乃ち請じて ㊉首座と同じく衆に對して下語して、「出格の者往くべし。」百丈遂に淨瓶を拈じて、地上に置いて問を設けて云く、「喚んで淨瓶と作すことを得ざれ、汝喚んで甚麼とか作さん。」首座乃ち云く、「喚んで ㊋木揬と作すべからず。」百丈卻つて山に問ふ、「山乃ち淨瓶を趯倒して去る。百丈笑つて云く、「第一座、山子に輸卻せり。」因つて之に命じて開山と爲す。

㊌溈山。潭州溈山靈祐禪師、福州長谿の人、姓は趙氏、十五にして出家し、二十三にして百丈禪師に參じ、辛酸苦修し、終に其の法嗣となり、司馬頭陀に請ぜられて湖南の大溈山に住し、四十年間大いに宗風を擧揚す、此の則は大溈山に請ぜらるゝ時の上座と溈山との法戰にして、これに依りて溈山は開山の選に入ることを得たるなり、傳燈錄九に傳あり、溈仰宗の初祖なり。

㊍典座。禪宗にて炊事掛の役な典座と云ふ。

㊎首座。第子の上席にあるもの卽ち華林の善覺首座を云ふ。

㊏木揬。木の株のこと。

㊐圈圙。物を圍むの義、卽ち溈山も百丈の圓規内を出でないとの意。但重不但輕。典座の時は輕く、開山の時は輕からず、主に命ぜらるゆゑなり。

㊑盤頭。炊事に用ふる切盤のこと、卽ち溈山も典座の役は脫け出したが、却つて首には鐵枷を嵌めさせられたとの意。

㊒笊籬。諺手道具を一切打ち捨て、身邊の妨げを無くして溈山へ足を向けた、如何に百丈が住めんとするも如何ともする能はずとて、溈山を褒めたる語。

㊓達磨。初祖達磨大師、南天竺國香至國王の第三子、姓は刹帝利、初めの名は菩提多羅、後、出家して般若多羅に從ひ達磨と云ふ、師の遺命を奉じて晩年支那に來りて傳法す、傳燈錄三に傳あり。

㊔二祖。二祖慧可大師、初めの名は神光、洛京武牢の人、少にして老莊の學を習ひ、後、寶冑禪師に從ひて佛教に入り、更に達磨大師を少林寺に訪ふて心印を受く、此の則は

㊕過去。遯退谷まるの意、難儀なる尻尾にあらずや。

㊖光明寂照。張拙秀才が禪月禪師の指教に依りて石霜禪師に參じ、入道の時の投機の偈の初めの一句なり。

㊗張拙。石霜楚圓禪師の法嗣、秀才とは博士と云ふが如きものなり。

㊘話墮。失言の意を云ふ。

㊙死心。黃龍の死心悟新禪師、會元十七に傳あり。石霜楚圓—晦堂祖心—死心悟新。

㊚孤起。孤危嵓峻の意、卽ち雲門の用處を云ふ。

㊛自救不了。人の濟度は扨て置き、自己の身の取り廻しにも難儀するものと云ふ意。

㊜急流。この頌は雲門の釣針に掛けられて命を取られたる魚の樣子を云ふ。

無門曰く、「溈山一期の勇、爭奈せん百丈の ㊇圈圙を跳り出でざることを。檢點し將ち來れば、重きに便して輕きに便せず。何が故ぞ、覃。 ㊈盤頭を脫得して鐵枷を擔起す。」

頌に曰く、「㊉笊籬並に木杓を颺下して、當陽の一突周遮を絕す。百丈の重關攔れども住らず、嘯尖趯出して佛麻の如し。」

第四十一　達磨安心

㊓達磨面壁す、十二祖雪に立つ。臂を斷つて云く、「弟子未だ安からず、乞ふ師安心せしめよ。」磨云く、「心を將ち來れ、汝が爲に安せん。」祖云く、「心を覓むるに、了に不可得なり。」磨云く、「汝が爲に安心し畢んぬ。」

無門曰く、「㊔缺齒の老胡、十萬里海に航りして特特として來る。謂つべし是れ風無きに浪を

起すと。末後に一箇の門人を接得するに、又卻つて(ム)六根不具、(ク)咦。(ヤ)謝三郎四字を識らず。」

頌に曰く、「西來の直指、事は囑するに因つて起る。叢林を(ノ)撓聒する、元來是れ個。」

第四十二　女子出定

(オ)世尊、昔、因に(ク)文殊、諸佛の集る處に至つて、諸佛各〻本處に還るに値ふ、惟だ一りの女人有つて、彼の佛座に近いて(ヤ)三昧に入る。文殊乃ち佛に白して云く、「何ぞ女人は佛座に近づくことを得て、我れは得ざる。」佛、文殊に告ぐ、「汝但だ此の女を覺して三昧より起たしめて、汝自ら問へ。」文殊、女人を遶ること三匝、指を鳴すこと一下して、乃ち托して梵天に至つて、其の神力を盡せども出すこと能はず。世尊云く、「假使ひ百千の文殊も亦此の女人の定を出すことを得ず、下方一十二億河沙の國土を過ぎて、(マ)罔明菩薩あり、能く此の女人の定を出さん。」須臾に罔明大士、地より湧出して世尊を禮拜す。世尊、罔明に勅す、卻つて女人の前に至つて指を鳴すこと一下す。女人是に於て定より出づ。

(ム)六根不具。感官の缺陷なきを云ふ。

(ク)咦。大呼の意、笑ふ貌。

(ヤ)謝三郎。是れは罪過の張本人は元來汝なりと云ふ方語、即ち達磨大師を飽くまで愚弄するの意。

(ノ)撓聒。騷亂の意、達磨大師が西天より來り、二祖に付囑するゆゑ、叢林を騷亂せしめたりと云ひて、達磨大師を抑下す。

(オ)世尊。この則は諸佛要集經に出づと云ふ。

(ク)文殊。文殊は根本の大智、即ち無漏の大智慧を代表せし人にして七佛の師なり。

(ヤ)三昧。梵語にして正定とも正受とも云ふ、深く座禪三昧に入るを指す。

(カ)小小。一場の大々的大芝居を演じたるの義、釋迦老人は千兩役者であるとの意。

(ヨ)且道。智力も神通も共に優れたる文殊が出來ない事を、劣りし罔明が出定せしめたと云ふは如何と云ふこと。

(タ)業識。業識茫々の處其の儘が那伽の大定にして、煩惱妄想即大禪定の當體と云ふ意。

(レ)那伽。那伽とは龍と翻す、即ち座禪の行相の嚴格なることを形容す。

(ソ)渠儂。世尊を指すの言。

(ツ)神頭。或は文殊に命じ、或は罔明に勅して、種々の藝當を演じたが皆失敗なり、しかし

無門曰く、「釋迦老子、者の一場の雜劇を做す、(カ)小小を通せず。(ヨ)且く道へ、文殊は是れ七佛の師、甚に因つてか女人の定を出し得る。罔明は初地の菩薩、甚としてか卻つて出し得る。若し者裏に向つて見得して親切ならば、(タ)業識忙忙として(レ)那伽大定ならん。頌に曰く、「出得出不得、(ソ)渠儂自由を得たり。(ツ)神頭並に鬼面、敗闕當に風流。」

第四十三　首山竹篦

(ネ)首山和尚、(ナ)竹篦を拈じて衆に示して云く、「汝等諸人若し喚んで竹篦と作さざれば則ち觸る、喚んで竹篦と作さざれば則ち背く。汝諸人、且く道へ、喚んで甚麼とか作さん。」

無門曰く、「喚んで竹篦と作さざれば則ち觸る、喚んで竹篦と作さざれば則ち背く、有語することを得ず、無語することを得ず。速かに道へ、速かに道へ。」

頌に曰く、「(ラ)竹篦を拈起して、殺活の令を行ず。背觸交馳す、佛祖も命を乞ふ。」

(ネ)首山和尚。首山は汾州の人、風穴の法を嗣ぐ。

(ナ)竹篦。竹篦は竹の根を以て作つた杖の如きもの。

(ラ)竹篦。竹篦は竹の根を以て作つた杖の如きもの。

第四十四　芭蕉拄杖

㋕芭蕉和尚、衆に示して云く、「儞に㋖拄杖子あらば、我れ儞に拄杖子を與へん、儞に拄杖子無くんば、我れ儞が拄杖子を奪はん。」

無門曰く、「㋗扶つては斷橋の水を過ぎ、伴つては無月の村に歸る。若し喚んで拄杖と作さば、地獄に入ること箭の如くならん。」

頌に曰く、「諸方の深と淺と、都べて㋘掌握の中に在り。天を撐へ並に地を拄ふ、處に隨つて宗風を振ふ。」

第四十五　他是阿誰

㋙東山演師祖曰く、「㋚釋迦彌勒は猶ほ是れ他の奴、且く道へ、他は是れ阿誰そ。」

無門曰く、「若し也た他を見得して分曉ならば、譬へば十字街頭に親爺に撞見するが如きに相似ん、更に別人に問うて是と不是とを道ふことを須ひず。」

頌に曰く、「㋛他の弓を挽くこと莫れ、他の馬に騎ること莫れ。他の非を辨ずること莫れ、他の事を知ること莫れ。」

此の失敗も風流であるとのこと。

㋕首山和尚。汝州首山省念禪師、萊州の人、姓は狄氏、法を風穴延沼禪師に嗣ぐ、傳燈錄十三に傳あり。

㋖竹篦。師家の應機接物利生する道具、長さ尺五六寸、形少しく曲る、弓を截りて代用することもあり、此を用ひて自己の本分を示す。

㋗竹篦。一本の竹篦にて殺活自在の令を下す、背觸に渉る者は皆死漢なり。

㋘芭蕉。會元の中に於て芭蕉の名ある者六人あり、何れも此の話を載せず、依つて何れの芭蕉なるかを知らず、然れども古來の傳說には芭蕉山の慧清禪師となす、新羅の人、法を南塔の湧に嗣ぐ、卽ち仰山の法孫に當る。

㋖拄杖子。禪僧の持つ杖、此れを擧揚して自己の本分を示す道具となす。

㋗扶過。人々具足の一拄杖子の用處を明す、實に有用のものなれど、認めて拄杖子であると爲さば、早や墮地獄とならねばならぬ、危險々々。

㋘掌握。此の拄杖子一本の突き加減に依つて、天下の宗匠の深淺も分るとの意。

㋙東山。五祖山の法演禪師を云ふ、無門は法演五世の孫なるがため、尊んで師祖と呼ぶ。

㋚釋迦。釋迦彌勒は等妙二覺なり、尊しと雖も修成始覺の人、本覺自性に比すれば猶ほ是れ他の奴。

㋛他弓。他と云ふと雖も外に求むること勿れ、須らく自己に取つて返して大いに實參實究せざるべからず。

㋜石霜。潭州石霜山慶諸禪師、廬陵新淦の人、姓は陳氏、年十三にして出家し、二十三にして受具し、後、道吾山圓智禪師の法嗣となる。

㋝古德。長沙岑禪師を指す、傳燈錄十に傳あり。

㋞十方世界。大悟に達し、更に轉身自由の境を得て、無礙自在に衆生濟度する樣子を云ふ。

㋟嗄。感投詞にして力を入れる時の語。

㋠頂門眼。第一義の心眼、卽ち摩醯首羅の一眼にして妄想を去つた所を頂門眼と云ふ。

㋡兜率悅和尚。隆興府兜率從悅禪師、贛州熊氏の子、始め道吾及び雲蓋等に參じ、後、寶峰克文禪師に就いて法嗣となる、會元十七に傳あり。

㋢撥草。徧歷の體なり、草を撥いて往來し、玄妙の處に參するの義なり。此の三關は現過未の三世と見よ。

第四十六　竿頭進歩

㋜石霜和尚云く、「百尺竿頭如何が歩を進めん。」

又㋝古德云く、「百尺竿頭に坐する底の人、然も得入すと雖も、未だ眞と爲さず、百尺竿頭に須らく歩を進めて、㋞十方世界に全身を現すべし。」

無門曰く、「歩を進め得て身を翻し得ば、更に何の處を嫌つてか尊と稱せざる。然も是の如くなりと雖も、且く道へ、百尺竿頭如何が歩を進めん。㋟嗄。」

頌に曰く、「㋠頂門の眼を瞎卻して、錯つて定盤星を認む。身を拚て能く命を捨つ、一盲衆盲を引く。」

第四十七　兜率三關

㋡兜率悅和尚、三關を設けて學者に問ふ。「㋢撥

草參玄は只だ見性を圖る、卽今上人の性、甚の處にか在る。」「自性を識得すれば方に生死を脫す、眼光落つる時作麼生か脫せん。」「生死を脫得すれば便ち去處を知る、四大分離して甚の處に向つてか去る。」

無門曰く、「若し能く此の三轉語を下し得ば、便ち以て處に隨つて主と作り、緣に遇うて宗に卽すべし。其れ或は未だ然らずんば、㊀蠽飡は飽き易く、細嚼は飢ゑ難し。」

頌に曰く、「㋔一念普く觀ず無量劫、無量劫の事卽ち如今、如今箇の一念を覩破すれば、如今覩る底の人を覩破す。」

第四十八　乾峯一路

㋕乾峯和尙、因に僧問ふ、「㋖十方薄伽梵、一路涅槃門、未審し路頭甚麼の處にか在る。」峯、拄杖を拈起して㋗劃一劃して云く、「者裏に在り。」後に僧、雲門に請益す。門、扇子を拈起して云く、「扇子跳して㋘三十三天に上つて、帝釋の鼻孔に築著す、東海の鯉魚、打つこと一棒すれば雨盆の傾くに似たり。」

無門曰く、「㋙一人は深深たる海底に向つて、行いて簸土揚塵し、一人は高高たる山頂に於て、立つて白浪滔天す。把定放行、各一隻手を出して宗乘を扶竪す。大いに兩箇の驢子相撞著するに似たり。世上㋚直底の人無かるべし。㋛正眼に覩來れば、二大老、總に未だ路頭を識らざること在り。」

頌に曰く、「未だ步を擧せざる時、先づ已に到る、未だ舌の動せざる時、先づ說き了る。直饒ひ㋜著機先に在るも、更に須らく向上の竅あることを知るべし。」

㊀蠽飡。丸呑みは胃の爲に毒なり、良く咀嚼して十分に骨折り、仔細に吟味して修行せよとの意。

㋔一念。一念とは正念なり、正念とは無念なり、この一念を明め得ば自由の妙境を得るとの意。

㋕乾峰。師は洞山頁佺禪師の法嗣、傳燈錄十七、五燈會元十三に傳あり。

㋖十方薄伽梵。此の句は楞嚴經第五に世尊の阿難に示し給ふ偈なり、薄伽梵とは佛の梵語、涅槃は佛の境界とも云ふべきものなり、卽ち偈の文意は、十方皆是れ佛、この佛の境界に行くべき路は一本のみと云ふこと、玆は其の一本路を問ふ。

㋗劃一劃。空中に一の字を書くこと。

㋘雲門。雲門久しく乾峰に師事し、其の家風を知るがため讃袋するなり。

㋘三十三天。印度の須彌山說に於て其の頂上にありと爲し、其の主を帝釋天となす。

㋙一人。一人とは乾峰を指し、他の一人とは雲門を指す、兩人共に言ふことは異なれども、各々一隻手を出して宗旨を擧揚す。

㋚直底。直は眞の字の誤り。

㋛正眼。已下無門和尙が本分の位地に立ちて二師を抑下す、實は卓上の意なり。

㋜著。著著。圍碁より出づ、一手一手に先手を取ることを指す。